目　次

松尾芭蕉……八十島　元：1
嵯峨日記――壁の跡
ハロー　ニューヨーク……柴田富佐子：12
作兵衛の槍……大和禎人：27
ハイラル挽歌……金子正義：38

連載

第二章　開嶺の崩壊（六）　老漢の系譜……山口健二：45
第三章　赤い月　男たちの藩（六）……三戸岡道夫：55
金子正義寸描……Q太郎：44
編集後記……：70
表紙・岸田幸雄・カット：塩見三恵

松尾芭蕉

嵯峨日記――壁の跡――

八十島　元

(一)　落柿舎へ

奥のほそ道の旅をおえてから一年半、元禄四年の春、芭蕉はひさかたぶりに京嵯峨野の向井去来を落柿舎にたづねた。

その夜半しきりに風が吹いた。竹林と柿の梢がかなでる風鳴りをきいていると、その音色のなかへうっとりとまきこまれてゆく不思議な感覚に落ちこんでゆくようだ。

この思いはその後もいくつかの旅に草枕と月をかさねて露命つつがなく、そのたびに野ざらしの覚悟、そして覚悟の果にあじわう無常と哀しさと安緒のいりまじった気持とでもいうべきなのか。

すでに充分生きすぎたようにも思えるし、この世に生きたしるしの淡あわしさも腹立たしくもある。

「それにしても今宵の月のなんという凄さであろ」

庭の葎が真白く浮きだって、開け放たれた窓からさしこむ月光で、彼の横顔はそそりたつように彫が深い。

嵐山からであろうか、小倉山からであろうか、吹き渡ってくる風が軒を小きざみにふるわせる。

芭蕉は去来の置いていった、地酒だがなかなか入手しがたい名酒という一壷を、ときたま惜しむように口にふくんだ。

二日まえ、芭蕉は京に着いたその日、凡兆の家へ泊った。そこへその近くに本宅を構えている去来が迎えに来た。落柿舎は別宅である。

一夜酒を酌みかわしながら「このたびの嵯峨野入には大沢の池を見たいものと思っております……というのも、ははは、じつは大沢の池も見たいし、そしてそのあたりに住むというひとりの女性にもあいたいものと。ははは、そういうことじゃ」

歴史的背景のある大沢の池と、わけありげな女性との

とりあわせにもさることながら、去来も凡兆も、なにやら艶めいた話に戸惑った顔を見合わせて「おお……ぜひぜひとも……」とうなづきあいはしたものの、凡兆などは露骨にいやな表情をした。

「お師匠さまらしくもなく、なにやら源氏物語か平家物語にでもでて来そうな、悲恋の匂いのしそうなお話でございますな」

芭蕉は苦笑して

「祇王や小督、横笛などの挿話とはおよそ無縁じゃ、わたしは」といった。

凡兆の妻の羽紅尼はさすがに女の敏さを働かせて、夫のあけすけさをなじるように、

「お師匠さま、それはきっと、……寿貞さまにお関わりある女性ではござりませぬか……ほほほっこれはたんなる女の感でございますよ。そうでなければお師匠さまがいたづらに女性のことを申される筈もないではござりませぬか……かんぐりも的を外せば問わず語りになりましょう」といった。

去来も救われたように笑い、凡兆もしかたなく「これこれ羽紅、問わず語りとはなんということを……それではわしに後暗いことでもあるようだ」

「ははははっ妻女の申されるとうりじゃ、そこまで底が割れて黙っていては、いよいよ話がこじれそうじゃ、ははははっ」

酔いも手伝ってか芭蕉は機嫌がよい。ふだんは弟子のまえでは艶めいた話どころか、謹厳さが俳諧にかかわりのないところでは其角ですらこそこそと逃げまわらせるくらいであるから、去来たちが戸惑うのも無理はない。

相手が去来に凡兆だから気を許したのか、「寿貞がことは、口の端にのぼせることもなかったが、わたしにとって生涯の数ならぬ身と思いこそすれ、心にそまつに思ったことのない女……みなも知ってのとうり十七八年まえ、寿貞はわたしのところから去ったことがある。延宝四年の江戸吉原の大火のあったその時のことじゃ……それが四年前江戸を発つまえの夜、幼いおふうにおまさをかかえてわたしを去ったあと、暫く、その大沢の池のほとりに庵を結ぶ千代女という花造りの師匠に拾われて世話になったと聞きましたのじゃ」

「ああ、お師匠さま、存じております。ことに嵯峨菊づくりの名手ときき及びます。ですが、先年亡くなりました。あとをつぐ者もなく廃庵となっております」と去来がいった。

「まことか……」

「はい、一輪の菊の黄のごとく匂やかであったと噂に聞きます」

「ではせめて、その匂いの名残りなどおとないたいものじゃ」

「おおぜひとも、ぜひとも」と凡兆も去来もこんどははは

づんだ声でいった。

「寿貞はふしあわせな女、おふうもおまさもふしあわせな娘、わたしのような者とめぐりあわせたのがふしあわせ。伊賀上野での出合いから二十余年、ひとつ軒の下で暮した日数のすくなさ、病弱、なにひとつよいことのなかった女」

「お師匠さま」と雨紅尼は芭蕉の盃になみなみと酒を酌ぎながら、いたづらっぽく芭蕉をからかった。「寿貞さまのことはお話に聞くばかりお会いしたこともありませぬが、ふしあわせ、ふしあわせと仰言る眼がしあわせにうるんで見えまする」

喉に酒をつまらせて芭蕉は思わずむせった。去来と凡兆はうろたえた師匠の眼につられて同時に吹きだした。

翌日、去来と凡兆の案内で、大堰川を越え嵐山からの道筋をとらず、すこし遠まわりになったが、鳴滝から広沢を眺めて嵯峨野へ入った。

「この林を出ますと大沢の池が見えます」

去来は芭蕉の横へと少し早足にすすみ出て、見えぬ林のかなたを指さしてみせた。

「おおさようか、古の貴人たちが舟遊びをした日がほうふつと偲ばれましょう」

芭蕉は眼を細めて、突いていた杖を左の小脇にかかえてふところから小短冊を取りだし矢立から筆を抜いた。

「去来どの、これから幾日かごやっかいになります。さよう、淋しさをあるじとして、嵯峨日記なるものを書いてみたいと考えております。……二年ほどまえ、伊勢長島で《うきわれをさびしがらせよ秋の寺》と詠みましたが、この文句も改作してみたい。」

立ち止ってなにやらさらさらと筆を動かし、また歩きだした。

「西行上人は、喪にいる者は悲しみをあるじとし、酒をのむ者は閑をあるじとし、愁に住するものは愁をあるじ……などなどと申し、《山里はこはまた誰を呼子鳥独りすまんとおもひしものを》と詠まれた。げに独りすむほどおもしろきはなし、じゃ」

去来は凡兆とふと目を見交し「お師匠さま」と呼んだ。

「大沢の池でございます」

「おお」と芭蕉は眼前にひろがった、微風にたてるさざ波を眼で追っていった。「あれが菊ヶ島じゃな……なんと小さな島じゃ……あれが平安の昔、中国の洞庭湖を模して築かれたものか……なんと嵯峨離宮の嵯峨天皇が竜頭の船で女官たちと情味を味わわれた舟遊びの様子が眼に見えるようじゃ……あの島で見出された一本の菊、それが嵯峨菊と嵯峨流華道の発祥と聞く……おお、千代女の住めりという廃庵はどのあたりなのであろ」

「ああ、それはあのひときわ大きい竹林の蔭でございま

す」

と去来は嵐山の方向をさした。見れば、ほんのすこし屋根らしきものが、青葉の濃淡のはざまに、波の中の小島のように浮んでいる。

「寿貞は、来る日もくる日も大沢の池面を眺め、嵐山の風に弄られて過したと申しておる……弄られて、とのう。ふふふっ」

芭蕉の笑いは、しかしけっして口と鼻で洩した声ほど自嘲気味ではなく、むしろ佗びしげな表情であった。

危げな田の畔を辿ると、かつての庵は、床は破れ、軒は傾き、風雨にさらされ、雑草に埋れていた。

芭蕉は、去来と凡兆を忘れ去ったように、小半刻も、ときたま大沢の池の方を眺めてはじっと庵の中を見つめて佇んでいた。

壁に掌大の穴があいている。それをふさいだらしい茶色の厚紙が釘から外れかけてかろうじてぶらさがり、風に吹かれているのを、芭蕉は呆けたように見ていた。

「去来どの、凡兆どの、見てくだされ」

やがて、である。

去来と凡兆が近づいても芭蕉は黙っている。「まさか、それがあろうとは思いもよらなかった」

「それ、とは」凡兆が好奇にかられて師匠の視線を追おうとするが、ふと

「ははははっ」と芭蕉は笑いだした。そして「さて、そろそろ落柿舎に蓑をはづしにまいりましょう」といった。

はぐらかされたように凡兆は眉と唇をゆがめて見せた。去来はただ始終ほほえんでいるだけである。

落柿舎に蓑というのは謎なぞでもなんでもない。もとはある公家の邸であったのをゆずり受けたもので泉水や築山もある。屋敷の広さはかなりなものであった。門を入ると十五六歩で玄関があるが、その右脇の土壁に当主の去来が留守にするときは蓑と笠を掛けて出掛ける。おとずれた客はそれを見て、主人のいないことを知る。という印であった。

屋敷のそばに柿の木が四五十本もあり、秋になればたわわに色づいて風情を添えるのであろう。

(二) 落柿舎で

月が雲にかくれた。ながい刻、月を眺めていたのに、今宵になってはじめて光が曇ったのにきづいた。しかし薄雲なので仄かに月の面を流れて見える。

すこし酔が眼もと熱くしているのを感じていた。

落柿舎に着いてからの芭蕉は去来と凡兆に手伝ってもらって、屋敷のなかでいちばん風通しのよい眺望のきく奥まった部屋を自分でえらんだ。破れた障子を切り張り

したり、庭の、その部屋の窓からほんのすこし見えるあたりの葎を鎌で薙き払い、根こそぎ引っこ抜いたり、それに籔の枯枝がからんでいたりするのをずるずる引っ張っては、

「おおこれはひっつこい、まるで江戸の其角のようじゃな」

と芭蕉がいったので凡兆が腹を抱えて笑いこけ、去来も思わず「ははははっ、其角どのは恋句は名人、けれどほかは新奇を求めすぎて難解な句が多すぎる。やはり知れ渡っている句はわかりやすい句ばかり。ははは、あまりからんでは、ただわけもなく引摺り切られるばかり、伊達の其角もいけませんなあ」

去来は其角に悪意をもっているわけではない。が、その性情や生活のはなやかさを蔑視こそしないが無頼派としての彼とはどうしてもあいいれない。

去来の本名は向井兼時といい、元来武家の出であるが、父は天文学、儒学、医学者である。朝廷や公家に出入して名医の誉れもあった。

去来は、黒田家から仕官を求められたこともある、馬術、柔術、剣術、軍学と秀いでた武士であった。礼儀正しく、親に兄に師によく仕えて、その生活も質素、物静かでおだやか、武門を継ぐことをやめ、儒家神道家として公家に出入するかたわら俳諧の道にもはいった。

去来は其角の才能を認め、其角も去来を尊敬している。だから、其角批判の意識はない。

「ふむ、ではこれではどうじゃ、其角もわかりやすかろう」

芭蕉は、からみあった糸屑のようなかたまりの中にかたわらに置いておいた愛用の杖をさし込み、ぐっと力を篭めて貫いた。

「これが其角の伊達じゃ」

「おお、そう見ればまわりのからまりも華やかですな」

感心したように去来がいった。

「その華やかなること、其角に及ばず、とは去来どのの其角評であったな」

「ほんに、ほんに」と凡兆も同調した。

「さてさて、これくらいでよかろう、つぎは部屋じゃ、机をひとつ、硯、本朝一人一首、源氏物語、それに土佐日記に大鏡など揃えてもらいましょ」

去来はいわれるままに師の部屋を造りだした。そして彼は唐の蒔絵の五重の器に、京から用意したさまざまな菓子を盛って机の上に置いた。夜食にと凡兆の妻羽紅尼の調理した豆類、野菜などの煮物と酒壺を、いつでも寝られるようにと夜具を敷き、枕元にならべた。

「去来どの凡兆どの、まことにかたじけない。わが身の貧しさも忘れそうじゃ」

暮方に凡兆は京に帰り、去来は気を利かして自室に引きとっていった。

芭蕉は酔っていた。それほど酒に強くはない。酔眼のなかで月の曇りが払われて、痛いような輝きを感じると、そのとき立あがって窓障子を閉めた。

翌日、去来と嵐山のふもとの法輪寺に詣たあと、平家物語ゆかりの小督屋敷を見物したりして夕方落柿舎に戻ってくると、凡兆が来ていたが、かわりに去来が京に帰っていった。

その翌日は羽紅尼が北嵯峨野の祭を見たいという口実でやってきたり、去来が、彼の兄の妻からだといって菓子や菜漬などぶらさげて帰ってきたり、芭蕉にたいして精一杯の歓びをしめしてくれる。

来る日も来る日も充足した、閑寂にひたった。思うままに、日記や書きすてにしたものなど整理したり、古書を読んだり、ときたま去来が顔を出して、暫くあわない京周辺の門人達の消息をもってきたりすると、彼らの噂に花を咲かせたりした。

江戸へいつ帰ろうか、とふと思いはじめた頃、凡兆夫婦がひょっくり姿を現わした。

人恋しさを幾日かすごしたので、芭蕉は夫婦をひきとどめた。今宵は庵主の去来に元気がないので、そのかわりをつとめましょう。と凡兆がいった。

春とはいっても、もう蚊がではじめているので蚊張りを吊った。夫婦の夜具を持ち運んできた屋敷守りの与平という男も仲間にはいってきて、にぎやかに談笑し、芭蕉はこのたびの落柿舎入りの第一夜に吟じた句を披露した。

《ほととぎす大竹藪をもる月夜》

すると羽紅尼も興がって

《又やこん覆盆子あからめさがの山》

せまい蚊張の中に頭をつきあわせて寝たが、どうも眠られない。芭蕉がむっくり起きだして、菓子をごそごそと摑み食べはじめた。すると去来も凡兆夫婦も与平もつられて起きてきた。

「落柿舎はもと公家の持物と聞くが、そのまま少しも手入れをしないで、壁も崩れ、天井も黒ずみ頽破している風情が、新築であった昔のみがかれた頃より、どれだけその哀れなさまが心をうつことだろう」

と芭蕉はゆっくりと部屋を見渡しながら、今さらのようにしみじみといった。

「梁の彫も、なにやら画いたらしい壁も雨が泌み風に破れ、昔の公家の主が金子にあかしたであろう、庭の奇石も、珍らしい枝ぶりの松も葎の下にかくれてしまったような、あれも奥床しき詩の情景じゃ」

凡兆がいやに菓子を口に含んで、ばりばりと音高く鳴らしたので、

「おおそうそう、去年の夏、凡兆どのの屋敷に泊ったとき、やはり同じように蚊張のなかで夜を明したことがあ

る。そのときも凡兆どのは菓子を鳴らしましたぞ」

「ははは、そうでしたか……お師匠さまは伊賀上野、去来どのは肥前長崎、丈草どのは尾張犬山、わたしは加賀金沢、四国の人伏せたり、と申し《おもうことよつにして夢もまた四種》と書き散らされた」

「そうじゃった」

「やっ」

「やっ」

とみな顔を見あわせ、笑った。

「おや、雨になりました」と羽紅尼が庭をのぞいた。

芭蕉は楽しかった。がなにか憂きものが摑みどころなく襲ってきて《憂きわれを》と思う。すると突然、大沢の池と廃庵のなかの砂壁の穴と風にあおられている厚紙が眼に映った。

翌日は朝から曇っていて、雨がときどき降る。昨夜睡眠不足なので頭が重く、しかたなくごろごろと伏せがちで凡兆夫婦も去来も暮れには京に帰ったので、ただひとりでほのかな灯の下で筆を走らせた。

またその翌日も雨。誰も訪ねてはこない。翌日も又その翌日も雨があがらない。それどころか夕方近く風と雨を分けるように烈しい雷鳴が嵯峨野を白く駈けめぐった。ばたばたと軒を打つ音に窓を開けると、時ならぬ雹が降っているではないか。

「龍が空を過ぎる、すなわち雹を降らすという」芭蕉はひとりごちた。

「ああ江戸へ帰りとうなった。寿貞もおふうにおまきも淋しがっておろう」

(三) 落柿舎を

芭蕉の弟子に杜国という者がいた。名古屋で米商人であったが空米売買の罪に問われ、財産没収の上、御領分御追放となった弟子であった。それが昨年病死した。

その杜国がこつぜんと芭蕉のまえに現われた。

夢である。

雷鳴風雨のなかで月がこうこうと冴えわたっている。幾人もの俳人らしき者の死装束が次つぎと現われて芭蕉の背後へ消えてゆくのだが、どの者にも顔がなかった。その中のひとりに後姿になって歩いてくる女がいる。それが芭蕉のまえまでくると、くるりと振り向いた。

それは凄絶とよりいいようのない美しい女であった。

「千代女でございます」と女はいった。

「おお、千代女どのとは、あの……」

「をを、その千代女は私のこと、寿貞さまとの縁も浅からず、芭蕉とはどのようなお方かと思い待るに、聞くと見るとの違いはこのように大きい……」といったかと思うと側の砂壁の穴へ片肢を幾度もつっこんで、躰ひとつ

が這入るほど拡げたかと思うと
「しょせんあなたは自己ばかりが愛しいお方。女ひとりをしあわせに出来ずに俳諧も糞もなきに等しい。おほほっ」
たちまち彼女の躰から黒雲を発し、寿貞の顔に変った。
「おお寿貞」と叫んだが、彼女は狂ったように砂壁の穴に厚紙を貼っている。貼ってはこぼち、それを床に落しては新しく貼ろうと夢中になっている
「寿貞よ、苦労したであろう。われとて木石にあらず。煩悩に苦しみ、官能に悶えた。崩れ落ちた壁に厚紙を貼って寒さをしのいだとそなたは語った。おお、それがその穴か、おおかわいそうに。いまさらなにを、と申すか……ああ、女は恐ろしい。一緒に生活していても心でなにを思うているか……三ツ指を突き、男のために茶をたて花を活けて見せても、唇の裏側に牙をかくしてほほえむが如きが女の本性であれば、いづれいつかは寝首を掻かれるが必定。だが……寿貞はそのような女性ではない筈。そなたと再会したとき、わが思う発句の姿と似たりと見ればこそ、共に生活をと覚悟したるに、その夢は飛花落葉散り乱るるの末期となるか」
芭蕉が大声で叫びながら、大沢の池らしい波の上を走ってゆくと、荒れ果てた田畑が果てしなく続き、農夫達が天を指し地を打ち、呪いの呻きをあげているのにぶつかった。飢饉である。捨て子、骨だらけになった老人、みな眼だけ光らせているではないか。突然、ひとりの男が芭蕉の足にしがみついた。「おお、そなたは……」見ると死んだ杜国ではないか。「私は潔白です。商人仲間の悪だくみに巻き込まれました。口惜しいかぎりでございます。このままでは成仏覚つかなし」芭蕉は涙をぼろぼろと流し「おお、わが悲嘆の声のとどけよ≪塚も動け我が泣く声は秋の風≫とはまことそなたへの追懐の句ぞ」「ああお師匠さま、お教え下さいませ、発句の本当の姿を」「おお成仏せい杜国よ、発句の姿とは」芭蕉は涙でなにもかも見えなくなった。
「愛する杜国よ、発句の姿とは、青柳の小雨に垂れたるごとくして折おり微風にあやなすも悪からず……杜国よ、どこにおる、そなたの姿が見えぬ……わかるか、薄月夜に梅のどことなく匂えるが如く、竹林を隔てて琴声を聞くが如くじゃ」「わかりかけましたお師匠さま」
「そうか、情は心裏の花をも眺め、真如の月をも観ずべし、杜国よ。口は飛流のただちに下るが如く句を吐くべし！杜国よ、どこへゆく、まて杜国よ」芭蕉は大声でわめいた。気がつくと、再び雷鳴と月光にさまよい歩いている。杜国の姿はどこにもない。「杜国よ、杜国よ」
芭蕉は自分の泣き声で眼が覚めた。
夜具の上に起き直った。静かな夜である。ほっと溜息をつくと掌の甲で涙をぬぐった。起き上って灯をともすと窓の障子を開けた。雨つづきだったのに今夜は嘘のような月だ。
耳を澄すとかすかに鳥の鳴き声が聞える。
≪憂きわれをさびしがらせよ≫とすらすらと言葉になった。芭蕉はぞっとするようなさびしさに圧された。
夢の中のことを思い出している。千代女が、寿貞が、そして杜国が現われた。考えればなんと人生とはさびしいものであろう。
寿貞やおふうおまさともすでに四年も会っていない。病気がちの体をどのように過しているだろうか、おふうもおまさも嫁することもなく、ただただ母親の世話にあけくれていることであろう。
今……どれほどの刻が……
奥深い庭のかなたからはっきりと鳥の鳴き声が響いてくる。気がつくとすぐ夜明の空である。月ももうかくれていた。
「あれは閑古鳥じゃ」
芭蕉は「杜国よ」といった。「出来ましたぞ≪憂きわれをさびしがらせよ閑古鳥≫と……夢であえたのも神仏の引き合わせであろう。そなたが御領分御追放になって、三河の保美村に隠れ住むのをたづねたとき、そなたの昔の生活にくらべ、変り果てた姿に顔をそむけて泣いたものじゃ。あれは三年半前のこと……いちにち伊良古崎に遊び、いらご白という石を拾って楽しんだことも忘れぬし、≪鷹ひとつ見つけてうれし伊良古崎≫も出来た。杜国、お前を鷹にたとえたものじゃが、不偶に耐えながら面影を少しも失っていないのにほっと安緒した。……翌年再会したとき、そなたはなんと明るい人生に已れを変えていたことか『お師匠さま、このたびは道中、童子となってお仕えしましょう。わたくしは万菊丸と申しまする』などと戯れ、ひざまづいて見せて、この芭蕉を笑わせたものじゃ……それが……その後、便りをしても便りなく、もしや病いに伏せたのでは、と、とつおい気を病みしを知るか。それが三十五才という短かい生涯を閉じていたとは……」
芭蕉は頬を濡らす涙をおもわず袂でぬぐった。
再び寝に入ってとろとろとしたかと思うとあっと目を覚した。すでに昼近かった。短かい明方の夢の中で一句出来上ったのだ。そのよろこびを芭蕉はじっと胸に押し込んだ。去来がきていて一通の書状を食卓に添えた。
「おお曽良からじゃ。吉野の花をたづね、熊野に詣たい……とある」
「李由どのもおめもじしたいと、二三日後に彦根よりこちらへ参りまする。それぱかりか千那も、史邦も、それに丈草どのも顔を見せまするぞ。それに乙州も近ぢか江戸より土産話をもって帰りましょう」
「おおさようですか。それは楽しみじゃ……これはまだまだわたしは江戸へは戻れぬな……だが去来どのだい

ぶん世話になったが、暫く京、大津あたりを泊り歩いて弟子たちと会うてみたい……去来どの、わたしは今日は気持がたかぶっておる。いくつか佳い句も出来た。奥州行脚、高館以来ずっと形をなさずにいた句がたったさきほど仕上った《夏草や兵どもが夢の跡》じゃ」

「おお」と去来がなにかいおうとしたのにかぶせて

「まだある、出来かかっておるがまだじゃ……去来どの、もう五日ほどで、ここの仕事も終る、京への途次、もう一度、大沢の池と千代女の廃庵へ寄って見たいと願おておる……それにしてもまた雨のようじゃな」

「いえ降ったり止んだりでございます」

「これからすぐまた篭らせていただこう。孤独な、よい月日であった。会うのが楽しみな曽良や丈草たちに刻を余程とろうために、今のうちに仕事をはかどらせて置きたい」

去来は素直に「それでは」と部屋をさがっていった。

翌日、李由がきた。そのまた翌日、曽良が懐かしい姿を現わした。堰川に舟を浮べ、嵐山に沿って昇ったが、心配していた雨がとうとう降りだしてしまったので途中で舟をおりて落柿舎へ急いだ。明る日も雨が止まないので、去来や曽良と夜明しで話に夢中になってしまった。そのためすっかりくたびれてしまって、仕事もせず寝ては覚め、眠っては床の上でごろごろとりとめもなく考えごとをしてしまって夜になってしまった。

明日は落柿舎をでよう。そう決心すると、急に名残りおしくなって芭蕉は、玄関からじゅんじゅんに部屋をしげしげと見て廻わった。

去来と曽良がなにごとかとついてまわったが、

「いや、つい名残りおしゅうなってな。もしかすると、これが見おさめやも知れぬ」

二人は笑おうとしてあわてて口をふさいだ。

「不吉なことを申されますな」

「そのような馬鹿げたことを」と去来がいったとき彼は語気が荒くて、その息で手燭の灯を吹き消してしまった。

「ははは っ冗談、冗談じゃ……今夜はもう寝みましょうぞ」

三人は枕をならべて横になったが、やはり眠りつけない。誰かが黙ると誰かがしゃべる。やがて芭蕉のいびきがし始めた。去来と曽良が「ふふっ」と笑った。

落柿舎の玄関脇の壁に去来が蓑を掛けている。曇ってはいるが雨は降りそうにはない。

「今年は柿の実が豊かにみのりそうじゃ」

芭蕉は一本の柿の木を見上げながらいった。

「じゃが、落柿舎とはようつけたものじゃ」

「それにしては去来どの、あなたに落ち柿の句がありませぬな」と曽良。

「ほんに、そうじゃ、ときには屋根を打ち転がり庭石かなにかにつぶれる音も聞いておろうに」

落柿舎の門前を離れながら「はい」とぽつりと答えた。ちょっと誰もなにもいわず歩いた。去来の声が沈んでいたからである。

「死んだ妹を思いだすのでございます……妹は柿が好きで、落柿を拾い集めては、それを細かく切りきざみ、干して、よく酒の肴をつくり、ふたりでよく酌み交わしたものでございます」

「おお、それはつらいことじゃ……《燃えやすくまた消えやすき蛍かな》が妹御の御辞世じゃな」

「はいお師匠さま《手の上に悲しく消ゆる蛍かな》がわたくしめの追悼の句でございまする。《なきひとの小袖も今や土用干》とお師匠さまからは贈られました」

芭蕉は昨夜よく眠ったのでさわやかであった。がこんどは彼が大沢の池に近づくにしたがって黙ることが多くなった。去来と曽良はわざと師から遅れ、ずっと隔たった。それで去来は曽良に大沢の池と千代女の話をして聞かせた。

芭蕉の歩いてゆく背を見ていると、去来には、なぜかわびしげな首筋のあたりに不思議な煩脳の色が見えてならない。

「ああ、このお方も……」と思う。

千代女の廃庵は、降り続いた雨と、風で、びっしょりと濡れそぼち、今は音もなく沈んでいる。

沈黙が続いた。近くの山に霧がたなびいている。きもち重たげに見えるのは、きっとちいさくちいさく降っているのであろう。

佇づみが続いて、やがて芭蕉の腕が動いた。短冊が取りだされ、筆がはしった。

ほっと去来と曽良の口から吐息が洩れた。

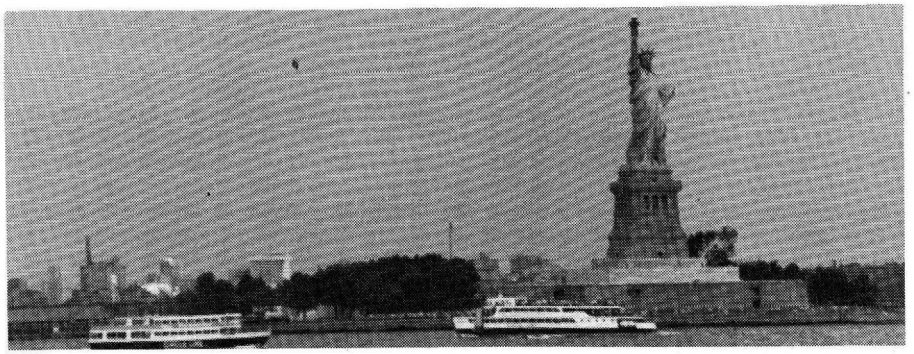
芭蕉がゆっくり振りむいた。その芭蕉と去来と曽良との空間に糸のような雨が無数に落ち始めていた。

芭蕉は二人へ呟いた《五月雨や色紙へぎたる壁の跡》

二人は顔を見合せて《さみだれやしきしへぎたるかべのあと》と言葉にしあった。廃庵のうちをかわりばんこにのぞいてから、師の姿に視線を移そうとしたが、芭蕉はいなかった。

もうずっと向うの竹林の中をとぼとぼ歩いていた。

昭和六十二年一月



ハロー　ニューヨーク

柴田富佐子

「ハロー　グッドゥモーニング」

昌子の弾んだ声に、受話器の向うで戸惑っている息子の顔が見えるようだ。夫は自分から受話器をとるような人間ではない。

「ジス　イズ　マサコ　スピーキング」

「なあんだ」

緊張のほぐれた声を出したのは、長男の隆だった。

「なんだはないでしょう。そっちは今、十時でしょう。晩御飯、食べた？」

「まあね」

「お父さんは？」

「お風呂に入ってる」

「進は？」

「勉強してんじゃない」

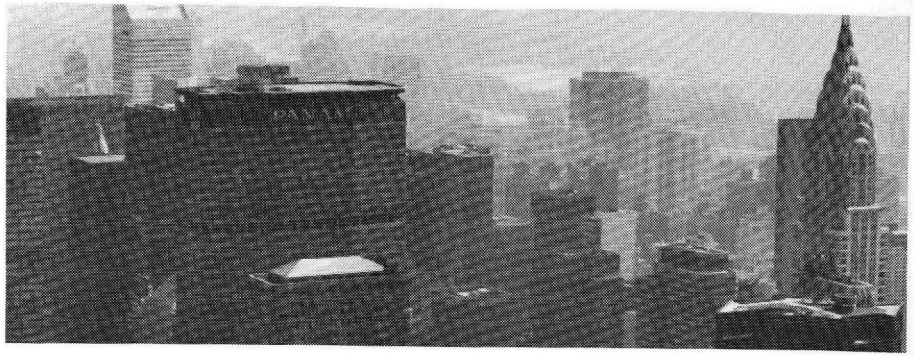
「これ、ダイレクトなのよ。ホテルの部屋のダイヤルを廻しただけで、東京へ繋っちゃったの。凄いと思わない？」

「当り前だよ。それより国際電話は高いんだから、用がないなら切りなよ」

「なによ。お母さん元気？位の事、聞いてくれたっていいじゃない」

「それだけしゃべってんだから、元気に決ってるじゃないか。俺テレビ見てるんだ」

うん、もう——隆はいつもこうなんだ。あの子には感激ってものがないのよ。子供のくせに、いつも醒めてて、慌てないで、張り合いがないったらありゃしない。夫にそっくりなのよね。私なんか飛行機に乗るんだって事だけで、出発の前の晩は嬉しくて寝られなかった。小学生の頃、遠足の前の晩というと興奮して寝られず、そのくせ朝方になって寝込



んじゃって、遅刻しそうになった事がよくあった。三十年以上も経って全く同じ経験をした。お陰でゆうべはよく寝てしまった。

目覚めたら八時で、同室の細川さんはもう出掛けたとみえ、テーブルに「お先に失礼します」という書置きが載っていた。

昨夜もかなり遅くまで本を読んでいたようだったが、矢張り若さには敵わない。細川さんは人文学系の大学院生で、ニューヨークには本を買うのと、図書館や美術館を廻ったり、教授に紹介して貰った大学の研究室を見学したり、教授に会って話を聞いたりするために来たのだ、と言っていた。

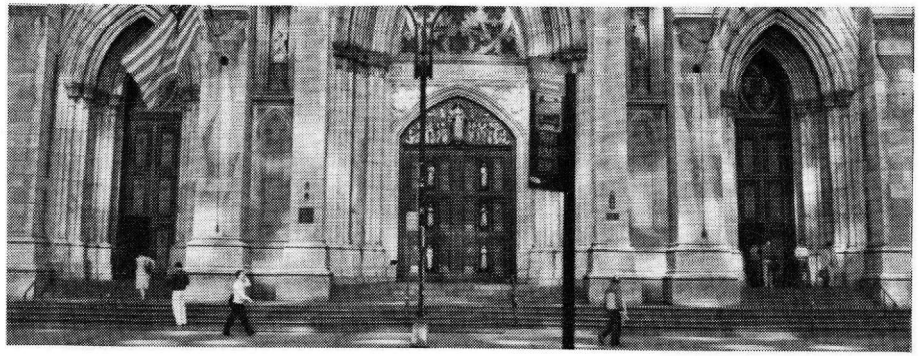
「丸善は、今だに三百六十円のレートで売ってるんですよ。だから倍以上も高いんです。円高の今がチャンスだと思って、貯金をはたいて来たんです。ですから、観光めぐりにはおつきあい出来ませんが、悪しからず」

外人ばかり（当り前だけど）が立ったり坐ったり、歩いたりしているホテルのロビーに入った時から、天井にまで弾んで届きそうな昌子の心は、その細川さんの初対面の挨拶で、ほんの少し弾みを失ったが、もともと、このツアーは往復の飛行機と、ホテルを共にするだけのツアーだから、ニューヨーク滞在中はそれぞれ勝手に過せばいいのだ、と自分の心に言いきかせた。

ゆっくり顔を洗い薄化粧をし、あらかじめ決めておいた衣装計画通りの服装をする。黒のTシャツに白いスラックス、薄いピンクの上衣を羽織って、イヤリングを白にしようか、黒にしようか、迷った揚句白にした。白いイヤリングをした時の方が、鏡の中の顔が若やいで見えたからであった。

今日は市内観光のオプショナルツアーに申込んである。市内の地図は、この旅行を決めた日から、毎日何回となく眺めている。

案内書を読み、行きたい所に印をつける。区画のかっきりしたニューヨークの街は、昌子の頭にすっかり納っている。パークアベニューと42ストリートの交差した所、それがホテルの場所だし、エンパイアステートビルはアメリカアベニューと五番街の間でE33ストリートに面した所、五番街を北へどんどん行けばセントラルパーク、その東側をもっと北上して80ストリートへ行けば左手にメトロポリタン美術館、有名な本屋のスクリブナーはE48ストリートと49の間で五番街に面してい



るし、チョコレートのゴディバは同じ五番街のE55ストリートの一寸手前、すぐその先にティファニー、ああ、ティファニー、ティファニー、オープンハートのペンダント、いくら位するのかなあ、日本橋の三越で見たら八万円してたけど、買えるかなあ、買いたいなあ、よし、ニューヨークへ来た証に、絶対買っちゃう。

集合は九時半、ホテルの入口であった。すっかり支度を整えた九時に、昌子は家へ電話したのだった。今は夏時間なので時差は十三時間、ニューヨークの時間に一時間足して午前と午後を入れ変えればいいと、空港からホテルまで案内してくれた旅行社の人が言っていた。十時なら必ず誰かは家にいる。

ああ、進を呼んで貰えばよかった。あの子なら隆と違って、

「どう、楽しい？」位の事は聞いてくれる。

「一緒に行こうよ。連れていってあげるから」

と申込む前に誘ったら、

「冗談じゃないよ。僕は受験生だよ。一週間も遊んでられる訳ないじゃない」

「だって、夏休みじゃないの」

「受験生にとっちゃ夏休みが勝敗を決める天王山だって事ぐらい、知らないの？」

「もう少し余裕を持ちなさいよ。遊ぶ時は遊んで、そのあと集中してやればいいじゃないの」

「そんな、お母さんが受験した頃とは違うんだよ。一週間遊べば、一週間分人に遅れるんだ」

「遊び、遊びっていうけど、実際にアメリカを体験する事は、決して遊びじゃないわよ。実地勉強だと思えばいいじゃない」

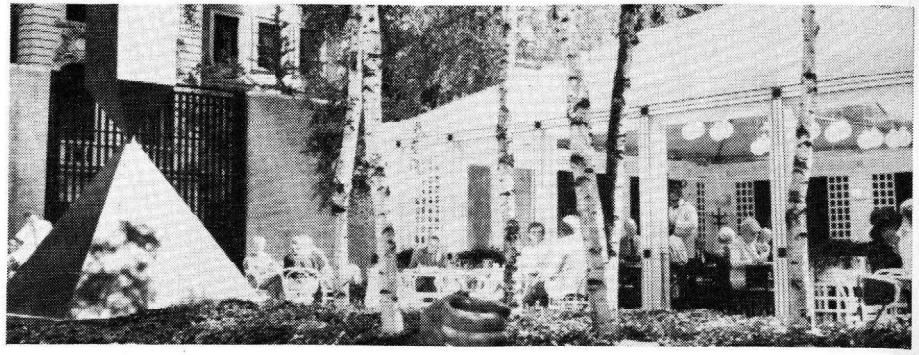
「そんなのは屁理屈、受験生にとっちゃ、実際のアメリカを見る事や、英語をしゃべる事は、勉強の中に入らないの」

口では偉そうな事を言うが、進は気持ちのやさしい子だ。今度の旅行の計画を切り出した時も、真先に賛成してくれたのは進だった。

「お母さんは、ずっとしたい事もできずに我慢して来たんだから、そんなに行きたいなら行っといでよ。後は何とかやるから大丈夫だよ」

夫は反対こそしないが、積極的に賛成した訳ではなかった。

「ニューヨークは治安も悪いっていうし、



一人で行って大丈夫なのか。何もアメリカまで行かなくたって、そんなに行きたきゃ北海道か九州あたりにしとけばいいじゃないか」

と尤もらしい事を言った。

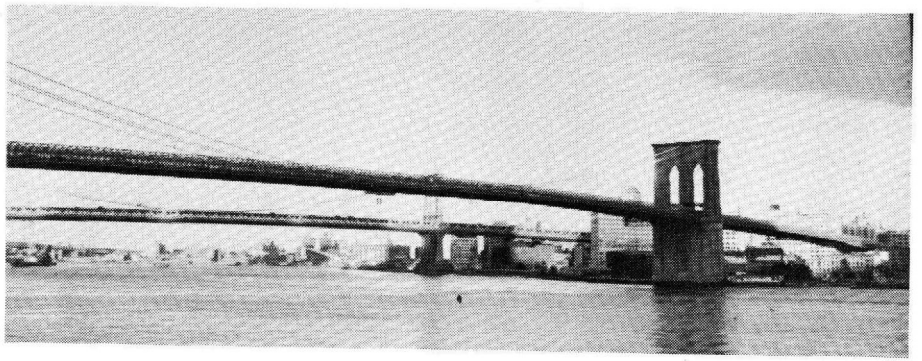
「友達の親爺さんがニューヨークから帰って来たばかりなんで聞いて貰ったんだけど、危いって言われた場所にさえ行かなきゃ、何てことないそうだよ。昼間はどこでも心配ないってさ。だから夜は歩き廻らない方がいいよ」

ちゃんと調べていてくれたんだ、昌子は進が小さい頃よくしたように、抱き寄せて頬ずりしたい程に進を可愛いいと思った。

次の朝も、昌子が起きた時は細川さんはすでに出掛けていた。

ゆっくり身仕度をしホテルを出ると、迷わず昌子は五番街へ出る道を歩いた。焼きたてのパンを売る店を見つけて中に入り、ブルーベリージャムをのせたパンとホットコーヒーを買って、店の片側にあるカウンターに載せ立ったままの朝食を済ませた。カウンターには、勤めに急ぐ人々が次々と入って来てはパンと飲物を食べ出て行く。ニューヨーカーの朝食は意外と質素だった。五番街の辻には、ホットドッグやパン、缶ジュース、アイスクリームなどを売っている屋台が多い。何というのか知恵の輪みたいな形をしたパンを一つと缶ジュース一本を両手に持って、歩きながら昼食を済ます若い人達が多いという。ゆったりした五番街の舗道には、五メートルおき位に段ボールの空函に黒い布をかけ、その上に一目で贋物と思われる金時計を並べて売っている黒人が、あきれる程にいた。たまには金ピカピカのベルト類やアクセサリーを並べている。「あんなの買う人がいるのかしら」口に出しかけて共感してくれる人間のいない事に物足りなさを感じはしたが、夫と一緒ならよかった、とは思いもしない。つまらなそうな顔して側にいられるより、一人の方がよっぽどいい。

アメリカは新しい国、ニューヨークはその中でも最先端をゆく新しい街、と漠然と思い描いていた昌子のイメージとは異って、ニューヨークは意外と古い街並であった。どんな有名な店でも、入口のドアは昔ながらの回転扉か手で押すドアで、日本のように間口一間の小さな店にもオートドア、というのはない。



店内の内装も古めかしいヨーロピアンスタイルが多く、それは老舗の証のようでもあった。

合槌を打って貰いたいと思った時、昌子はカメラのシャッターを押した。写真を見せれば、進が昌子の感想の正当性を証明してくれるだろう。

目の前にセントラルパークの緑が見えて来た。え、じゃ、ティファニーは？足を止めた昌子の前に、ティファニーの古めかしい建物が端然と威厳をもって立っていた。

ああ、ティファニー、ティファニー

ティファニーという言葉には、何故か昌子の胸をときめかす響きがあった。一階には比較的安い、従って昌子にも買える可能性のある品物が並べてある、と案内の本に書いてあった。天井の高い余り明るいとは言えない店内には、ゆったりと陳列ケースが並んでいる。

オープンハートのペンダントを探した。

（あった！）三越本店の陳列ケースに並んでいたのと同じ品が、同じ顔で並んでいた。三十ドル、八・二五％の税金を入れても五万円弱、買える！

「アイ　ウオント　トウ　バアイ　ジスワン」

美人だがオールドミスっぽい売り子が、昌子の指差すオープンハートを取り出した。

「メイ　アイ　ユース　トラベラーズ　チェック」

「イエス」

五十ドルのトラベラーズチェックにサインをし、パスポートと一緒に差出すと、売り子はそれまでの割としとやかな態度とは一変した激しさで、手にしたボールペンの尻でショーケースのガラスを叩いて叫んだ。

「キャッシャー　キャッシャー」

コンコンコンと激しいボールペンの音が静かな店内に響き渡るようで、昌子は体がすくんだ。レジ台からキャッシャーが来てトラベラーズチェックを持去った。いつの間にかオールドミス嬢と入替ったよく太った血色のよい初老の店員が、右手のペンダントを昌子に見せたあと、左手の茶色い巾着型の袋にするりと入れて紐をしめた。それは「種も仕掛けもございません」と両手を拡げて見せる奇術師の気取った手つきに似ていた。店員は袋を水色の小箱に納め白いリボンをかけて昌子の前においた。

「サンキュー」

昌子はこの店の持つ不思議な雰囲気に酔わされていた。成程、これがティファニーか。

水色の小箱は、ずっしり重い満足を昌子の心に与えた。

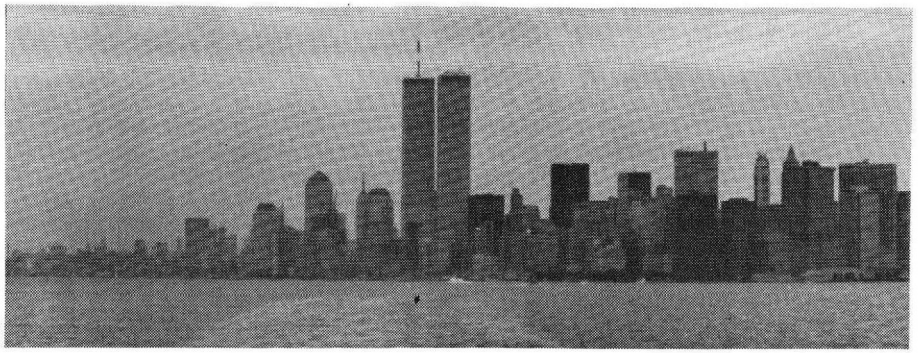
翌日の晩は、ホテルのブレイガイドに頼んで、ミュージカルの切符を買っておいた。開演が八時だから終るのは十時を過ぎるだろう。

昌子はこの日のために持って来たスーツを着て、ホテルの前からイエローキャブに乗った。想像以上に小じんまりした劇場であった。

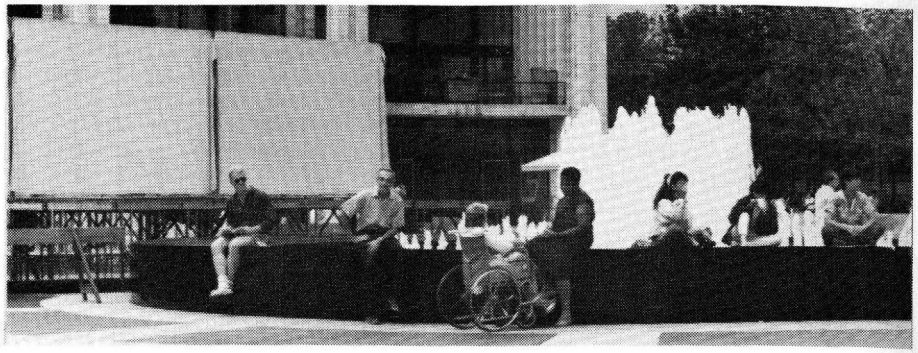
日本でも上演された「コーラスライン」は、バックに鏡を配しただけの簡単な舞台であったが、歌も踊りも本場物の迫力で、台詞や歌詩は殆んど聞き分けられなくても十分に楽しめた。俳優の一人一人が厳しく鍛えられている。十八年間という長いロングランは、考えてみたら進と同じ年という事だった。

幕が下りて劇場から出たのは十一時少し前だった。ホテルまでの道距は、さして遠くはないが、夜は通らない方がいいと念を押されているタイムズスクエアを突切らなければならないので、何とかしてタクシーを捕まえねばと思ったが、あちこちの劇場から一せいに出て来た客でタクシーは奪い合いになり、慣れない昌子にはとても割込める状態ではなかった。時間はどんどん遅くなるし、昌子は歩いて帰る外あるまいと覚悟を決めた。ハンドバッグをきっと抱え込み、足早に歩き出した。斜め下を見つめたまま人混みを縫って急いだ。タイムズスクエアを無事に抜け出し42ストリートに出ると、急に人通りが減った。閉めた店の前に、黒人の若者達が三人四人とたむろしているのが一番怖かった。彼等は何をしているのでもない。ただ集って立っている。針ほどもつけ入る隙を見せてはいけないと、昌子は身構えて足を一層早めた。しばらく歩いている中に、前を歩く初老の夫婦連れが昌子と同じ姿勢で、同じ速さで歩いているのに気付いた。アメリカ人にしては小柄なその二人は、腕を組んで懸命に歩いている。

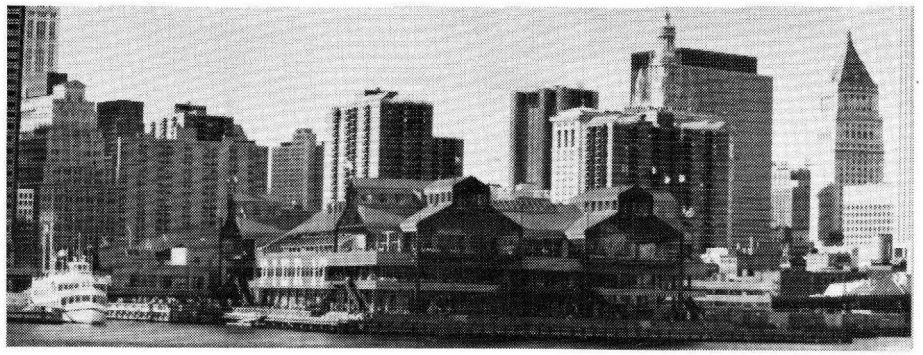
昌子は何となくこの人達は大丈夫だと感じ、歩調を合せて二、三歩後ろに従った。五番街を横切ってホテルのネオンサインを見た時、ああ助かったと思った。何と前の二人連れは昌子と同じホテルの回転扉を押して入っていく。昌子がロビーへ行くと、二人連れは笑顔



で待っていて、夫人の方が右手を差出した。
同じ修羅場をくぐり抜けた戦友といってもいい温い感傷が、昌子の胸を熱くした。
明方少し冷えると思ったら、起きてみると細かい雨が降っていた。珍らしく隣りのベッドに細川さんがまだ眠むっていた。きっと疲れが出たのだろう。時計は七時を廻っている。
洗面を済ませて部屋に戻ると、細川さんは目を覚していて窓の外を見ていた。
「降っているんですね」
「ええ、今日はお出掛けにならないんですか」
「何だか、とてもくたびれてしまって」
「雨も降ってる事ですし、今日位少しゆっくりなさったら」
「そうですね」
「よろしかったら、御一緒にお食事しませんか」
「ええ」
二人は連れ立って二階にあるホテルのレストランへ行った。窓際の席に向い合って坐り註文の品が来るまでの間、窓の下の通行人を見ていた。ちょうど通勤時間とみえて、傘の列が絶え間なく続いている。
「ニューヨークって、意外と地味なんですね。みんなの傘の地味な事、東京の方がずっとカラフルですよ」
柄物の傘は少なく、大方は黒の無地で、女性の傘にしても茶とかグレーせいぜいブルーの無地が多い。
「そうですね。どこでも生活している人は地味なんですね」
細川さんが相槌を打ってくれた。ニューヨークへ来てから昌子の話に相槌を打ってくれたのは、細川さんが初めてだった。
目玉焼とサラダ、それにコーヒーとパンの朝食が運ばれて来た。
「いつもここで召上っていらっしゃるのですか」
「いいえ、朝は大てい焼きたてのパン屋で立喰いです」
「あら、私もですよ。でもこうやって、ゆっくり食べるのもいいですね」
「本当、私も今そう思ってたところです」
「雨のお陰で、思いがけずゆっくり出来ました」
同じ部屋の空気を吸って寝ていながら、細川さんと会話らしい会話を交したのも初めて



だった。部屋に戻ってからも細川さんはベッドに腰を下したまま窓の外を見ていた。昌子も昨日立てた予定では、電車に乗ってワシントンへ行って来る積りだったが、雨の中を一人で行くのは臆劫になって、さて、どうしょうか、とベッドに腰を下した。
「今日はショッピングの日にします。妹にルイ・ヴィトンのバッグを買って来てくれって、頼まれているんです」
「あら、私も姪からお金を預って来てるんですよ」
メトロポリタン美術館の帰り道に、昌子はルイ・ヴィトンの店へ寄った事があった。美術館を歩き廻る積りで、Tシャツにスラックス、それに革製ではあったが、これなら一日中歩き廻っても大丈夫という運動靴を履いていた。間口こそそう広くはないが、ルイ・ヴィトンの店は白木を主にした内装の格調高い雰囲気で、ハイキングスタイルの昌子は気押されてドアを開ける勇気がなかった。ガラス戸の向うに、ドアマンなのか、立派な体格の白人の老人が、正装して控えているのも、昌子の足を引止めていた。正装して出直そう、と思った。昌子がその経緯を笑いながら話すと、
「じゃ、今日は正装して行きましょう」
細川さんは即座に言った。
今度は二人連れではあったし、正装はしていたし、昌子はためらわずにドアを押して店内に入った。二人は同じバッグを買った。
雨は少しずつ弱まっていた。同じ大きさの袋を下げて五番街を歩いている間に、細川さんは度々腕時計を見ていたが、公衆電話のボックスを見つけると「一寸すみません」と袋を昌子に預けてボックスに飛び込んだ。しばらくして出て来た細川さんは、
「これから真直ぐホテルへお帰りですか」
と聞いた。
「ええ、あと二つ三つお土産を買って帰る積りですけど」
「勝手言って悪いんですけど、私どうしても会いたい先生がいて、電話したら、今すぐなら空いているから来てもいいとおっしゃるんです。本当に済みませんが、それ一緒にホテルへ持っていただけませんでしょうか」
「いいですよ」
細川さんは「御免なさい」とお辞儀をすると、通りかかったイエローキャブを捕えて走



り去った。

同じ袋を二つ持って昌子は歩き出した。雨は傘もいらないほどになっていた。

通りにあったタオルの店に入って「ニューヨークへ行くんだ、行くんだ」と触れ廻った友達への土産を買った。心の片隅に何となく物足りない空洞を抱えてホテルへ戻った昌子は、ロビーで同じツアーの三人連れに出逢った。

「お買物ですか」

中の一人が声をかけて来た。

「今日は正装ですね」

もう一人が言った。

「ええ、お土産買いを済まして来ました。あなた方は？」

「今昼飯を食って来たとこです」

「あら、そういえば、私お昼まだでした。道理で体に力が入らないと思った」

「もう少したったら、三人でフルトンマーケットへ行こうと思っているんですが、よかったら一緒にどうですか」

「ああ、こないだ市内観光の時に添乗員さんが言ってらしたとこですね」

「面白そうですよ」

「私も行きたいと思ってたんですが、一人じゃ一寸怖いかな、と思って」

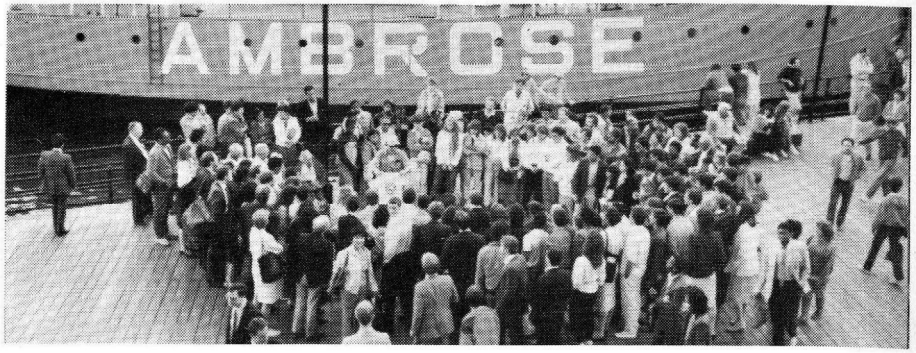
「じゃ、いきましょう。四人いりゃ大丈夫ですよ」

四時にロビーで落合う約束をして昌子は部屋へ戻った。フルトンマーケットというのは、イーストリバー沿いの魚市場を、若者向けの街に再開発して成功している場所だという。

倉庫だった鉄骨の建物を区切り、若者好みの内装を施してブティックや装飾品の店にして人気を呼んでいる。別の倉庫にはシーフードばかり集めた店を並べ、安く旨くシーフードが食べられるというのでこれも若者に受けている。折からのダイエット食品としてのシーフードの人気と相まって、今ニューヨークで一番新しく活気に溢れた若者の盛り場だというのである。昌子は残り物のパンと缶ジュースを腹に納め、着替えてロビーへ行った。

イエローキャブでフルトンマーケットの入口まで行った。金曜日の夕方のマーケットは仕事を了えた若い男女で埋め尽されていた。

薄暗くなりかけたイーストリバーには大小の船が行き交い、美しい曲線を描くいくつもの橋には無数の豆電球がともり、夕焼けの名



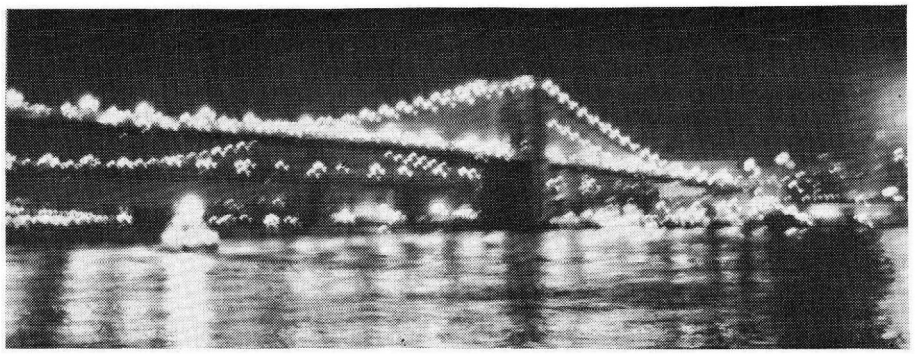
残りをとどめた空に、対岸の林立したビル群が黒くそびえ立っている。海の匂いの強い夕風が熱気にほてった頬を快く撫ぜて通る。お膳立ては巧みに揃って、人恋しいやるせなさが、広い桟橋の上にも、マーケットの中を動き廻る若者の間にも色濃く漂っている。桟橋の中央では、白いTシャツを小道具に大道芸人が大声で何かを言い、その都度、ぐるっと取り囲んだ人々の爆笑の渦を巻き起していた。野次が飛び交い、その野次で人々は又どっと笑い崩れる。鋭い短かい野次も芸人の台詞も、全く昌子には理解できなかったが、洪笑の渦の中にいるだけで十分楽しい気分になった。

三人連れの一人は、プロのカメラマンで、レンズやフィルムなどを入れたかなり大きな鞄を下げていた。人々の間に潜っていったと思うと、少し離れた建物の二階に駆け上ってシャッターを切っていた。来る時の飛行機の中でも、入国手続きを待つ二時間近い間も、この三人はいつも並んで冗談を言い合って笑っていたので、当然仲間なのかと思っていたら、この旅行で知り合った仲なのだと言う。

プロのカメラマン氏はゴム草履にショートパンツという軽装で飛行機に乗っていて、昌子はその無雑作ぶりに目を見張ったが、彼はニューヨークが好きで、仕事があってもなくても、三か月に一度位は来ているのだという。「先生」と呼ばれる小柄な青年は、中学の英語の教師で、「生徒に偉そうな事を言うための材料を仕入れに来たんです」と自己紹介した。一番年かさに見える青年は「自営業です」と言った。何とは言わないが、昌子はコーヒー屋かレストランの経営者ではないかと思った。そんな雰囲気をもつ青年だった。スポーツなら何でも、という自営業氏は、もうヤンキーズの試合を二度、これもここへ来る目的の一つだったという全米テニスオープンの試合を二度見に行った、ゴルフには三回行ったという。「ゴルフ場もゴルフの道具も、とに角安いんですよ」

新しいゴルフ道具を又買ってしまった、と笑った。

大きな倉庫の一つは、食べ物屋専門になっている。シーフードは勿論、ソーセージ、チーズ、フルーツ、飲み物、雑多な店がぎっしり並び食欲を満す若者達で賑わっている。その人いきれ、食べ物の匂い、話し声、笑い声の騒音で、昌子は何も食べない中にもう胸が



一杯になっていた。一階の一隅に腰かけて食べられる店があった。

「そんな事言わないで、何か食べましょう」

「先生」に促され昌子は壁の黒板に書かれたメニューの中からボイルドクラムを選んだ。

カメラマン氏がビールのジョッキを持って来て昌子の前に置いた。

「小さいのなら、いいでしょう」

「ええ」

「一人でニューヨークへいらした勇気あるお姉さまのために」

自営業氏が音頭をとって乾杯した。「おばさん」とは言わないで「お姉さま」と言うだけ、この人は大人なんだ。

それぞれの人間がそれぞれの目的で勝手に一人で来て、それぞれに楽しむ——こういう世界もあったんだ、それを知っただけでも来てよかった。

「ホラ、この時計」

左隣りのカメラマン氏が左腕をみんなの前に突出した。

「ラドーの金時計が、二万円しないで買えちゃった」

「なあんだ、矢張り買ったの」

自営業氏が大きな声を出した。

「イミテーション、承知。こう金ピカ金ピカに光ってりゃ、それでいいの。驚くな、ラドーの時計が、なんと、メイドインジャパンなんだぞ」

「え、本当か、メイドインジャパンか」

先生が唸った。

「こういうの、五番街の街頭で沢山売ってましたよ。黒い人が」

「そう、それですよ、これ」

「え、あれを買ったんですか、私、あんなの買う人がいるのかしら、と思ったけど、いるんですね。目の前にいるんですね」

「いるんですよ、アハ……」

軽い酔いも手伝って昌子は楽しくてならなかった。今までにこんな楽しい気分で笑った事があったかしら、と思った。結婚以来ずっと昌子の体をぴったり覆い尽していた殻なんか、ロブスターの殻を剝ぐように、自分の手でむかなきゃいけない、そうしなきゃ私は前へ進む事も出来やしない。

「これ、日本に帰るまでもつかなあ」

先生がロブスターの鋏の先で、時計を突つついた。

「もつ、もつ、メイドインジャパンは優秀なんだぞ」

「そうか、そうだな、お里帰りだもんな、頑張んなきゃ、アハ……」

三人は交互に席を立ってビールを買って来た。若いっていいなあ、昌子はジョッキに残ったビールを一気にあおった。

「先生、今日は何を仕入れて来たの」

カメラマン氏の問いに、先生はポケットから茶色の袋を取出した。

「何だい、これ」

テーブルに置かれたのは、上下に白いキャップのついた透明な筒状のものだった。透明な液体が入ったその筒の中には、真白い螺旋状の滑り台がついていて、その上を冴えたブルーの小さな玉が、後から後から限りなく転がり落ちてくる。

「ね、面白いでしょ。実に面白いんだ。じっと見てると、カリブ海に浮かぶ真白い島、澄みきった青空、よくある光景だけど、そんな光景を想い出しませんか」

転がり落ちる玉の速度がゆるくなると、先生は筒を逆さにした。玉は又勢いよく転がり始めた。

「まあ、いいわ。あたしも欲しい」

「お子さんのお土産ですか」

「いいえ、自分の机の上に置くんです。いつまで見てても倦きないもの」

この玉の一つが自分で、螺旋状の道を転がり下りても、筒を逆さにすれば反対側の口から又新しい姿で飛び出せる、人生もそういうものであったなら、どんなにいいだろう。

長患いだった姑の後始末が終る頃から、昌子の心には「万才」の声が次第に拡がり始めていた。その声は、押し殺しても押し殺しても、ふつふつと小さな泡となって喉元に浮び上って来た。

（自由になった、万才）

（私の時代になった、万才）

結婚して舅・姑と共に暮し始めた日から意識の下を流れ続けていた自由への渇望が、二十年経ってやっと現実のものとなった。

しかしやりたい事はいくらもある筈なのに、さし当って昌子は何をしていいか解らなかった。姑の看病に費していた時間は、空虚なままに残り、何とかしなきゃ、何かしなきゃの焦りが、却って昌子を疲れさせた。姑が一生

をかけて守り続けて来た古い家の秩序を覆すには、昌子自身の思い切った気持ちの切り換えが必要であった。

七月に入った或る日、昌子は買物に入った近所の酒屋の冷蔵庫に目をとめた。見慣れたデザインの缶ビールが並ぶ中に、一きわ目を引く缶があった。それは超高層ビルの明るい窓が美しいマンハッタンの夜景であった。

ああ　ニューヨーク　自由の女神

マンハッタンのあかりが、昌子の心に学生時代の夢を甦らせた。あんなに行きたくても行けなかったニューヨークが、今なら旅行社に申込むだけで簡単に行ける。そうだ、行こう、ニューヨークへ行こう。

舅が亡くなり姑が寝ついた頃から、昌子は頼まれて知り合いや近所の中学生に自宅で英語を教えていた。英文科を出たといっても、結婚以来家事に追われて、勉強らしい勉強はしていなかったが、中学生になった隆のためにも勉強し直すいい機会だと思って続けて来た。一か月二、三万の収入でも、長い間には纏った金額になっていた。

グリニッチ・ヴィレッジを歩くオプショナルツアーに参加した。危険だから一人では絶対乗らないようにと言われている地下鉄に乗るというのに、昌子は惹かれた。このツアーには、細川さん以外のメンバーが揃った。例の三人組と六十近い夫婦連れ、それに昌子の六名である。

トークンと呼ばれる地下鉄用（バスにも使える）のメタルを一つずつ手渡され、ホテルのすぐ隣りにあるグランドセントラル駅の地下から乗った。駅へ下りる階段は落書きだらけで汚なく、公衆便所を連想させる強烈な悪臭が鼻をついた。昌子はなるべく息を吸わないようにした。

最初にホームへ入って来た電車はあの悪名高い落書きに埋った車輛ではなかった。

「折角だから、なるべく落書きだらけの車輛に乗りましょう」

案内役の青年はそう言ってきれいな車輛を見送った。

「日本から輸出された車輛は、いくら落書きされても、拭くとすぐ消えてしまうように出来てるんだそうです」

次に来た電車は、期待通りの、壁から天井

果ては床にまで文字や絵を書きなぐった車輛だった。

「これは落書きではなく、芸術家の芸術的自己表現なのだそうです」

成程、落書きといっても、日本の公衆便所にあるような卑猥なものは一つもなく、芸術的と言われればそうとも思える。乗客には黒い人が多く、ちらちらと見られているような気がして、一行六人は、案内の青年を取り囲んで一塊になっていた。

グリニッチ・ヴィレッジは若い前衛美術家達が、倉庫街だった街を改造して多くの画廊を作り、芸術活動の場にしている所だという。

今はシーズンオフでどの画廊も扉を閉しているが、九月に入ると、街は一せいに新しい芸術活動を始めるという。

「一休みしましょう」

と案内の青年は一行を古い造りのコーヒーショップに案内した。席について見廻すと自営業氏の姿が見当らない。昌子はその事を青年に言った。

「彼はレコードを買いに行っています。じき来ますから心配ありません」

ヴィレッジには、古いレコードを揃えている店が何軒かあって、そこへ行けば大抵は見つかるのだそうだ。注文したコーヒーが運ばれて来ない中に、自営業氏がレコードの包みを青年の方へ振りかざしながらニコニコ顔で入って来た。

「あった、あった、バッチリ」

自営業氏は青年の隣りに坐った。

「これを買うのも、今度の旅行の目的だったんですよ」

言い訳のように自営業氏はみんなに言った。

「若い人はいいですね。楽しみが沢山あって」

夫婦連れの夫人が言った。

「若かないんですがね、もう」

自営業氏が頭をかくと、

「こいつ照れてやがる」

カメラマン氏がその肩を突いた。

「いや、日本でも随分探したんですが、なくってね。友達にここならあるだろうって聞いたもんで」

「何のレコードですの」

夫人が言った。

「いや、古いジャズナンバーです」

「渋いネー」

先生が茶化した。

「一人者のうちだよ。社長」
カメラマン氏の声に、
「そりゃそうだ。カミさんなんかいたら、わざわざレコード探しにニューヨークくんだりまで、って訳にやいかない。女は煩いからね」
十時にホテルのロビーに集合してバスでラ・ガーディア空港に着き、十二時発の日航に乗った。細川さんは本の一部は船便で送ったが、持てるだけは持って帰ると、重そうな鞄を引摺っていた。自営業氏はゴルフ道具が重そうだし、カメラマン氏も新しく買ったハンティングワールドの鞄に、カメラ道具を一杯詰込んで重そうであった。先生は滅多矢鱈買いこんだという玩具類の入った大きな袋をいくつも両手に下げていた。夫婦連れの二人も、子供や孫や新戚へのお土産を目一杯買い込んで、膨れた鞄や袋を息を切らして持運んでいた。
昌子だけが、手廻り品を入れた鞄とルイ・ヴィトンの紙袋を下げて身軽であった。買ったものと言えばヴィトンの鞄と、自分のティファニーのペンダントと、あと二、三のタオルだけであった。夫や息子達への土産が何にもないのに気付きはしたが、それでいいと思った。ニューヨークへ着いた日だけ家族の事が頭にあったが、後は想い出しもしなかった。それでいい。結婚以来、一日として忘れてはならなかった家族—舅、姑、夫、息子、からやっと完全に解放されている自分を見つけた。一個の人間として、これからは自分の事を大事に考えよう。
夫は夫、息子は息子、私は私。
ニューヨークへ来たかった理由はそれだったのだ。日本を離れなければ、この気持ちの切り変えはできなかったろう。
思い切って来てよかった。もう若くはないんだから、細川さんほどには行くまいが、勉強のし直しをしよう。英語ももっと情熱をもって教えてみよう。そして又、自分のお金で日本を離れてみよう。自分の目標を持てば、夫がどうあろうと、息子達が何をしようと、そう気にはならない筈だ。ヴィレジで自営業者が言ったような煩い女にはならないで済むだろう。
体中に張って来る力を快く感じながら、昌子は窓の外を見つめていた。薄い雲の切れ間に、白いレースで縁どられたような海岸線が見えて来た。

作兵衛の槍

大和禎人

「名護屋城址」と刻まれた、巨碑が聳える草原に立った。
この東郷平八郎揮毫にかかる碑石はなんとも寂しげにポツンとしていた。巨きいだけになおのことそれは寂しく思えるのだった。他にもう一つ「名護屋城天主臺址」とある小さい石柱がある。
碑石からうける寂しさはいまどき東郷さんはなんとなくしっくりしないからだ。しかし、壱岐の島を指呼し得るこのあたりでは日露の対馬沖海戦の砲声は多分いんいんとして遠雷のように聞えたのではないか、そうとしても、いまはそれを糺す由もない時代である。だが、なんとなく東郷さんが嘱されこの碑のために染筆した謂れはわかるような気がする。
「おたく、海軍でいらっしゃいますか」
と、これは娘の嫁ぎ先が近く、たまたま三笠記念艦を尋ねた親しい友人が呼びかけられたという話を聞いたことがある。旗艦「三笠」も、提督東郷の名も、すでに遠い昔の伝説と化して久しいのだ。
「太閤の睨みし海の霞かな」
こちらは月斗という俳人の句碑としてまことに堂々たる貫祿のものが、一軒だけのわびしい割烹旅館の脇にある。太閤さんならいっそ風化した歴史中の人物だから無難ではないか、そんな気がした。太閤の滞在は一年三ケ月、淀君の秀頼懐胎はこの時といわれるロマンの地でもある。朝鮮出兵の折の布陣を示す天主台東北、西北の二面を上下、彩色の図絵風に描いた掲示板がある。目前に浮かぶ島々をおかげで識別できる体ものだ。
総体としては想像に描いた荒涼たる風景がここにあり、かえって、それは満足していい風景なのであった。
ここまで上ってくるについて、タクシーは何度か車体の腹を擦り、客の方はのけぞるばかり背持たせに体重を一杯かけることがしばしばであった。さすが要害の地に

思えた。海抜にして八十九メートルだそうである。こうして憧れの地にいまようやく立ったものだ。むさぼりこの場に一望できるかぎりを眼に焼き付けておきたいと思った。

壱岐海峡の眺望は見事なパノラマ状に展け、ここに玄海・壱岐対馬二つの国定公園の接点を構成する自然がある。馬渡、加唐、加部といった島々が浮かび壱岐はその奥に島影を望める。斧鉞を加えようもない自然そのものが感動をもって迫るようだ。

眼下をちょうど壱岐へ向うフェリーが呼子港を出て、航跡のカーブを描き、船首を北へ転じようとするところだった。

と、そうした景色の中にもう一つだけ、ふと、草原の天主台上の方に点景になるものがあることに気付いた。それはこんな所でも商売が成り立つものか、つつましく置かれた写真屋のサンプルパネルである。

「ああ、これは小林桂樹、そしてこっちは田中邦衛ですな」

「そうそのとうり、はてなぁ、この女優は誰だっけ、思いだせないなぁ」

「誰でしょうか」

（恐らくロケかなにかでこの地を訪れたものであろう）

と、思われるスナップなのだ。

「そうですなぁ、思い出せません、この顔有名ですがなぁ」

「そう僕も思いだせない」

なんのことはない。それは梶芽衣子だったのだが、あの大きい眼の女優をどうしても思い浮かばないでしまった。

だが、かんじんの写真屋がいないではないかと不審に思い、はじめてその傍らのビニールテントに気づいた。中に黙然として人影があるではないか。写真屋は初手からこちらの一部始終を見ていたことになる。あきれたものだ。

だが、男は生ける石の像のように動こうともしなかった。けっして記念撮影を強要はしないという構えだ。気にしながら、ビニールテントのすぐ前に立てられているくだんの文祿・慶長役参加諸将の布陣の見取図をあらためて見入った。先鋒勢を半島におくり出したあとの、これは予備軍の配置なのだ。徳川家康の名も発見される。

「家康公も律儀でか、付き合いよくか、仕方なしか、ここまで出陣しているんだねぇ」

「……」

運転手くんはそれには応えなかった。郷土だからなんとも言いようがなかろうし、こちらの心証を計りかねたらしい。聞けば彼は波戸岬をはるか回りこんで玄海という町があり、そこの出だという話しだった。

さて、これからの話は名護屋城とはあまりかかわりもないことのようだが……。ここで「ホリさん」という現代の、といっても少し過去の、政治家が登場する。

「ホリさん」と聞いて、（堀さん）としか思い浮かばなかったのはいささか不覚であったようだ。そして、なにか因縁話めくようだが、名護屋城と太閤さまもこれから先の話に無関係ではない。狭いニホン国のことだから仕方がないのだ。だんだんミステリーじみてくる……。

唐津市文化会館常設の曳山展示場に「くんち」の花、十四台の曳山を見た。これも考えれば本編に密接にかかわる寺沢志摩守広高なるご仁の築かれた唐津城、そしてその後代の唐津藩治世と無関係ではなく、ひらかれた太平の賜物と考えられる。この豪壮な曳山は文政二年（一八一九）に刀町の石崎嘉兵衛が同志の大木小助らと一番山「赤獅子」を製作、産土の神である唐津神社に奉納したのが始まりとされ、明治九年（一八七六）十三番「鯱」、十四番「七宝丸」まで、明治中期惜しくも「黒獅子」という一台を損滅したが、各町が競い合った町人の心意気が守り継がれたところに意義があり、文化遺産の価値が買われる。秋祭は寺沢氏の築城以前からの伝統と言われる。

この日は一台が県内武雄の「くんち」に出場して欠けていたが、いずれも二トンから四トンという重厚をほこり、木組、粘土の原型や木型の上に和紙を数百回張り重ね、漆をはき金銀を施して仕上げたもの。要するに昔あった「一閑張り」なのだった。オドケ加減になんとも言えぬロマンが感じられるのだ。いわゆる山車の観念に思い描くものとは少しく違っていた。強いていうなら東北の「ねぶた」にむしろ似通うものに思われた。「くんち」は（供火）と書くのが語源だそうである。

映像文化を通して民族行事が多く紹介される時代だが、この場合にかぎらず、思わず目頭の熱くなるような感動を覚えることがしばしばである。日本人の血がそうさせるのだろうか。

ところで、ここから唐津城にむかい歩くほどに、やがて「保利」さんという表札の邸宅の前を通ったものだった。（ホリさんは保利さんだった）保利さんといえば官房長官、衆議院議長をつとめ、たしか癌に倒れるまで悲壮な登院をした人、間違いでなければ保利茂と云われたように不確かだが覚えがある。

（よそもん）にはあまりかかわりがなさそうだが、いまだ保利さんの神話は生きて、厚い支持をうけているもようだった。抜きがたく堅固なローカル色を見る思いである。

運転手の話は急には呑み込めない種類のものだった。

「あれですか、（呼子鉄道）のための高架ですたい、保

利さんご存知と思いますが、あのかたが亡くなったんで、実現が見送られたものですたい」

という話だったのだ。七つ釜、呼子、そして名護屋と走りぬけ、振り出しにようやく戻ってきたところだ。

「名護屋大橋が出けて、こちらへわけなく来られ、便利なりました」

そのご自慢の大橋をもう一度渡ると、来たときの道と違う道路に入って行った。そしてやがてのこと、往路と合流する手前の左手に高架が見えてくる。

「さっきはこの下の道を七つ釜へ行きました」

「そうだったね、で、この高いところを走っているのはなに、水道かなにか」

しかし、それが鉄道のためのものだった。荒打ちのままのコンクリート肌が、黒ずみ空しく流れた歳月を物語るかに見えるものだ。未完に終ったそのまま、これを撤去するとしても改めて工事費をかけねばならない、無用の長物の見本のようなものだ。政治家の死が長大なこの遺産を残したところに、色濃くローカルの特質を覗いたような気がする。いまのところ風化にまかせるほか手はないのだろう。

時の流れが堆積して歴史が作られる。時の流れにも自浄作用があって、ほどよいところでまったく別種の巷説を作りあげたりする。唐津城に達して、天正の昔にさかのぼりそうした巷説にめぐり会うことになる。そしてホリさんにそのことで後日のお世話をかける経緯をたどることになる。

ここにいう巷説は幾重にも資料がぶつかりあうことで、唐津土産のロマンはにわかに高まりを見る。

第一の資料は有名な伴天連ルイス・フロイスの報告する『イエズス会日本年報』に収められる記事である。

明智の兵は、内部にはいって信長が手と顔を洗い終って、手拭で清めているのを見て、その背に矢を放った。信長はこの矢を抜いて、ナギナタをとってしばらく戦ったが、やがて腕に弾創を受けて、室にはいり戸を閉じた。ある人は彼が切腹したといい、ある人は宮殿に火を放って死んだという。

本能寺の変をドラマ化する場合、大方はこの推移をなぞった演出が多いようだ。

さらに第二の資料は唐津城に見る『信長を刺した槍』というはなはだショッキングな展示品の説明である。

史書によっては信長は天野源左衛門に討たれたとしているものがある。と、すれば寺沢志摩守広高に迎えられ姓を天野と変え世を忍ぶ後日譚がおかしくなる。明智三羽烏の一人とうたわれた安田作兵衛の勇名も空しくなる。また、別の説として筑後柳川の豪勇立花宗茂に仕え、やはり天野を名乗り朝鮮役碧蹄館で明軍を破った豪傑とする説がある。これまた迷説であろう。

そうでなければ唐津城の「作兵衛の槍」は偽物となるはずだ。巷説すでに紛々の気配である。安兵衛が槍をかついで九州に落ちのびた忍び姿を想像すると戦国乱世を生きる男のおぞましく必死なドラマを小説に書けるかもしれぬ。豪勇が命惜しく生きようとする、俗な人間臭を描けば面白いのではないか。

槍一筋は命だった。手離せないものとすればこの落武者は（残党狩り）の追手の目をどうくらまし、その槍を抱えて落ちのびたものであろうか。興味しんしんたるものがある。

作兵衛の槍は全長二・九六メートル、穂先二六・五センチ、巾二・七センチ、片方は平面刃で、真ん中に巾〇・四センチ×長さ一一・四センチの窪み、他面は真ん中に頂のある特異な三角刃、乱れ刀文。三ケ所に大きな刃こぼれが目立ち、激闘を物語るようだ。銘は無い。柄は木製、直径三・五センチだが、黒漆塗が剝れ落ちておりいかにも使い古したものだ。

釘づけにされたように足を止めて飽かず見入った。どこの城に行ってもあるのは石器、土器、青銅器といった考古資料から武器、武具、はては民具にいたる展示を見ることが多い。だから、「作兵衛の槍」は目立つのだ。

ところで、唐津城は寺沢広高が名護屋城の解体資材を用いて築城したものと由来の略記を標識に読める。天主閣はついに建てられず天主台のみで明治維新におよんだ。広高は玄海を望み風光に恵まれた満頭山を選び城を定め、松浦川の流路を変えて城を囲む大改修を行い、後世の虹の松原をなす防風植林を行っている。秀吉の麾下の将として信頼を得、かなり世渡りは上手の方だったらしい。気宇また広大で安田作兵衛を厚遇し秀吉の追及から匿い通したあたりなかなかの器量である。

さて、その寺沢広高は尾張の国人で信長や秀吉に仕えたという素姓はともかくとして、文祿三年（一五九四）唐津入部以前の来歴についてはあまり明らかでない。一説では大和の国で三千石、またの一説には、福知山で二万石を領有する大名だった、と言われたりする。

唐津藩主としての志摩守の治世は三十九年、二代兵庫頭堅高は十四年、合わせれば半世紀にわたり、寺沢氏は歴代藩主中唯一の外様大名だった。堅高の時代に天草キリシタン叛乱があり、関ケ原役に際し父広高の軍功により所領に加えられていた天草一揆の鎮定に苦しみ、次いで島原の原城攻撃でも目立つ働きがなかったかどで、辛うじて本地は安堵したが、天草島その他の属領を失った。失意の堅高が正保十四年自害するにおよんで寺沢氏は血統が絶え断絶した。

安田作兵衛の寺沢氏随身の時期については右の経緯からもかなり疑問にぶつかる。

それはまず天正十四年（一五八六）、つまり本能寺の変後四年に相当する春、彼は追及の手を逃れ九州に下り、同十五年旧知の寺沢広高に高祿をもって迎えられた、という説があることだ。寺沢迅の唐津入部は前記のように文祿三年だから、事変からは十二年を隔てる後年である。封をいまだ見ない天正十四年の九州下りは寺沢氏を頼ってはあり得ない。

そうしてみると、旧知の間柄を頼るとしても、まだ下積みの弘高に随身し片腕として働いた時代が十年ばかりあるという推理が成り立つことになろう。

別説のように立花氏に仕えたのが真とすれば同じ十年ばかりの空白の間を、文祿役に参加し碧蹄館に勇戦したことが真実としてあり得ることになるかも知れぬ。しかる後、さらに転身したものだったか、だが、残念ながら唐津側にはそうした裏づけになる資料は何もないのだから、いよいよ謎の霧に包まれ真相は見失われる。

ともあれ、安田作兵衛本人は天野源右衛門として慶長二年（一五九七）唐津に没している。数奇の人生中、この地の在住はわずか三年という勘定にしかならないということで、いっそう疑問は深まるばかりである。

歴代藩主の夢を実現するように鉄筋コンクリートの天主閣が創建されたのは昭和四十一年だった。唐津市政の歴史中、このことは重要な一ページとなるものに相違ない。そしてこの時こそあの保利さんは政治家として絶頂期にあったのだから、郷土のため大いに蔭の力になったことであろう。想像に難くない。

寺沢氏二代半世紀にわたる治世は転封大名として唐津の天地に大いに新風を吹き込んだことは明らかである。

志摩守広高は入部するとそれまで鬼子岳にあった波多氏の城を廃して現在地に移し、すでに廃城と化していた名護屋城の用材を許されて移し、天主台その他を現状にまで築いた。ほぼ今日の舞鶴城址公園の基いを拓いたのは実にその治世である。

さらに治水の面でも松浦川に波多川を合流させ、流路を変え城の東に注がせる大改修を行い、防風対策として八キロに及ぶ松原を植林したものが今に風雪に耐え「虹の松原」を形成するなど、また広高その人の業である。これらの余慶はすべて今日に及んでいる。保利さんの果しえなかった呼子鉄道とはスケールが違うようだ。

大手口から登り、直線の石段をほぼ登りつめ、さらに行くと大藤のある場所に達する。樹齢恐らくは数百年と思われる。ここから望み仰ぐ天主の威容は名城の印象がある。拋物線を描く石垣の上に聳え、鉄筋の城とはいえこれは広高の想い描いたものの風格を目のあたりにするものではないか。寺沢志摩守が生きてこれを見ることがあればハラハラ涙を拭いあえぬことであろう。

作兵衛を姓安田として記憶していたのは、少年期に雑誌の口絵かなにかで見た『森蘭丸奮戦の図』といったものを見て強く印象に残っていたからだ。安兵衛の突き出す槍を小姓の森蘭丸が高欄の上にあって、わしつかみにし太刀を振り上げ奮戦している、といったもので少年の健気にうたれたもののようだ。多分「少年倶楽部」あたりで見たものではなかったかと思う。

これは謀反か、いかなる者の企てぞと御諚のところに、森乱（ママ）申すように、明智が者と見え申し候と言上候えば、是非に及ばずと上意候

こちらは『信長公記』に見えるものだ。

森乱は側近に仕え、重用された森氏だから少しく失礼に思われる。公記の筆者（太田和泉守牛一）は蘭丸に好意をもっていなかったのではないか。信長の寵を一身にあつめ、まさに花の十七歳、弟坊丸とともに殉じている。いまだ自浄の及ばぬ歴史事情が現に存在するもののごとくである。

唐津における安田作兵衛の槍にまつわる由来書なるものの全文をこのへんで写しておこう。

安田作兵衛槍の由来

安田作兵衛は光秀の臣、明智三羽烏の一人として驍名かくれなし。

本能寺の戦いで作兵衛一番乗りをなし、信長に迫る。信長怒って

「下郎推参なり」

と呼びすて寝所に入る。作兵衛は障子にうつる信長の影を目当て突き出す槍先、過またず公の眉間を刺す。信長ついに自刃す。時に年四十有九、蘭丸大喝して作兵衛とわたり合ううち、作兵衛足踏み外して階前の溝に倒れたるを蘭丸すかさずこれを突き、太股より睾丸のあたりへ貫く、仕損じたりと蘭丸二の槍を入れ込んだ。槍を引くと作兵衛得たりと槍の柄を伝い躍り上って抜き打ちに蘭丸を一刀のもとに切って斃したり、そのうち山崎の嵐に枯梗の花空しく散り失せて五三の桐天下に時めく。慶長年間寺沢志摩守唐津城主たり。作兵衛その志摩守と刎頸の交わりありければ当城下に来たり、天野源右衛門と名乗り、客将として優遇を受く。

然るに末年彼の眉間に腫物を生じ、百方医を加えれども治せず、しかもそれぞれ往年の信長の眉間に槍をつけた箇所と寸分代らぬをいたく気を病みけるが、ついに病没したりと伝う。遺骸は寺沢家に由緒深き当寺に葬り、厚くこれを弔いたりと伝う。彼の千軍万馬の中に使用せし長槍は当山の宝物として長くこれを伝う。

（山崎の嵐に桔梗の花は空しく散り失せて五三の桐天下に時めく）

なんとも大仰で、桔梗は明智、桐は羽柴とわからぬではないが、時代がかった文体である。信を失う恐れさえ感じられるのは残念なことである。しかし、

（「下郎推参なり」）

とあり、この一語だけはよく信長らしくうけとれるフシが妙と言えなくもない。信長から見れば陪臣の安田作兵衛のごとき虫ケラ同然のはずだった。

さらに作兵衛随身の時期もただに慶長年間とあるのみ、前記のように同じ二年の没年を真とする場合、曖昧であるばかりでなく、慶長改元は文祿五年十月二十七日であるから、作兵衛の唐津に客将として遇された期間はいよいよ短いものになってしまう。

ここにかかげたものは唐津市西寺町浄泰寺が伝えるものである。因みにこの寺に安田作兵衛は葬られ、墓石が建てられていて、

『善要智仙禅定門』

とその戒名が刻されている。

さて、ここで唐津城の方の説明は食い違う点がもう一つある。それは知行の相違である。槍の所蔵は寺方で唐津城の方はこれを乞いうけ展示したものだが、さすが説明文はかなり垢ぬけしたものになっている。だが、末裔の言い伝える一万石の知行が、なぜにか八千石とされている。むしろこのほうが（さあらんか）と納得できるような気がする。万石となると出城を与えなくてはならない格式ではないか。唐津藩の石高は志摩守広高入部の当時八万三千石、兵庫頭堅高に家督を引き継がれた最盛期に十二万三千石である。広高の入部当時に万石を与えたとは到底思われない、とするのが妥当ではないか。

ともあれ、山崎の敗戦以後を彼はいかに逃れ、またいかに生きたものか、潜伏、流転の事情はまったく不明である。

心に残った唐津の印象を完結したい念願は日を経るにしたがいつのるばかりのところ、意を決してそれを尋ねてみる成行きをたどることになった。あて先も地図を案じ、（東城内町、唐津城管理事務所）として、返信封筒を入れて投函した。

待つほどに回信を得た。封筒の裏を返すと、担当、保利陽之助とあった。

（あっ）

と思った。恐らくは一族でもあろうか。

さきに引用した寺方の説明全文と、昭和五十九年十二月二十四日の佐賀新聞のコピーが入っていた。

前略　粗筆にて失礼乍ら、おたずねの件二葉の資料を送ります。

「一、左記はお寺（浄泰寺）の由来書」

「二、新聞は新聞社の調査によるもの」

とあり、左記のと書かれた由来書の原稿は同じ保利さんの手蹟と覚しく、コピーをとったものだった。その全文は借用して前掲のとうりである。

次に新聞の方だが、

「本能寺の変で〝新事実〟」

というサブタイトルとともに、

『信長は自害でなく殺害』

という大見出しの記事がいきなり目に飛び込んできた。ローカル紙のことだから記事としてはラフで、また混乱も多い文章なのだが、整理し要約しておこう。

この記事によれば作兵衛の末裔が現存している。直系十三代にあたるという竹田猛さん（九〇）が北九州市若松区に、その実妹東久さん（八一）が同市小倉区に、また十四代として久さんの方の長男東義久さん（五〇）が福岡市早良区に、また、その姉昭子さん（五七）は嫁して米倉姓となり佐賀市に健在というのである。竹田猛さん夫婦には子供がなく、十四代は東さんということになったが、東義久さん、米倉さんともに子宝に恵まれていないので、このままだと家系が絶えるという。ここに掲げる年齢はすべて五十九年現在のものだから、その後の事情の推移は計り知れない。

ところで、直系が青柳姓となったのは十二代末吉さんからで、この人は名前の示すとうり末子だが、十代天野貞固の四男四女のうち二男が早逝し、十一代となった貞成さんに子がなく、養子縁組して竹田姓になっていた末吉さんが十二代になった、という経緯らしい。養子になり嗣子となれば徴兵逃れができると教わったというものだ。朝鮮総督府の役人だったそうだ。この（徴兵逃れ）の話が槍一筋に生きた武辺の子孫というのだから面白い。東久さんの口からもれ、取材されている。久さんが女性だからということもあろうし、また、いまだから平気で話せることのようだ。

ところで、こうした家系に大事に守られ、伝えられてきた系譜にたどると、

作兵衛は美濃の国不破郡安田村の出で宝蔵院流槍術を松田主膳という人物を師として学び。在所の十兵衛が明智光秀を名乗り、日向守として信長に仕える身であることを知り、尋ねて家臣となったものという。

本能寺の変そのもの、その時の作兵衛の働きは、

『信長が殿中の炎の中に飛び入ろうとしたとき、着衣の襟をつかみ一刀のもとに首を切った。その首と着衣の片袖を明智左馬助に見せると落涙して、明智光秀に見せると無残な仕打ちをしそうなのでひそかに知り合いの寺院住職に供養を頼み、光秀には片袖だけを見せた』

という伝承が末裔の後生大事に守ってきた内容になっている。武功は武功として、一片の憐愍をもって敵に情

をかけた話になっているところが整いすぎる。

もちろん左馬助はかの湖水渡りで有名な光秀の娘婿どのだが、主家に功名を告げるにあたっておん人将には片袖だけを示してすませるということがあり得るだろうかと思われる。

右大臣信長の首級をあげながら実検に供することがなかったとすれば虚妄とされても仕方あるまい。明智氏が天下人となった際には功名一番の証拠を争乱中に秘かに葬るなどあり得ないことだろう。

そうとなれば、太田牛一の「信長公記」や宣教師フロイスの聞き書きのような体制側の資料が信をおけそうに思われてくる。数多のドラマの思うつぼである。

どちらかといえば、あまりにも愚直な光秀を憎むいわれがなく、同情する者からみれば、疑問がありすぎてどちらとも軍配をあげかねる。

さて、ここで槍を抱える戦国生れの男が拾われたのが、寺沢氏にしろ、立花氏にしろその恩義に報いるためにも、目を血走らせて駆けたであろう舞台をもう一度かえりみたくなる。

もちろん、ハイライトはあの名護屋城にかかわり、そしてその周辺でなければならない。戦国に生まれたこの男がせっかくの腕をいまひとたび振るうとすればこの時でなければならない。慶年二年に生を終えた彼は武運を試そうにも、それから三年後の関ケ原合戦となるともう生きてこの世にはいないからだ。

狩野光信筆と伝えられる「肥前名護屋城図屏風」が昭和四十三年世に出るということがあり、五層七階の天主の全容や櫓などが明らかになり、板ぶきの店や、遊女、入江の船の様子も描かれ、往時一大要塞地となった活況を偲ぶ手がかりが得られるに至った。向いあう加部島から観察し描いたものであろうといわれている。

豊臣秀吉が朝鮮出兵を決意したのは天正十九年（一五九一）十月、それまで一寒村にすぎなかった上場に築城の工を起した。松浦半島の突端で、玄海の島々をのぞみ、壱岐対馬に最短距離の地を卜したものだ。本能寺の変後九年である。

城は翌文祿元年二月完成、わずか五箇月の突貫工事であった。権勢の大きさを物語り、諸大名の協力ぶり、築城の進歩がうかがわれる。もとはといえば松浦党の波多氏の小さな出城があるにすぎなかった土地が、名護屋浦を擁し朝鮮渡海に絶好な良港であることに着眼かれ、俄かに大城郭が築かれる成行きになったのである。この要塞の町を作兵衛がほとぼりさめたとはいえ、いったんは（お尋ねもの）の身、人目をおそれ顔をかくすようにし、しかし、いざとなれば腕に覚えもあり、なんともやり場のない時をすごしたと思われるが、どうだったろうか。

秀吉のこの時の朝鮮へ向けての派兵は十五万八千、後備軍として名護屋要塞周辺に陣を置いた兵員十万一千といわれる。ほぼ同時期の一五五八年（天正十六年）スペインが無敵艦隊でオランダに送った兵力がせいぜい四～五万、また少し前の三十年戦争といわれるものにしても両軍あわせても十万内外だから、当時の世界最大の軍事行動だったと言える。

城の周囲に諸将の陣屋は百二十余。その跡の明らかなものだけでも百十七を数える。ひしめく軍兵の中に紛れ、虎視たんたん目を光らせ腕を撫していたものか、それとも名護屋の浦をすべり出て行った数多くの軍船どれかに乗組み玄海の波濤を渡った一員であったものか。男の消息はすべて謎という外ない。

復元を見た模擬城の唐津城天主はその隅瓦に歴代藩主の紋どころがあしらわれ、最上層の五階から寺沢氏の珍しい陣幕紋、四階は大久保氏の大久保藤、三階は松平家の蔦、二階は土井家の水車紋、一階は水野家の沢瀉（おもだか）紋、そして櫓には最後の藩主小笠原家の三階菱紋という具合である。上層に敬して寺沢氏の陣幕紋を置いたところはさすがの配慮に思われる。時代を下るというごく単純な発想かも知れないのだが、……。

ともかく、この昭和模擬城の一隅に明智三羽烏の一人安田作兵衛の槍が展示されている。彼が唐津の城に客将天野源右衛門と名を変えて出仕した事実があったことを否定する材料はなにもない。立花氏仕官説もあとづける資料を欠いている。本能寺の変で信長を天野が刺したとする史書があることをはじめに書いたが、この場合、姓は同じ天野でも源左衛門としているものだ。天野は安田とは全く別に存在した人物という可能性すらあり得る。激闘を物語る由来書に感動し、遠い戦国の歴史ロマンに想いを馳せるのは後人の幻を追う勝手かも知れぬ。

天野源右衛門の墓は前記のように唐津市内西寺町浄泰寺にある。近松門左衛門の遺髪墓で知られる近松寺がこれに近い。浄泰寺の方は寺沢氏ゆかりの寺だが、志摩守広高の墓はなぜか鏡神社の東北隅にある。さすが国守という趣きの大きな墓だ。陣幕紋を仰ぐことができる。曽呂利新左衛門作庭の裏庭をもつ恵日寺とともに佐用姫伝説の鏡山の西麓にある。

誠実な回答を寄せられた保利陽之助さんには手厚く謝意を表する返信を書き送った。

さもあらばあれ、天野源右衛門は本当に安田作兵衛なのか、または、源左衛門をこれに加えるとき三者の像はついに完全な重なり合いを見ない。巷説はあくまで巷説として勝手に歩ませ、そっとしておくに限るもののようである。

（六一・一二・二六）

ハイラル挽歌（六）

第二章　開嶺の崩壊

金子正義

（九）

第一大隊は連隊本部に近く、直接ソ連軍と激突していなかったので停戦の情報が早かった。それでも陣地の撤収に手間取って山陣を下ったのは十七日の朝であった。

大隊は隊列を組んで連隊本部へ通じる山坂道を北東に下り、連隊本部前から左に折れて真直ぐ興安街道に出て新南興に入った。既に連隊本部の将兵や付近の部隊が集結して軍用列車を待っていた。間もなく入って来た列車に乗り込んで将兵は、博克図迄歩かずに済んだと喜んだが、鮨詰列車は後から到着する部隊を待って夕暮になっても動かなかった。

黒煙を吐き続けていた列車が漸く動き出すと、清水連隊長が第一車輛から汽罐車に移って来た。続いて軍旗を抱くように奉持した加藤中尉が緊張した顔で渡って来た。第一大隊長江口少佐も後続して来たので、狭い汽罐室は肩がぶつかり合う程だった。

加藤中尉が憤懣の情を漲らせ、

「連隊長殿、せめて御宸筆だけでも切り取り度いのですが」

と悲痛に叫んだ。旭光輝く軍旗の下辺にある歩兵第二百五十五連隊の名号が、天皇直々の御真筆であると言われていた。

清水大佐は宮中に於ける軍旗親授の際、

『歩兵第二百五十五連隊編制成ルヲ告ク　仍テ今　軍旗一旒ヲ授ク　汝軍人等協力同心シテ益々威武ヲ宣揚シ以テ国家ヲ保護セヨ』

との勅語を畏み拝受して、

『敬テ明勅ヲ奉ス　臣等死力ヲ尽シ誓ツテ国家ヲ保護奉ル』

と誓った感激を思い起した。

骨の髄から軍人である清水大佐にとって、軍旗のあるところ即ち陛下の御馬前であり、陛下のみそなわすところ軍旗は将兵の生命であり魂であった。如何に大命とは言えその軍旗を奉焼することは断腸の思いであった。

「唯、唯、恐懼するのみ、臣、命を断つのみ」

と絶句した。

加藤中尉は連隊長の言葉を解し兼ねて清水大佐を睨んでいると、

「さ、早く奉焼し奉れ」

と江口少佐が自からボイラーの焚口蓋を引き開けた。ガッと熱気と紅舌が吹き出たボイラーの内は赫々と石炭が燃えていた。

加藤中尉は押し潰されたように屈み込んで、包袋の儘の軍旗を火焔の中に差し入れた。忽ち紅炎が包袋を溶かし、軍旗は生きもののように縮み動き、黒く固まり乍らブスブスと燃え、動物を焼くような臭気が吹きつけた。

江口少佐は懼れて蓋をガチンと押し閉ざした。

「敬礼！」

と叫んで挙手の礼を取った清水大佐は不動の姿勢の儘凝っと見守っていた、一同も黒光りのするボイラーに向っていつ迄も挙手の礼を取り続けた。

加藤中尉の大きく睜いた眼眸から大粒の涙が弾けるように落ちていた。清水大佐は軍旗の奉焼と共に日本の軍隊は崩壊したと思うと、急に全身の力が抜け落ちてぐらぐらと蹌踉いた。

列車の重いピストンの音は、葬送行進曲の打楽器のように響き、軈て列車は野獣の吐く息のように蒸気を吐いて速力をあげていった。

清水大佐は未だ瞑目して挙手の礼をした儘であった。彼の脳裡には昭和十九年十月十五日、宮中正殿の軍旗親授式の情景が明滅していた。そして親授式後陸軍大臣官邸で杉山元陸相の招宴の後、憲兵隊のサイドカー四台に護衛されて、東京駅中央の皇族用乗車口より特別車輛に軍旗を奉置して畏んで後座した。

清水大佐は天皇の身近くに仕える侍従のように胸膨らむ思いだった。下関の連絡船も、南満洲鉄道も貴賓特別室で軍旗に奉侍した。実に軍旗のあるところ即ち陛下のご馬前であるとの実感を犇々と感じて、畏み謹み生涯の栄誉と感動し続けていたのだった。

海拉爾に到着すると、駅前から二百五十五連隊正門迄正装した将兵の徒列捧銃の中を清水大佐を先頭に中野大尉、旗手の賀川少尉、衛兵一個分隊が堂々と行進し、喨喨と響く連隊喇叭手の吹奏する行進喇叭で営門に入った。

北満は既に厳寒であった。防寒外套を厚く着用した将兵が営庭に整列して厳粛な拝謁式を行なった。

次々と浮ぶ栄光の情景を想うと清水大佐の閉じた眼眸から涙が糸を引いて落ちた。彼は虚脱したように力を落して挙手の礼の腕を下した。

鉄路に近い部隊は列車に乗り込んだが、山陣の奥にいて乗り遅れた将兵は徒歩で興安街道を南下した。トボトボと空腹を抱えて歩く傍らをトラックや馬車が先を争って走って行く、その無統制振りは既に日本軍は敗走の軍隊であった。

第二、第三大隊や迫撃砲大隊の前線は広く分散し、彼我入り乱れて戦闘していたので戦争の終焉を知らない部隊も多かった。第三大隊の山陣に大隊本部より伝令が飛んで来たのは十七日の朝六時半頃で、将兵は敵の砲撃が始まらないうちに朝食を摂っておけ、と飯盒の底に残して置いた前夜の僅かな粥を啜っていた。

「全員直ちに武装して大隊本部へ集合せよ」

と言って来たので将兵は遂に最後の時が来たかと、朝食もそこそこに山襞の間にある大隊本部に集合すると、皆川大隊長が、

「今や我が軍は建軍以来嘗って無い重大な時に臨んだ。国家の危機存亡の時が迫ったのである。斯る時こそ軍規を厳正にして最後を潔くしなければならない。大隊は緊急に連隊本部に合流する。持てぬ兵器弾薬は地中に埋め他の重要な文書・資材は適切に処置して十時に新南興に向って出発する。全員直ちに行動を開始せよ」

と沈痛な声で言ったが、兵隊達には何事が起ったのか薩張り判らなかった。将校の多くはノモンハンの時と同じように停戦協定が成立したのだろうと思ったが、何にか唯事でないものを感じ乍ら山陣を降った。

反田中尉は十七日朝第二大隊山陣の展望台にいた。明け方から霧のような小糠雨が降っていたが、綿帽子を被ったような太陽がボーと昇って時折り薄れた雲間から日が射した。その光茫の下に開嶺の街や興安街道がパノラマのように俯瞰された。観測鏡を覗いていた白石軍曹が、

「隊長殿、どうも様子が変であります、白旗をつけた車が行ったり来たりしています」

と言った。反田中尉が代って覗くと確かに興安街道を白旗を掲げた車が走っている。或いは停戦の交渉が始められたかなと思い乍ら、傍の木村上等兵に

「暫く街道のソ連軍に焦点を合せて様子を見て居れ」

と命じて中隊本部の壕に入ると間も無く大隊本部から伝令が来て、

「戦闘停止、各隊は銃を捨てて興安街道に直ちに集合せよ」

と伝えた。

「何に、銃を捨ててだと、間違いないな、」

と反田中尉は念を押して愈々降伏かと醒めた気持になった。直ぐ中隊全員を集中させると、

「大隊命令で此れより山を降りて興安街道に集合する。どうやら日本は敗北したらしい、兵器弾薬は陣地に残して行くが整頓して置け」

と命じ、白石軍曹、田中・高良の伍長、本間上等兵、関一等兵と個々に指名して、数ケ所に出ている分遣隊や斬込み隊に引揚げを伝える為に出発させた。

中隊は壕の一隅に毛布を敷いて兵器・弾薬、銃や帯剣迄もそれぞれ区分して整然と揃え置いたが、兵隊達は今迄何によりも頼りにしてきた兵器を残置していくのが心残りであった。

反田中尉は万一の場合の自決用の手榴弾は各自に一個は必ず持て、食糧は持てるだけ持てと命じた。

兵隊達は普段は酒ばかり呑んでいる中隊長でも、いざとなると豪胆細心で、兵隊を大事にして呉れると信頼し切っているので、隊長に従いて行く分には心配無いと身軽を快よく感じ乍ら山陣を降った。

十三日夜半、反田中尉の命令で斬込み隊となって出撃した宮田上等兵達は、開嶺の北端イレクテ川支流の土橋際の壕に、各中隊から選抜された隊員と共に潜伏していた。

だが十四日の日没になってもソ連軍は此の方面に姿を見せないので、待ち倦んだ宮田上等兵達は、夜になってから土橋際より更に北に進んで従前に掘って置いた蛸壺陣地に潜り込んだ。

恰度その時、直ぐ近くに陣を構えたソ連砲兵隊が、何にを驚いたのか猛烈な砲撃を開始した。曳光弾が大きく花火のように弧を描いて日本軍の山陣や、斬込み隊の潜む山麓に落下した。

宮田上等兵は、土橋付近にいたら此の砲撃でやられて仕舞った、敵の喉元近く潜入したので助かったが、此の分では山陣の本隊が壊滅して仕舞うと滅入っていると、間も無く砲撃は熄んで冷雨が降り出した。気の緩みもあって急に寒さが迫りガタガタと胴震いし乍ら雨水の溜った蛸壺に伏せていた。

夜明けに雨は上ったが空腹を覚え、雑嚢から湿った圧搾口糧を出して噛っていると、戦車の進行する地響が聞え、次第に大きく伝わってきたと思ううちに突如、五十米程前方にぬっと五台の戦車が現れた。宮田上等兵達は首を縮めて蛸壺にへばりついた。

「愈々最後の時が来た」

宮田上等兵の心臓は高鳴った。今迄何回となく、頭上にかかる直前に発進して爆雷ごと戦車に体当りする訓練を繰返していた。

今か、今か、と戦車の進入を待ったが、地響が休んで戦車は停止して仕舞った。宮田上等兵は不審に思ってそっと窺うと、天蓋を開けた戦車からソ連兵が次々と地上に降り立った。

「今だ、肉迫斬込みの絶好の時だ！」

と宮田上等兵が跳び出そうとすると、耐え切れなくなった竜崎・土屋の一等兵が一斉に小銃を撃ち込んだ。

ソ連兵はパッと地に伏せた。戦車は直ぐ急速に動いて先頭の一台が伏せたソ連兵の前方を塞ぎ、二台目は左を、三台目は右、四台目は右後方、五台目は左後方を防ぎ囲んだ。斯うした場合を何回も訓練していたのか、独ソ戦での経験を重ねた戦車隊なのか見事な動きであった。

伏せたソ連兵を防衛する体形を作ると、前方の戦車は機関砲を宮田分隊に向け盲ら撃ちに乱射し、一渉り撒水のように一面に撃ち込むと急に中止して静まり返った。

宮田上等兵が蛸壺からそっと窺うと、戦車群の後方から赤旗と白旗を立てた乗用車が走って来て、停車すると内から日本兵が一人降りて宮田分隊の潜む方向へ歩いて来た。

宮田上等兵はスパイかと思ったが、蛸壺から首を出して

「おい、どうした」

と声を掛けた。日本兵は血の気の失せた紫色に脹れ上った顔で繃帯をした右腕を首から吊っていた。

「自分は三大隊の赤嶺隊の山中上等兵だ昨日破甲爆雷を抱いて戦車に跳び込んだが、気がついたらロスキーが傷の手当をして貰れていた。今朝停戦したと言って今帰して呉れたんだ」

と言った。宮田上等兵は何にか狐に化かされたようであったが、今迄も国境の紛争で何回か停戦協定もあったので、また停戦かなと思って、

「急な停戦は一体どうしたんだ」

と訊くと、山中上等兵は

「どうやらロスキーが降伏したらしい」

と彼自身も判っきりしないようだが、そう言われて見れば、先程からソ連戦車は停止した儘一向に撃って来ない。成程と合点したが未だ半信半疑であった。

三大隊の山陣に帰ると言う山中上等兵の肩を落した後姿に

「頑張れよ、無事に隊に帰れよ」

と励ましたが何にか虚ろな気持であった。何処からも砲声は聞えず、妙に静まり返っていつしか大きな薄日が西に傾いていた。

兵隊達は停戦と訊いたので、何にか張り合い抜けの虚脱状態で、宮田上等兵の一番大きな蛸壺壕に集って腰を下していた。何にか急に空腹を覚えて来た。十三日夜半の出撃以来僅かの携帯口糧を噛っただけだった。

梶原上等兵が、

「おい、宮田上等兵、腹が空いたな何にか食べる物を探して来ようか」

と誘ったので宮田上等兵は怖る怖る街道に出て見た。降伏したと言え油断は出来ない、路上に停止している戦車の手前十米程迄這い寄って様子を窺っていると、二人の後に何時の間にかソ連兵が立っていた。

宮田上等兵は悄然として発作的に銃を構えた。その瞬

間ソ連兵が大きな叫び声を上げた、忽ち数十名のソ連兵が戦車の陰から飛び出て二人を囲んだ。梶原上等兵が慌てて街道際の窪みに転がり落ちた。ソ連兵は撃ちもせず、ケラケラと大声で嗤って大きな手を伸ばして梶原上等兵の襟元を摑んで引っ張り上げた。

「ダモイ、ダモイ」

と手を振って二人にあっちへ行けと手を振った。二人は薩張り分らないことであった。大きなソ連兵に子供扱いされたような屈辱に空腹を忘れて元の土橋の壕に戻って、

「どうやら停戦は本当らしいぞ」

と残っていた兵隊達に伝え、停戦なら本隊から何んとか伝達があろうと其の儘壕に潜って、寒さと空腹にまんじりともしない裡に薄明となった。

薄日が次第に斉れて気温が上昇した故もあって宮田分隊は壕内に転がるように睡り込んだ。

宮田上等兵は夢の中で叫び声を聞いた。遠くで自分を呼んでいる声に重く自由の利かない軀を動かそうと焦って目を覚した。大声がするので半睡の首を壕から出すと、大隊本部当番兵後藤一等兵が、付近の斬込み隊に

「戦闘停止だ、日本は降伏した、直ちに本隊に帰れ」

と知らせ回っていた。宮田上等兵は死んだように睡っている梶原上等兵を揺り動かして、

「おい、降伏したのはロスケでなく日本だ起きろ」

と簇々とおこる何んとも言いようのない憤りを当り散らすように、土屋、竜崎に向けて蹴り起すと中隊の山陣へ向って歩き出した。

もう伏せたり身を隠す必要も無いので並んで歩いているうちに憤激も次第に消えて、生命が助かった安堵感が比比と胸に溢れてきた。旨くすれば直ぐ復員で内地へ帰れるぞ、再び見られないと思った故郷の山河や老いた父母にも逢えるぞ、ゾクゾクする嬉しさが熱く込み上げてきた。ロスケが、ダモイ、ダモイ、と言ったのはこのことだ。と宮田上等兵達は軽やかに足を運んだ。

中隊へ登る山麓に入ると白石軍曹に出会った。

「お前達を迎えに来たんだ、日本は敗けた一刻も早く中隊へ戻るんだ」

と興奮して伝えた。

宮田分隊は未だ重い爆雷と小銃・手榴弾五個を各自が持っているので、山陣への登り道は苦しく喘ぎ喘ぎ行くので、軽装の白石軍曹に遅れ勝ちだった。梶原上等兵は空腹で力が入らず堪え切れなく

「班長殿、爆雷はもう捨ても良いでしょう」

と言ったが、

「いや、いかん本隊迄はどうしても持って行くんだ」

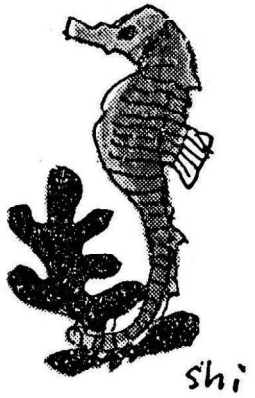
と強く言った。

漸く中隊に着いたが既に全員後退した後だった。宮田分隊はやっと持ち帰った兵器、弾薬を揃え置き中隊の撤

退した後を追った。梶原上等兵は白石軍曹に聞え良がしに

「何んちゅうこっちゃ、兵器を山に置きに苦しみ乍ら登って来たようなもんか、今度は下り坂で腹ペコだから軀も軽すぎて気が抜けそうじゃ」

と大声に喋り乍ら中隊に取り残されたら大変と山坂道を駆下りて行った。



金子正義寸描

「ハイラル挽歌」の連載は今号で通算十八回を数える。章を改める間に二回と編集都合による休載が他に二回あるだけだ。これだけは必ず読むという読者が多い。戦争体験の世代だ。関東軍の敗走をパノラマ視界に捉え、臨場感をもって描く、主人公のない一種のドキュメントに共感し、郷愁に似たものを覚えるからだ。しかし作者はその場にいた人でなく信託された資料をもとに書いていると聞いて驚きの声をあげる。もっとも、この作者には「ニューギニア日記」という日本図書館協会選定の著作があり、南支から転戦した学徒兵の手記を書かれた過去をもち、凄絶な戦火を潜り生還された人と聞けばそれは納得されることであろう。

なんのバッシヨンによりこれを書くか、いまはそれが明らかでない、と、言った毒舌の仲間がいた。だが、それは完結を見守ってあげた上でのことだ。気短かに言うべきではない。作者自身の胸のうちにあるものを今は問うべきではなかろう。

「まんじ」はこの息の長い作家（他にもう一人そういう人がいて）に助けられている。雑誌の命脈はマラソンに耐えるランナーがいるかいないかで道を岐けるもののようだ。労作完結へ向けて良き伴走を誓わねばならない。

（Q太郎）

老漢の系譜 (一)

山口健二

窓からのぞくと、空一面、雲が低く張りつめ、雪こそ未だ落ちては来ないが、冷気が霧のようにガラス戸の隙間から入り込んで、老漢が炬燵から立ち上ると、着物の裾から下腹部へ、そして胸のあたりまで忍びこむのがう す冷たく感ぜられる初冬の夕暮れどきであった。私は書籍小包と朱印のある郵便物を、その人、佐竹佐一郎氏から受けとったのだ。暫らくは、サタケサイチロー、さたけさいちろーと呟いてみる程遠い縁の人で、此処十年ばかり、年に一度、賀状の交換はあったが、その賀状さえ、向うがくれるからこちらが出すと云ったかすかな撃り方であった。しかし縁を遠くしたのはこちらの僻みがもとであって、血縁と云う筋でゆくと、老漢の亡母の母親加寿祖母の妹の子であるから左程遠くはない。只この人が日本敗戦の半年前に支那から復員して、住金物産という会社の支店長の椅子に坐って、敗戦がかえって社運に幸いしたのであろうか、やがて他の会社と合併して、そこの常務とか監査役とか云う地位を得て行ったのに反して、私はその日の米麦にもことかく敗戦復員軍人くずれであったことが、私の方から縁を遠くする切ッ掛けになっていたのだ。

一五〇頁程のその本は〝東海道五十三次双六噺〟と題されていて、礼状を出すためにバラバラと頁をくって内容のあらましをみると、〝日本橋〟から初まって〝品川〟〝川崎〟〝神奈川〟〝平塚〟〝大磯〟〝国府津〟〝小田原〟〝湯河原〟〝熱海〟〝三島〟〝沼津〟〝吉原〟〝岩渕〟〝興津〟〝清水〟〝静岡〟〝焼津〟〝菊川〟浜松〟〝弁天島〟〝豊橋〟〝岡崎〟〝池鯉鮒〟〝鳴海〟〝宮（名古屋）〟〝桑名〟〝四日市〟〝石薬師〟〝亀山〟〝鈴鹿峠〟〝草津〟〝犬山〟〝岐阜〟〝大垣〟〝関ヶ原〟〝醒ヶ井〟〝米原〟〝彦根〟〝石山〟〝膳所〟〝大津〟〝山科〟〝京都〟と小節に分けられている。題名を借用したと思われる十返舎一九の東海道中膝栗毛の弥次郎兵

お手洗場をのぞくことがおすきだったのよ」

こういう話には祖母の加寿は苦にがしい顔をしたが一座した若い者は共鳴してウワッと笑ったものだった。こう云う世間にそれとなく囁やかれた話ではなく、もっと深く宮中というところに秘められている話や、一般世間で使われている日本語とは随分かけ離れた言葉もあるであろう、そういうことを、私は未だ存命している桂しげから聞き度いと思っているのだが、それを阻む出来事が私とかの女の間に横たわっている。いや厳密に言うと私とかの女との間ではなく、私とかの女の妹ハルヨの間にあったのだ。それが間接にしげやハルヨの子供たちをして私を憎み、きらわせ、このままでは私と桂と云う家とは縁が断絶してゆくめぐり合わせになっていたのだ。

佐竹佐一郎氏は本と同封して手紙をよこし、その中で次のように書いている。

〝前略、あなたの本をたのしく読みました。〇町〇丁目とは、今日の新宿歌舞技町あたりでしょうか。そこにあった山本家の本宅へ私も遊びに誰かに連れて行かれたことが二三回ありました。加寿様のお名前も懐かしいです。錚之助伯父の厳しさに比し、加寿伯母様のやさしさ、その妹が私の母でした。子供が多いので二十才以上も年が違いますが、あなたのお母様と私は従姉弟に当ると思います。もう七十年も前のことですから、私の話は、想像に近いことで何卒お許し下さい。もう桂千恵さんと貴兄のお母上と私ぐらいしか古いことを知らなくなりました。いづれお目に掛り、古い事柄のお話でもと存じております。私も七九・六才で手足がしびれ、目は霞み、足はガクガクで物の用に立ちません。道路で左へ片よったり、右へよろけたり、コロビは年中で、余り外出もならず、お互に年ですから大事にして下さい（後略）〟そして別に便箋一枚に桂の家系図とそこから出て山本錚之助に嫁いだ加寿とその子供たち、即ち私の叔父叔母まで、又桂から佐竹家へのつながりを系図にして送って来た。桂家は、加寿の父親、母親の桂尚志・あいに始っている。しかも赤インクで〝御醍醐天皇から出ている由〟と註訳がついている。

私はこの佐竹佐一郎氏のまちがいを殊更に指摘するのがこれを書く本旨ではない。只私のきき知ったこととか け離れている所があり、そこが祖母加寿の運命的な最晩年の惨たらしさとどうつながってゆくのか。又親族とか血縁と云うものの果なさ、哀れさを書き残してみたいと思うだけである。〇町〇丁目〇番地と云うのは、かれの言うように新宿歌舞技町あたりではなく、神田神保町一丁目三番地のことであることを先ず言いたい。祖母加寿が佐竹氏のいう通り新宿区に住んでいたのは、昔西大久保と言われた所で、その頃加寿は、祖父錚之助と、無気

力ながら有産者生活中の女主人公であり、私の父親が昔の言葉で〝洋行〟していた間、私たち一家は女中さんのおタキどんもふくめてこの祖父母の家に居候していたことがあった。私は小学校三年生で、いろんなことを記憶している。桂一家の長男で佐竹氏の伯父にあたる桂尚次はよく姉加寿の嫁ぎ先の山本の家に出入りしていた様におぼえているが、佐竹佐一郎氏には一度も出合った記憶がない。〝やさしい伯母〟にあたる私の祖母加寿が自分の実家の者は誰れ彼れの区別なく面倒を見ていた様だ。その中には尚次の妾のおくまやトキさんという女も交っていた。此の二名の者は尚次の妾であった。そのおくまは、〝東海道五十三次双六噺〟の〝鎌倉〟の節に、〝人気者の伯母を私達は「おくま伯母」と呼んでいた。（中略）おくま伯母さんは田舎の婆さんよろしくとばかりに弁当を背中に背負って皆と一緒について来るのだ。海岸につくと同時に荷物を降ろして、早速着物を脱ぐと腰巻き一つで海中に飛びこんだ。無論オッパイはブランブランのヌードスタイルである。やがて海水が臍の所まで行くと、こんどは腰巻きを外ずして洗濯を始めた……（後略）〟これは佐竹氏が鎌倉での一家の海水浴の楽しかったことを思い出して書いているのであるが、おくまが自分の伯父尚次の妾の一人であったことを知っていて、おくま伯母さんと呼んでいるのであろうか、どうも何も知らされずに、そう呼ばされていたように思えてならない。

尚次は桂家の長男でおだやかな人柄に見えたが、酒を一滴も口にせずに妾を数人も持つと言った女道楽に達者な人であった。私が戦地から帰って祖母加寿と〇町〇丁目〇番地に住んでいた頃は、全財産を女に入れ上げて、女房のおえいさんと一緒に、さてこれからどうしようと云った零落れ切った姿であった。敗戦は日本人全部をおちぶれさせて、どこから立ち上り初めるのか全く見当がつかない状況であった。只大陸から革命歌を声高だかと、軍靴の足音荒く復員した兵士たちもいつの間にかこの国の家族制度の中に解けこまされて行く気配であった。

私の祖父山本錚之助は佐竹佐一郎氏の本と同封された手紙の中に錚之助伯父の厳しさに比して加寿伯母様のやさしさ〟とあるが、確かに祖父の顔は裁判官などやって来た経歴の通り厳しいものであったが祖母加寿とは昔の言葉で琴瑟相和したらしく、私の母らくを長女に、貞久、貞ヨシ、スエ子、フジ子、利貞と六人の子供をつくっている。（片仮名は私がこの叔父叔母の名の漢字を知らぬためである）フジ子は十六才で若死し、スエ子は妻がある松下松五郎という都電の車掌のところへ、親がきめた北海道帝大の教授をふって走り込んだ。家出である。錚之助はこの娘を勘当した。利貞は二十才頃から急速に惚けてゆき、やがて敗戦後〇町〇丁目〇番地で死んだ。貞ヨシは横浜の百姓成金の小野家へ聟に入った。つれ合い

はウマというひとであった。何故私がこんなことを細細しく書くかと云うと、これらの人物は皆々〇町〇丁目〇番地で祖母加寿とふれ合い、敗戦後のむごたらしさの中で結局つぎつぎと死んで行ったからである。〇町〇丁目〇番地とは神田神保町一丁目三番地のことであり、私は其処に住んで、家妻と一緒に、祖母加寿を初め、山本家、桂家の者たちと運命的なふれ合いをして、その惨たらしさを小説というかたちに仕上げ、〇町〇丁目〇番地と題して同人誌に何回かにわたって連載してみたが、途中で筆を折って中途半端なものに終った。所詮あの敗戦後の荒廃を生き生きと書く腕がないとさとったからであった。だが只今七十才を越える老漢になって、佐竹佐一郎が自著した本と手紙と家系図を送って来たことにそそのかされ桂家、山本家、山口家という昔の家族の入り組んだ関係の中に仕組まれた出来事を、自らを嘲る気持ちで投げ出してみたいと思うのだ。

山本利貞は全く気が狂って、母の加寿に身体をさすられながら、カラカラと笑い、家妻の実家へ米を貰いに行く私と家妻に最後の挨拶の意味か、こけきった尻をヒタヒタとたたきニヤリと笑った状形は〇町〇丁目〇番地の一〇号にかかれている。私の名は廉作となり、利貞は利秋に、小野貞ヨシは大野貞之助となり、山本錚之助は山上森之助として又私の母はラクという名で、祖母加寿は加寿刀自となって現われて来る。ツイに完りを全う出来なかった作品（？）であるが、私にとっては可成り真剣な構えで書いたつもりで、連載の㈠は同人誌の八号に初まって、山上森之助と山本錚之助とその長男であるとり貞一こと貞久の親子の争いは、加寿刀自のうたた寝中の回想と云うかたちで描かれている。又狂人利秋こと利貞とその甥である私こと廉作とのかかわり合いは、同じ同人誌の十号に㈡となって、狂人の死の直前の姿が描かれている。又祖母加寿と夫錚之助の西大久保での無気力な有産者生活、長男貞久のこと、次男小生貞ヨシの介在関係は、同人誌の九号に描かれている。この貞久、貞ヨシ、貞久の一人ッ子の貞幹のことも神田神保町一丁目三番地での祖母加寿の最晩年の命とかかわり合いが深い。

私が米麦が欲しくて、父親の出た山口家へ何十年に亘る無沙汰の果てに思い切って行き、遂に米麦のことを口に出来ずに、三夜の宿を貰っただけで東京へ帰り、狂人利秋と私の叔父の利貞は既に骨になって密柑箱の上におかれてあったことなどは同じ同人誌の十二号十三号にかかれている。筆はこの十三号で折られているから、米麦を貰いに行ったのが切っ掛けになって、その家の娘が私の家妻になって祖母加寿と神田神保町の裏長屋に住んでいたことまで筆はのびていない。祖父錚之助と祖母加寿がいたくかわいがり、トシさんトシさんと労わり育てた狂人利貞の死は加寿を急速によわらせて行き、半年後に長火鉢にうつぶせて倒れた。脳溢血であった。私と家妻は、先ず加寿の長女であり、私の母であるらくに報せ、殆んど毎日の様に加寿を見舞うという口実で立寄る小野貞ヨシと錚之助との争そいと小野貞ヨシとの遺産のうばい合いが元で加寿祖母のところへ出入りをやめていたあととりの貞久両名のところへかの女の危篤を報せた。

さすがに貞久は、妻と二人で神田神保町の裏長屋に来た。しかしそれは自分の母親の最後を看取るという態度ではなかった。この老婆に何かこの世に残すものがあるなら、小野貞ヨシの手にわたらぬうちに自分たちの所へ持ち帰るためであった。それは貞久とその妻、即ち私の義理の叔母との短かい会話に明らかであった。

「もう帰るぞ、何もないらしい」

「小野さんも来るだろうし、ケンさんのお母さんも来るのですから、今晩一晩ぐらいついていてやって下さいな」

「無駄だ、お前わたしの気持が未だわからないのか」

錚之助、加寿対この長男貞久の心の争そいはもうぬきさしならない所まで来ている。貞久夫婦は小野貞ヨシと出会うことを避けて早々と引き上げた。尤も祖母加寿の死去のあとで、この貞久叔父は、加寿が残した行季一ツを引ッかついで私の家妻に、「お前らの物なぞ持って行くか」と捨てぜりふを残して立ち去るのであるがそれは後日のことであった。小野貞ヨシの方は、狙うものはもっと大きい。錚之助は利貞の惚けてゆく有様にそなえて神田神保町鈴蘭通りに面した店一軒と、祖母加寿が息を引きとった裏長屋を利貞の名儀にし、先祖の墓寺に利貞の墓もつくらせてあった。小野貞ヨシはこの表通りの店一軒と、裏長屋の利貞名儀を、加寿を最後まで面倒見たということを楯にして自分の名儀に書き返させるため、私の家妻を保証人に仕立てて、祖母加寿の生前にもう公証人役場で正式の手続きを済ませてあったのだ。

此処でこの神田神保町三丁目一番地と山本家の因縁を同人誌八号の〇町〇丁目〇番地㈠にどの様に描かれているか原文のままうつして見よう。

〃この〇町裏小路の二軒つづきの二階建て長屋は、昭和二十年五月の東京空襲まで、表て通りの本屋街商店の倉庫に使われていたのを刀自が信州から東京に戻るというので貞之助が昔の店子の差配を通じてあけて貰ったのである。更に古いことを言えば、表て通りの本屋の大部分と、この長屋をはさんで裏通りになる鈴掛け通りに面する東山房書店まで、加寿刀自の夫山上森之助の父山上織之進の屋敷であった。駿河台一帯にわたる千石取りの旗本とちがい、百石台のお徒士組の分隊長程度の武家の暮しはまずしく、きびしく、娘たちは富有な商家の嫁に出されたり、口べらしのため養女に貰われて行った。（中略）その頃から屋敷の地価は急騰して行った。今日の

大誠堂書店の祖は織之進を伯父とする者で「お前にあそこの隅をやるよ」と気軽く貰って、それが今ではあたりに聳える本屋になった。でも、もう二代、三代と代がわりすると、加寿刀自とは親類のつき合いはない。一方は士族という虚名にかかずらい、一方は明治五年の華士族、卒の農工商営業許可の実を採ったのであった。〃

この文の中にある通り織之進の子供の錚之助は官途につき、神田神保町の屋敷を売り払うか又は賃貸借関係に入ったらしい。その差配は小川文泉堂と言って今日E・タトル商会と云う洋書の古本商に変っている。そう云う父祖の地で最後をとげた利貞と母親の加寿の運命をどの様に考えればよいのであろうか。私の母のらくも晩年思い出すものはこの神田神保町の裏ぶれた長屋の暮しであると述懐していたことも奇妙である。

さて、貞久が去ると入れかわるように加寿の長女であるらくが信州から上京して来た。その頃加寿は、もう鼾をかいて眠りこけるだけで大小の用も全くらくと私の家妻にまかせるというかの女にとっては無念な屈辱の三日であった。その朝家妻が医者に走り、枕元にらくが控えている時、喉につかえる痰を吐く力を失ない、足の方から次第に体温を失って行った。痰がつまって呼吸を自然に止め、心臓から遠い足の方から冷えてゆくことはまことに人間の死の自然の成りゆきを示している。

「あの時、あたしの肩が、どうしたせいか何か大きい口で噛まれたように痛んだよ、ほんの一分程で、その痛みが、すうっと消えたんだから妙だネ」らくは後日私に祖母加寿の霊との訣別の瞬間をその様に語ったことであったが、加寿の布団の下から御家流の文字で〃ながながおせわにあいなり申そうろ〃と書かれた私の家妻宛ての紙が出て来た。ずい分前に用意されたらしく文字に乱れがない。覚悟と云った思いが示されている。

利貞が死に加寿が死ぬと、同居していた私たち夫婦は自然にこの裏小路長屋の主人格になった。広さは二階八畳階下四畳半と三畳と台所、便所、一寸した廊下で広がりはないが夫婦二人の住居としては、焼野が原と化した東京の中では恵まれた住まいと思われた。私は二階を自分たちの居間にしたり、人に貸したりして暮したが、叔父の小野貞ヨシとこの家の賃貸契約を口頭で結んだ。家賃は月額二千円であった。その頃、転々と職を変え未だ暮しは不安定であった所へ桂ハルヨが三人の子供をつれて満州から帰国して来たのだ。亭主は日本銀行の満州国支店勤めであったらしいが、戦乱の中に死んでいた。ハルヨは千恵とちがって奔放な青春時代を過して来た。私よりは五才年長であったが未だ三十代、私の前に身体をくの字にして坐って引き上げの苦労を語った姿には、未だ充分に女の色気を残していたし、ハルヨ自身、その肉

の力を知っていた。その力は、かの女の前に机をはさんで、この屋の主人らしく構えている私の上に覆いかぶさる程であった。かの女は子供を千恵の嫁ぎ先にあずけ、自分はパーマネント屋にでも住み込み、半年位でパーマネント技術を身につけ自活してゆき度いと健気な心意気を語った。

此処で私は昔の桂ハルヨの行跡と、それをじっと眺めていた中学生の性の目覚めを語る必要がある。ハルヨはその頃、男と同棲していた。その男は結核性の痔を病み、最早先きが見えていた。先に書いた山本錚之助の次女スエ子は、親の意に反し家出して松下松五郎の女房におさまっていたが、このハルヨの同棲を助け一口で言うと面倒を見ていた。それは自分を勘当した親に対する反発のあらわれであったろう。その頃桂尚次、おえい夫婦が千恵、ハルヨと一緒に私の親の山口競・らくの家に遊びに来たことがあった。大人は何か目的があってのことであったろうが、中学生であった私には漫然と遊びに来たとしか思えなかった。

お客様にはご馳走は先ずお風呂である。私は、未だ十才になっていなかった妹のさくらに命じたのだ。

「一緒にお風呂に入ったらここととこを見てオレに報告しろ」

〃ここ〃〃ここ〃が何処であったか、それは、ハルヨの身体の一部分であり、中学生の私が一番関心の深い場所であった。

「大きくふくれてたヨ、そっちはうす黒かった」妹の報告は真面目であった。

それから間もなくハルヨは結核性痔疾の色男から乗りかえて満州行きになった。満州行きは夫を早く出世させて青春時代の汚名を雪ぎたかったのであろうか、それとも夫なる男が出世を急いだのであろうか。両方であろう。当時軍人なぞも満州国軍に感がえすると、二階級特進出来た。学者と称する者も日本内地の国立大学に席があくまで満州国の大学で時をかせいだ。このハルヨの二度目の男との結婚の式に千恵は出席していて、宮中と云う所の女官づとめにあきたらなくなり、急いで退いて先年死んだ絵かきの秋元節朗と結婚した。だから桂千恵こと桂しげは此処から秋元しげになっていたのだ。

秋元節朗がどの位の絵かきであったのか、見当をつけるために、昭和十一年版の「大日本画家名鑑」という書物にたずねてみると、かれの師匠、松岡映丘（テルオ）在世中は相撲取りで云えば幕下十両位のところに名前を出してもらっているが師匠死去によって入選特選の機を逸し、日本敗戦後はアメリカ国へ輸出する絹のハンケチに艶画猥画のたぐいをかいて、世過ぎ身過ぎしていたらしい。この秋元節朗夫婦が私の母らくの最後の身寄りとしてらくの八十八才の祝いと亡父競の三十五周年忌の式に出るために長野へ来てくれたので、その翌々年秋元節朗が死んだ

ときに母は私に代理弔問をすることを頼んで来た。これが実に二十年ぶりでハルヨの子供たちの住む家、秋元節朗、千恵の住む家を代々木上原に訪ねる機会となった。ハルヨは既に死んでおり、その子供たちは成人してそれぞれ世に出ていたが、この時に顔を合せる機会はなかった。顔を合せて、ハルヨの長男浩一郎他三名の妹たちのうらみにあふれた顔に敢えて会ったのは、それから一年後、秋元節朗の墓を浩一郎が私の住居の近くの都営霊園の一偶に建てた故人の一周忌の日であった。何故ハルヨの子供たちが、私をうらみ、にくむのか。その出来事をありていに書いておき度い。それは敗戦が源の人間の惨たらしい生き様にかかわっているからである。

ハルヨは、私の祖母が、かつて住んだ裏小路長屋、今は私たち夫婦だけであるが、此処へ来れば山本貞久、小野貞ヨシ、山本貞幹にも会う折があろうと、しげしげ、出入りするようになっていた。そして私の家妻が持っているミシンをみつけ、それを使わしてくれとほとんど毎日出入りするようにさえなって来た。私たち夫婦も一緒になって未だ一年半ぐらいで、女はこの位の時間が経つと自分の結婚を振りかえり、亭主の心身の疵に目覚めてくるものである。家妻はハルヨの妖艶さと、健気とも云える生活力に警戒心を働かせ初めた。あるいはその頃長女を腹中に持って、異状な程とがった神経で私のハルヨに対する応対の態度に疑がいを持ち初めていた。ある日かの女は言った。

「ハルヨさんミシン使わしてくれって云うのよ」

「いいじゃないか、どうせこっちでもしょっちゅう使っちゃいないんだろ」

それから一ヶ月位して家妻が重ねて言った。

「あたしの着物が三着、押入れに入れておいたのが、抜きとられているのヨ。それが、ハルヨさんが近頃自分の着物を盗まれたって話してくれたやられ方とそっくりだわ」

その瞬間、私のあたまに閃めいたものは、〝ハルヨだな〟と云うぬきさしならない疑いであった。私は次の日ハルヨがミシン使いに現われたとき真ッ向から言った。

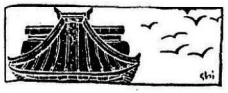
「ハルヨさん、この押入れから持って行った女房の着物かえして下さいよ」

私の心中には、この生活力の強い、未だ女の色気を充分のこしているハルヨを文句なく押え込んだ快感が下腹部にあった。

「ケンさん、あなた、私を庫三叔父さんと同じだと言うのね」

かの女の目はきりきりと逆立った。

（つづく）



男たちの藩（六）

第三章　赤い月

三戸岡道夫

（一）

「はて、どうしたらよかろうか」

長尾真十郎は首をひねっているのだが、いい知恵が浮かばない。

高柳玄宰が太閤資金に首を突っこんでいるという報告を聞いたのは、すすきが原開拓の鍬入式が終って、一段落した頃であった。

「嘘であってくれればいい」

だが、千羽功兵衛は信頼のおける部下である。その報告が嘘だとは思えない。

報告によれば、こうだった。

料亭「水上」で高柳玄宰が怪しげな人間と会合しているのを見た千羽功兵衛たちは、その後を尾行した。高柳を乗せた駕籠はそのまままっすぐ自宅へ帰ったが、見知らぬ三人を乗せた駕籠は一団となって、ひさご屋という旅籠に入ったというのである。

「やはり彼等は土地の者ではない」

今夜はここに泊るらしい。

「何者だろう…？」

その正体がつかめない。だが高柳が人目をさけて逢っているのをみると、多分にうさん臭い。

「どうやら江戸者らしい」

これは直感である。

「とすると、明日は江戸へ発つのだな」

江戸まで尾行するとなると、そうした人間でなければならない。

「これは〝傷〟の役目だ」

傷の留蔵とは長尾真十郎が闇の連絡に使っている男である。

翌朝からは留蔵が江戸まで尾行した。そして地獄耳の留蔵は、途中の旅籠で三人の部屋の襖の蔭や、天井裏に

しのび寄り、聞き耳を立てて、三人が太閤資金の関係者であることを嗅ぎ出したのである。

三人のうち一人は笠倉彦五郎といって、太閤資金の世界では有名な斡旋人であることがわかった。他の一人は加賀藩の家老で加賀谷兵庫、これは彦五郎の叔父に当る。そしてもう一人は澄田藩の勘定奉行の岡島文之丞ということであった。

長尾真十郎は武鑑をとり寄せて調べてみた。たしかに加賀藩の家老と、澄田藩の勘定奉行にそのような名前はある。だが料亭「水上」に来た人物が、果してその本人であるかどうかの保証はない、と長尾真十郎は慎重に考えた。

ちょっと考えてみても、加賀藩ほどの大藩の家老が、そう気軽に美春藩の城下などに姿を現わす筈がない。その辺のことに高柳玄宰は気がついていないのか。

一行は江戸へ着くと、本郷の加賀屋敷へ姿を消したという。

太閤資金のことは長尾真十郎も噂には聞いてはいるが、もちろん信じてはいない。だから高柳玄宰が太閤資金に手を出しているとは信じられないことだった。本当なら一大事である。美春藩財政再建の重要な時期に、筆頭家老ともあろう者がそんな危険なものに首を突っこんでいるのかと思うと、背筋が寒くなった。万が一公儀の耳にでも入ったなら、お家断絶の憂目にあう。

翌日、長尾真十郎は千羽功兵衛を呼び出すと

「謎の男、笠倉彦五郎をもっと洗う必要がある。そうすれば太閤資金の動きもおのずと解明されよう。江戸へ行って、もう一度よく調べてくれ」

と、功兵衛自らが直接再調査をするように指示したのであった。

江戸へは、二、三回、行ったことがあるから、勝手はわかっていた。しかし今度は密命を帯びてのことであるから、江戸藩邸を拠点に活動するわけにはいかない。

そこで功兵衛は本郷に近い神田明神下の旅籠に宿をとった。

近くの髪結床に入ると、仲間風に髪を結い直した。着てきた着物も脱ぐと、大小も捨て、紺の法被をひっかけると、ちょいと粋な仲間風に早変りした。名前も銀平といつわって、本郷に向った。目ざすはもちろん前田家の上屋敷である。俗に加賀屋敷と呼ばれている。

その名も赤門で有名な唐破風造りの御守殿門を通ろうとすると

「ちょいと…」

と呼びとめられ

「横から入んなよ」

仲間姿の功兵衛はそう言われた。

「へえ…」

頭をぴょこんと下げて、横手に廻り

「彦五郎さんに逢いたいんだが…」

紙にくるんだ小銭を握らせると

「仲間部屋に行って聞けばわかる」

彦五郎の名前はかなり浸透しているようであった。

仲間部屋に入った。だがその仲間部屋は他とちょっと様子がちがっていた。普通だとうす暗い部屋に、暇をもてあました仲間たちが、車座になって酒を飲んだり、博打を打ったりして、自堕落な雰囲気が濃密にたちこめているのだが、この仲間部屋にはそれが無いのだった。その代りもっと別の、なにか異様な雰囲気がたちこめている。

仲間らしい人間はほんのわずかで、そうでない男達が大勢、部屋のあちこちに集って、なにかを熱心にしているのであった。

くたびれた着流し姿だが顔だちにはどことなく品のある初老の武士が、一人で酒を飲みながら帳面に何やら細かい字を書きこんでいるかと思うと、その近くで紋付羽織袴姿の立派な中年侍が、やくざ風の若者を相手になにやら盛んに熱弁をふるっていた。また人口に近い片隅では、三人の浪人風の男が顔を寄せあい、汚い書類をひろげて話に余念がない。そのヒソヒソ話に耳を澄ませてみると

「あんたさん、居留守を使っちゃだめだよ、昨日も、おとといも、わたしの方から使いを出したのに…、今日の昼までに約束のものをアレしないと本当に駄目なんで…、今日はちゃんと…」

などという会話は、人の世の裏側でうごめく金の亡者の陰惨な青白い炎を垣間見る思いで、功兵衛は一瞬足のすくむ思いがした。

ここは太閤資金の末端を構成する『仲間部屋グループ』と呼ばれるその根城で、江戸に何ヵ所かある溜り場の一つなのであった。ここに集る人間は特定の仕事場を持たずに、たえずどこかの仲間部屋に入りびたって、情報を交換しながら、口先一つで商売をしている、うさん臭いが、逞ましい生活力を持った男たちなのである。

功兵衛はその中の一人にそろっと近寄ると聞いてみた。

「彦五郎さんに逢いたいんだがね」

「ここには居ないね」

「でも、たしかに、ここに居るといわれたので、来たのだが…」

「彦五郎のことなら、あいつに聞きな」

反対側の隅を指さした。そこには人の好さそうな中年男が書きものに熱中していたが、眼つきがいやしく、濁っていた。功兵衛は場所をそちらむ変え、

「彦五郎さんに逢えますか…」

すると濁った眼が仲間姿の功兵衛をじろりと見て

「お前さんは…」

「へえ、銀平と申します」
「ここは連絡場所だけで、ここには居ねえよ」
男は金をもらって連絡係をしているだけだと言い、
「でも、何か用事があるなら取次ぐよ」
取次ぐと言われても困る。功兵衛は様子をさぐりに来たのである。そこで素早くなにがしかの銭を握らせると、男の様子がにわかに変るのがわかった。
「彦五郎さんの金廻りは、最近どうだね」
「金廻り、いいようだね。いいツルを摑んだらしい。このあいだ一杯ご馳走になって、小使銭も臨時にもらったばかりだ」
その日を聞いてみると、彦五郎が料亭「水上」で高柳玄宰と逢った直後である。彦五郎が高柳からなにがしかの金をもらったことはまちがいない。
「それはよかったねえ。ところで彦五郎さんってのは、どんなお人なんですかい」
「おや、あんた、そんなこと知らないのかい。この仲間部屋に来て、そんなこと知らなきゃ、もぐりだよ。彦五郎って人はねえ…」
男は彦五郎の連絡係であるのがだいぶ自慢のようで
「あの人は太閤資金の本命なのさ」
小鼻のあたりをピクッと動かして話し出した。
「本命…？　それは、すごい。それで…」
「血筋、家柄もよくて、太閤資金の最高機関である五人組に近いところに居るからね。彦五郎さんが扱ったもので実現しなかったものは、ないと言われていますよ。しかし住居は不明だね。もっとも人形町の方に借家があって道場の看板をあげてはいるが、そこに姿を現わすことはめったにない。ほとんどの連絡はこの加賀屋敷を使っていて、このあっしがその連絡をつとめているというわけさ。江戸の金融ブローカーや大名家の家老たちが、彦五郎さんに渡りをつけようと血眼になっておりますよ」
濁った眼の男は一息いれて
「あっしの知るかぎり、彦五郎さんのように太閤資金の本筋につながっている人は、三人か四人しかいない。そうした本命の人間を、あっしはやっといま摑まえたというわけですよ」
男は急に眼を生き生きと輝かせて、自分のこれまでの生活を話しはじめた。
「あっしが太閤資金を垣間見たのは、五年前ですよ。いったんその魔力にとりつかれると、仕事も何も放り出してそれを追いかけつづけた。すると収入はなくなる、経費はかかる。『本物を紹介してやる』と言われて金を騙しとられ、女房子供に何回も逃げられそうになった。しかしその甲斐があって、ついに笠倉彦五郎という本命を摑んだというわけさ。なにせ五人組の一人に直結しているのだから…。その下にこのあっしが繋っている。ここまで辿りついたからには、もうバタバタすることはない。彦五郎さんにしっかりしがみついて、じっと千載一遇のチャンスを待っていればいいんだよ」
「五人組というのは誰と誰…？」
「それは言えないよ。だが家柄は正しい人ばかりで、名前を言えば、ああ、あの人が、とすぐ判るが、言えませんね。」
「大閤資金って本当にあるのかね」
「それは、お前さん、ありますよ。あっしはこの眼でたしかに見た。手数料を持ってきたのさ。それをまちがいなく確認した。毛利の血筋を引いたある藩の勘定元をやっている侍が、『長い間の苦労がやっとみのった』と言って彦五郎さんに渡すのを、あっしは横で見ていた。れっきとした大阪の両替商を通した切手で、四万七千両（約二十億円）とはっきり書いてあった。正直言って、びっくりしたね。そんな大きな手数料、よほど大きな金が動いたのにちがいない。いや、本当の話ですよ。でも気がかりなことがあるんですね。というのは間もなくその侍は藩から居なくなってしまったというんですよ。消されてしまったという気がするんだねえ。なぜって、それはわからねえ。あまりに大金を握ったから、狙われたのか。あるいは持ち逃げしたのかもしれない。いずれにしても、大閤資金にはちょっぴり、こわいところがあるんだよ。もっとも大きい金が動くのだから、危険がないことの方がおかしいかもしれないが…」
「彦五郎さんは、ここで待っていれば逢えるかね」
「駄目だね。きまった時に連絡があるわけじゃないんだから。気長にいつまでも待っているというのなら話は別だが。でも、なにか連絡することがあるなら、聞いておきますよ」
「とくに連絡というわけのものでもないんでね」
「そう…」
男はいくぶん怪訝そうな顔をして
「あんた、渡り仲間（ちゅうげん）の恰好をしているが、仲間じゃないね」
「……」
功兵衛の背中に冷汗がさっと流れた。
「なにを調べているの…？」
「……」
なんと返事をしていいのか、とっさに言葉が出てこない。
「おれたちの同業には見えない。瓦版かね…」
「そう見えるかい」
やっとそう答えると
「図星だったか。それなら、おれのこと、書いちゃだめだよ。おれが毎日こんな所にごろごろしていることが知れたら、女房やせがれが腰を抜かすから。これでもれっきとしたお店に勤めていることになっているんだ。わっ、はっ、はっ…。そんなお店なんて、とっくに潰れて、

もうありやあしないがね」
「こういう仲間部屋で仕事をしている人は多いのかね」
「見た通りさ。だが、仲間部屋はここだけじゃない。他にいくつもあるし、また居酒屋にたむろしているグループもある。少しましなやつらは小料理屋の二階などを使っているさ。大閤資金を売りこむには信用が大事だからね。大名屋敷の仲間部屋を使うと、仕事がやりやすいんだよ。だが、あんた、そんなこと、瓦版に書いたら殺されるよ、この世界はこわいから…」
「やっぱり侍が多いのかね」
「本人たちはみんなそう言っているけれど、何がなんだか、わからないね。この世界は自称〝何とか〟という人間が多いから」
「みんな太閤資金で食っているのかね」
「いや、太閤資金専問でやっている人もいるけれど、いつもいい話がころがっているわけではないから、普段は高利貸しなどをして様子をうかがっている者もいるね。この業界はひろいようで狭いからね。どこのどいつが、どの藩を相手に大仕事を仕掛けたというような話は、すぐに伝わってくる。すると『その藩ならおれがルートを持っているから』と仲介を買って出る奴もいるし、また自分は別に一儲けしようと同じその藩を別ルートで攻める奴もいる。また噂を耳にしただけでその藩に押しかけ、〝足代〟一封を頂いてくる恐喝まがいの者もいてね、世はさまざまというところさ」
「そうした情報だけでも結構めしが食えるんだね。すると太閤資金って、やはり本当にあるんだね」
すると男は急に声をひそめて
「もちろん、もちろん。そしておれは本当のルートを持っているよ。くわしいことを、いま喋るわけにはいかないが。どうです、お世話しましょうか」
「世話もいいが…、あんたは、これまでに実際、太閤資金を世話したことがあるのかね」
男は大声で笑って
「馬鹿だね、もしも世話していたら、手数料だけでも何千両も入ってくる。こんな所に今ごろ、ごろごろしている筈がないじゃないか。いくら本当のルートを持っていたって、大きい仕掛けが成功するなんてものは、一生に一度あるか、ないか、のチャンスということさ」

〔二〕

太閤資金は実体を持った本当の話なのか、それとも根も葉もない金融詐欺なのか、この濁った眼の男の話だけでは解明できなかった。
そこで功兵衛は場所を変えてみた。
上り框から遠いところで三人の男が車座になって、盛んに話をしている。その方に膝でいざり寄りながら
「ちょっと、火をお借しなすって…」

煙草に火をつけ、口から白い煙を吐きながら
「彦五郎さん、今日はまだですかい」
とぼけて聞いてみた。その中の若い一人が顔を上げ、ぐるっと部屋の中を見廻して
「まだのようだな」
「ばか、奴はいつも来やあしないよ」
年寄りの男がそう言った。
「そうですか。もしよかったら彦五郎さんのことを、ちょっと…」
功兵衛はわざと、おずおず、そう聞いた。
「あれは詐欺師だよ。文書偽造のプロだ。おまえさん、近ずかない方がいいよ」
年寄りの方が、まるで教えさとすように、そう言った。
「おまえさん、彦五郎を探しているのかえ」
「へえ、ちょっと資金のことをお願いしようと思ってね」
年寄りは急に大声で笑って
「おまえさん初だねえ、太閤資金なんて、そんなもの、ありはしないよ。作り話さ。何もありもしないものを、あるように話しているだけ。太閤資金でなくて、夢資金。夢のお金さ。おれたちは太閤資金ではなくて、幻資金と呼んでいるくらいだ」
「でも、太閤資金を実際手に入れた人もあると聞きますがね」
功兵衛がかまをかけると
「それは嘘だ。話を本当らしくするために、金が入ったというニュースをわざと流しているだけの話さ」
「そうすると、話はすべてインチキ…？」
「そうだ。巨額な金が借りられる、金利は要らない、やれ返さなくてもいい、なんて甘い話で近ずき、相手がそれに乗ってくると、逆になにがしかの金をまきあげてしまう、それが殆んどのやり口さ。金をまきあげる方法にはいろいろあるが、一番多いのは、借入申込書とか、借用証文を利用する手だね。大名の借入申込書や借用証文だったら、現金と同じ力を持っている。言葉巧みに申込書や借用証文を書かせると、それを持ち逃げし、闇の金貸し業者のところで、それを担保に金を借りてしまうのさ」
「貸した人はどうするんですか」
「なに、簡単さ。期日が来たら、証文を大名の江戸藩邸へ持ちこめばいい。藩としてはそんな証文を放置しておくわけにはいかぬから、仕方なく金を払って証文を買い戻すのさ」
「もし、買い戻さなかった場合には…？」
「おそれながら、と公儀へ訴え出る、とおどかす。そんな証文が幕府に知れたら大変だ。まかりまちがえば、お家断絶。そこで泣く泣く金を出すということになる。もっともそんな証文だから、証文の金額通りに藩が買い

戻すようなことはしないがね。しかし金貸しの方も最初貸すとき、そこを計算した金額でしか貸してないから、損するようなことはない」

「藩は結局なにがしかの金をパクられたと同じことになるわけだ」

「そうだ。だがその外にも金をまきあげる手はまだある。最初話を持っていくとき、運動費が必要だといって、なにがしかの金をまきあげるのさ。そう言って千両、二千両の金がだましとられた藩もある。また手数料や旅費などといって、金をまきあげる場合もある。みみっちいものとしては、一流料亭で飲み食いして、その代金を踏み倒す」

「実際だまされた人はいるのかねえ」

「それは、いる。全財産をほとんど騙しとられた家老もいて、このままでは死にきれない、彦五郎を見つけたら刺し違えてやると、怒っている者もいるくらいだ。そうした怒りと、呪いは、すさまじい」

「でも、実際にそうしたトラブルは、あまり聞きませんがね」

「それが問題中の問題なのさ。被害届けを出さないのは、醜聞が世間に拡っては困るからさ。しかし実際はそんなことよりも、騙されたとは知りつつ、『でも、いつか本当に金が入ってくるのではないか』と、未練が断ち切れない、一縷の望みを誰もが捨てきれないのが本当の姿なんだな。そんな不気味な魔力が太閤資金にはある」

こうした話を聞いてみると、やはり太閤資金は実体のないものだという思いが功兵衛には強くなってくるのだった。

「とすると、どんなふうにして騙すのかね」

「そうだな、騙しのテクニックというのかな…、まず狙うのは、中か小の大名だな。大きい藩へはあまり持ちこまない。大きい藩は騙しにくいし、また、ばれやすいからね。また、カモるには、多小自信過剰の人物の方が騙しやすい。脆いところがあるからな。だからそんなタイプの藩主や家老のいる藩が狙われやすい」

功兵衛は反射的に高柳玄宰を想い浮べた。中藩であること、自信家の国元家老、二つの条件に美春藩はぴったり当てはまっている。

「次に、話を持ち込むのに、藩の最高陣営の一人に的を絞るのがコツだね。財務を担当している家老に的を絞るのが普通だ。そしてその時〝話が他にもれるとつぶれてしまう〟と、極秘であることを強調する。極秘だ、極秘だと、繰り返し、藩の内部に話が拡がらないようにする。他に知れると、嘘だとばれてしまうからだ」

「なるほど」

「次に必ず有名人の名前を使う。豊臣家の後裔だとか、加賀藩の家老だとか、何々藩の藩主、幕府の要職、いろんな名前を名乗る人物が、入れかわり立ちかわり現れて、

いかにも本当の話らしく演出する」

すると不思議に相手は、ころりと騙されてしまうというのである。

功兵衛は料亭「水上」で、笠倉彦五郎と一緒だった二人の男のことを思い出した。

だがそのために彼等はいろいろな演出を心得ている。

「相手を信用させるために、細かい小道具を使ったり、芝居を打ったり、実にいろいろな手を使うものじゃ。まず逢う場所も汚い所ではいけないので、一流料亭を使う。そして大名の紋のついた塗り駕籠に乗ったりする。もちろん、どこかからの借り物だがね。それから豊太閤から賜った盃だとかいって、五三の桐の紋の入った豪華な盃に酒を注いで飲ませながら、偽の申込書とか、念書とか、契約書、貸付決定書などといった書類をひろげて見せたりすると、もうすっかり相手は自家薬籠のものになってしまうというわけさ」

高柳玄宰と笠倉彦五郎たち四人の料亭「水上」での会合の様子が、功兵衛には彷彿と浮かび上ってくるようであった。

こうして功兵衛が仲間部屋で何人かから話を聞き重ねていくと、次第に太閤資金の正体がわかってきた。

太閤資金と称する幻の資金を売り物にするブローカーたちは、江戸、大阪を中心に、約三千人以上もいるということであった。そして彼等のほとんどは裏で暴力団や詐欺師と結びつき、普段は闇金融や高利貸しなどをやっているが、たえず太閤資金という架空の話をひっさげて、カモを血眼で探しているのであった。

太閤資金の共通点としては、巨額低利の極秘融資であること、有名諸藩の家老や五大老の血筋を引く人間などが登場する手の込んだ舞台装置の上で行われること、そして騙しとった借用証文などを巧みに換金する背後組織が存在していることであった。その背後組織を更に鴻池などの両替商が裏で糸を引いて甘い汁を吸っているという噂もあるが、しかしそこまでくわしいことはわからない。

さて、一つの犯行はどのようにして進められるのであろうか。

仕掛けから最後までの仕事は、とても一人では出来ない。そこで時には数十人に及ぶ人間が協力し、役を振りあてられて仕事を進める場合もあるが、その役割を分類してみると、五つあるということであった。

役割の第一が、仲間部屋グループ、居酒屋グループと呼ばれる連中である。加賀藩邸のような利用しやすい仲間部屋や、あるいは居酒屋などにたむろし、金をほしがっている藩の情報を交換したり、実行する仕掛けを考えたり、手蔓を探したりする、いわば詐欺の原型を作る役割である。

第二が役者グループと呼ばれる人間である。太閤資金に真実性を持たせ、信用させるには、何々藩の家老だとか、豊臣家の血を引く何某だとか、大物の名前をかたって獲物に近ずく必要があるが、そうした大物の役を演ずる人間のことである。たまには本物の場合もあるが、ほとんどは偽せ物である。

この第一と第二の上に位するのが、オーナー・グループと言われる、第三のグループである。仲間部屋グループの人間が『おれはルートを持っている』と言うときには、このオーナー・グループのメンバーと繋りがあることをいう。だから彼等は一応どこかに形だけでも自分一人の事務所らしいものを持っており、仕事をする場合には一流料亭などを暗躍の舞台として使うのである。

このオーナー・グループの人間は当然のこととして金融ブローカーが多いのであるが、同時に藩の家老職にある者や、儒学者、道場主、両替商の主人、奉行所の役人、あるいはかっての幕府要職者などが、その社会的地位を利用して、ひそかに携っている場合も多いのである。

彼等は第一と第二のグループを手足に使って、一つの仕掛けを実現していくわけであり、言ってみれば一番やり甲斐のある部分を担当しているわけである。そして太閤資金の実績を持つと言われる幾人かは、特に尊敬の念を集めていると言われる。

四番目に登場するのが、手続きグループである。相手がうまく話に乗ってくると、細かい手続きが必要になってくるので、専門の知識を持った人間が腕を振うことになる。書類に巧みに判を押させたり、それを捲き上げて詐欺の仕上げをするのであるが、何といっても一番重要なのは騙しとった借用証文の換金である。そのためには彼等は大阪の闇の金融業者や暴力団と深いつながりを持っている。また時には藩へ直接乗りこんで、『証文を取り戻してやるから』と、それを材料にもう一度金をまき上げるような小悪党ぶりを発揮することもあるのである。

最後に太閤資金の最上位に乗っているのが、五人組と称せられる貸出審査のグループである。しかしその存在は極秘であり、居所も不明である。

こうしてみると、さしずめ笠倉彦五郎はオーナー・グループの人間だなと功兵衛は見当をつけた。そして加賀藩家老の加賀谷兵庫と、澄田藩勘定奉行の岡島文之丞とは、役者グループということになる。功兵衛には美春藩の上に仕掛けられている罠の輪郭が少しずつ浮きぼりにされていくように思われた。

「ところで加賀藩のご家老は彦五郎さんの叔父に当ると聞いておりますが」

「ああ、あの白鬚の老人だろう」

「たしか加賀谷さまとおっしゃいました」

「あれも偽せものだよ」

年寄りの男は明確に一言で言い切った。

「この加賀屋敷にたしかに加賀谷さまというご家老はいるが、それはまったく別の人間。鬚の爺さんが勝手にその名前を使い、彦五郎と組んで芝居をしているのさ」

「じゃあ、本当の名前は…？」

「そんなもの知らないね。この世界じゃ、本当の名前なんて関係ないんだ。みんな都合のいい名前を勝手に使っている。要は誰が誰って、わかればそれでいいんだ」

「古株なんだね」

「ああ、この世界の名物男さ。太閤資金病の代表みたいな人間でね、『わしが判をつかないと金が出ないのだ。判は加賀藩下屋敷の蔵にしまってあって、毎日昼前は下屋敷の方へ出勤しているのだ』というのが、その口癖なんだ。そこである日、本当かどうかと後をつけてみると、出勤しているのは下屋敷の近くの居酒屋だったという。お笑いだね」

「……」

「ところで、おまえさん」

功兵衛の方に顔をすっと近ずけてきたかと思うと、急に声の調子を落して

「おまえさん、法被を着ているが、本当はお武家でしょう。わかりますよ。図星…？　そうでしょう。そうだと思いましたよ。で、仲間の恰好をして何をしているんです？」

「……」

「資金を探しているんでしょう。隠したってわかりますよ。よく、そういう人がこの仲間部屋へは来るからね。もしそうなら、あたしがツルをつけますよ。実はあたしこそ、本物の太閤資金の仲介人なんですよ」

そう言って、暗い刺すような眼で、じっと功兵衛の眼をのぞきこむのであった。

頃あいを見はからって、この年寄りの男もちらっと本性を見せたのである。これがここにたむろする男たちの、誰もが持っている本性なのであろう。彼等は誰彼かまわず、隙があれば『おれは本物だ』と、必死に自分を売り込むのである。

「その爺さん、どこに居るのかね」

功兵衛がすっとぼけて、そう聞くと

「なんだ、あんた、あっしの話にのらないのかい」

「その爺さんにちょっと逢ってみたいんだよ」

彦五郎に逢えなくても、鬚の老人に逢えば、すこしは感触がつかめるかもしれない。

「さっき言っただろう、居酒屋だよ」

口調は不気嫌でもそう教えてくれた。根は親切な人間なのであろう。

「名前は…？」

「桝屋」

〔三〕

功兵衛は加賀屋敷を出た。

上野の不忍池あたりまで歩くと、その「桝屋」はすぐわかった。

縄暖簾をくぐる。

客がたてこんでいたが、奥の飯台にむかって白鬚の老人が一人、ちびり、ちびり、やっているのが眼に入った。

功兵衛は躊躇なく酒を注文すると老人の前に坐り、自分の盃に酒を注ぐと同時に、老人の空になった盃にも注いでやった。

「これは、ありがたい。つきあってくれるのかね」

鼻筋が通って気品のある顔立ちの、眼を細めて酒を飲む。

「あなたが加賀谷兵庫さま…？」

「そうだ。わしが正真正銘の加賀藩の家老だ。そして太閤資金の仲介人の代表でもある」

「えーっ、本当に…？」

功兵衛はわざと驚いてみせた。

「本当だ、嘘など言うものか」

「でも、なぜ、加賀藩のご家老ともあろうお方が、このような居酒屋に…？」

「…と思うだろう。おしのびって奴だよ。わしは固苦しいところは嫌いじゃ。気楽な所がいい。それに太閤資金のことは藩邸で話をするわけにもいかぬからのう」

老人は空になった盃を突き出す。功兵衛が注いでやると、すぐなめるように飲み干した。

「加賀谷さまは五人組に非常に近いお方だと聞きましたが」

「その通り。わしは五人組の頭と同じ家系なのじゃ。本家と分家の関係だ。だから五人組はすべてこのわしに委せている。わしが判をつかぬ限り、一両たりとも金は動かぬ」

「はあ…」

いちおう功兵衛はそう神妙に返事をする以外ない。どこまでが本当で、どこまでが嘘なのか、見当がつかないからだ。

「それで加賀谷さまのお力で、金が入った藩がありますか」

さぐりを入れてみると

「もちろん。入らないということがあるものか。だが太閤資金には規則があってな、金が入った場合に、関係者全員は『金は入らない』と言うことになっている。『入らない』というのが、入った、という合図なのだ」

再び空の盃を前に出した。功兵衛は酒を注ぎ、徳利を振って、もう一本と注文した。

「それでは、本当に入ったのか、入らなかったのか、わからなくなりますねえ」

「わかっても、わからなくても、入ったことが関係者にだけわかれば、それでいいんだ。世間にそれがわかろうが、わかるまいが、そんなことはどうでもいい。な、そうは思わんかい」

「言われれば、たしかにそうで…」

「納得がいかぬようだな。それだけ太閤資金は秘密を要するということだ。だから借りようとする藩が疑問を持って、下手にその仕組みを調べたりすると、そこで話はつぶれてしまうということを心得えておく必要がある。あくまでも当事者同志の信頼関係で成り立っているのだから…」

「わかりました。ところで最近、美春藩への仲介をおやりになっているとか聞きましたが…」

功兵衛は思いきって探りを入れてみた。

「どこからそんな話を聞いた？」

老人の眼は急に鋭くなった。

功兵衛は瞬間、心の中が刺されるように思った。

「ちょっと、噂で…」

「知らないな」

ぷいっと、横を向いた。そして急に不気嫌な顔になり、飯台にひじを突きながら、手酌で、一杯、二杯と、酒を飲んだ。それは無理に気持を落着けている風にみえた。

功兵衛はここで引っこんではならないと思い

「笠倉彦五郎って、どういう人なんですか」

次の探りを入れてみた。

再び老人の眼が、ギロリといった感じに光った。恐ろしい眼だった。この老人の顔のどこにそんな眼が潜んでいたのか。

「あれは詐欺師だよ。用心した方がいい。近ずかない方がいい」

これ以上功兵衛がこの話に立ち入るのを拒否する口調だった。だが老人は彦五郎と組んで仕事をしているのではないか。その相棒を詐欺師だとののしるのは、どういうわけなのか。それは功兵衛を警戒しているからだった。

「おまえさん、美春藩のお人かね…？」

虚をつかれて功兵衛はどぎまぎした。

「いえ…、あの…」

「まあ、どちらでもいい。一つ、面白い話をしてやろう」

老人は罠を仕掛けるような口調で話しはじめた。

「それは現にある幕府の要職にある人物が太閤資金をひそかに使っているという話さ」

「そんな馬鹿な…、太閤資金は幕府の眼をのがれて、ひそかに動いている闇の金、それを幕府の要人が…、とても信じられない」

「だが、それが本当なのだ。今の老中の一人もそうであるし、先年不慮の死をとげたある老中もそうなのは、わしら業界では公然の秘密さ。老中になるのには尨大な

運動資金が要る。また老中になってからでも権力の座を守りつづけるには金が要る。やむをえず闇の金にも手をつける。背に腹は替えられぬという奴さ。それだけではない。これはと思う大きな太閤資金には、必ずといっていいほど、そうした人物の名前が登場してくるものだ」

功兵衛は雲の上の、どす黒い権力斗争の一端を垣間見た思いがした。

「だがこわいのは、そうした幕府の要人に対しても、太閤資金の掟は絶対だということだ。うっかり深入りしすぎると、そうした連中でも命を落すことになりかねない。太閤資金にはどことなく、死の影がつきまとうのだよ。先年不慮の死をとげたその老中が、そのいい例だ。ある日登場した直後、白書院に通ずる廊下で急に胸を押えたまま絶命した。死因は不明。今だに謎とされている死だが、あまりに太閤資金の秘密を知りすぎたために、五人組の手によって消されたというのが、事情通の間に流れている見方だね」

おそらく毒殺されたのであろう。功兵衛にも、そんな場合に使われる毒薬の研究がいかに発達しているかという話を聞いて、慄然とした記憶がある。

「それと同時にその老中の下で隠密を働いていた若者も急死している。老中と隠密とは一蓮托生だ」

「……」

「そういう話なら、まだいくらもあるよ。聞きたいかな」

「ええ」

「ほら、最近多額の太閤資金を取りこみ財政再建を果した澄田藩でも、外には発表されていないが、家老の一人が自宅から火事を出して焼け死んでいる。その家老は太閤資金の渉に当った人間の中の一人だが、これなども怪しいね。そればかりではない。その火事のあった日、家老の配下の一人が酒を飲みに来いと誘われていたことが、後でわかった。その者は他に用事があったので結局行かなかったのだが、もし行っていたら、一緒に火事で死んでいたことになる」

「背後で誰かに仕組まれているのを感じますね」

「更にもう一人いる。その家老の代理人として、重要書類一切を預っていた侍がいたのだが、それも四、五日たってから、不審な死に方をしているのだ。ある日、道で馬に蹴とばされて倒れた。そのとき書類包みを失くしてしまった。家に帰って、気分が悪いというので蒲団を敷いてすぐ寝たが、そのうちコロッと死んでしまったという。もちろん書類の風呂敷包みは、どこへ行ったのか今もってわからない」

わざと馬で蹴とばし、風呂敷包みを奪って、毒でも飲ませたのであろう。最近は毒薬の研究も進んでいて、死後にまったく反応が現われないものもあるという。功兵衛の背筋に冷いものが走った。

「だから、お若いの…」

老人はもう普段のおだやかな表情に戻っていて

「必要以上にこの話には関心を持たないことだな。必要以上に詮索すると生命が危い」

それだけ言って口をつぐんだ。

功兵衛は酒代を払って居酒屋を出た。

空に赤い月が出ていた。

びっくりするような大きな月で、上野の森へ吊り下ったように動かず、中空から加賀屋敷を不気味に見下していた。

加賀屋敷の仲間部屋は伏魔殿だと思った。そこには信じられないような事がいっぱいある。しかし本当のこともあるらしい。どれが本当で、どれが嘘なのか、さっぱりわからない、というのが真相のようだ。

彦五郎についても同じである。彼が本当に太閤資金の本命なのか、それともペテン師なのか、真相は摑めない。

だが、これは他人事ではない… と功兵衛は思った。

高柳玄宰はこの太閤資金の真相を、どこまで知っているのであろうか。死の予兆が高柳玄宰の上にも黒く影を落しているのだ。

だが、死の予兆は高柳の上だけにではない、美春藩二十万石の上にも影を落しているのである。

至急国元に帰って、長尾真十郎に報告をしなければならないと思った。

翌朝、功兵衛は国元美春へと、急ぎ旅立った。

（つづく）

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

（刊行時期）　（原稿締切）

春季号……二月一日　一二月三一日

夏季号……五月一日　三月三一日

秋季号……八月一日　六月三〇日

冬季号……一一月一日　九月三〇日

季刊確保のため右のように規約を定めております。温かいご支援をお与えください。

各位

編集後記

この冬は珍しく変化の多い天候で、カメラをさげて遠出しようと決心すると、雲行きがおかしく中止してしまうということの繰り返しだった。同人、会員のみなさまにはどのような正月休みだったでしょうか。

「オール読物」一月号に、野坂昭如氏が「赫奕たる逆光」と題して、三島由紀夫の思い出をつづっている。肩の凝る三島論とは異なり、気軽に読んでいった。

戦後の混乱期を生き抜いてきた野坂氏の生きざまがよくかかれていた。世代が似通っていて、私などには共感するところが多かった。というより、三島由紀夫の出現と、その作品から受けた感動というか、驚愕に共鳴を覚えた。野坂氏は「…絢爛たる文字面と、小説家たるその確かな意志に圧倒され…」また、「仮面の告白」の華麗な文章、精緻な構成、詞華と知性の見事な融合に魅入られたと告白し、「三島に負けた、小指が痛い」と唄った。

三島由紀夫の出現で筆を折った作家志望の若者は多かったのではないかと思っている。

「まんじ」も二十二号をかぞえ、連載作品もいよいよ佳境にはいったことを喜ぶ。八十島氏、柴田富佐子氏も健在で今後の活躍が愉しみである。

他の同人諸氏の健筆を心よりお祈りしたい。（も）

「まんじ」第二十二号

昭和六十二年二月一日発行（非売）

編集　森本俊正

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九
「作家群」（まんじ）編集部
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二ー九〇八一五

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー十一（261・5743）

目次

烏川の畔……大和禎人……1
老漢の系譜（二）……山口健二……26
連載
ハイラル挽歌（七）……金子正義……36
第二章　開嶺の崩壊
男たちの藩（七）……三戸岡道夫……46
第四章　金のやりくり
編集後記……56

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

烏川の畔

大和禎人

仏門とはいえ多感な青春時代に文学趣味のあったかれは菊池寛の「出世」という作品を読んでいた。（譲吉もの）という一連の作品の一つである。

上野図書館の白亜の建物を仰ぐところまで来ると、いつもこの作品のことを想った。閲覧券を窓口で求めグルリと右手の階段を下りて陰気で薄暗い下足場へ通る、すべてあの作品のとおりなのである。

かれはチビ下駄をそこで脱ぎ、上履き用の藁草履を籠からとりあげて履いた。下駄は片手で腰高な預り台の上に置き下足札をもらう順番を待つのである。ここに働く下足番は「出世」の場合、やがて一人は閲覧券売場の窓口に座っていて、懐かし気に譲吉に声をかけたということになるのだが、あの男から数えて何代目になるにしろ、まだ、この頃はまったく働く姿を変えていなかった。（まだ）というのは「出世」という作品は大正八年十二月の『新潮』が初出という昔の作品だからだ。

菊池寛は同年「恩讐の彼方へ」を『中央公論』に、また「藤十郎の恋」を『大阪毎日』にあい次いで書き、いわば作家としての地歩を確固なものに築き上げている。

ところで一方、ここにいう（この頃）は昭和七年の歳晩である。それまでは赤羽までの区間がのびて、かれの在所大宮からも直通電車で上京が可能になった。たまたまそれも九月一日からという（足の事情）に多分のかかわりがあるのだった。かれの取材活動はにわかに活発を加え、範囲を徐々に広げはじめていた。

かれ阿部道山の下駄は譲吉の履いていたという草履よりまだましであった。譲吉には拒んだ下足札をもらえたのである。大宮の大成からここまで辿りつくについて埃にまみれ、生れつきの油足でそれをこびりつけた下駄だった。

かれは閲覧室に座り場所を確保すると、急いで貸出しカウンターに行き五冊ばかりを申し込んだ。

「維新前後の政争と小栗上野の死」蜷川　新
「夜明け前」島崎藤村
「檜山兄弟」吉川英治
……
……
など、それは単行本であったり、新聞の縮刷版であったりした。
かれはそれらから、ノートに必要の部分を見出しては丹念に記事を写し取る作業を仕事にして倦むことを知らないのであった。
大正十四年三十九歳で普門禅院の住職になってから、まもなく一念発起して時折ひまを見ては上京をかさね、（小栗上野介）の事蹟を追いつづけていたのだ。小栗氏歴代の墓域があり、上野介忠順の首塚のある寺として当然すぎる関心の成り行きであった。
この日は次のようなくだりを「夜明け前」から写している。

栗

土蔵付き売家
これは、傾きかけた徳川幕府の大身代をどうかして支えられるだけ支へようとしてゐるやうな、その大番頭ともいふべき小野上野介の口から出た言葉である。土蔵付売家とはなにか。それは幕府が外国から購ひ入れた軍艦や汽船の修繕に苦しみ、小栗上野介とその知友喜多村瑞見との協力の下に、元治元年あたりからその計画があって、愈々慶応元年のはじめより経営の端緒に就いた横須賀の造船所を指す。どうして又、それがいよいよ出来た上は慰斗を染め出しても、猶土蔵付きの栄誉を残すであろうと言はれるのか。これは小栗上野介の一時の諧謔でもない。
さすがは文豪藤村だ。格調高い文章のうちに道山の会心を呼ぶだけの内容がここにはある。
（ただし、ここに言う瑞見は栗本鋤雲でなければならない、断じてそうでなければならぬ）
心のうちにそれを批正するだけの確信をもっている。積み重ねてきた資料探索のお蔭である。
この「夜明け前」第一部は昭和四年に稿を起し、同六年に書き終ったことを著者みずから書き残している、足掛け三年、七百三十一ページという労著、すでに百余版を重ねている大冊だ。
そして、江戸幕府の没落の運命を辿りつつあったことは幕府の内部のものですらそれを痛感してゐた間にも、来るべき時代のためにせっせつと支度を怠るまいとするような、こんな近代的な設備がその一隅には隠されていた。
だが、藤村はこんな叙述もその先の方でしている。
（よく言ってくれた）
道山和尚は手をあわせたいくらい感動する。しかし、

「夜明け前」の作者はこの本のはじめの方で（日本最初の使節を乗せた咸臨丸）として波濤を乗り切る果敢さを主人公青山半蔵の師である宮川寛斉が望見するさまを描写し、史実を誤っている。しかも艦長木村摂津守、指揮官勝麟太郎としているのも事実に相違する。木村は軍艦奉行であり、勝が艦長でなければならない。
（これはまずい、藤村先生としたことが、いけません）
かれはそっと席を立って窓ぎわへ歩いた。採光を考えて高窓はあるが、そこから外の景色を眺められるという構造ではない。ここは図書館だった。かろうじて上野の森の一部と青空が見えただけだ。
（少し興奮しているな）
テレかくしに伸びをし自席へもどった。
老大家の鬱然たる大作、しかも奥深い文学作品に瑕瑾を見出して快とするつもりはないが、後世に伝えられる名作としては惜しまれる。もちろん、日本最初の使節ということであれば万延元年、安政条約交換使節の大任をおび渡米した正使新見豊前守、副使村垣淡路守、それにわが小栗上野介をとくに伊井大老が抜擢して加え「御目付」とした一行を指すものでなければならない。
（文芸家は虚と実をあざなうものとしても、事実の歪曲を許されるものではない、藤村先生のこの作にして）
という昂ぶりだった。文芸作品がどう小栗上野介を取り上げているかを掘り起すことは一つのテーマになっていた。
ところで、この折の遣米使節一行は官吏従者あわせて八十一人よりなり、万延元年正月十八日（一八六〇年二月九日）品川より出帆し、三月十五日ワシントンに到着、四月二十日同地を発し二十八日ニューヨークに達し、五月十二日にいたり同地を発ち、九月二十七日品川に帰着したのであった。この際の乗艦はすべて米国の迎艦ポーハタン号を主とし、あるいはワシントンへはローノック号に便乗するものであった。くだんの咸臨丸はこれに伴わせた航海ということを見誤ってはならないのである。
かれがこれまでに掘り起した作品はざっとこんなふうになる。
「ふらんすお政」村松梢風
「小栗上野介」近松秋江
「大菩薩峠」中里介山
戯曲「小栗上野介の死」十菱愛彦
などである。
さて、きょうはさき頃完結した「檜山兄弟」を縮刷版を借り出して、これから目を通そうと思っている。『毎日』連載を十一月に終ったばかりである。堂本印象さんの挿絵が良かった。小栗上野がこの作者、吉川さんの平明、簡潔な筆で生き生きと書かれていたはずに思う。その部分を写したいのである。
「出世」の譲吉は後年、青い（特別閲覧券）をもとめ

ようとして出世した下足番に会うことになるのだが、ゆっくり調べものをするためには広い机がほしく、それにたまさかの利用である。譲吉の頃は五銭のものが十銭としてもさしたる贅沢とは思えない。特別室は気分的にも落着いた雰囲気が好ましく、かれにはありがたかった。かたわらに置かれた風呂敷包みの中にはこれまでかれの労力を惜しみなくかけた大事なノートが四、五冊入っている。

この日貸出をうけた本のなかに「維新の政争と小栗上野介の死」という蜷川新博士の一冊があり、いまさらの感があるのは未読というのではなく、手持ちがないからであった。昭和三年九月初版のこの本はかれがまだ三年ほど女学校に奉職した時期に耽読したものだ。小栗上野介の事跡に対する開眼はこの本に負うところが多い。若気のいたりで女学生相手に青臭い（小栗論）を繰り広げ、試験問題にも出して、百点をおおばん振舞いした過去がある。本は貸し失ったものだった。

蜷川博士はその後続編を出された。「続維新前後の政争と小栗上野」、昭和六年二月の刊である。かれはこの続編の方ではとくに博士が前編の反響として諸家の書簡、論評を集められているところが参考としてありがたかった。再読、三読してほとんど章編を絶つほどになっている。博士を敬し交渉もひらけ、すでになにかと教示を与えられて今におよんでいる。

中里介山の「大菩薩峠」に現れた小栗論は博士がこの続編のなかで抜粋しておられる。格調高く、まことに鋭く理路整然の文章である。かれのノートからそのいくつかを写しておこう。

小栗上野介の名は徳川幕府の終りにおいては、何人の名より忘れられてはならない名の一つで、あるのに、維新以後においては、忘れられ過ぎるほど忘れられた名前であります。

事実において、この人ほど、維新前後の日本の歴史に重大関係をもってゐる人はありません。

歴史といふものはその当座は皆勝利の歴史であります。勝利者側の宣伝によって歴史と人物とが一時眩惑されてしまひます。

舞台の回し方が、正当（あるいは逆転）に行くならば、あの時、西郷を向うに回して当面に立つ処の役者は勝ではなくて小栗でありました。単に西郷といはず、所謂、維新の勢力の全部を向うに回して立つ役者が小栗上野介でありました。

そうして彼はまた幕府の保守側を代表する頑冥な旧守家でなかったことも確実であります。小栗は一面において最もすぐれたる進歩主義者であり且、少しの間ではあったが、これを実行するの手腕と地位とを充分に与えられておりました。

さらに、少しく長くなることを憚られるが、小栗の才幹と面目を如実に論ずるくだりを紹介しておきたい。簡にして要を得た小栗全体像を浮彫りにする記述である。中里介山氏の史眼透徹ぶりもまた舌を巻くほどのものがある。それはこうだ、

三十余歳の壮年赤毛布は、他の同僚が西洋の異様な風物に眩惑されてゐる間に、金銀の量目比較のことに注意し、研究し質問して、日本に帰ってから小判の位を三倍に昇せた程緻密な頭を持っておりました。程なく勘定奉行の地位をかち得たのは当然過ぎる程の当然であります。また程なく財政の鍵を握って陸海軍のことを統べるの地位に上ったのも当然の人物経済であります。勝でも大久保でもその手足に過ぎないし、講武所も開成所も、海軍所も、軍艦の事も、火薬の事も造船の事も徴兵も郵便も今日まで功績を残してゐる基礎において、彼の創案になり意匠に出でぬといふもののないこと再論するまでもない。

さらになお、いくつか落せない文字をなおひろうならば、

その人となりを聞いてみると、酒をたしなまず、声色を近づけず、職務に勉励にして、人の堪えざる処を無し、しかも和気と諧謔とを以て、部下を反らさず、上に対しては剛直にして、信ずる処をいひ、貶黜せらるる事七十余回といふこと真なりとせば、得易からざる人傑であります。

ここで珍しくかれの割註があり、つぎのような意見を加えている。

（貶黜—へんちゅつとは官位を下げ退けるの意である。巷説なりとしても七十余回はいかにも甚しすぎる。道山のこれを調ぶるところによれば、

安政六年目付任官から慶応四年勘定奉行勝手方兼海軍奉行の職を免ぜらるに至るまで、わずか九年間に十八回の任免がある。世上七十余回

と称せられるは事実ではないが、とにかく、六ケ月間に一度の任免があったことになる。この点を見ると彼がいかに嘱をうけることあつく、尋常一様の凡庸な人物でないことが知れよう。彼の閲歴するところを見るに、勘定奉行、陸軍奉行、海軍奉行、町奉行、外国奉行と幕末国政のあらゆる顕職に歴補されたことは明らかである。その国家に寄与せる功績のとくに著しきを挙げるとすれば、

慶応元年五月勘定奉行に就任し、幕末国家経済を調整したことと、兼職たる海軍奉行として我国に一大造船廠を創設したことであろう。即ち後の横須賀海軍工廠がこれである。）

さて、もう一節だけ中里介山氏の舌鋒の鋭く痛快きわまる行文がある。それを写し忘れてはならない。あともう少しだけ写してノートを閉じることにしよう。

小栗上野介が単に人物として日本の歴史上どれだけの大きさを有するか、それは成功せしめた上でないと、ちょっと論断を建て兼ねるが――

この人が、徳川幕府の中心に立って、朝廷に背くのではない、薩長その他と戦はねばならぬと主張することは、絶大なる力でありました。

長州の大村益次郎が維新の後になって小栗の立てた作戦計画を見て舌を巻いたといふのは本当であろう。これが実行されたら薩長その他は鏖殺した！　と戦慄したといふのも嘘ではあるまい。かくありて大村の大村たる値打ちがわかる。西郷などはこの点においてノホホンです。

ここにいう小栗の作戦計画は第一に、連合軍をして箱根を越えしめてこれを撃つ、第二に優秀な海軍力を駆使し、駿河湾より薩長軍を砲撃して連絡を絶ち、前進部隊を自滅せしめる。さらに海軍をもって兵庫方面よりも同時に薩長連合の連絡を断つ。連合軍のそれは無に等しい海軍力を、こちらは存分に活用しようというものだった。勿論、軍費の上でも小栗には成算があった。

しかし、如何せんすでに慶喜将軍その人に戦意の失われていては万事休す、事は畢ったのであった。

蜷川さんの引用された部分は介山先生の異常な熱っぽさが感じられる。このへん、連載の数回は机龍之助もそっちのけになった。大正二年「都」新聞連載にはじまり、いまだ未完という大長編のこれは「Ocean の巻」という珍しい横文字を題とする巻に書かれているものだ。後

年、昭和十六年に結成された「日本文学報国会」の入会をたった一人断った介山先生の反骨が伺える行文である。同時にそれはこれを快とし、共鳴された蜷川博士の反骨をも物語ることは確かだと思われる。

（失礼ながら蜷川博士は時勢を少しお考えにならないといけないのでは）

と阿部道山は思う。博士を敬しながら、なお、

（危ない、いかにご親戚とはいえ先生の史論は少しく激しすぎます）

とひそかに呟くのである。というのも蜷川新博士の実のご母堂は小栗上野介忠順の室、道子夫人の実妹にあたるという立場を存じ上げているからこそである。

（陸軍は長州、海軍は薩摩とする申さば軍閥主流に抗しては障ります）

道山はむしろその海軍を立てることで小栗の顕彰を実現したい、そう考えていたのである。

かれはこの頃すでに水交社の広瀬彦太大佐、時の横須賀海軍工廠長都築伊七中将、といった海軍将星に近づき、また、伊藤痴遊氏を介し岡田啓介海相に近い陸軍の松尾伝蔵大佐にも近づきつつあった。

（普門禅房に箔を、一山繁栄のために）

と念ずる一心に燃えていたのだ。

荒廃に任せていた小栗家の墓域を遺族にはかり整備することからかれの仕事はすすめられなければならない。

小栗家十三代小栗貞雄氏は、上野介最期に先立ちひそかに諭されて落ちのび、会津の横山氏に身を寄せた道子夫人がそこで懐妊中だった一児を生まれ、国子と名づけられた。忠順公唯一の遺児である。奇しき運命のこの女児は後に大隈重信夫人が縁戚という関係で、同邸に育てられやがて当時の名士矢野龍溪氏実弟の貞雄氏を迎えるのである。かねて蜷川博士から紹介もあり、十二代忠順公の墓が、東京、大宮、上州二ケ所の都合四ケ所にあるは不便と嘆かれていると聞きおよんでもいたが、かれは未だこちらからは会おうとしていなかった。

（私は思ふ所あり、これを断った。）

と、後に自著に記している。その（思ふ所あり）とはなにか、およそ不可解と言えるが、さきの蜷川博士に対するかれの抱く私情とはなぜか通ずる一脈を想像できなくもない。小栗上野介を顕彰し、事蹟を研究する先鞭は間違いなく博士であるが、これを敬し一目も二目も置きつつ、かれはなぜか距離を置いていたのである。

さて、ふとここで気づくと、上野図書館には薄暮が近づいていた。くだんの高窓は暗く、どんよりした宵闇が覗いていた。ちょうど、係がその時スキッチをどこかで入れたものらしく、特別閲覧室のシャンデリアに灯りがともった。

促されるように読み返しをしただけで、ついに写しを

とりそこねた「檜山兄弟」を返しながら、ふと最後にある人名鑑をのぞいて見ようという気になり借り出した。

（今日はこれだけでお終いにしよう）

と、思ったものだ。それがおそらくはなにかのインスピレーションとでもいうものであったろう。

（原保太郎）

という名が計らずも目に飛び込んできたのだ。

（あっ）

と思った。この名前こそ蜷川博士が、続編で引用されている。中村政太郎氏の書簡に見える名前ではないか。それはまさしく小栗上野介忠順を烏川畔水沼河原に斬首した当の加害者でなければならない。茫々七十年の昔、この人は東山道総督岩倉具定麾下の監軍として官軍の一員であった。いまは勅選の貴族院議員としてその名を連ねる、時世時節の皮肉、あまりのことと言わねばならないであろう。さすが道山も凝然としてこの人名の上に瞳を泳がせた。そして、われに返ったようにあわただしく、そこに示されている（その人）の住所を書きとめた。

鎌倉市二階堂六八

とあった。息を呑むような瞬間のあとの、胸の騒ぎをおさえ、すっかり暮染めた上野の山道をかれは弾かれたような急ぎ足で駅に向った。

まさに、右のことは昭和七年の暮、十二月二十三日のことであった。

数日後、とうとうかれは意を決して原安太郎氏あての長い手紙を書いた。図書館での発見の興奮から醒め、心を静めるのに数日要し、ためらいからようやく抜け出したのだった。

この間に、あらためて、（その人）の名前を突き止めるきっかけを与えてくれた蜷川博士の「続維新前後の政争と小栗上野」をとり出して、関連するページを繰ってみることもしている。続編が昭和六年二月の刊ということはすでにさきに触れたことだったが、読んだときからいつか年余を過ぎていたことになる。前編の好評に応え、多く寄せられた反響をも収める部分があり、原安太郎氏のことはその三二〇ページにひろえる。

一〇　中村政太郎氏の書簡

とあるのがそれだ。

「前略」、小栗氏直接の斬首者は、貴著中、何れにも御明記無之候得共、当時の実見老翁の申さるるには、下手人は、現貴族院議員原安太郎殿当時二十二歳位の青年なりしとの事故、本年八十二歳位と思はれ候（付記キング雑誌一月号に原氏自ら、岩倉総督の部下として、小栗氏捕縛に参ぜし旨記されあり）。以て実見者の言辞と符合候故、浅学をも顧みず、先生の御参考まで申進候、従来一度も御温顔に接せず、突然の妄言乱筆、多罪御宥恕被下度候

「説明」未知の同志の熱心なる御垂示には感謝する所であった。余の著書には、原氏の姓名は故更に除いて置いたのであった。併し権田村の長老より送られたる「調書」の中には、明らかに掲げられてある。余は此事を回答して同氏に感謝した。余は先年某席上にて、先輩石黒忠悳子より、原氏と小栗との関係を詳しく聞き夙に此事を承知して居ったのである。

博士は重々承知していながら、その名を挙げることは避けられたというのである。一片のヒューマニズム的立場からであったろうか、激しいとも言える史論の展開の中で、なお、これを回避されたことを中村政太郎氏は親しく返書を得たとしも、どう理解をされたのであろう。（故更）という文字は博士の心理までを伝えるものではない。書簡の文辞から推して中村氏なるお人はやはり上州の方であろう。冤死した小栗公に手を下した斬者が健在で顕官の列にいる。そしてその人自身雑誌に身上を物語ることがあった。中村氏の書簡は紙背に義憤が秘められ、そのことを指摘していられる。

「キング」という大衆娯楽雑誌は大正十四年一月にいまの講談社の大日本雄弁会講談社から創刊され、たちまち雑誌界破天荒の六十二万部を売り尽したという人気雑誌だ。原氏の寄稿がひろく世間大衆の目にふれたものであったことは事実だ。だが、中村書簡に伝えられた以上にどのような内容であったかは、わかっていない。ここ数年の新年号を調べれば判明するであろうが、そこまでの労力をかけるほどのこともあるまい。おそらくは蜷川博士も同様に考えられたであろう。大衆娯楽誌という性格上それは勅選貴族院議員という肩書を付し、多分、得意の立志成功談として取り扱われているのがオチではないか。肖像入り、巻頭の枠囲いに遇されたものを想像できる。

原安太郎氏は明らかに長州人であろう、道山は後年、昭和十六年になって宮武外骨氏の「府藩県制史」の刊行に会い、手に入れていてそれを確かめることになる。よほど岩倉具視公には可愛がられたらしい。公の随員として明治四年、欧米視察の機会に恵まれ、帰朝すると山口県令となり、県令はやがて県知事と呼ばれて明治二十九年までその職にあった。当時、在職二十年はおそらく絶後であろう。道山が前記の本に見出したという記事は、「明治時代府県別善悪人物表」なる外骨氏独自のものである。落すべからざる人物を府県ごと数十名を挙げる中に、山口県の部で明らかにその名を発見する。

ところで、（故吏に除いて置いた）という蜷川博士の真意にふれるものは他にあった。さきに掲げることのあった十菱愛彦氏の戯曲「小栗上野介の死」という本に跋を書かれ、またとくに付録というスペースに「小栗上州を廻る維新前後の史実」というこの本の1／3を占めるエッセイを寄せていられるのだ。肝心の戯曲の方は三幕六場に構成され、この時期の小栗ブームとも言えるものに応えたもののようで、昭和四年の刊行である。博士の二著のちょうど中間の刊本ということになる。自らの続編の稿とダブリモあるが、明らかに博士は述懐の文字をこの本に書かれているのだ。

ほぼ推察できることだったが、それはこうである。解明の鍵として写しておかねばならぬようだ。

小栗を殺した人は誰れであるとの事を態々書いて知らされた人もあった。余もこの人を知る。併し乍ら責任は当時の上の役人ども、即ち岩倉とか伊知地とか板垣とか、乃至は西郷其他の人にあるが故に、余は其等の下役人の姓名は、書かなかった次第である。

さて戯曲の登場人物として終幕（第三幕　大詰　榛名山麓烏川畔の場）に奉保太郎なる配役がある。冷酷無残な科白を十菱氏はこの役に吐かせている。もちろん秦は原に置きかえて考えねばなるまい。作者はなぜこの配役のみを仮名としなければならなかったのであろうか。跋文を書かれている蜷川博士からの助言があったのではないか。江戸城内本丸大広間の場という小栗上野真骨頂を示す活躍、熱涙をもって慶喜将軍にせまる場面を現出する第一幕にはじまり、ついに悲劇に終わるドラマだから秦安太郎はひと際冷酷に演出されるはずであった。

率爾ながら……

といく度も書き直し、直してこんなふうに書き出しは落ち着いた。陳腐かなと思ったがしかたがない。

（やはり、突然の手紙だからしかたがあるまい）

そう腹をきめると、あとは意外にすらすらと書けた。

（原氏に会うことができればこの私の研究はいよいよかなる類書にもない、いや、ことによればあの博士を超える重味を加え得るであろう）

と思うと、筆さきにも思わず力がこもった。フーッと溜息がときどき漏れた様子であった。納所の机を借り、炭火に手を暖め暖め、それは書き継がれていった。

かれのくだくだしい手紙の要旨はおよそ次のようになる。

私は小栗上野介忠順公歴代の墓を守る菩提寺の山僧である。貴台に親しくお会いする機会を得たくかくはお手紙をさしあげる。実は今日ま

で貴台を探しもとめていたのであるが、計らずも、ちかごろさる名鑑により貴台のご健勝を知り、またご住所を知るを得た。失礼ながら安政四年の往時、上州権田村における貴台と小栗氏とのかかりあいについてぜひ真相を承りたい。

なにとぞ面晤のあい叶うよう……

自分は山僧であると名乗りをした。住職と書くことを避けた。相手の身分を考えてそうしたのだ。

いまはひたすら謙虚に、へりくだり下手に出る以外にはない。そう思えばここが大事なのだ。そうすることで相手の心証に訴え、ゆすぶりをかけねばならない。

なにとぞ面晤あい叶いますよう……

と書いてから、しばらく考えた上、あとを

伏してお願いを申し上げます。

とつづけた。

ここを先度拝み倒しにかぎる、そんな計算であった。額に汗が浮かんだ。炭火の一酸化炭素の加減か、ほんの少し頭の痛い感じがした。そこで首を振ってみ、筆の穂先を無意識になめて唇に墨をつけたが、気づかなかったようだ。

一片の香を焚き、ねんごろに回向をともにいたしたく、山僧ひたすら懇願を申し上げ、はなはだ蕪辞お許しを賜わりたくお願いを申し上げます。

不尽

恐懼謹言

昭和七年十二月下浣

阿部道山

原　安太郎閣下

玉案下

かくて懼れ謹みながらようやく手紙を書き終った。

翌朝、かれは小僧に命じ、郵便局までわざわざ走らせ、親展書留として差し出させた。

日課でもあり、夜をふかした眠気を払うためにもかれは高箒をとり、使の帰りを待ちつつ寺域のあちこちを掃き清めた。上野介の墓ももちろん懇ろに浄め、うやうやしく手を合わせ、

（当山繁栄になにとぞ加護を、南無阿弥陀仏）

と念じた。そして、これ以上は原翁からの返書を待つのみであると思った。

（そう、原氏は翁だ、すでに八十歳をこえた人だ、その老人がはたして要請に応えるであろうか）

という一沫の危惧は払いかねるものがある。幸先を願うほかないのだ。

この年、昭和七年はかれの寺門にとってきわめて意義の多い年であった。

それは盛夏、七月二十六日のこと……。

蟬時雨の中を突然、スタール老博士が小栗公の墓参に見えるということがあった。お札博士として知られる人だ。日本の神社、仏閣について詳しい博士は小栗上野介について深く認識をもたれ、公こそは日本新文化の父であると表現された。米人として博士は万延遣米使節の史実を知っておられ、帰米したらワシントン大学の図書館について使節一行のことを書き残した当時かの地の接伴武官の日記を収める本があることを確かめたいと話され、その紹介を約された。このご縁をもって後日には横浜に出向き、日枝丸に訣れを惜しみ見送ったのも先日のようであったが、博士は帰国後書簡をよせられ、はからずも添えて小栗公の全身立影を贈ってくれたのである。前記の日記を残したかつて万延元年使節迎艦ポーハタン号乗組みの米海軍中尉ジョンストン氏の撮影にかかるものだ。博士はこれを複写し与えられたのである。異国の碩学の手を通してこの貴重な写真の伝えられたこと自体はなはだ奇しき出来事であった。

かれはこの写真を珍重すると同時に絵はがきにして各方面に送ることを思いつき、それを実行した。いかにも道山らしい挙でもあるわけだが、友人知己に分けた残りがあり、実はこんどの原氏あての手紙に封入したものだった。

（見覚えがおありのはず）

としたことがあるいは行き過ぎるものであったかもしれない。

（まずかったかな）

という思いが苦く心の隅を占めていた。こだわっていた。七十年をさかのぼる過去の怨念を白日のもとにいまあえて暴くことになる恐れがあるとともに、この写真一葉がどぎつい印象を与えはしなかったか、恩讐をこえた会見を望む意図を誤られてはせっかく手紙を書いた労が無になる。そう思ったのである。

原翁から返書があった。毛筆しかも流麗の崩し字で道山は判読に手間をとった。仏門の身、そうしたことには多少とも覚えもあるはずだが、少しばかり冷汗を覚え、しかし返書を得たことでは喜びに震えるようであった。

こんな意味にその内容はうけとれるものであった。

貴翰まさに拝承した。年末余日もなければ、来春早々にお会いいたそう。加封ありし上野介殿のホトグラフはたしかに見覚えのある相貌、得忘れはせぬ……

といったものだ。老人のこと故多少は手蹟に乱れを認められるものだったが、要は尽くしたものになっている。判読に苦しんだことはこちらのむしろ未熟を物語るものだった。ホトグラフと書いた翁は案外ハイカラで、それだけの壮気をもちあわせるものとしてうけとれる。懸念したわりには淡白すぎることでホッとすると同時に、これは容易ならぬ相手であるという判断をしなければならないのかも知れなかった。

秋口、僧坊に架設を実現していた電話を入れて、ことの次第を蜷川博士に伝え意見を聞くことにした。

（さぁ、どうだろうか、あなたの熱意はともかくとして、暴いて甲斐のあることにわたしは思えないですな）

申し込んであった東京渋谷への電話がようやく通じて、幸、在宅された博士と対話ができると、まず、いきなりそう言われた。

（……？）

（もし、聞えていますかな、いいですかな、貴族院議員さんは八十の老体ですぞ、いまさら平地に波乱ではないかな、そっとしておいてあげたいですなぁ、わたしだったらそうする）

（わかりました。先生のヒュマニズムはいつものことでございますな）

道山は鼻白んで、

（先生おしつまっておりますが、良いお年をお迎えなさいますよう）

と言うと受話器を掛けた。博士はなにか答礼の言葉を言われたようだったが、かれの耳には入らないで通話を終った。

第三幕

第三場

時―慶応四年戊辰四月六日。早晨。

処―上州榛名山麓烏川畔

そして、舞台はこういう設定である。

烏川畔にある河原。はるか正面右手に榛名山を望む、その裾を北西にかけて、白い一条の川が走っている。

上手は土堤に通じ、下手は数町を隔て権田村東善寺を眺めうる心地。河原の上に一枚の荒菰を敷き、その傍らに床机二脚、手桶柄杓などを用意す。下手には蛇籠転がりある。寅の刻過ぎ。川靄深き払暁の景。

高崎藩の足軽五、六名、河原に荒菰を敷き、手桶に水など汲みて、刑場の支度に忙しさうに働きゐる。

道山は電話のあとの心のホロ苦さを紛らわそうとして、十菱愛彦氏の戯曲「小栗上野介の死」をとり出して読み返してみることにした。

右の大詰の場の中に秦保太郎として登場する原翁の姿を、もちろんそれがフィクションの世界であることを承知のうえで検討したかったのだった。

この役柄の過酷さ、そして忍びないことだが斬首というシーンをどう捉えて構成しているかを確かめたかったのだ。

秦　あれが東善寺か、小栗見納めだ。よく見て置くがいい。いい態だな。いよいよ、貴様もお陀仏になるのだ、念仏でも唱えておけ。

上野　（無言）

秦　こいつ昨日から一言も云はぬ、どうだ命が惜しくなったか。助けてやりたいが、助ける訳にはいかぬのだ。まだ黙っているな、さては気が臆して啞になったか。笑止なやつだ。

上野　（無言）

秦　少しは思い当る節もあるだろう、幕府の元締になって、いらぬ知恵を絞ったからだ。もうこのへんで引導を渡してやろうか。豊永、罪状を読みきかせてやれ。

豊永　よかろう、では読みきかせるぞ。（懐中より奉書を取り出す）いいか。

小栗上野介

右ノ者朝廷ニ対シ奉リ、大逆ヲ企テ候条明白ニ付、天誅ヲ蒙ラ令ムル者也　慶応戊辰四月。

東山道先鋒総督府。

秦　（受取って上野介面前に突き出す）不服か。異存はあるまい、明白だろう。

どうも蕪雑なものだ。キャラクターの想定の問題だらうか。十菱さんはかなりの劇作家だ。倉田百三の知遇をうけ、牧野信一らと親しく小説も書いた人だ。自らが旧旗本の名家の出、憤激をこめてこれを書かれたはずであった。

さて、エピローグは……

豊永　いい覚悟だ。小栗を斬れ。

一人の武士。上野介の背後に回り、大刀を抜く。

上野　さあ、お斬りなさい。

豊永　斬れ。

首斬人鋭き一声にて斬りつく、されど心怖じたるせいか、誤って斬りこむ。

上野　（静かに振り向き）そこは違いまするぞ。心を落ち着けて、立派にお斬りなさい。それでは上野の首は落ちませぬ。（笑ふ）

再び首斬人刀を振り上ぐ。

上野　心を鎮めてよろしいか。

豊

―（幕）―

ここに登場する豊永は仮名ではない。豊永貫一郎。やはり東山道総督の監軍である。この豊永のその後は明らかでない。道山は名鑑にこの名をついに発見し得なかった。生存する原を秦と仮名し、斬首の直接命令者は豊永、そして手を下したものは別人のごとき設定である。作者の配慮をあらためて覚える。

（やはり、そうだったか）

背後に蜷川博士の強い示唆があったと考えることは想像に難くない。

彼言にして用ひられたならば、日本に公明輝き、「藩閥」と云う地方的の団結をもって、日本の全人民をあたかも敗者の如くに圧制したり、東北を混乱せしめたり地方人民を泣かしめたりしことは生じなかったであらう。彼等の醜穢なる同志討だの、内乱だのは、断じて起ることはなかったであらう。幕末の当時殆んど一般政争者の眼中には、「国民」といふものなく、対世界的識見など全くなく、唯だ単に盲目的に、攘夷とか、討幕とかを口にして、囂々し、国家を危地に陥れることのみに没頭して居った其中に於て、真に世界を知り、日本を如何にして、世界各国の中に存在せしむべきかを理解して居ったのは、唯だ徳川方に若干の先覚ありしのみであった。小栗上野はその中の最優物であったと云える。……

そして、

……官軍下役人等の手に、烏川の畔にて、莞爾としてその首を斬らるる所なぞは、いかにも劇そのものであって……

と、博士は跋文の中に述べている。小栗上野介忠順に惚れぬいた文章である。（官軍下役人）という言葉がでてくる。電話の向こうの博士が道山の原保太郎訪問の意図を聞いて、甲斐あるものとしないばかりか、むしろ冷然とした口吻を投げかけたのはこのへんに由来するものだろう。下役人とよぶ言葉には限りなく蔑みがあり、また憎しみの針が感じられる。ことによると、博士は官辺そのものに対して蔑視の眼を向けているのかもしれない。

（怖いお方だ）

と道山は思う。

（激しすぎる）

と別には声なく呟く。

博士ははじめの著書で当然の対比から勝海舟を批判して「老獪の才人也」としたことに対し、徳富蘇峰が論難、揶揄し、

（このごろは、世間往々反海舟熱を煽り、特に小栗上野介などを持ち出して、かれこれ対照する人もある。されど勝は勝であり小栗は小栗である。小栗が偉いにせよ、偉からざるにせよ、勝その人の価値になにも関係はない。……）

と、アテこするということがあった。博士は前著でとくに、勝が小栗の死後、目して（ただ徳川氏一点張りにして、大局の明なし）と評し、また晩年に自家宣伝をこ

とした心事の陋劣を突く論旨を展開されたことに対するものであった。

万延遣米使節迎艦ポーハタンに伴った咸臨丸には頼みこんで乗った勝、軍艦奉行木村摂津守の年下であることから、従うことがいやで艦長室を一歩も出なかったという勝。そうした経緯は森田草平氏が近頃「革新」という雑誌に面白く書かれているのをたまたま道山は読んでいる。「煤煙」の森田草平はすでに過去の人と思われたが、エッセーとして興味をひかれた。やはりかれの文学趣味に違いない。蜷川博士とはそのことをお会いした時、話題にすることがあったが、

（いや、あれは一説には勝が軍艦に乗ったことがないので、船酔で艦長室を一歩も出られなかったのだ）

と語られたことを思い出される。

博士は徳富蘇峰氏に真っ向から論駁されている。

（「反海舟熱を煽り」とはなにごとか）

（「特に小栗上野介などを持ち出して」とはなにごとか、ことさら「などを持ち出して」とは……）

明らかに薩長を本位とする、権力阿党、阿世の不公平の論である、と痛論して止まなかった。

勝を目して幕末の偉人と論断するならば、その証拠を挙げ来るべし、……

敵側の薩人から見ればまことに都合の良い才人であった。智略も西郷以上であったろう。姦雄の資たる事は同じ形式人物に属する大久保や岩倉には良く理解し得たであろう。然しながら、幕府亡びて後の徳川方の正直な人から見れば、忌むべき人物であった。敵の為になる不都合な老獪人であった。若し夫れ天より神が眺めたならば、一点も賞むべき人物ではなかったらう。而して日本国民として静観すれば、「ああいふ人物は味方としては持ちたくない」といふのが正しいであらう。

なにも勝をムキになってコキおろすことはなかったが、徳富氏の倨傲の姿勢を博士は許せなかったらしい。弟芦花が二度も訣別し、そして和解した兄蘇峰の個性は道山にもそれとなくうけとれるものである。

さらに博士は別に、中村孝也博士の同情的立場をもって書かれた論説にも弁駁をされている。

氏は曰く、「彼は時勢を解してをった、けれども時勢を解していなかった」と、

この論は、美文的であらうけれども、論理的でない。時勢とはなんぞ、若しそれが同一の事柄を云ふならば、解していたと同時に解していなかったと云ふことは、論理として全く不明である。氏の言は小栗を指して「分らず漢」と云ふに同じである。……

「趨勢を知らざりし人」と小栗を見らるるので

あらう。若し夫れであるとせば、氏の言は全く盲評である。

蜷川博士のこれらの駁論はあるいは龍車に向う蟷螂の斧の譬えに似たものと道山には思える。徳富氏にとかくの風評はあるとしても、折から「近世日本国民史」の修史事業をもって知られる老大家であり、中村博士はまた錚々たる史学者であられる。

（先生、いかに小栗贔屓とは言え、これでは失礼ながら少しくカドがたちます）

と思う。蘇峰先生の方は明けて昭和八年、五月十日になって、夫妻で小栗上野展墓のため山門を訪れられるということがあり、その折の見聞を東京日日新聞に寄稿されている。

（記者は上野介と政治的見地を異にした勝海舟翁の門下である）

という文字を発見するのだ。

道山は年の瀬を落ち着きなく慌ただしい時を過ごしながら、これから原保太郎翁を往訪するについて心組みとして、あれこれ知識の整理をしておきたかった。おおつごりまで、寝苦しい幾夜かを経験したことだった。

松のとれない元始祭翌日の一月四日、この日は水曜だったが、意を決して薄明を大宮駅へ向った。手土産は山内の田舎茶を選び携えて行くことにした。いよいよ鎌倉に原氏を訪ねようとするのである。二階堂という地名は五山を尋ねた昔があり、心あたりとして鎌倉宮周辺の、文壇の久米正雄や永井龍雄、小島政二郎といった人々の住む好ましい住宅のたたずまいを想像できるのだった。

横須賀線では道山はむしろ終着の横須賀へ昨年は何度か出かけることがあった。海軍関係の将星に近づき、とくに工廠は歴代長官に昵懇を得ていたためだ。

ところで、その横須賀ではいまを遡る大正四年九月二十七日、横須賀開港五十周年式典があり、

（まさに不朽に伝ふべき所なり）

当時の工廠長黒井悌次郎海軍中将は賛辞を述べ小栗上野介の国家的功績を認め、横須賀海軍工廠の始祖とし、横須賀公園に小栗ならびにフランス人技師長ウェルニー、二人の小胸像が建てられたのであった。小栗上野介忠順のはじめてというより、ようやくにして冤雪がれる光輝の日を記録している。二胸像はいまに臨海公園に無事を得ている。この胸像の小栗公は実に良い顔をして見える。

黒井中将はやがて累進して大将になり、普門院の寺域に阿部道山発意による、

「小栗上野介招魂碑」

の大碑石建立に当って徳川家達公爵の染筆を斡旋されている。このことはあとで触れることになろう。

鎌倉へ着いた。駅舎を出ると段かづら道を八幡宮前ま

で歩いてみた。そして質素な蕎麦の店を選び、少し早い食事をとった。よほど早く寺門を出てきたはずだったが、そんな時間だった。

鄙びの中に古都は落ち着きはらっていて、都会の騒音を忘れさせる好ましい町である。

少しでも迷惑をかけないよう、時間を計って訪ないの声をかけるようにしたいと思っていた。

浄妙寺ゆきのバスに乗ればよいと知っていたが、宮前のたまりで人力車を拾い、

「二階堂」

と行先を告げ、念のため原邸という訪問先を口にすると、車夫は知っていた。

「大抵ご在宅でしょう」

と梶棒を上げ、心得て軽快に走りだした。

（原保太郎）

という門表のある家の前に着いた。それはあの返書に認められていたものとまさしく同じ筆跡のものだった。

（ここだ）

生垣が十二、三間、道路に面してあり、かなり奥まって玄関に達する構えである。枯淡なサビ色も好ましく鞍馬石をあしらった延段には水をうってあった。客を迎える心配りが清々しく思えた。それは正月だったからかも知れないのだが、主の心の澄みようを物語り、道山の心をまず和ませた。女中が出てきて取次を待つ間、道山は心に般若心経を唱えて待った。実はその玄関式台からは小窓を通して、離れの建物が見え、そこに人影があってこちらの様子を凝視する気配があった。この人がおそらく保太郎翁その人であろう、と確信できた。

やがて十二畳ほどの離れにさきほどの女中の案内で通された。

「やぁ、やぁやー、お待ちしちょり申した」

と、意外な大声を響かせ立ち上がり招じ入れてくれた。八十余歳とは見えぬ矍鑠たる老人だった。

「わしが原じゃ」

と、言った。道山がこの日に至った突然の手紙、その他心の至らぬ非礼を詫びる間、翁は無言であったが、少しく耳が遠いから、ということですぐ脇の椅子をすすめられた。

「夢のようじゃな」

茶が運ばれ銘々に菓子皿が置かれた。女中の去るのを待って、翁は口をひらいた。

「さよう、夢、でございますな」

陽光の一杯差し入る明るい部屋であった。それは正月というのどかな雰囲気をかもし、道山の訪意、そしてこれからの話柄にかかわらず、あまりにも平和すぎた。

この人の家族はどんな構成であろうか、この離れ座敷にいては気配を知りようがない。どう話を切りだしたものか道山の方に戸惑いがあった。

ふと、床の間に目をうつすと刀が一振、飾られていることに気付いた。

「あれかな、そうあれじゃな」

翁はこちらの視線を追って気づくと立ちあがっていって、刀掛からそれを取り上げた。

「その刀ですか」

「そう、そうなんじゃよ、申し訳ないが、そうじゃよ」

主客がそれ以上のことを言わないで意味が通うことであった。

「そうでしたか、なぜ国家的な功績あるお方をお斬りなされた」

「……」

抜き放った刀は刃渡り三尺はあろうかと見られる業物だった。

「これは無銘の刀じゃ、わしも、無名じゃった、あの場合はさきに斬った者が勝ちだと考えちょった時代じゃった」

この（さきに斬った者が勝ちの時代）という言葉が言いあてているものを道山もいまはうなずけるフシがないではない。

「しかし、総督の命は追捕にあった、高崎、安中、小幡三藩は小栗の抵抗の意志なきを復命している、しかるにあえてあなたは斬られた」

「いや、板垣総督はえらく心配されてのう、なんせ、小栗は大砲をもっちょるちゅう噂だったからのう、わしは板橋の本陣から急行したのだった、大砲は怖い威力の武器じゃ」

いま（小栗）と呼ぶ翁は当時白面の二十二歳、そして斬られた小栗は四十二歳、しかも顕職にあった人だ。指して小栗と呼ぶ不当は非礼とも思えるものだが、いまの翁の身分から言えばふしぎなことではないとも言える。流れ去った時がもたらした現実なのだ。道山としては割り切れない思いを消しがたい。

上野介は権田村隠棲に際してたしかに大砲、ならびに鉄砲二十挺ばかりを運んでいる。門地、格式からいえば当然のことであった。しかもそれは一発の実弾をも伴わぬもの、かれが近代銃砲の研究者として愛着をかけたものであった。

（小栗が大砲さえ持っていかなければ事情が違っていたのではないか）

前記した道山の近づいていた伊藤痴遊氏あたりの言は当っているであろう。痴遊氏は政治講談で知られた人物である。やがて、首相岡田啓介、逓相床次竹二郎などという人々を普門院に導くことになる。

「大砲は一門ではない、二門じゃった、実弾？、それはなかった、小栗は縛しはせぬ、籠で三ノ倉の本陣へ護送しとる、取調べをせぬと云われても、わしらは小吏だ、なに云うてもはじまらんのじゃ」

憮然とした言いかただった。

まさに蜷川博士の言われた下役人とはそうしたものかも知れぬ。

「わしは悪いことをしたとは思わぬ、だが気の毒じゃったと思うとる」

「貴殿の斬首された、公の首は秘かに忠義の家人武笠銀介なる者により奪取され、懇ろに秘葬されていることをご存じか」

「聞いたように思う、埼玉とか、事後格別の詮議はしてはおらんが、そうか貴僧の寺に、そうじゃったか、因縁浅からぬことじゃのう」

「いまだ無銘、なんの刻字もない丸坊主の自然石の下に公は眠っておられる」

「そうか、そうか、葬らいたいのう、手厚くのう」

翁はどうやら足が不自由らしく、それまでの立居に見うけられた。

「おみ足はどうされましたな?」

「これか、馬に蹴られ古傷負うとるのじゃよ、若い時群馬でな、馬め大層暴れよった、わしは見ん事落馬した、ちょっと乗って見たいと思うたことだったのじゃがのう」

「それは権田でのことではありませんか」

「……」

翁はそれには答えなかった。どうやら表情がなぜか苦しげに見えた。

道山は翁が(群馬で)ともらしたことから、それは権田での出来事に相違ないと直感したのだった。

小栗上野介は陸軍奉行として洋式兵制をとり、洋式訓練に熱心の時期があり、フランスから軍馬を購入し、自分もこれに乗ったことはその側近にあった栗本鋤雲の著述にも見えることだった。権田へは騎乗しないまでも当然愛馬を伴ったとみてよい。

蜷川博士の前著「維新前後の政争と小栗上野介の死」に(小栗は駿馬を馭するを好む)という一章がある。興をひく内容で、短いものだから写しておこう。

小栗上野介の登城は普通人の如くに輿に依らず常に乗馬であった。而して小栗上野介の登城せらるる折には、仮令家の中に潜みつつあっても「これは小栗殿の登城也」といふことが其馬の足音にて能く判断し得られた。蓋し小栗上野介は必ず駿馬に跨がり行くを例とし、其馬蹄の響きが、他の馬の夫れとは全く違っていたからである。

武人としての小栗の凛然とした姿がよく伝えられている。これは次のような書き出しにはじまる文中に森山休平なる老人が蜷川少年に語り聞かせたというのである。

蜷川相模守と云ふ一旗本の家は当時神田錦町にあり、小栗上野介の家は駿河台にあった。小栗上野介は毎朝登城する毎に、必ず蜷川家の家臣

共の居住する所謂侍長屋の前を通過するを例とした。

というものである。森山老人は旧蜷川家臣、学識豊かな人で博士の幼児影響を与えたものらしい。

(そうだったのか)

自らは語られたことがないが、博士の生家はこの記述の中で旗本であることを告白しておられる。それとなくであるけれども、矜持を示されている。烈々たる薩長糾弾の論陣の根拠を道山はここに見出したような気がした。

それはさておき、目前の原翁は瞑目して往時を回想でもする様子に見えた。

「もしや、その馬は洋式の鞍をおき、鐙も金物のアラビヤ馬ではありませんでしたか」

「……」

翁はなぜか口を閉じたままそれに答えなかった。

落馬という恥辱に触れられたくない、そして、あるいは勝てるものの傲りに対する慚愧が胸を占めたものであったろうか。それ以上の追及の言葉を道山の方から遠慮して話題を変えた。

「小栗公の墓とされるものは四カ所にある、ご存じだろうか、菩提寺たるわが普門院は首、烏川東善寺に胴、同所高橋村に遺髪、さらに東京雑司が谷霊園のもの、遺族の供養も届かぬ事情をどう思われるか」

「……」

「では大音滝太郎という名をご存じであろう」

「それは知っとる名じゃ」

「明治四年廃藩置県の世になって、大音はいずれかの県令になるにおよび、金二十五両を届け、東善寺に墓を築いたというのは事実か、それは本当か」

「本当だ、あれは私が大音に命じたものだ」

「罪滅ぼしをしようとてか」

「いや、大音の一分を立てようためだ、大音はわしの部下だった、大音は小栗の罪状申渡し届書の名義人だった、寝醒めも悪かろう思ったことじゃった」

「そうだったのか、良心の呵責であろう、罪滅ぼしを思うてであろう」

「なんとでも言い給え、今日のところわしは負けじゃからのう」

「負け、勝ちではありませんぞ、これは人道ですぞ」

「言い給うな、今日は貴僧にひたすら供養を頼もうと思うとったのじゃよ」

「……」

「わかりました、経はいかにもあげ申そう、懺悔をなさりませ」

「なんの懺悔があろう、わしにはそのようなものはない、ただ回向を願うとる」

「わかり申した、ただし、ここでわが普門院三十三世大猷和尚横死をも弔いたい、和尚は小栗公の首級を葬り、間もない五月三十日、何者にか斬殺された」

「それは惨い、何者の仕業であろう」

普門院はこの大猷和尚の時代、七堂伽藍を安政三年烏有に帰していて、その再建に奔走する和尚を助け忠順公は金五十両の寄進をされた記録が寺方に残っている。そうした親交を知るものの手による故なき犯行であったろう。

「それは、なんとも惨ごいことを」

「閣下、惨いと思われますか、ならば小栗はいかがですか」

「もうよかろう、お主も気がすんだであろう、経を頼む」

（一切空）

道山は経を朗々と唱した。持参したカメラに翁を撮り収めた。うまく撮れていれば貴重な資料を加えることになろう、わくわくする気持を秘め薄暮に原家を辞した。

翌十一年十一月二日、翁は急逝した。品川海晏寺、岩倉公墓所の傍らに葬られたという。数え九十歳であった。

道山はこれまでに、「中央仏教」、海軍の「有終」、「中外」、そして、「教学新聞」、また「報知新聞」などにすでに折々寄稿していた。いずれは一本にそれらの稿を纏めたいと念願していた。

昭和九年十一月二十五日の日曜を卜し、「小栗上野介招魂碑」の除幕式が普門院寺内で執り行われた。この日は曇だったが、海軍の将星、ならびに県知事をはじめとする県下の貴賓、建立関係者、壇徒有志に寺域は埋められ、阿部道山一代の晴れを飾った。

海軍大臣代理艦政本部長山本海軍中将、横須賀海軍工廠長村田海軍中将、その前任で十六代様を異称される徳川家達公爵に碑の染筆を斡旋された黒井海軍大将、文部大臣代理橋本宗務課長、竹下海軍大将代理広瀬海軍大佐など、県知事飯沼一省氏などは片隅に小さく写る記念写真が残っている。当主十三代小栗貞雄氏、息又一氏も出席したはずだが、その説明は省かれていて見当もつかない。なんとも不思議と言えるし、不思議ではないとも言える。蜷川博士は請われて陰記の撰文をしているが、ついに出席はしていない。せめてもの反骨ここに見る清々しさと言える。

祝辞も賑やかをきわめ、岡田総理、海軍大臣大角岑生、文部大臣松田源治、外務大臣佐藤尚武など、列席はしないまでも代読されている。

そして、道山を狂喜せしめる、岡田啓介首相、床次逓相等の展墓を実現したのは翌十年六月三十日のことである。前夜から警戒の警察官の顔見知りの一人が、

（方丈さん、いよいよ本物になりましたな）

と言ったことであった。

大成山普門院は大宮駅西口から北西約二キロのところにある。「小栗上野介招魂碑」の現状を知りたいと思って尋ねた。

折から彼岸会でもあり、供養に訪れる人足も繁く、寺号を刻む見事な御影の石柱を見ながら門内に入った。寺内はまことに整然として、正面に本堂、左に鍾楼があり、右手は客殿らしい。植栽も見事に手入れが行き届いて見受けられた。

門内すぐ左手にテントを張り花を売る出店があり、綿飴をひさぐ屋台が一方には引き入れられて、商いをしているという光景が見られた。花売りの娘の方は地元の出店であろうから、碑の在り場所を聞くと、さぁ、ということであったが、なんのことはないテントの背後、塀に添う駐車場の広場を前面にして、振りかえる位置にそれはあった。

（なんだここじゃないの）

左から水雷、招魂碑、前面に大砲、右に碇という配列は創建当時の写真に見るものと異なり、場所も杉木立を背に基壇の上に仰ぎ見る体に聳えたはずのものが、平坦な地上に移されて印象を全く違えたものになっている。

寺側の東側を限りかなりの敷地を割いて幼稚園も経営される現在である。あるいはこれも当然すぎる変容かも知れないのだった。

気づいて見ると、ことさらなんらの案内も表示もない現状である。鉄柵に隔てられ背後に回ることはできない。したがって蜷川新博士の陰記は読みたくも不可能であった。道山がかって下付を誇りとした、水雷、碇、砲のすべてはともあれ無事であった。なぜか銀色のペンキを塗られて軽薄を呈し、鉄の地肌の重厚を覆っていた。ともかく無事であった。傍らに海軍省という小石柱が忘れ去られまいとするかのように、ポツンと建てられているのが認められた。

脇門から墓域に入った。「大宮市指定史跡小栗忠政一族之墓」として区画された一角がある。元和二年九月十八日に没した始祖忠政を初めとする墓石が並んでいる。刻字はほとんど読み取りがたいものが多い。ここにも上野介についてはなんら説明する表示がない。丸い自然石のものが一基あり、まさしく、これこそすでに前記したことだが、かって現職の岡田啓介首相も副総理格の床次逓相を帯同し礼拝した往時のある墓石なのだ。昭和十年六月三十日、道山一代の光栄に輝いた蒸し暑い日の記録だ。その折の写真にも見えるものだから、すぐそれと分かった。

中里介山氏がぶらり、この寺を訪れたのはさらに翌年だった。同氏の個人雑誌「峠」第六号にその折の印象が書き残されている。

昭和十一年四月二十六日
盗まれた小自動車の復帰試運転を兼ねて、大宮方面へドライブの途中与野と大宮の間で一小栗上野介首塚、普門院」とある標柱を認め帰途これをとぶらふ。徳川家達公筆。蜷川新博士文章の大石碑がある。海軍省寄贈の武器がある。皆、最近この人を弔ふ為の建設と見受けられる。祖先小栗又一（忠政）をはじめ小栗家代々の墓地がある。上野介の墓は自然石である。

介山氏はねんごろに墓を弔った後、庫裏に侵入したとあり、道山に会うのだが、その応対はかなりぶっきらぼうなものであったとし、名刺をもとめられ差し出すと急に態度を変え招じ入れられたことを書いている。道山の人物の一面を写すものに思える。

記事になお他をひろおうとすれば寺域三町歩という広大さであろう。そして、なにより門前に首塚の表示があったという事実を知らねばならない。

この年はあの二・二六事件があり、道山はショックをうけていた。岡田首相はかろうじて難を免かれたが、道山に親しく好意を示して、斡旋を惜しまなかった松尾伝蔵大佐が身代わりとして亡くなっていた。

去りがたい気持を持って寺門を振り返ると、右手にさやかな標柱があり、単に県文化財指定の絵画を表示する文字を読み取れた。ついに碑石を除いては小栗上野介忠順由縁の寺であることを明示するものはなに一つないまことに寂しい現状を知った。せめてものこと、小栗氏一族の墓に誰か末裔の詣でがあり、卒塔婆の真新しいものが立てられていたことは慰めである。

阿部道山がはじめて烏川の畔に立ったのは昭和十四年、しかも元日のことであった。それまでも、高崎を通ることはあってもつい果たし得なかった懸案である。原保太郎翁を訪ねたのも正月だったが、寺方の宗務は仏事、雑務をふくめて案外多忙なのである。せめて正月だけは解放されるという事情によるのであった。

高崎に入る前に列車は鉄橋を渡る。これが烏川である。右に赤城、左に榛名、妙義の山並が見えてくる。

権田へは長井行のバスに乗ればいいと教えられていた。江戸から小栗上野介ら主従が徒歩きで大宮の普門院に立寄り大猷和尚との訣れを惜しみ、ここまで来るには大砲を曳いておそらく三日は要したであろう。権田は草津へぬける山里である。

権田まではどのくらいかかるかと聞くと、バスの運転手は、

「さぁ、二時間半かね」

と言う。心細い答えだった。山道を八里余、バスは西へ西へ走りつづけた。同乗客は兵隊が多かった。野線帰りらしい会話である。正月のわずかな休暇を家郷で過ごそうというものであるらしい。非常時という実感に身をつまされるようであった。

「それなら三の倉で降りればいい、小栗さんは河原で斬られなすった、碑ですか、あります、あります、二、三年前大水で流され、昨年新しい堤を作る工事の時、発見されて元の所に建てられています」

「ほう、そうでしたか」

道山の訪問は時を得たようである。

『偉人小栗上野介罪なくして茲に斬らる』

碑は堤の下に建っていた。蜷川新の筆である。基壇の上に丈余、濃緑の自然石に文字を刻まれ聳えていた。鬼哭啾々たる想いが阿部道山の胸を占めた。

（この碑には博士の想いがこめられている）

と思った。堤の上に立つと、河水はほとんど枯れているように見え、荒々しい石塊の河原が眺められた。

（とうとうここへ来た）

そして、「小栗上野介斬首の地」という峻烈な文字を標柱に読むことができる。

道山は豁然としてなにか拓ける想いを味わった。

東善寺をこれから訪ねたいと思っていた。

「海軍の先駆者　小栗上野介正伝」という阿部道山の労著は昭和十六年十月という大戦前夜、海軍水交社内、有終会から発行された。戦意高揚に資するものという見地に立つ刊行であった。ともあれ「正伝」はいささか過大の称に思われる。

（六二・三・三一）

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

老漢の系譜（二）

山口健二

私が子供の頃、桂家に一人、所謂道にはずれた男が、祖母加寿・桂尚次の弟の中にあって、放火、窃盗を重ね、生涯の殆んどを刑務所で過し、晩年、刑を終えた時、身元の保証を引受ける者がなく、ついに私の母らくに保証人の役はどうかと、裁判所から照会があったことを、かすかに記憶している。勿論それは亡父競の反対があったのであろう、実現はしなかったし、この男がどうなったか、どの様な最後を遂げたかは、私は知らない。只、昨今、中国残留孤児と云われる人々が、卍同人、金子正義さんの描く「ハイラル挽歌」にある無惨な敗戦と混乱の中で、親子兄弟姉妹離散の末、四十年も経って、日本に肉親を求め、両親共に既に墓石の下に在ることを知り、その墓前で狂気の様に泣き、ついに精神に異状を呈するに至ったという出来事を、テレビの画面に見て、涙が止まらぬどころか、しのんでも、しのんでも声をあげて泣けて致し方ないことがあった。余り悲しいので、世の中には、こんな親子の心の関係もあるんだぞと、この中国残留孤児の、のぞみ悲しみとは全く正反対の親子関係を想定して、卍三号に「陽の当らない風景」という短かいものを書いてみたことがあった。そこに出て来る庫三なる人物が、どんな人物で、佐竹佐一郎氏の何番目の叔父に、又は伯父に当るのであるか、祖母加寿の、従って桂尚次の何番目の弟であったかも知らないが、多分こんな具合にして、俗に云う道にはずれたものになって行ったのであろうと、全く想像で、一人の陽に当らない男を描いてみたのである。私自身としては、可成り思い切り智恵をしぼって書いたつもりであったが、合評会と云う所では、集った人々のほめ言葉は聞かれなかった。もう四年経っている。当時をしのぶ気分で卍三号を開いてみると、「思いっ切り想像力を働かせて読む人をだましてみたいと思って描いた」と云う私の自評の文句に続いて、大和禎人さんの「仲々だまされやしないよ」と言う批評

の言葉が、余白に書きとめられているから、多分そこで駄作として葬られたのであろう。又ある友人の批評に、「仕立屋銀次と並べて公卿小僧なんて主人公が出て来るから、余程大悪党かと思って読んでいったら、公卿小僧なんて、ホンの鼠賊じゃないの」と云うのもあった。要するに何人にも大した作品ではないと読み捨てられて了っている。それはそれでいい。ただその公卿小僧こと庫三という小説中の人物が、公卿を先祖に持ち、兄弟姉妹が多いので、幼児の折、里子に出され、徴兵検査で、己れに本当の親があることを知って、その親に会いに行き、「そんなものは知らない」と実の母親に突き離され、その家に放火するのが、道にはずれる切っ掛けになり、一生刑務所暮しをすると云う筋がきにしたのであるが、その庫三と云う名は、小説中に私が勝手に名づけたのだ。桂ハルヨの、本当の叔父庫三に名前が符合しているなんて、だからハルヨの口から「それじゃアタシを庫三叔父と同じだと言うのネ」と言われては、ギョッとしないわけにはいかない。本名が、偶然とは言い乍ら、私が小説中に勝手につけた主人公の名前と一致していたのである。これは、どう云うことであろうか。私は食卓の丸膳に一木酒どっくりを家妻につけさせ、グビリ、グビリと音立てて腹の中に酒を流し込み、から景気をつけながら言った。

「庫三叔父さんなんてボク知りませんよ。アンタにそんな叔父さんいたんですか、人のものをだまって自分のものにしてしまうって男が」

これは可成り嫌味な言い方であった。私としては、精一杯なはぐらかせ方ではあったが。かの女は、ッと立ってびしゃっと音立てて破れ障子をあけたてして履き物もつっかけるようにして出て行った。家妻は、台所に暗くうずくまり、音も立てずに、事の成りゆきに耳すましながら、ごそごそ次の酒徳利を用意している気配であった。そこには、生活の望みのかけらもない貧乏が漂っていた。〃ハルヨだ、ハルヨにちがいない、だが何故、かの女が自分の叔父に名代のぬす人がいることを知っているのか、そしてその「叔父とアタシを同じだと云うのネ」と私に向って口を尖らせたのであろうか。私はぞっと冷たいものが背筋に走るのを感じていた。

酒を腹の中へ流し込んだ勢いで、私は神田署のドアを開けていた。私はどう云うわけか警察と云う所と警官がきらいであった。七十余才の老漢になって、このどういうわけかと云う問に答えをあたえようとすると、いろいろな理由が思い浮ぶ。子供の頃、それは小学校へ入る前のことであるが、亡父競は、裁判所の近くに住んでいた。それは町はずれで、その田舎町でもひときわ静かな一角で、附近には、判事や検事の公舎が黒い塀にかこまれて

人気なく沈まりかえっていた。一日に何度か、徳利編み笠をかむり、手錠をかけられた男や女が、警官の服装をした男に引き立てられる恰好で出入りした。母親は〝あの人たちは暗い所へ入れられるんだよ〟と私に教えた。やがて二度目の住居の近くには、その暗い所である監獄があった、その白い長い壁の外には畠が広がり、そこには折にふれ、色あせた朱や青の服を着た男たちが畠仕事をしており、ピストルを腰につるした警官の服装をした男たちが番をしていた。白い壁に囲まれた中はわからなかったが、真中のあたりに高い塔があり、子供たちはそこで死刑が行なわれるんだとひそかに理解していた。又小学校に入るようになってからは、学校の通り一ッへだてて、市役所と警察署が並んでいた。そこには町の人たちに対して、何故か威丈高に威張る空気が流れていると、子供ながら感じていた。その頃は、勿論、警官の種類はわからなかったが、そう云う人たちに嫌悪と恐れを感じていた。暗い所へ入れられることにも恐れと嫌悪の気持ちがあった。だが未だ人間が人間によって縛られ、暗い所へ入れられることのみじめさを本当に感じていたわけではない。その様なことは、断じてあってはならないと心底から思うようになったのは、それから拾数年の後に、旧制高等学校の生徒になって、「赤」といわれて警察につながれて、無茶苦茶で無智まる出しの訊問の挙句〝暗い所〟に入れられる始末になったり、喧嘩でモンキーハウスこと、日本流で豚箱にぶちこまれて、世の中のどうにもならぬ最底辺の人々と話をする機会が重なってからである。

もうこうなっては、行くところまで行かねばならぬ。ハルヨに思い知らせねばならぬ。少年の頃の或る種のかの女に対する思いが、底知れない憎しみに変っていたのだ。貧しい、まずしい、他を許せない心になっていたのだ。

「こいつぁ面倒だな、家族、親族中の窃盗だからな」

肩巾がっちり、人相は、窃盗犯をしのぐと思われる警官が言った。その頃の警官は、目がまわる程多い犯罪件数の割に、進駐軍や、独立を標榜したばかりの韓国人にはさまれて、今日の警察とは勿論、戦前、戦中の警察とも質のちがうものであった。中味は、戦前戦中の警察官の中から高位にある者には若干の戦争犯罪に加えられたものもあったろうが、大低は戦前戦中そのままであり、日本人に対しては強高腰であったが、移り変ってゆく世相や法令の改変に右往左往の体たらくであった。だから私が持ち込んだ件についてなんか、持ち込んだ私には、職業的になっている疑いの目をジロリと向けながら、メモをとる手続きさえ省略していた。〝こりゃ警察は駄目だ、自分でやるよりしょうがないぞ〟私は思いきめて警察署のドアを足で蹴って街へ出ていた。その足で私は、代々木上原と云う所にある桂しげが秋元節朗と一緒に住み、ハルヨが身を寄せている家を訪ねた。お茶の水から、

新宿に出て、そこで小田急線に乗りかえるのである。その家は子供の頃祖母に連れられて一度行ったことがあるだけで、当時、畠の中に建てたばかりの家で、祖母の母親ともう一人の老婆が住んでいた記憶があるだけであった。その老婆が、祖母加寿や、桂尚次、桂庫三の母桂あいであり、桂尚次と共謀で桂家の全財産を使い果たして行った人であったのだ。今日では、長煙管の煙草を私にすすめて「ボクすいません」と答えると「今の若い者は感心だね」とほめられたことを朧ろに思い出すことが出来るだけである。私は小学校三年生であった。だから桂家では、大正十二年の大震火災で焼けて、新しく建てなおしたものであったにちがいない。よくぞそんな朧ろな記憶が、私をその家へ導いてくれたものだ。〝ハルヨを罪人にして、うむを言わさず、自分の下に押えこんでやろう〟とする悪鬼の気合と、結婚間もない家妻に男の力を示そうとする貧しい意地がうごめいていたのだ。

新宿には、四十年後の今日でも、かすかにその残骸をとどめているが、尾津某と云う荒れん坊が、もう五十を越えてはいたが、自分の肺結核におかされている命に見切りをつけた捨て鉢な生き方が、敗戦の荒廃の中で、花ひらいたのであろうが、新宿一帯のやくざの親分として君臨して、闇市場を支配していた頃であった。線路添いにぼろ市、飲み屋台、食い物屋台が軒をつらねていた。そのぼろ市には、食い物と交換されたものであろうか、盗品であろうか、着物るいが、ぶらんこで、ずらりと干される形で店々にぶらさがっていた。〝ハルヨは上原へ帰る前に、こういう闇市場で金に換えたかも知れん〟私は一軒、一軒、店に番をしている人相の悪い男をしのぐ人相になって、着物の柄についてのかすかな見覚えを頼りに、たずね歩いた。かすかな見覚えと云うのは、何者かに押入れから抜きとられる前に、その着物を、数回質屋に出し入れした覚えがあったからだ。

二度、人に尋ねるだけで、その家を見つけることが出来た。も早や畠の中ではなく、戦火からのがれることの出来た郊外にはびっしり家が建て込んで、その家々の狭間にあった。秋元節朗の妻になっていた宮庭女官の千恵こととしげ子が、なつかしさを顔一杯にして出て来た。何十年ぶりである。間に戦争がはさまっている。戦争を生き残った親族、友人、知人は皆々、ヒシと抱き合って、命を拾ったことを喜び合うのが、並な人情と云うものであったが、私はしげ子の妹のハルヨを詰問しようとしているのだから、性急にも冷然と言った。

「ハルヨさんに会わして下さい。どうも変なことがあるんです」

私の全神経は、しげ子の表情に走る怪しい変化を見のがすまいと、びんと張りつめていたのだ。折角、全身で懐かしさを示そうとしたしげ子は、険しくなっている私の顔に、なつかしさのやり場を失って、うろたえ気味に

言った。

「チョッと、ちょっと待って下さいナ」

かの女は、この思いもよらない訪問者の目当てが、自分ではなくて妹のハルヨであることに鼻白みを背に残しながら引っこんだ。私の張りつめた神経も、ハルヨが私のところから持ち出した着物を、此の家まで持ち帰って、しげ子にそれと気付かれているらしい気配は、かの女のどこからもさぐり出せなかった。私は古畳の上に投げ出されている火の気のない瀬戸火鉢のふちをまさぐりながらハルヨの現われるのを待った。

「何のご用」

ハルヨは、入って来て、投げやりに坐るなり尻上りに言った。その口辺には、あから様に拒絶と警戒の表情が漂っていた。短刀直入にゆくより他に方法はない。そこにはハルヨに対するかすかな親愛の甘さと、復員軍人くずれの短絡さがあった。

「ハルヨさん、先日あなたに言った着物、返して下さいよ、何んにもこれ以上言わないから……」

「何んてったって、アタシの知らないことですよ」

「だって自分の着物ぬすまれたって話、女房にしたでしょ、そのやられ方と、私たちのやられ方がそっくりなんだ、どう云うことですか、あなたは少なくとも何か知っている筈だ」

私の家妻は押入れから着物がぬきとられる三日程前に、ハルヨが自分の着物を、矢張り盗まれていて、その時、別間の窓があけられていたと云う話を私にしている。〃俺の様な貧乏暮しの家の押入れから、然も重ねてある着物の中からぬきとってゆくと云う思いやりある盗人が、果して外から入ることがあるだろうか。私の口調には訊問の気味が高まり、かの女の目尻は又又段に上って行った。〃これじゃ、この女にどんなに頼んでも無駄だ。他の方法でうごきが取れない様にする以外にないぞ〃

「それじゃ、ボクの思う通りに、必ず見つけてみせますよ。いいですね」

かの女が、私の家から飛び出した勢いと恰好も同じく、私はしげ子の家を飛び出していた。

命を一度拾うと、ひどく憶病になる。戦争の中で、ヒョンなことで命を拾ってメリケン軍の捕虜になった日本兵が、土下座させられて、玩ばされている写真や、日本軍の将校が、その肩章をつけたままメリケンの飛行機に同乗させられて、フィリピンの上空を飛びながら、日本軍陣地の位置を案内させられている写真を、敗戦後、島に上陸して来たメリケン兵から貰ったニューズ・ウィクリーや、リーダース・ダイジェストの中に発見して、〃俺も、こんなものかなあ〃と何か吐き気に似た感じで見入ったことが、思い出されるのだが、私もその様に憶病

になって日本へ復員して来たのである。その上男は、妻と云うものを持っては更に憶病になる。自分の命を保ちたい気が先に立って、独り身の時の大胆さと云うか、命知らずな向っ気が消滅するものだ。人の心の荒れすさんだ新宿の街を、私は肩を窄めて歩いていた。それはどれ程貧しく、みじめな姿であったことだろう。この様な気持を叱咤するには、酒の力を借りるのが近路だ。私は日本に帰ってからも滅多に酒を口にすることはなかった。それは安心して呑める酒は、金の都合で手に入らなかったし、闇に出廻る酒の類は、石油の匂いがするアルコホールで、数日前にも織田作之助ら何名かの文士たちが、それで命をとられた記事が新聞にあった。〇町〇丁目〇番地こと神田神保町三番地の裏長屋でハルヨを前にして飲んだ酒は、家妻が親から貰った戦争中の国債証券を捨て値で売り払って買った酒らしく、そこにも貧しさがからみついていた。ッと私は新宿の駅の一角にある屋台に首をつっこみ「酒くれ」と力なく言った。

「ホイキタ、新宿イッチ、キッつい酒だよ、ホイ」

屋台のアンチャンは、歌う調子でコップになみなみ水様の呑み物をついで、ガチンと屋台の台の上においた。

「これ……目つぶれねぇだろうな」

私はつまらない念の押し方をした。八百屋や魚屋の店で〃これ新しいでしょうネ〃と愚問を発する女共と同然な愚問だなと自分でも思った。

「つぶれるヤツはつぶれるよ、つぶれねえヤツはつぶれねぇや」

アンチャンは私の愚問を一蹴して、屋台の前に飛び出し、前を行き来する人の群れに向って、呼びこみを繰り返した。

「新宿イッチ、キッつい酒だ。生きのいいやつはイッペイやってけ！」

このアンチャンも多分は復員兵隊くずれであろう。この程度の荒らくれ者を兵士として、軍律の蔭にかくれて部下と云う名で、敬礼させて来た自れをふと懐しむ思いが心の底をよぎった。〃俺はどうだ。インチキ酒を売りまくる気合もなく、女房の着物の行方をたずねあぐねて、アルコホールの力を借りて、手前を誤魔化そうとしている。意久地なしめ！〃私はその水を三杯無理に腹に流し込んで蹌踉となっていった。

その翌朝は、目がさめても、厚い目やにが、目ぶたにはりつめて、目を開くことも出来ない始末、〃これだな、文士連がやられたメチルというやつは〃でも心臓はしっかり動いている。誰でも若い時には、命を軽んじても事なくその危期を乗り越えたと云う体験を持つものである。老漠私も、その様な危期を何度も、ある時は、それと知り乍ら、又ある時は無意識のうちに乗りこえて生き残って来たことを〃不思議に命ながらえて〃と感慨深く思い返してみるのだが、その間に、目標をつけて〃命を張っ

た〃姿勢はついになかったことを告白しなければならないのは何とも心残りなことだ。

さて、ハルヨが代々木上原の姉夫婦の家に帰りつくまでに立ち寄りそうな闇市場をあさりつくして〃ない、ないぞ、これじゃ別の手を考えにゃなるまい、そうだ、子供に当ってみることだ。子供は母親の行動をながめて覚えていることがある〃この考えは、天来の閃きとなって浮んだ。浮ぶと、もうその考えに捕われる。意地の悪いやり方だなあと心の底につぶやく声もあったが、何か探偵めいた気分にもなって、母ハルヨと私の心の角逐など露知らずに、何時もの様に神保町一丁目三番地の裏長屋に来たハルヨの子供を近くの錦華公園の土手に連れ出した。三番目の子供は、未だ赤児だからハルヨが連れてパーマネント屋へ行ったのであろう。上二人は、母親の留守中に、毎日のように来ていた私の住居にふらりと来たのであろう。家妻が、かれらが来るたびに、少しばかりの駄菓子、煎餅のたぐいをあたえていたからである。公園の土手からは、焼のが原東京の一部が見おろされ、夏も過ぎ去って、土手の草も黄ばんでいた。

「ボクが、これから聞くことにゃ、ありのまま答えてくれよナ。キミのお母さん、うちへ二三枚着物持って帰ったことあるだろ」

私は兄の方浩一郎を、正面に据えて言った。妹の方は、そばにボンヤリしゃがんで淋し気であった。兄六才妹三才であった。

容易に想像出来るところだ。中国から引揚げの混乱中必死の先き争そいの中で、乳のみ児を抱えたハルヨは、狂気のように激しく、この子供等を叱ったり、はげましたりしたことであろう。その大人たちの狂声罵声のさ中で、大人の心を吸みかけて、子供らは何度も、何度も、まわりの大人たちや、自分の母親を恐怖におびえながら、上目づかいに見上げたことであろう。その上目づかいが浩一郎にあった。かれは無言で私を上目でみた。この子供たちから証拠をつかもうとする一途な私のあせりが、子供の心を読む力を奪っていた。〃こりゃ怪しいぞ。やっぱり……〃私の疑いは深まっていった。

二三日後に小野貞ヨシが現われた。かれは祖母加寿の死後も、週に一度は、[illegible]神田神保町一丁目三番地の裏長屋に現われるのだった。それは、ある時は、月額二千円の家賃の取り立てのためであり、又あるときは、私たち夫婦の生活の監視のためであった。何を監視するかと云えば、家主のかれに無断で二階の八畳の部屋を他人に又貸しして利益を得ていやしまいか。又くずれかけた建物のどこかに家主のかれに無断で手を入れるようなことはあるまいか。又自分が祖母加寿をときふせて手に入れた表鈴蘭通りの店一軒に、不法な賃貸関係が出来上ってはいまいか見張るためであり、又ときには、かれの兄貞久との永年に亘る山本家からの持ち出し

し財物返還にかかわる裁判のため、東京地方裁判に出頭した序に立寄ることにしているのであった。持ち出した財物とは、山本鈴之助が買い集めていた書画骨董の類から、家庭用品にまで及んでいた。

私の前に坐るや、かれは、私を窄る口調で言った。

「ケンジ。ハルヨは兎も角として、子供をおどかすのはよくないぞ」

〃ハルヨは兎も角として〃とは何だ。かの女は、私の追求を、小野貞ヨシに訴えるため横浜まで行ったに違いない。その訴えを聞いて、〃ハルヨは兎も角として〃と小野に言わせるのは何故か。かれは若い頃のハルヨの所業を何かと知っているに違いない。そしてその様なことも起り得ると考えているに違いない。又庫三という彼れにとっては叔父に当る男についても、私よりは、もっともっと、いろいろ知っているに違いない。その頃、小野貞ヨシに叔父に当り、ハルヨの父親である桂尚次も零落れるだけ落ちて、女房のえいと一緒に、世話する人があって、埼玉県のさる市の公会堂の住み込み番人になったあげく死んでいた。従って、わが子ハルヨの後ろ楯になって面倒をみることは出来なかったのである。たった一代で、今日で云えば巨億の財を使い果たして野たれ死んだ人間を憐れむより、そこに何か運命的なモノの支配を、かすかにのぞき見る感じである。

「ハァ、子供の方はやめますよ。でもハルヨさんの方はあきらめませんよ」

私は家妻に聞える程に声を大きくしてキッパリ言った。

「ううむ……」小野貞ヨシは暫らく口をつぐんで、それから言った。

「アイツ死んだぞ、線香の一本もあげてやれ」

「アイツって……」

「貞久よ」

私は息を呑む思いではあった。先日、私が外出している間に来て、死後そのまゝに私共夫婦があずかっていた祖母加寿の最後の遺品一行李を、家妻が引っ込み勝ちに制止するのに対して〃手前らの物なんて持って行くか〃と捨て台詞を吐きすてて持ち去ってから未だ十日とは経っていなかった。年も五十代の終り頃であった。

その日の夕景、私は小野貞ヨシのかいてくれた地図を頼りに、貞久叔父叔母の住む家を訪ねた。貞久は父鈴之助との争いの末、鈴之助が西大久保の家を売り払って昔勤当した娘スエ子の家に移り住んだので、女房の実家に身を寄せていたのだ。尤も西大久保の家も、戦争であとかたもなく焼き払われ、女房の実家が焼け残ったのでそこにころげ込む始末になったのであろう。今日それが板橋のどのあたりであったか、どうしても思い出せない。勿論今日では跡形もなかろう。門もあり、玄関もある可成り奥ゆきのある家であった。訪れると叔母が出迎えてくれた。この叔母は、私が未だ小学校三年の頃、母子ぐ

るみ居候をしていた祖父錚之助の家で若奥様であり、私はこの頃の山本家の風景を、卍の九号あたりの〇町〇丁目〇番地に描いている。叔母は私の母らくとは何かと気が合わない仲であることを子供乍ら感づいていた。私の母とは、あととり貞久の嫁と、小姑で居候の身分の者との間柄であったのだ。それでも私はこの叔母にはさして悪い印象を持ってはいなかった。若いきれいな女であったからであろうか。

貞久の骨は、玄関を上ったすぐ左側の八畳程の部屋の正面に、密柑箱様の箱の上にのせられ、二三の供え物が置かれているだけであった。未だ敗戦直後のことで、この頃の死者には祭壇などは考えられもしなかったのである。

「ケンジさんか、線香ぐらいあげに来なかったら、どうしてやろうかと思っていたんだ」伜の貞幹が父の死を悲しむと云う表情は少しもなく、ほがらかに言った。かれは北海道に行っている間に出来た女を勝手に連れ帰って、矢張り神田神保町の本屋街のとある小路の呑み屋の二階に住まわせていた。何度か私の住む裏長屋に来たこともあったが、父貞久と小野貞ヨシとの争いの中にあって、小野を避けている風であり、父貞久共に、表通りの本屋から「坪売り」という方式で、地代、家賃をとって暮している風で、そう云う暮し方に何か心の許せないところがあって、私はこの従弟を遠ざけていた。型の様に密柑箱様の箱の上にある骨に線香をあげている私の後ろに、叔母と貞幹に加わって誰かわからぬが、風のように、音をしのばせて坐る者があった。私はそれにはかまわず、線香を上げ終ると、さらりと玄関に出て靴をはいていた。送り出して坐った叔母に振りかえって、複雑な思いをこめて挨拶をしようとした私をハッとさせたのは、冷然と私の動作にじっと目を据えたハルヨの佇像がそこにあったことであった。私は叔母に対する挨拶を省いて、ハルヨの凝視を振り払うようにして足早やに立ち去ったのである。〃代々木上原の姉の家ではなく、今度はこんなところにころげ込んでいるのかな〃

戦争は、そして敗戦は、計数や統計などというものを踏みにじる人間の不幸せな死に方を結果している。私の父競はまだ敗戦を知らないうちではあったが、私が一兵卒で兵役という制度のもとで、それまで経験したことのない人間のつながりの中に喘いでいる時に死んだ。兄弟は、出征と云うことで支那国とビルマ国に在った。山本錚之助は、長男貞久との争いを逃れて、かって勘当した娘スエ子のところに、老耄の身を横たえていたが、東京空襲で、その家もやかれ、最後は、焼け残った寺院に附属している洞窟の中で死んだ。その妻加寿は〇町〇丁目〇番地と神田神保町一丁目三番地という夫錚之助の父

祖の屋敷のあとに残された裏長屋で、苦痛と屈辱の中に死んだ。狂人利貞は加寿に先立って、その家で死に、ついで貞久は妻の実家に死に、小野貞ヨシも、それに続いて横浜の焼けあとに建てた小屋の中で、晩酌中、ズルズルと足の方から滑りこむ姿で息絶えた。かれの妻ウマは矢張り、〇町〇丁目〇番地の中で、加寿と同居しているところが描かれているが、夫貞ヨシに先立って死んでいる。この叔父に女の子と男の子があったが、女の子は横浜空襲の業火の中に死に、男の子は、その頃は、支那国の戦場に在って未復員であった。夫貞久をあの世へ送った叔母も、そこに、私が焼香に訪れた時にころげ込んでいたハルヨも死んだ。病因はガンであったと、風便は私に伝えた。秋元節朗も死んで、その時私は母らくにたのまれて代理で弔意を表しに、代々木上原の秋元しげこと千恵さんの家を訪れている。いつまでも生き残るかに見えた母らくも、ついに四年前に、「この頃は、昔の人が生きていないので淋しい」ともらしながら死んだ。九十三才であった。母らくの妹のスエ子も夫を二度、三度とりかえて生き残っていたが、姉のらくより先に死んだ。山本家最後の人であった従弟貞幹は行方不明で生死を知らぬ。その様な、冬の景色の中で、老漢私は七十という年を越え、さてあたりを見まわして、索然とした灰色の冬空からいつの間にか霏々と降り初めた雪を眺めながら、老妻にきいた。

「四十年前、ハルヨがお前の着物を抜きとったと云うことを覚えてるか」

「覚えていますよ」

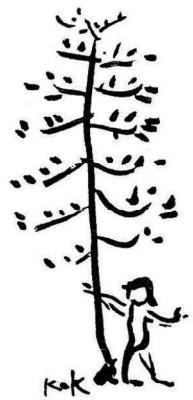
「あれ本当にハルヨがやったんかな」

「ソンナ事わかりませんよ」

「だって、お前はハルヨらしいと俺に言ったんだぞ」

私は、それ以上、お互に冬景色の中に在る老妻を問いつめる気力を失っていた。

（三月二十日洗筆）



ハイラル挽歌（七）

第二章　開嶺の崩壊

金子正義

（十）

日本軍は無条件降伏したものと、日本軍の布陣内に入ったソ連軍は、戦争の終結を知らない日本軍の銃火を浴びて、ヤポンスキーの裏切りと憤激して報復の砲撃を加えたり、攻撃を再開する部隊もあった。中でも開嶺山狭を突破して開嶺駅北方から日本軍の東側山陣の後方に廻り込んだソ連軍は、戦車を中心とする精鋭部隊で、日本軍と見れば容赦しなかった。

速射砲の飯塚中隊は、十三日午後一〇二七高地に真向から押し寄せたソ連軍を撃退し、ソ連軍の後方迂回を予想して砲座を南西へ向けて待ち構えたが、ソ連軍の進攻以来の砲撃戦で全弾を撃ち尽し、補給が間に合わず、兵員も半数になっていた。十六日朝、山陣南辺にソ連軍が浸透したとの報で山を降りて斬込みをかけようと出撃すると、強力な火力を持ったソ連軍と遭遇した、山の斜面を利用して夕刻から翌十七日昼頃迄敢闘したが、北方から急斜面を登って来た戦車隊と、関嶺東側の道路を北進して来た機甲部隊に挟撃されて、飯塚中尉以下全員悉く戦車に蹂躙されて戦死した。

野砲大隊の中山隊は、激戦中の十三日、軍の作戦命令で急拠野砲を斉斉哈爾に移すことになり、その先遣隊となって開嶺駅迄行ったが、列車が無く付近の山に入って、ソ連軍を待ち構え、予想通り進攻して来たソ連戦車隊を邀撃して迫撃砲を撃ち尽し、短剣突撃を期していたが、その後ソ連軍の進路が変って雑木林に取り残された儘であった。

雑木林の丘から真下の街道が良く見え、ソ連軍の動きが良く判った。十六日正午、日本軍とソ連軍の軍使が道路上を白旗を掲げて行き来しているのも望見された。

何事かと訝ったが、まさか停戦交渉とは夢に思わず、

負傷兵の交換交渉だろうと思っていた。

十七日夕刻になって大隊本部から伝令がやって来た。中山隊が十四日に盛んにソ連軍戦車に迫撃砲を撃ち込んでいるのを知った野田野砲大隊長は、疾うに中山隊は、迫撃砲を運んで斉斉哈爾に向ったと思っていたので、

「命令違反をやりおって！」

と激怒していたが、野砲大隊そのものが、起重機が来ないので移動出来ず、砲弾は撃ち尽して進退窮まっていたので、

「中山め、やり居るわ」

と内心満足していたので、停戦を一早く知らせたのだった。伝令は、

「日本軍は降伏した、兵器はその儘にして直ぐ山を降りて博克図に集結せよ」

と言った。傍で聞いた伊東伍長は、憤懣やるかたも無い思いで

「隊長殿、むざむざ砲を敵に渡し度くありません」

と言って兵隊達と迫撃砲を分解して地中に埋めてから、闇の街道に下った。

第三機関銃隊は、第三大隊の山陣の南端に位置して、連隊本部に通ずる道路のある鞍部を隔てて、南にある第一大隊の山陣と向い合っていた。

第三機銃の各分隊は百米程の間隔で陣を構えていた。

ソ連進攻当初は山陣の北方で盛んに砲声がしたが、第三機銃正面にはソ連軍は出現せず、砲火を交えていなかった。

十七日朝は妙に静まり返っていたが、陣地から四粁程東に突き出ている草山にある九中隊の方向で、重油の燃え上るような黒煙が盛んに昇っていた。

第三機銃中央の井上分隊には時折銃弾の揆ねる音が伝わって来る。井上軍曹は火災でも起きているのだろうと思ったが、

「どうも可怪しいな、あの陣地には黒煙があんなに昇るような可燃物が有る筈がないがなア」

と兵隊達と話していると、中隊本部から伝令の岩野一等兵が馬を飛ばして来て、

「日本軍は降伏した、各分隊は兵器弾薬をその儘にして瀬川分隊の陣地に集合せよ、十二時が停戦時限なので遅れると撃たれるぞ」

と大声で各分隊ごとに伝えて行った。

瀬川分隊の位置は井上分隊から六粁程離れていたが、興安街道と鉄道がトンネルに入る開嶺峠を抑える要衝にあって、直ぐ下に中隊本部があり連隊本部にも近く、部隊を集結するには都合が良かった。

井上軍曹にはどうも合点がいかなかった、日本軍が降伏するなど考えられなかった、ノモンハンの時と同じように停戦協定が行なわれるとしても、兵器弾薬をその儘

にしておけとは何んとも理解できなかった、暫く考え込んでいたが、

「えエ！　酒でも呑め」

と酒好きの井上軍曹は地下壕から一升瓶を持ち出して、

「おうい、分隊全員飯盒を持って集合」

と叫んだ、七名の分隊員が揃うと、

「今から陣をその儘にして中隊本部に集合する、残念乍ら戦争は終ったらしい、酒を呑んだら兵器を処分するぞオ」

と言って粉味噌や携帯口糧の鰹節などを嚙って冷酒を廻し飲みをしていると、二百米程離れている高杉分隊が装具をきちんと身につけて下って来た。

「おう、高杉分隊長！引揚げるか、砲はどうした」

と井上軍曹が首を伸ばして訊くと、

「分解して埋めて来た、俺達は大隊本部へ集合だ」

と憤然と答えて林の中に消えた。

今迄、岩野一等兵の伝えた日本軍の降伏を信じ難ねていたが、高杉分隊が大隊本部の命令で撤退するなら、もう間違い無いと思ったが何んとも遣り切れない思いで、

「ようし、今から兵器を分解するぞ」

と命じて、兵隊達と一緒に七瓩の急造爆雷の信管を外し、重機の実包は箱から投げ出して壕の水溜りの中へ投げ込んだ。重機は銃座から引摺り下して分解し、本体は地中に埋め、小さな捻子や部分品は草叢に投げ込んだ。

兵器は軍人の魂と、毎日一点の曇りも無いように磨き上げていたので、兵隊達は腹の煮え繰り返る思いで誰もが黙りこくって作業していた。井上軍曹は兵隊達の兵器処分を苦り切った顔で見据え乍ら冷酒を煽っていた。

「ノモンハンの時は重機を埋めたり出したりだったな、また掘り出せなんてご免だぞ、畜生め、九中隊の連中も腹に据え兼ねて陣地に火をかけたんだな」

と草山方面の黒煙を眺めた、もう大分衰えて薄墨色に棚引いていた。

「俺の方もやるかッ」

と、重機を処分してから、九九式小銃二丁、各個に二個の手榴弾を自決用に持たせると、毛布にスピンドル油罐をブチあけて点火すると地下壕の中に落し込んだ。

陣地を離れて暫くして振返ると山陣は煙幕を焚いたように煙っていた。

三百米程急坂を降ってなだらかな疎林を行くと、先行の鈴木上等兵が林の中を駈け戻って、伏せろと合図してパッと草叢に伏せた。井上軍曹が躙り寄って

「どうした」

と鈴木上等兵の指す方向を見渡した。分隊の伏せた疎林の向うは、ずうと斜面が低く拡がって、その五十米程先は下草の茂った唐松林の窪地であった。更にその先は台地に競り上って疎らな唐松林が続いていた。どうやらその樹間に動くものが見える。

「どうも満軍らしいですが」

と鈴木上等兵が囁いた。井上軍曹が双眼鏡で確かめると、ソ連軍であった。自動小銃を吊革で肩に掛けた兵や騎馬隊が前方を横切って行く、

「ソ連軍だ、どうも困ったことになったぞ」

井上軍曹は鈴木上等兵と顔を見合せた。

「中隊の集合地点に行くにはどうしてもあの台地を越さなければならない、然し、此の様子だとソ連軍は既に開嶺峠を越えて第二大隊の後方迄浸透しているらしいな」

陣地に戻る訳にはいかない、構わずに突切ろうかと迷った。先に行った高杉分隊や、此の地点を通過して行った他の部隊は一体どうしたのだろう、銃声はしなかったし、ソ連軍が全身を露け出して行動している様子から戦闘が行なわれたとは思えない、暫くソ連軍の動きを窺っていると隊列が切れたので、

「敵の進行の間断を見て突切る、俺が先頭を切るから各個躍進して続け、行くぞ」

と井上軍曹は一気に窪地を抜け、台地を駈け登って草地の中を走った。百米程駈け続けると開嶺峠へ通じる道路が見えた。道路を西に行けば集合地点である、パッと草に伏せて荒い息を調え乍ら後続の兵を待ち、道路の方向を見ると道路側の林の中からソ連兵が三名出て来た。暢気に口笛を吹き乍ら井上の真向に歩いて来る。井上軍曹は驚いて振返って後続の兵を見ると、鈴木上等兵、続いて宮崎一等兵と駈けて来る。井上が合図する暇も無くソ連兵は気付いて鋭く叫声をあげ、空に向けて自動小銃続け態に撃った。

「停れ！」と言っているのだ、どうして狙撃しないのか、井上軍曹は怪訝に思った。ソ連兵は伏せている井上軍曹を発見すると草叢に近寄って、

「ヒュー」

と口笛を吹き、銃を向けて立てと言った。井上は不貞腐って鈍ろ鈍ろと立ち上り両手を上げ乍ら、同じように停止させられたのは鈴木、宮崎、後藤で、自分を入れて四名だ、と目に納めた。ソ連兵は僅か三名だけで辺りにはその外の姿が見えないと確かめて、ソ連兵を突き飛ばし道路の側面の野草の茂みに飛び込んで、続く林の中を突走ろうと、と目で鈴木上等兵に合図した。

ソ連兵は銃を横に振って井上達が一個所に固まるように身振りで差図した。井上は一固まりになるように見せかけて一気にソ連兵に体当りを喰わせて

「走れ」

と叫んで道路を一散に駈け道路際の草叢に跳び込んだ。宮崎が直ぐ続き、鈴木も駈けた。井上に突き倒されたソ連兵は直ぐ立ち上ると、逃げ去る日本兵を後からパンパンと撃った。

鈴木が道路の真中に倒れ、宮崎は草叢に転げ込むと同時に肩を撃たれた。銃声に応じて道路の反対側の林の中

からも銃声がした、続いて道路の登り坂の向う側から軽機が撃ち込まれた。

井上軍曹は頭上をヒュン　ヒュンと掠める弾丸の下を全速力で駈けた、幾度か息が切れて草の中にのめり倒れては、後に続く者を気にし乍ら一散に駈け続けた。熱気で充血した眼に日本軍の野砲隊の幕舎が映じた。

「助かった」

と気を緩めて駈け寄ると三、四名のソ連兵が飛び出て井上軍曹に照準を合せてパン　パンと自動小銃を浴びせた。パッと身を伏せたが、至近な距離なのでもう駄目かと観念の眼を閉じたが、ソ連兵は一向に確かめに来ない。暫く凝っと様子を窺って跳び出し一気に走った。五百米程駈けると白樺林の中に三大隊本部の幕舎が見えて来た。前回に懲りて慎重に近付いたが、全く人気が無い、気抜けして幕舎の前に腰を下して散り散りになった分隊の者を按じていると、梶原上等兵、西尾、後藤の一等兵が息を切らせて駈けて来た。井上軍曹は一先ず安緒して他の分隊員の到着を待っていたが、仲々姿を見せなかった。漸く上野一等兵が到着して鈴木、宮崎は撃たれ、豊永一等兵は捕えられたと報告した。

井上軍曹は此の分ではソ連軍は新南興迄進攻しているに違いない、博克図迄行こうと分隊に伝え、ソ連軍の目を掠めて山中を歩き出した。

ソ連兵に撃たれた宮崎一等兵は、観念して倒れた鈴木上等兵の傍へ這い寄った。忽ちソ連兵が取り囲んで宮崎の頭に自動小銃を突き着け引金に指を掛けた。

彼方此方で銃声が散発する中をソ連軍将校が馬を飛ばせ走り寄ると

「撃つな！」

と大声をあげた。胸を貫通された鈴木上等兵は虫の息で虚ろの目で宮崎を見上げて

「水を呉れ」

と幽かに言った、宮崎が水筒を腰から抜いて振ったが空であった。馬上から様子を見ていたソ連将校が自分の水筒を出して飲ませてやれと身振りで示した。

鈴木上等兵は三口ばかり呑むとガックリと息を引き取った。宮崎は将校に挙手の礼をして水筒を返すと、ソ連兵が自動小銃を突き着けて

「手を上げろ」

と露語で叫んだ、何時の間にかソ連兵は十数名となっていた。ソ連兵が二名で宮崎の身体をぐるぐる回して帯剣を取り外し、雑嚢の内から手榴弾を探し出して路上に置いた。

馬上の将校が兵士達に何にやら命令すると、衛生兵が駈けて来て衛生箱の中から繃帯を出して宮崎の左肩の手当をした。その間に二名のソ連兵が鈴木上等兵の屍体を道路際の草叢に移した。将校は宮崎の帯剣を見ていたが、

宮崎に返して腰に着けろと手つきで示し、大隊本部の方向を指示して行けと言った。

宮崎は遂に捕虜となったか、と観念したがソ連兵は其の儘去って仕舞った。宮崎は却って何にか無気味になって、辺りを見廻したがもう井上軍曹の姿は草叢に消え、他の分隊員の姿も見当らず、心細くトボトボと大隊本部に辿り着いた。

もう日本兵の姿は何処にも見えず、放たれた軍馬が三四頭狂ったように幕舎や疎林の中を当ても無く駈け廻っていた。大隊本部の幕舎を覗くと三、四名のソ連兵が何にか探していた、一寸と宮崎一等兵を見たが一向気にする様子も無く、大声で笑い乍ら幕舎を出ると宮崎を全く無視して次々と幕舎に火をかけ始めた。宮崎は茫然と燃え上る火焔を瞶めて立ち竦んでいた。

（十一）

ソ連軍に斬込み攻撃をかけようと饅頭山北方を三日間も彷徨っていた園田隊は、方向を誤って戦機を逸したので三大隊陣地に引揚げようと、一〇二七高地山麓の松林に差し掛ると、近くの疎林や山径にソ連兵が動き廻っていた。園田隊は伸びた夏草に伏せて様子を窺っていると、敵は主力の車輛隊でなく、騎兵隊や輜重隊で園田隊の二百米程前方を南に向っていた。輜重隊は叺を積んだ荷車を支那馬に挽かせて暢気な様子で通って行く、騎馬の兵は自動小銃を肩掛けにして半靴の乗馬靴を履いていた。

通過の体列に日本軍の軍装で車輛の側面を歩いている兵士が見えた。園田見習士官はソ連軍が大隊本部を攻略して物資を拿捕し、捕虜にした日本兵を引き立てて行くのかと思って、血の逆流するような憤りを覚えたが、日本兵は捕縛もされずソ連兵と何にか話し乍ら肩を並べて歩いて行くのが不審であった。

遣り過して起き上ると下田軍曹が近寄って、

「隊長殿、朝鮮兵ですな、あいつらは」

と言った、今年春の根こそぎ動員の初年兵に多くの朝鮮兵がいたが、早くも寝返ったのか、と園田は情無く思った。

ソ連軍が見えなくなったので警戒しながら大隊本部の方向に進んで行くと、白樺の疎林の不整地を三頭の裸馬が園田隊に向って驀しぐらに駈け寄って来て兵隊達に鼻面を寄せて嬉しそうに嘶いた。速射砲中隊本部の幕舎の窪地に繋いでおいた軍馬であった。

園田見習士官は、軍馬が放たれて日本軍の後を慕って来る様では陣地に戻るのは不可能であると思った。

「三大隊陣地はどうやら敵の手中に有るようだ、南の第一大隊の山陣へ行って見よう」

と白樺の林を潜行している裡に日が落ちた。磁石を頼りの闇夜の行軍を続け、十七日の暁に第一大隊本部近く

の炊事場の唐松林に出た。日本兵の姿は見えず、慌てて撤退したらしく昨夜炊いたらしい朝食用の米飯や、昆布と豆の煮付が樽や食缶に入れた儘放置されてあった。数日来飲まず食わずに彷徨って飢え切っていた園田隊には天与の賜物であった。日本軍の撤退や、ソ連軍の包囲など吹き飛んで仕舞ったように、歓声をあげて食缶に群がりつき夢中になって噛りついて掻い込んだ、腹の虫が治ってから味噌汁を温め直したり、水筒に湯茶を補給したりしていると、その炊煙を見て付近に潜伏していた日本兵数名が怖る怖る姿を現わした。いずれも敗残兵や本隊を見失なった迷い兵だった。

飢え切っていた兵隊は挨拶もせず食缶に飛びついて手摑みで米飯を呑み下していた。その後も続いて丸腰の三、四名が迷い込んで来た、園田見習士官を見た下士官が、

「自分達は第三機銃の高橋伍長以下二名であります、日本軍が降伏したので博克図に集合せよと大隊命令があったので撤退中本隊とはぐれました。同じ三大隊でありますから一緒に連れて行って貰い度くあります」

と言った。

「日本軍が降伏したなどと、莫迦なことがある筈がない、自分達は軍命令を受けてないので園田隊は武装の儘行動し途中ソ連軍と遭遇したら撃ち破って突切る、戦闘を継続して行く覚悟の者だけ我が隊と行動を共にして貰いたい、日本軍が降伏したと思う者は遠慮なくソ連軍に投降せよ」

と伝えたが誰も離れる者がいなかった。

園田隊を先頭に各隊の残存兵が後に続いて第一大隊の駐屯していた山裾を東に行くと、再び片側に興安街道が見え、日本軍の残存部隊など歯牙にもかけずにソ連軍車輛隊が砂塵をあげて驀進していた。

日没近く博克図の町が見える地点に達すると、町の付近から頻りと銃声がする、城壁の望楼あたりには火煙も昇っていた。

園田見習士官は再び下士官を集めて、

「博克図に出る予定であったが、現にソ連軍が侵入して交戦の模様である、博克図に突入して潔よく散るか、捕虜となるか、或いはゲリラ戦を続けて南下し、斉斉哈爾方面に行くかである。我が隊は七中隊及び速射砲中隊から編成されたので、それ以外は俺の命令に従う必要は無い、今から自由行動を取って貰いたい」

と言い渡すと、追従して来た兵隊達は彼方此方で相談

た、見渡すと園田隊はいつの間にか百名以上に増えている、こうした混成部隊で行動するのは危険と思ったので下士官を集合させて、

「我が隊は、今から博克図に向って山中を行く、未だ正式に軍命令を受けてないので園田隊は武装の儘行動し途中ソ連軍と遭遇したら撃ち破って突切る、戦闘を継続して行く覚悟の者だけ我が隊と行動を共にして貰いたい、日本軍が降伏したと思う者は遠慮なくソ連軍に投降せよ」

と伝えたが誰も離れる者がいなかった。

園田隊を先頭に各隊の残存兵が後に続いて第一大隊の駐屯していた山裾を東に行くと、再び片側に興安街道が見え、日本軍の残存部隊など歯牙にもかけずにソ連軍車輛隊が砂塵をあげて驀進していた。

日没近く博克図の町が見える地点に達すると、町の付近から頻りと銃声がする、城壁の望楼あたりには火煙も昇っていた。

園田見習士官は再び下士官を集めて、

「博克図に出る予定であったが、現にソ連軍が侵入して交戦の模様である、博克図に突入して潔よく散るか、捕虜となるか、或いはゲリラ戦を続けて南下し、斉斉哈爾方面に行くかである。我が隊は七中隊及び速射砲中隊から編成されたので、それ以外は俺の命令に従う必要は無い、今から自由行動を取って貰いたい」

と言い渡すと、追従して来た兵隊達は彼方此方で相談していたが、第一大隊機関銃隊から斬込み隊に出て迷った永江・森山の一等兵がやって来て、

「自分達は今から本隊を追求することは困難であります、どうか一緒に行動させて貰い度くあります」

と残留を申し出た。

井上軍曹は整列して

「自分達の原隊は必ず開嶺付近の山中に残っていると思います、その付近を探して原隊に復帰し度いと思います」

と井上軍曹達が分れて行くと宮崎分隊の三名、その他の兵が、五名、三名と列外に出て

「自分達も所属中隊を探します、大変お世話になりました」

と挙手の礼をして夜の闇に去った。

開嶺周辺の山陣には未だ本隊から離れた分遣隊が険阻な断崖の側面とか、突出した山塊の岩棚とかの洞窟壕に残っていた。

一〇二七高地東端の分遣隊は、崖下の東北部に野戦兵坦部が在るのにソ連軍の進攻も受けず、日本軍からも忘れ去られたように無傷の儘十七日の朝を迎えた。前日の昼頃迄は分遣隊の南西方面に盛んに砲声がしていたが、今朝は静まり返って無気味であった。

永井軍曹が双眼鏡で山陣の壕から遙か北方の街道を見

渡し、路上を行進するのはソ連軍車輛ばかりで日本軍は一体何処へ消えたのかと不審に思っていた、昼頃監視哨の今井一等兵が

「班長殿、どうも様子が変であります、一寸と見てください」

と展望鏡を向けた、覗き込んで指す方向に焦点を合わすと、街道を外れて襤褸軍衣の日本兵が流人の列のように歩いている、愕然として展望鏡の囲りに集った兵隊の顔を見廻して、改めて確かめて見たが、日本軍の兵に違い無い、戦闘で捕虜になったのかと思ったが連行するソ連軍が見えない、不審に思って展望している間にも次第に数が増え点々と草原を歩く日本兵も見えた。日本軍は降伏したのかも知れないと囁き合う兵もいるので、

「そんな莫迦なことがあるか、一時の停戦だろう本隊から命がある迄は持ち場を離れるな」

と強く言って念の為に竹田上等兵、是松一等兵に一番近い大隊砲陣地へ様子を見に行かせたが、何時迄待っても戻らなかった。日本軍の降伏の疑いは深まるばかりだった。だが「生きて虜囚の辱を受けるな」の戦陣訓を守って不安の日夜を耐えて二十日の朝となった。突然、

「日本の兵隊さん、戦争はもう終ったのです、祖国には妻と子と親と兄弟が待っています。早く山を降りて出て来なさい、国に帰れるのです」

と若々しい女の美しい声がスピーカーから流れて来た。

衝撃を受けた兵隊達は半信半疑で怖る怖る壕から山頂に姿を現わして立って見たが、何処からも射撃されないので、やはり戦争は終ったのだと救われた気持になってゾロゾロと山を降り始めた、永井軍曹も制止することも無駄と悄然と後に続いた。

（十二）

開嶺防衛の各部隊は、師団命令の博克図集結に従って、列車や車輛の将兵は既に集まり、馬匹や徒歩の遅れた将兵が正に敗残兵の惨めな姿で、新南興から博克図に至る街道を襤褸の列をなして歩いていた。

道路の傍には戦火を避けてソムを離れていた蒙古人がゲルを積んだ馬と休んでいた。家を焼かれ家族と散々になった満人達が蹲っていた。蒙古人は深々と腰を下ろして黙って敗走の日本軍を眺めている、満人達は恨みを堪えた目を通り過ぎる将兵に向けていた。

その間にもソ連軍の戦車やトラックが日本兵も難民も野の雑草か土塊のように無視して疾走していた。

夜になると未だ武装の儘の日本軍の車輛が博克図集結を無視して南に向って突走って行った。夜間ソ連軍に遭遇せず札蘭屯近く迄行ったが、夜が明けて発見され交戦の後に武装解除されて札蘭屯駅に送り込まれていた。

札蘭屯には各方面の部隊の将兵が入り乱れていた。馬

匹を連れている部隊もあれば、武装の儘無傷の中隊もいた。昼になるとソ連将校が来て日本軍の集結地は博克図だと言って、日本兵を列車や車輛に詰め込んで博克図へ再び逆送させた。

博克図駅に軍用車が入る度にソ連兵がやって来て、銃剣をかざして下車する日本兵を武装解除して街に放った。徒歩や車輛で集結して来る将兵が増えると、街の到る処放置された車輛や捨てられた兵器が散乱し、主を失なった軍馬が流浪していた。

日増に市街には戦意を失なって統制の緩んだ将兵が飢えて群をなし、喪家の犬のように食物だけを漁っていた。軍隊より早く奥地から引揚げた開拓民や、満鉄社員家族達の在留邦人も軍人と一緒に捕虜扱いであったが、南に向う列車が入るとソ連兵がやって来て、重傷兵や病人を嫌ず乗せ、邦人を次に上車させて哈爾浜へ送っていた。

昼間は街で食物を漁っていた日本兵は夜になると旧満軍兵舎や、日本軍の第一機銃兵舎に集って宿泊した。満ち溢れて入れない者は無人の商店や廃屋に入り込んで睡った。夜は雨の降る闇が多くなったが、市の電源が切られているので何処も真暗で、勝手に灯を点けることは厳禁されていた。

兵舎では狭い室内に折り重なって押し込まれているので身動きも出来ず、足場を確かめようとマッチでも擦ると、忽ち巡回中のソ連兵に銃撃された、密集して室内なのでその都度何名かは死傷した。朝になると戦友達は戦場で助かったのに、此んな所で生命を失なう無惨さに胸を痛め乍ら遺体を戸外に運び出した。路傍には葬る処も無くシートを被せただけの屍が放置された儘増えていった。

満蒙の秋は疾く、雨の降る朝は寒気が迫って来た。廃屋の物蔭に繋がれた軍馬が、一緒に撤退して来た将兵を求めて物悲しく首を天に向けて嘶くと、靄の彼方此方から悲痛な嘶声が和してくるのだった。

第二章了

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

（刊行時期）　（原稿締切）

春季号……二月一日　一二月三一日

夏季号……五月一日　三月三一日

秋季号……八月一日　六月三〇日

冬季号……一一月一日　九月三〇日

季刊確保のため右のように規約を定めております。温かいご支援をお与えください。

各位

男たちの藩（七）

第四章　金のやりくり

三戸岡道夫

〔一〕

すすきが原の開拓は順調に進んでいた。

苗の調達と人夫の作業とはうまく歯車がかみあって、ゆっくりではあるが確実に、美春の自然を変えはじめていた。

しかし難渋している問題が一つあった。それは資金の調達であった。苗、人、資金と、この三拍子が揃わないと、計画は画餅に帰するからである。

金が無いから財政再建がスタートしたわけであるが、始めてみると、その財政再建自体に金がかかることがわかってきた。苗を買うにも金がかかるし、人夫の食費や工事関係費など、いわゆる一時的な先行投資である。

問題はその金をどうやって調達するかであった。しかし美春藩は借金の山である。これ以上どの両替商もそう簡単に借してくれそうになかった。

試算したところによると、五千両は必要であった。五千両が相談できる相手といえば、米島屋しかない。しかしすでに米島屋からは拒絶反応が出ていた。江戸の勘定方を通しての交渉では、限界に来ていた。直接国元から家老が出ていかねばならないだろう。

しかし長尾真十郎は米島屋と面識がない。高柳玄宰に動いてもらうより外に手がないと思った。しかし果して高柳が動いてくれるであろうか。

長尾真十郎はある日供を一人つれただけで、高柳の自宅を訪れた。直接自分が逢って依頼するほかないと、決心したからである。敵陣に乗りこむ心地であった。自宅を選んだのは、城中で話すよりも私邸を訪れるという礼を盡した形の方が、高柳の気持を動かしやすいし、それに近頃の高柳はほとんど登城してこなかったから、こうするより外なかったのである。

高柳邸の門を潜り、玄関で案内を乞うと、奥からほのかに香のにおいが流れてきた。

『あいかわらず贅沢をしているな』

しかしここで感情的になってはならないと、怒りをぐっと腹の底に押しこめた。

真十郎を長いこと待たせたまま、高柳はなかなか客間に現われなかった。その時間の長さが、すでに高柳の心のうちを表現している。

庭に落ちている日ざしがすっかり変わり、さすが辛抱強い真十郎の忍耐も限界を超えたころ、やっと高柳は姿を現わした。

「これは、お待たせして申し訳ない。ちと気分がすぐれず、ふせていたものだから」

しかし顔の色つやはよく、床についていたようには見えない。明らかに待たせることで、復讐の前哨戦を開始しているのであった。

「それにしても長尾殿がお見えになるとはお珍らしい。邸をまちがえられたのでなければ幸だが…」

「いえ、とんでもございませぬ。今日はお願いがあって参ったのでございます。ぜひお聞きとどけくださいませ」

「わしに、か…？ほお、そんなものが、まだあったかいな」

「近況の報告と、それに伴うお願いの筋をご説明いたします」

真十郎は財政再建の進捗状況と茶の植樹計画、とくにすすきが原の開拓について熱心に説明しはじめた。

高柳はいちおう話に耳を傾けてはいたが、しかし真剣に聞いている様子はなかった。眼はたえず庭に注がれ、一度も真十郎の方を見なかった。

熱心なのはいいが、真十郎の説明は一方的で、くどいと思った。ただ自分の都合ばかりを言っている。相手の立場を考えない。自分だけが正義だと思いこんでいる。

高柳は泉水に影を落した雲の形や、庭木をゆすって風が吹き抜けていく空の彼方を眼で追い、説明は聞き流しながら、心の中では別のことを考えていた。

『金を借りるというのは、そんな楽なことじゃないんだよ。大変なこと、苦労があるんだ。その大変な金を長年にわたって営々と借りてきたのは誰だと思っているのだ。それをわけもわからぬ連中が、借金はいっさい悪だと騒ぎたてながら、金が必要な時だけはこうして頭を下げて頼みにくる。そんな馬鹿なことに応じられると思っているのか。金が楽に借りられると思うのなら、自分で借りてみろ。すれば少しはおれの苦労もわかるだろう。美春藩で金が要るんだって…、ふん、そんなもの、おれはいっさい知らないね』

説明は終った。真十郎は懐紙で額の汗を押さえながら

「いかがでございましょうか、高柳さま」

切っぱつまった表情であった。

「というと、このわしに江戸まで行って米島屋との交渉に当れと申すのか」

「藩の危急存亡の時でございます。そう願えれば幸に存じます。殿もきっとお喜びのことと思います」

殿もお喜び、という言葉が、にわかに高柳の気持を逆上させた。虎の威を借りる狐め。高柳は真十郎の方に視線を戻すと

「だが、長尾どののお考えによれば、今後美春藩は借金をしてはならないというのでは、なかったかな」

「でも、苗を買う金は別でございます」

「別と言っても、金には色が無いはず。小判を畳の上に並べてみて、これはいい小判、これは悪い小判などということが言えますかな。小判はどれも同じ小判です。それに、わしにはもう借りる力がない。財政再建は長尾どのが中心になってやっているのだから、必要な金はあなた自身の手で借りるほかはない。とても、とても、私などの出る幕ではありません」

断言するように言うと、高柳はぷいと横をむき、もはや真十郎がとりつくしまもなかった。

だがここで挫けてはならないと思った。真十郎は再び財政再建の必要性をくり返し、そのためには藩全体の一致団結が必要なこと、そして最高家老職にある高柳玄宰こそ最も責任があるのではないかと、さらに理詰めで追究した。

しかしそう来られると、ますます高柳の気持は屈折していって

『馬鹿め、この男はちっともわかっていない。太閤資金が手に入れば、財政再建なんて吹っとんでしまうのだ。金を握れば、わしが再び美春藩の実力者なのだ。修身なんて菊掛藩へ追い返してやる。そして、きさまも、昔の足軽につき落してやる！』

結局、真十郎は高柳への依頼をあきらめた。難攻不落であった。

全身に水を浴びせられたような、挫折感に襲われた。藩主を後楯にしての説得なので失敗はないと思っていたのに、足許をすくわれた感じだった。同時に自分の甘さを思った。

だが事態はもっと深刻なことがわかった。それはひそかに高柳が米島屋に蔭で手を廻して

『美春藩から申込があっても、もうこれ以上は貸すな』

と裏工作をしていることがわかったからである。

そもそも筆頭家老といえば先頭に立って動かなければならない立場にあるのに、それが逆にブレーキをかけているとは…、怒りが猛烈な勢いで真十郎の中で吹きあげ、それが真十郎を次の行動にかりたてる原動力になったのであった。

「よし、それならば、自分で直接米島屋にかけあってみよう」

だが真十郎は米島屋の顔を知らない。金を借りるのに、どんな話をし、どんな手続きをすればいいのかも知らない。しかし誠意をもって当れば、なんとかなるだろう。当って砕けろ、だと思った。そのためには江戸へ行かねばならない。国元を一日たりとも留守にできない状勢なのに、仕方がなかった。

出発に先だっては米島屋にあてて書状をしたためた。それを飛脚に持たせて江戸に走らせると、その後を追うように江戸へ向った。

江戸に着くと、藩邸に二日ほどこもり、江戸の財政状態の報告を受けたり、また懸案事項の処理などをしながら、それと併行して米島屋に関する最近の情報を集めたり、現在米島屋からの借入額を聞き、訪問の準備をした。米島屋からの借金は十三万両で、財政再建をスタートさせた時点と同じであった。ということは、その後米島屋からの借金はふえていないことになる。

すると訪問の前日であった。夕方になって突然米島屋から

『ご家老さまがお訪ねくださるなんて恐れ多い限りでございますから、私の方から明朝参上いたします』

という連絡があった。

その瞬間、真十郎は先を越されたと思った。

用件の大要は先の書面で知らせてある。だから米島屋は内容を充分承知しているわけである。となると、勝負は明日の対応の仕方で決ってくる。対応には受身で処理した方がいい場合と、先制攻撃をかけた方がいい場合とがある。

米島屋はあきらかに美春藩へ金を貸しすぎたと後悔している。だから早く回収したがっている。となると結論は自ら決ってくる。長尾真十郎は気鋭の家老だとは聞いているが、高柳玄宰からの話によれば、金融取引には不慣れな青二才にすぎないから、ここは先を制すべきだと、ベテランの米島屋は判断したのにちがいない。

長尾真十郎の方から来られては、自分の立場が弱くなる。こちらから行くにしくはないと、一髪のタイミングで米島屋は立場を逆転させたのであった。

翌日、米島屋は羽織、袴に身を固めて、神妙な態度で美春藩邸の門を潜った。

座敷に入ると、入口の近くにぴたりと平伏し

「おはつにお目にかかります。米島屋善右衛門にございます」

「長尾真十郎でござる。さあ、もちっと、近くに」

「ありがたく存じます」

と善右衛門は膝を左右に動かしたが、前へは進まず、呼吸をととのえながら、先制攻撃の頃あいをうかがっていたが

「さて、今回のお申出、てまえ米島屋などには身に過

ぎたる御用命にございます。この重荷、とても負いきれるものではございません」

言葉はおだやかであったが、はっきりと拒絶の意思表示をした。

この一言で勝負は決ったと米島屋は思った。

あまり急な展開なので真十郎は狼狽した。

「いや、最初からそう言われても困る…」

「…しかしでは、ございますが、私どももといたしましても、すでに十三万両という大金を御用立ていたしております。それに近頃は利息さえも満足には頂戴しておらぬ状況。米島屋の身代をすっかり美春藩に預けてしまったのも同じでございます。これ以上お貸ししないというのではございませんが、お貸ししたくても、米島屋にはもう肝心の貸す金が無いのでございます。何とぞ心中お察しくださいませ」

こう先手を取られては、不慣れな真十郎はどう対応していいのか、わからない。

甲羅を経た善右衛門の作戦勝ちであった。

真十郎の全身から脂汗が吹き出た。だが、このまま引きさがるわけにはいかない。ここは自分の誠意を示す以外に手がないと、真十郎はやにわにそこに両手をつくと

「お願いでござる、米島屋殿、この通り……」

畳に額をつけんばかりにした。さすがに善右衛門も驚いて

「あっ、お手をお上げください。お家老さまがそのようなことをなさるものではありませぬ」

だが真十郎はそのままの姿勢で、美春藩の財政再建の必要性、計画の内容、茶園開拓の進捗状況、それに伴う資金の必要性などを、長い時間をかけて説明した。それを説明する必死の形相は善右衛門の心を動かすものがあった。財政再建策は、あるいは成功するかもしれないという気がしてきた。成功すれば、たとえ五年先、十年先になろうとも、米島屋の貸金はまちがいなく返ってくるであろう。それに引かえ財政再建が失敗すれば、米島屋の十三万両は返ってこない。

とすると、ここの所は真十郎の言うように多少の追加の金を貸して、財政再建が成功するように協力するのも、一つの手なのかもしれなかった。

だが、すぐ冷い商売の打算が善右衛門の頭を冷やした。

『甘いぞ、甘い。そんな甘い考えに乗ってどうするものぞ。五年先、十年先のことが信用できるものか』

それと同時に

『そんな先のことに賭けなくても、美春藩へはもうすぐ巨額な金が入ってくる。太閤資金さえ入ってくれば、たちどころに十三万両など回収できるのだ。これ以上貸してはならない』

善右衛門の頭の中に、いつか紹介状を書いてやった笠倉彦五郎という男の面影がちらついた。高柳玄宰からの

最近の手紙によっても、太閤資金は順調に進んでいるという。『さっきの一言でもう勝負はついているのだ』、そう善右衛門は自分に言いきかせると

「それでは大変長居をいたしました。これで、おいとまいたします」

真十郎の反応も待たずに立ち上ると、廊下を玄関の方に足早やに歩いた。

〔二〕

高柳玄宰には裏切られ、米島屋にも拒絶されて、八方塞りになってしまった。しかし挫けてはならない。

国境の峠を越えて入荷してくる苗も、代金を払わなければ止ってしまうのである。百姓たちが開拓の汗を流しながら食べる塩むすびも、供給することができなくなってしまう。誰かが金を作らなくてはならないのである。

米島屋が駄目なら、他の両替商から借りるしかない。直ちにその交渉を始めようと思った。

そう決心すると、真十郎は引きつづき江戸に留って、運動を開始した。

美春藩は米島屋のほかに、備前屋、近江屋、平野屋など、十指にあまる所から借りていた。と言うよりも、手当り次第に借りまくって、十ヵ所にもなっているのだった。米島屋からの借金が一番大きかったので、真十郎はなんとなく米島屋が一番規模の大きい両替商のような錯覚に陥っていたが、よく調べてみるとそうではなくて、米島屋と同規模のものや、それを上廻る力の両替商もあったのである。

直ちに真十郎はこれらの両替商と片っ端から交渉をしてみた。

しかしどの両替商も美春藩の財政困窮を知り抜いている。美春藩に金を貸したことを後悔している。折があったら米島屋と同じように回収したがっている商人ばかりだったので、申出に応ずる者は誰もなかった。

だがこの金は単なる金ではない。美春藩の生命の水なのだと思うと、二回、三回と、交渉を重ねるのにも勇気が湧いてくるのだった。

そうした熱意が伝わったのか、やがてその中の一人が同意を示してきた。大阪の平野屋である。

真十郎は平野屋の番頭新六に

「今度の借金はこれまでのように一時の不足金を借りるのとはわけが違い、金額も大きく、長期である。したがって内容をつつみ隠しなく説明いたしたい」

財政再建計画の全貌、植樹計画、すすきが原の開拓計画、それに借りる金の使途明細などを、包み隠さずに話すと、

「わかりました。長尾さまの熱意に打たれました」

「かたじけない」

「美春藩の財政再建を信用いたしましょう」

「だが、口で説明しただけでは不十分と思うので、一度ぜひ国元へ来て、現地をよく見てほしい」

真十郎は番頭新六とともに美春に帰り、領内をつぶさに案内した。

そのとき藩主の修身が直き直きに新六を出迎えたことも、新六をいたく感激させた。一国の藩主が一両替商の番頭ごときを出迎えるなんて、前代未聞のことであったからである。さらに修身が山歩きの姿になって、すすきが原の開拓現場を案内したことも、藩主自らの決意の固さを新六に伝えた。

台地では、汗水たらした人夫たちが必死に開拓にはげんでいる姿を見たし、領内の空地という空地に茶や密柑の苗がこまめに植えられているのを見て、新六は財政再建計画が嘘でないことを自分の眼で確認した。

新六はさっそくこのことを主人の平野屋栄蔵に報告し、この時から平野屋は美春藩のよき協力者となったのであった。

「それで苗木買入れに必要な金額は、いかほどで」

「一万両は必要かと思います」

「では、一万両、そっくりお貸しいたしましょう」

だが真十郎は好意をそのまま受けなかった。

「ご好意はまことにありがたい。しかしそれでは当方の誠意が通じません。自分で調達できるものは調達し、不足するものだけを借りたい。貧乏とはいえ、幸い当藩にはまだ領内の特産品からの利益が二千両ほどは稔出できるので、それを差引いた八千両をお借しくだされ」

「それはご奇特なこと」

この真十郎の馬鹿正直な態度が、かえって新六の胸を強く打ち、平野屋との間にもう一つ次の金融展開を可能にしたのであった。

真十郎はこれまで新六との交渉の中で、美春藩の財政のすべてをさらけ出し、その恥部ともいえる赤字決算の内容までも、隠さずに説明してしまっていた。

それを聞いているうちに新六は、毎年の支払利子の多さに驚いたのである。借金全体が巨額であるのだから、金利がかさばるのは仕方がないが、それにしても多すぎる。調べてみるとその中には、かなり高金利のものがあったのである。金が足らなくなると、どこからでも金利の高い金を借りてくる。藩士たちは金銭感覚に暗いから、いくらのコストになっているかなどということを考えたこともない。米島屋からの借金の中にも、無理に借りた分には、法外な利息がつけられているし、その他に町の高利貸しからの借金も相当混っている始末であった。

「これでは全身を吸血鬼に喰いつかれたも同じでございますよ」

しかし真十郎にはそう言われても、新六が何を言おうとしているのかわからない。借りた金は時間をかけて、

少しずつ返していくしかない、それ以外の知恵は真十郎にはなかった。

「長尾さま、八千両と言わず、十万両をお貸しいたしましょう」

「えっ…！十万両？」

突然言われて

「どういうことじゃ」

「ご説明いたしましょう。美春藩の財政再建には、まず金利の負担を減らすのが第一でございます。こんなたくさんな利息を毎年払っていたのでは、いくら稼いでも追いつきません。めしを食べる片端から、その栄養を寄生虫に吸いとられているも同じでございます」

「でも金利の減少…、そんなことが出来るのか？」

「高い金利の借金は、全部返しておしまいになればいい」

「返す…？といっても、返す金がない」

「そのお金を手前どもが、そっくりお貸しいたしましょう」

金にはそんな貸し借りの仕方があるのだと、真十郎ははじめて知った。新しい金融の世界が輝いて、真十郎の前途に開けてきたような気がした。

「ひとつ算盤をはじいてみましょうか。現在の美春藩の借入総額は二十三万両。そのうち高利のものを集めてみますと…」

新六は紙にその金額を書き抜いて

「全部でほぼ十万両にのぼります。この高い金利の借金を減らし、普通の金利の借金に乗りかえただけでも、ずいぶん楽になるはずでございます。その金をお貸しいたしましょう。なに、わたくしどもの方も損するわけではございません。普通の金利はいただくのですから。しかしざっと数えてみましても高利との差は一年間に一万両、節約になることは確実でございます」

真十郎の眼から涙がこぼれた。嬉し涙である。この恩は一生涯忘れまい。いや、末代まで忘れてはならない。

こうして平野屋と美春藩とはその後互いに協力し、心を通じさせる間柄になっていくのであったが、しかし平野屋はたんに熱意に動かされただけではなくて、その背後にちゃんとした商人の計算も働いていたのは当然であった。

というのは十万両の貸金の見返りとして、平野屋は美春藩の茶と密柑の専売権を新たに獲得したのである。植樹計画が成功して、茶と密柑が美春の特産物となったとき、その売買権を平野屋が専属的に握るという権利である。

当時はどの藩でも借金の代償として、領内産物の専売権を豪商に与えるところが多かった。藩の特産物の専売には魅力があり、また藩としても商人に任せた方が便利

で販売も安定するからであった。またそうすることが豪商との結びつきをより強固なものにし、藩の財政運営をスムースにする方便でもあった。

これまで美春藩の和紙、木材などの専売権は米島屋が一手に握っていた。しかしいったん握った権利は絶対手放さない。そこで平野屋は新しい茶と密柑の専売権を、今回の機会を利用して獲得したのである。

専売権の代償として商人は藩へ一定の賦課金を納入することになっているが、平野屋は賦課金のほかに、さらに

「毎年、二千両の献金をいたしましょう」

と申し出た。

真十郎はありがたく申出を受けたが、金の使い途については修身と相談した。この献金はいわば予定外の収入であるから、別会計として管理しようと思ったからである。

修身には前々から、やりたくても出来ないことがあった。それは米の備蓄である。凶作や飢饉がいつ来るかわからない。しかし美春藩にはその備えがまったくない。余裕ができたらどうしても始めたいと思っていたところだったので

「献金はすべて米の備蓄にあてよう。どうだ、真十郎」

「それ以上結構なことはございません。領民も安心してますます開拓にはげみましょう」

〔三〕

こうして資金の調達は片付いたのであるが、もう一つ心配なことがあった。

それは太閤資金である。千羽功兵衛の調査報告を先日聞いたが、ついに高柳玄宰がひっかかったらしいのだ。困ったことになった。

功兵衛が調べたところによると、笠倉彦五郎は太閤資金の本命だという人もあるが、あれはまったくの詐欺師だというのが本当らしい。そんな人間の言うことを、どうして筆頭家老たるものが信用してしまったのか。真意がわからない。

高柳はすでに書類に判を押し、なにがしかの金も渡してしまっているらしい。万が一、世間に洩れたらどうするのか。真十郎の胸には不安と、高柳への怒りが湧き上ってくる。

『藩が財政再建に浮沈をかけているというのに、協力しないばかりか、邪魔までするのか』

怒りよりも、絶望が襲ってくる。刺し殺すことが出来るなら、殺してしまいたい。

真十郎が心配しているのは幕府の大名取潰し政策である。それは徳川幕府の開闢以来一貫して流れている政策なのであった。たえず外様大名取潰しの口実を虎視眈眈と狙っている。どんな些細な騒動でも、幕府の扱い方次

第によってはお家取潰しの材料になるのである。幕府がいったん狙いをつけたら、巧妙な作為がかかった献金同様、逃れることはできない。現に太閤資金に手を出して、それが原因でお家断絶になった藩を真十郎は知っている。

美春藩が太閤資金に関係したとわかれば、

『なぜ、そんなに金が要るのか』

たちまち疑惑の眼が向けられる。金と言えば軍備ほど金のかかるものはない。軍備強化は最も幕府の警戒するところである。

『美春藩の財政逼迫は、武器を作ったり、鉄砲隊を養成しているからではあるまいか。美春藩は国禁を犯している』

あらぬ疑いをかけられて、公儀隠密でも差し向けられたら終りである。

それにしても功兵衛の報告を聞いて驚いたのは、こうしたペテンの貸金の話が日本の社会の隅々にまで行きわたっている、その蔓延のすさまじさであった。日本の金融の深奥には得体の知れない巨大な暗部があって、そこから立ちのぼる金の妖気が財政困窮にあえぐ大名の心を捉えて放さないのであろう。握った金蔓を危険と知りつつ、その黒い罠に陥っていく諸藩の姿は、真十郎を暗澹とした気持にさせた。

早急に手を打たねばならない。だが、どんな手段があるというのか。

直接高柳に逢って忠告するのはどうか。しかし真十郎の言葉など、せせら笑って聞きいれはしないであろう。とすれば思いきって修身へ報告して、高柳を取調べる。しかしそれも今の段階では尚早に思われた。高柳の行動については、まだはっきりした証拠をなに一つ摑んでいないからである。物的証拠を突きつけない限り

『そんなものに関わった覚えはない。まして笠倉彦五郎などという者、名前も聞いたことさえない』

否定されれば終りである。

そんな時であった。一つのアイデアがちょうど青空の白雲の破片のように浮かんできた。

それは名案だったが、ある意味においては悪魔のアイデアといってもよかった。太閤資金を高柳失脚の罠に利用しようというのである。不意に真十郎の背筋を甘い戦慄が走った。なぜこんなうまい考えに、もっと早く気がつかなかったのか。

高柳はいつも真十郎を足軽からの成上り家老と馬鹿にしていた。無視していた。真十郎の心は絶えず傷ついている。いつか復讐をしなければならない。

考えてみれば太閤資金はその絶好のチャンスだった。太閤資金に手を出した家老は、毒殺されたり、切腹を命ぜられる例が多いという。高柳もそういう立場に追いこむのだ。

太閤資金はいつか必ず失敗する。いつか綻びが出る。そのとき一挙に責任を追究すれば、切腹はまちがいないだろう。

その時まで高柳を[illegible]泳がせておく。高柳が失敗するのを待つのである。待って、一挙に失脚を図る。

ただ、この方法には一つの危険があった。それは失敗が大きくなりすぎて、公儀へ話が洩れることである。そうなれば元も子もない。その前に決着をつけねばならない。タイミングをまちがえると、反対に美春藩を全滅させてしまう。

『今後はとくに冷静でなくてはならない』

と真十郎は思った。冷静でないと、そのタイミングを摑むのに狂いが出てくるからである。真十郎に必要なのは、今後冷静に高柳の行動を監視することである。だからしばらくは何もしないことが一番いい。

とにかく待つことだ、と真十郎は思った。

そして必要なことは、その間に高柳に関する証拠を少しでも入手することだった。

（つづく）

編集後記

桜の季節が、あっ、という間に過ぎていった。本誌、二十三号がお手もとに届く頃は、青葉、若葉の五月、初夏を想わせる季節に変っている。

大和氏が「まんじだより」を復刊させてくれた。同人の一人として感謝したい。この復刊第六十号に、掲載予定作品が発表されている。四名がそれぞれ労作を寄せてくださった。他の同人も日夜健闘中なのだが間に合わなかった。

この「だより」に同人六名の消息が紹介されていた。初めての方もあったと思う。今後は維持会員も含め、支障のない範囲で伝えていただきたいと思ったが、どうであろうか。その人の作品に接するとき、別な親しみも湧いて、読後感も一層豊かになるように思う。

世の中には片仮名がはんらんし、企業までも、それに追随し、英字の頭文字や横文字を乱用している。片仮名の日本文化への功績は大きい、それは認めている。しかし、今日の状況は反省し、正しい日本語、秀れた伝統の上に立った日本文化の建て直しを考えるときであろう。

日本の文学の状況、然りである。純文学に対して中間小説といわれて久しい。その区別はもうなくなったという説もある。しかし、最近のものをみると、中間でなく軽文学と呼びたい。実に軽く薄いのである。（も）

「まんじ」第二十三号

昭和六十二年五月一日発行（非売）

編集　森本俊正

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九
「作家群」
（まんじ）編集部
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二ー九〇八一五

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー十一
☎（261・5743）

目　次

追録・井中加和寿氏の死……山口健二：1
柳眉抄……大和禎人：11
連載
男たちの藩（八）……三戸岡道夫：19
第五章　黒い影
ハイラル挽歌（八）……金子正義：35
終章　去来
編集子のメモ……42
表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

追録　井中加和寿氏の死

山口健二

井中氏は全く呆気なく死んだ。かれが毎晩傲然と反り返った姿勢で、太目の藤のステッキをかたわらに控えていては、他の立ち呑み客も気軽く話しかける気分にもなれず、その酒屋では、孤独と云うか、敬して遠ざけられる按配であったが、かれは三十余年、その店で、その姿勢をくずさずに呑んで来たのだから本望と云うものでもあろう。又その姿勢のために土地のやくざや愚連隊と何度も事を構えたこともあったが、一歩も退くところがなかった。かれは自分を他の呑み客に比べて上等だとかエライと思っていたのであろうか。いやいや決してそんな思い上った気持でいたのではなさそうだ。ただ人間に好き嫌いを感じ過ぎるせいであった様だ。その夜も、その店の主人常世専用に据えられている椅子からさっと立ち上ると店を出て行った。何か気に入らぬことがあった風にもうけとられたが実際は、自分の身体に異状な不快さを感じたのである。店を出ると、兎に角、自分の家に向って真直ぐあるいて行った。途中は矢張り胸を張って、擦れちがった人たちも、かれを変だナとは思わなかった。誰にも付き添われずに自家の玄関に達すると、かけられた扉の鍵に手はかけた様であったが、そのままぐずぐずと敷石の上に屑の様に崩れたのであった。未だ時刻は、八時を少し廻ったぐらいで、寺と職人の静かなまちではあるが、大通りに出れば、未だ宵の口であった。大通りから氏の家の方へ曲る角の石材屋も雑貨屋も、花屋も、スーパーマーケット屋も、その向いのラーメン屋も店は営業中で、客の出入りも絶えてはいない。角の石材屋から氏の家に曲る私道に入るまでが二百米、石材屋からさいたま屋までが三百米、此の約五百米の道路をゆっくりと歩くのが氏の晩年には恰好な運動であった。氏が神田神保町一丁目三番地の小路の中の裏長屋から追い立てられて、この町に移って来てから三十余年になる。だから、かれの恰好がいくら傲岸に見えても、その間には何とな

く挨拶をかわしあう相手も出来て、その町は氏にとって何時の間にか忘れがたい、捨てがたい町になっていた。三十余年の間には、他界するもの、転居してつき合いの遠くなった者、新しく住みつく者、見るみる商売のみちに成功して、店を拡げる者、三十年前と少しも変らぬたたずまいで、ひっそりと生きつづける者、様ざまであるが、東京のよその地域とちがって、その変り方はきわめて静かで、ことさらにそれと気を配っていなければわからない。寺の住職が、色女をつくッて、一時気が変になっていた大黒さんも、この所孫も出来て、落ちついたのか、足腰もしゃんとなって買い物袋をさげて氏と擦れちがって挨拶をかわすことがある。何しろ、寺町だから、三日に一回は、どこかの寺で告別式とか葬式がある。しかも近くに、都立霊園と称する墓地がある。彼岸には、駅を出た坂にはずらりと花屋や物売りの店が立つ。氏の家を出たところを東西に走るせまい道路は、花を手にして墓に参る倖せな顔つきの人々の列で、自動車も度々立往生する。

寺、墓地にかかわりを持って生活する者がいろいろある。その中で、筆頭株は何と言っても墓石屋とそれに附属する職人たちであろう。谷中と称せられる地域だけで、墓石屋は七軒もあって、それぞれ暮しもよくなって来ている。自家の仕事場を拡げたり、近代的にととのえたり、隣近処の家々を蚕食気味に自分のものにしてビルを建てたりしてゆく。そういう現象は、井中氏の書きのこしたものによると、三十有余年の日本の経済の発達がもとで、それに墓石屋という仕事は、コッコッと石を金槌で刻むのが習性となっているから。その家の主人の勤勉さがものを言って、それに、おかみさんが亭主の尻を殴る鞭と、暮しの才覚がよくかみ合って出来上ってゆくものだそうだ。ゲンに氏の家へ大通りから曲る角にある石材屋は、氏が此の町へ引越して来た頃は、おやじが朝の四時と云うともう仕事場に下りてカッカッと槌の音を立てていた。朝の早起きを身上とする筋向いの豆腐屋より一時間早い。市場と云う所へ仕入れに行く魚屋、八百屋でも六時にガリガリと鎧戸をあげるのだから、石屋は二時間は早かった。一日に朝二時間だから、一年には七百三拾時間の仕事量があり、それは朝に限らず、夜の方にもそれ相当の超過労動量を加えると他の職業人を断然追い越す仕事量となる。尤もこの石屋は、主人公の働きに加えて、運があって多量の石材を只同然で手に入れる機会があった。それは日本敗戦で主人公自殺の悲劇をうたわれた近衛家の先祖からの墓地の縮小整理に当り、その寺と、石材屋が、廃石を山分けしたと言うのである。町には、底流に、井戸端会議から流れ出した噂話が伝説となって定着する場合がある。その噂話の主が、生存競争の場で負けると、その噂話は伝説とならずに消滅するが、その主が生存競争の場で栄えつづけると、その噂話は、熱烈なファンの

力によって、古典や宗教のように尾鰭がついて何千年も生き残って伝説となる。そのまちに三十余年住み、そのまちを好きになっていた井中氏には、その種の伝説についてのメモが残された。そのメモによると、廃石を山分けした石屋と寺には、同じ頃に聾唖の子供が出来たと云うのである。それは近衛家の隠霊の働きかけであると伝説は伝えている。勿論井中氏は、近衛家の隠霊と云うものを信じて記録に残しているのではなさそうだ。只そのようなまちの伝説の出来上る過程にかれは興味を持ったのであろう。氏には、その他にも、自分の散歩路にある家々についての噂話をメモしている。氏の住居に曲る私道の角の呑み屋のおかみは熱烈な学会員で、選挙の時には公明党を頼むとしつこく言うので用心用心とか。それから二、三軒先の運送屋の死んだおやじは元博打ちで、れっきとした共産党員であった。共産党とばくちとは相通ずるものがあるとか、それから更に二、三軒先きの家は、三代ご家と言われていたが後家の因縁は三代で終って四代目の養子はうまくやっているとか、その裏長屋の住人は覚醒剤密売で何度も暗い所へ行ったが、今度は網走から帰って来たとか、花屋のおやじは町会の会計をやっていて町の金をごまかしたとか、氏が毎晩呑みに行ったさいたま屋へ下りて行く途中のパーマネント屋の女主人は、もと吉原のお女郎で伜に天才的な気狂いがいるとか、その二、三軒先の時計屋の先代は保険金目当ての放火をやって暗い所へ行ったことがあるとか、それらは未だ伝説にまで昇華し切れないヒソヒソ話のたぐいであるが氏のメモ帖にかきのこされている。何故氏はこんなまちの噂話をメモしたのであろうか。それは氏が六十才を過ぎて教員と云う職業をやめてから、何かの縁で、ものを書くことの好きな、わかり易い言葉で言えば、文学好きな人たちと、同人誌と言うものに、見様見まねで小説をかき初めてから、その材料にもと、まちの噂話を書きとめておいたものであろう。氏は死ぬまでに、それでも四十編ぐらいは小説と称するものを書き残している。主として、自家から五百米程離れた酒店、さいたま屋で拾った材料をもとにしている風で、「さいたま屋風土記」「さいたま屋曼荼羅」「さいたま屋歳事記」などをのこしている。「日暮里界隈」という題になっているかれの短編は、自分の好きなまちの風景を次のように描いている。これは氏の住む近辺の風情をなかなかそれらしく描いていると、私には思えるので、かれ井中氏供養の気分で此処に一部再録してみたい。

〃この町には、テレビドラマや映画の撮影に恰好な場所が多い。時代物向きには、長い土塀がひっそりと残っていて、その向側に森閑とした樹木の小森があり、時々土塀の上を尾の房々とした鼬鼠（むささび）が蛇を追って走り、樹木の中に名の知れぬ鳥の絶叫が聞える寺が並ぶ。やたらに細く曲りくねった小路の長屋は、建てられてから百年は

するであろう。左右に少し傾むいて屋根瓦もずれて頼りないが、住んでいる人の丹精で、手のとどく格子戸の桟など入念に拭きこまれて銅色に光っている。そう云う長屋の角に共同水道の名残りが水を切られて残っていたりする。これなど明治大正ものの撮影にいい。何しろ大正十二年の大震火災にも、今度の戦争にも焼け残って来たこの町には、東京府下北豊島郡何々村の残影が思わぬ所にその姿をあらわす。住んでいる人は、それとははっきり気がつかぬだろうが、江戸が東京になってから、そして百余年の間に三代四代と人間やその人間の営みには移りかわりもあった筈だが、そのうつりかわりが、とてもゆっくりと、しかも目立たぬ静かさの中で過ぎて来たようであった。

一週間前には餅菓子屋兼食堂の竹の屋と梅の屋の間の小路の入口に、二台の撮影機械を積んだ自動車がとまっていて、そのあたりを鳥打帽子や中国帽、ベレー帽などをななめに頭にのせ、荒い格子縞のオーブンシャツなどをきて、中にはチョビ髭を蓄えたいかにも大正の頃活動屋と云われた風彩の男たちが事あり気にうろうろして廻り、小路の奥の方にはそのドラマの多分主演格なのであろう、胸の厚みの足らぬ体格の若い男が、顔はうすぎたなくドーラン焼けして、梅の屋の裏手の調理場の流し口の敷石にしゃがんで煙草を吸っていた。撮影が一服模様と云う所だろう。ここらの住人はこんなことには慣れているのであろうが、それでも竹の屋、梅の屋並びのそば屋、水菓子屋、文房具屋、パン屋のおかみさんたちや、向い側の不動産屋の主人公など十五、六人、それに街ゆく人も一寸足をとめて、この撮影がどんなドラマにまとまるのか、この一服のあとで格闘の場面でも始まらぬかと立って観ていた。

又二、三日前には、これで二度目になる。最初はNHKであった。駅からだらだら坂を上り切って都営霊園と名乗る墓地の方へ曲った道にある銅屋の銅松の前に、今度は文化フィルムの撮影車がとまっていて銅松の仕事場をうつしていた。その店の先代は拾年ばかり前、六十そこそこで死んだ。かれはベレー帽をかぶり、職人ではなくて芸術家だと称していたが、かれのお祭好きは根っからの江戸ッ子職人であることを物語っていた。銅松から半町ばかり離れている夕倉と云う彫刻屋の親分は、芸術家のせいか町の祭には特別の関心を示すことはなかったどころか、アトリエの屋根の天辺にロダンの〝考える人〟をもじった裸の像を飾って町家を見下ろさせていたが、銅松では、地元の氏神の祭礼には自分の店をとじて紅白の幕を表に張り、祭礼風に飾り立て、祭壇を店一杯につくって供え物をあげる。そしてその銅松の裏手の長屋に住んでいる毛島の亀さんがサービスに太鼓をたたいたりした。子供たちは普段何となく亀さんにおそわった笛を、ヒューヒョロ、ヒューヒョロヒョロ、ヒューと吹きならし、亀さんは太鼓をトタンタン、タントトン、トンとならした。何しろ亀さんは、上野鈴本寄席の囃方を若い時からやっているのだから、撥のさばきは手品師の手つきである。そしてその笛と太鼓の音色は、夏の強烈さが間もなく逝って、やがて秋が深まり冬が来るのだと歌っているようで、恋などしている若い男の胸をやる瀬ない不安と女を思うおもいで一杯にし、女たちもまたそういう男たちの心をそそるかのように、その祭の夜のために新調した浴衣に、とっておきの帯をたらりと結び、木履には鈴を仕組んでチチンコロチンと可愛い気な音をたて、口の中では酸漿をキューと鳴らした。

× × × ×

井中氏は、その酒屋でセンセと云う仇名で呼ばれていた。立ち呑み客たちはお互の本当の名前や、職業や暮し柄など知り合わない方が、酔いの間にまに自分を変身させたり、法螺を吹き合って快感に浸り度いところがある。そこで、或る時は風貌姿勢から来る印象で、例えば「海坊主」とか「オヒゲ」とか、又本当の苗字の頭文字に「チャン」とか「サン」をつける。例えば、クリチャン、センチャン、ヤスサン、トリサンと言ったたぐいである。新顔には「社長」「旦那」「先輩」というのが普通である。そこには相手を傷つけまいとするマナーも結構働いている。やくざのゴロ松がこの自分の仇名を大体感づいて、気に入らぬところから、名刺を配った。それには〝極北組荒川支部〟と肩書きがついていたが、その肩がきに驚いたり恐れをなす者はいない。大体やくざを警戒する者は、やくざのねらうおいしい話を秘かに持っている者に多い。立ち呑み客は凡そやくざにねらわれる持ち合せはない。井中氏の仇名の由来をたずねてみると、氏は実際、英語の教員を二十年程やり、若い頃は、その酒屋の仲たちの英語のベンキョウを見てやったこともあったらしい。氏の残した小説の中には、その酒屋の女房ハナエがぜに子と言う名前でよく出て来る。ぜに子とは空想力に乏しい井中氏が直接法を使って名づけた名前で、ハナエはこの店の経営について神経がピリピリしている所がある。無理もない。目を離せば、自分で無断で徳利からタンブラーにドクドクと焼酎をつぐやつ、店にある罐詰などポケットに素早く忍ばせる奴、多士斎々と云った按配だからである。

氏は自分が中学校の英語の教員であることを深く恥じて、そのことを店で口に出すことはなかったが、せまい世間と云うもので、どこからともなく、氏が、この酒屋の近くにある坊主の経営する私立駒立高等学校、中学校で英語教員やっていたとこの酒屋の主人常世の弟の数奇夫の耳にもれたことが切っ掛けになったらしい。

氏が何故、英語の教員であることを深く恥じていたのだろうか。それは氏が初めから教育と云うものを自分の

一生の職として選んだのではなく、四十に近くなって、食うに困って教員になったと云う引け目がつきまとったのであろう。かれは尤らしく、エゲレス国の劇作家、バーナード・ショウの〝出来る者は、やる。出来ない者は教える〟と云う言葉を引用して自分の心境を弁解しようとした形跡がある。だから英語を教えるということは、ろくに英語が出来ないと云うことになって残念であると彼は考えたらしい。それだけに井中氏は、他の英語教員よりはベンキョウしたと自負するところはあった様だが、さて四十才近くなって、それから奮発してあらためて他人を世間的に凌ごうなどとは、かれの生来の怠惰な性質が許さなかったのであろう。

かれ井中氏は、子供の頃からゆくゆく何になろう、何職業をえらぼうなぞと云う所謂ココロザシを持ったことがなかった。そういうココロザシは子供の頃、だれもがぼんやりながら憧れのような翳をひきながら心中に描くものであるが、かれにはそう云うものが全くなかったと云うことは、かれの生涯を節くれ立った見事な出来栄えに仕上げずに、立ち呑み酒屋から帰って玄関に崩れ倒れる不様な死にざまに終らせた大もとであったように思える。

子供の夢を助長するものは、母親の人生の観方、世間に対する見識のようなものが働くのではなかろうか。ところが氏の母親はトント善人で、人生の観方、世間に対する見識も単純で、かれ井中氏に強く影響をあたえる程のものを持ち合せていなかったと云えよう。

かの女の父親は、明治十年代に、創立間もない東京大学の前身の法科大学を出て、司法官になって、段々任地も東京に近づいて、千葉の地方裁判所の長となった頃、伜の非行を新聞にたたかれてその職をやめている。やめるときに大審院判事と云う称号を貰っているから今日の最高裁判事である。そのあとで、日本橋に弁護士を大々的に開業したが余り依頼者に親切でなかったらしく、間もなく父祖の屋敷のあった神田神保町一丁目の地代の高騰を手頼りに、さっさと新宿区西大久保の地に、四十代の半頃から、早やばや隠棲の生活に入った模様である。そのことは井中氏の小説「〇町〇丁目〇番地」や「老漢の系譜」の中にいろんな小説的扮飾をほどこされながら出て来る。井中氏の母親はその母親が昭憲皇太后の女官で、権の典待であったと云う仲人口の大うそのふれ込みで、上野の国の地主百姓の末子であった井中木曽夫の妻になるのだが、この井中木曽夫が矢張り東京帝国大学医学部を出た医者であったところから、かの女は伜の井中加和寿氏や、その兄弟を、自分の父親や夫の出た学校を出しさえすれば、世の中に適用する然るべき人間になるだろうと云う単純な考え方に終始したようである。自分の子供である井中加和寿の生来の資質と云ったものには全く目を向けていなかったのである。その結果、井中加

和寿氏は勿論のこと、その兄弟たちも一人として東京帝国大学に学ぶ者がなかったとは、何とも皮肉なことである、且つ、かの女の晩年を、日本国敗戦のことも手伝っていたく悲しませたもとになったようである。井中氏が六十七才にもなって、小説遊びなどに耽っている時に、この母親は九十三才で死んだ。氏がかの女の枕頭に立ったときは、既に酸素吸入器によって最後の呼吸を続けている状況であったが、その吸入器を、看護婦の制止の手を払いのけてはずして言ったのだ。

「カワズ、何時カエル、クラシは立ッテイルカ」

× × × × ×

井中加和寿氏は、死ぬ二ケ月前、夕方例の姿勢で傲然とさいたま屋へ入って行った。その屋の主人常世が、自分専用に置いている椅子にかけて、珍らしく本を読んでいる。かれの顔は読書に熱中しているらしく、二、三の立ちのみ客の存在を無視していた。普段、滅多に本など読む姿を見せたことのない常世であったから、氏はかれの前に立って思わず聞いた。

「何の本だい」

かれは氏を認めると、恥ずかしいことでもしていたかの様にあわてて席を立って言った。

「アタシの昔のセンセイの本ですよ。小学校のときの、ホラすぐそこの日暮里小学校ですがね」

かれは、老人とまでは言えないが既に、五十六才であるから、五十年近く前のセンセイの本であると言うことになる。装幀もしっかりした美本だ。

「どれ、みせて・・・」

氏はこの常世に三十年来、好意を持っている。その主な理由は、かれがお世辞が下手だからである。氏は何となく孔子の「言を巧し色を令するは、鮮し仁あること」と云う言葉が好きなのであった。その常世が氏と同じ立ち呑み客で、喧嘩ばやくて氏にも一度、つっかかって来たことのあるガリ屋（床屋）のサトオが、ある夏の夜、アパートで三、四名の愚連隊相手に喧嘩して、喧嘩両成敗にならずに懲役四年になったことがあった。それはサトオの相手方に女がいて、臨月の腹をかかえて喧嘩にまきこまれ、サトオにその腹を蹴られて死産になった上に、何と思ったのかサトオは、その女のスカートを自分の部屋に持ち帰っていたというので、強窃盗・殺人が成立するのだそうであった。この不公平な判決に常世が義憤を感じたのかどうか、かれはサトオの公判を傍聴したり、何度も面会に行ったりした。そのことは、井中氏の「さいたま屋」もののどこかに描かれている。しかも四年の刑を終えた時には、身元引受人を進んで引受けている。〝進んで〟と言うのは女房や母親カメの反対を押し切ってという意味であった。このガリ屋ことサトオは出所後間もなく、四十代の若さで死んでしまうが、常世は常日

頃、「あれは四年のアソコでの生活がこたえたのでしょうナ」と深い同情を表わすことが屢々あった。このことも井中氏の心を揺すぶったのであろう。氏はこういう人情に弱いところがあった。

常世があまり熱心な目つきで読んでいたので、本ずきの井中氏も〝借してくれヨ〟とも云えずに、その店で、小一時間呑みながら要所要所を拾い読みした。先ずその本は死んだ主人の書き捨ててあった原稿を奥さんが整理して編集したものであった。故人の略歴は、大正四年七月、小笠原父島に生れるとなっている。井中氏より半年、年上である。氏は二ケ月後の自分の死の運命を予感したとは思い過ごしになるであろうが、自分と同じ年の故人の考えていたことを知り度いと思ったのであろう。又氏も二十年程志ならずも教員をやったので、この本の主田中斉一郎氏の考え方をたずね度い気持ちをおこしたのであろう。本の末尾にある略歴は田中氏の足跡を次の様にしるしていた。

「昭和一〇年三月東京府豊島師範学校卒業」「同年四月故郷の扇浦小学校に赴任」「同十四年四月荒川区第一日暮里小学校に転任」「同十九年八月福島県いわき熱海へ学童疎開に附添」「仝二十年八月退職」

敗戦を見て、児童生徒の指導教育をあやまったとして、その職を投げて、千葉県勝浦市鵜原に引っこみ、漁業者となっている。これは生半可な覚悟では出来ないことだ。

昭和六十年代の朝日新聞は、「戦争」と云う投書欄を設けて、様ざまな人の戦争体験をのせているが、その大部分は扮飾があったり、うそがあったり、本当を知らなかったり、文章のまずさなどから私の胸をつくものは少なかったが、その中にひとつ次のような記事があった。この記事は、田中斉一郎氏の漁業者になったくわだてと対照的で、私の注意をも鋭くついた。もし井中加和寿氏が生きていたら、矢張り田中斉一郎氏とひき比べたろうと思われるので、その記事をそのまま抜粋してみる。題は〝西洋人形を切った乙女たち〟となっている。

「マーシャル群島クエゼリン・ルオット両島守備隊七千人近い日本軍玉砕をきいて間もなく、会津盆地は彼岸獅子の舞いで春を知らされた。当時十三才の女学生であった私たちは、校長の命令で、自宅や近処の家から西洋人形と名のつくすべての人形を学校に集めさせられた。人形をしまっておくこと自体が、非国民と教えられた。校庭せましと積み上げられた青い目の人形を鬼畜米兵に見立てて、刺殺訓練を乙女たちにやれと先生はいう。全校生徒は、木製のなぎなたを構え、積み上げられた人形の山を十重二十重と囲み合図を待つ。生徒数名の代表、うち一人はこの私。真剣を持たされまず切り込んだ（中略‖編者）次の日地方新聞は〝会津婦女子の意気盛んなり〟と称えた。この愚行を命じた校長が日本が翌年無条件降服のあと、他校に転じはしたが、ずっと校長の職をつづけ、だんだん校長の中で珍らしい日教組よりの思想をあきらかにしてラジオ、テレビにさえ顔を出すに至っていた。私はその人がテレビの画面に出ると思いをこめてスウィッチを切った。（56才主婦）

この様な節操を恥じない時流便乗の人に比べると田中斉一郎氏の生き方は壮にして爽であると言いたい。彼は晩年、小笠原島に帰りそこの教育長になって、〝わたしたちの小笠原〟〝ひらけゆく小笠原〟と云う中学生の副読本編集の陰の人になっているが、決して表に立ってはおらぬ。かれの残したものの中に〝教育長は何をするのか〟という自問自答がある。その中に〝人事の上での間に合わせの地位であるとしても、心に痛みを感じる〟という氏の人柄をそのままに吐露した文章がある。

井中加和寿氏が属していた同人誌の主宰者株に大和禎人と云う人がいて、この人に最近、十巻目の小説集「逆島記」という本が出版され、井中氏のところにも送られて来ていた。これは主人公佐原の喜三郎が八丈島を脱出するところが小説の山場で、その中に伊豆七島についての歴史的考証が折りこまれている。それは、「三宅島歴史年表」「武江年表」「八丈実記」等にもとずいた精緻を極めた作品で、井中加和寿氏を刺戟したらしい。だから氏は田中斉一郎氏が陰で主宰した副読本が欲しくなったのだ。彼は故人の奥さんに当てて、いきなり不躾な本の無心に及んだのである。それは如何に傲岸無礼な井中氏でも、かれの知っている限りの丁重な日本語をつらねた無心状であった。代金も本の到着と引きかえに送り度いと書いてあった。尤もかれは内心、この様な無心がかなえられるとは期待してはいなかったようであった。ところが殆んど折返し気味に田中斉一郎氏の妻女ののぶさんから次のような手紙にそえられて、酒屋の主人常世が熱心に読んでいた本に加えて、二冊の小笠原についての副読本まで届けられたのである。

「お手紙拝見致しました。ありがたいことでございます。早速お送り致します。そしてもし島へお訪ねになるお気持がありましたら、お電話でも頂ければ島の様子を色々お話致します。又これは供養でございますから読んで頂ければ幸いに存じますのでお料金なんかとんでもないことでございます。

末筆ですが、お体をお気をつけ下さいませ、取り急ぎお送り致します。

かしこ

× × × ×

田中斉一郎氏の奥さんに、名前も知らぬまま田中奥様という宛名で、遺稿集と、小笠原諸島の歴史、地理を述べた本を無心した所を察すると、井中加和寿氏は、それから旬日を出でずに自分の生命を終ることを予感してはいなかったのである。自分と同じ年の故人の遺稿集を読んで、その思想・心境をたずねたり、小笠原諸島について

も、知るところがありたいと望んでいたにちがいない。

氏がこの世に残したものは、古本屋で一山いくらと云う値段しかつかないがらくた本、千冊程、百数十冊の大学ノートやいろんな手帖に記された日記と、これ又壱銭にもならない骨董品十数点、その内訳を言うと、古道具屋で買った吸入器（かれは喉に吸入をあてて声をよくしようと云う野望を持っていた）街で拾って来て愛蔵していた尻尾の欠けた獅子の鋳像、さいたま屋酒店の先代から貰った酒徳利数本、此処十数年、夏になると軒につるして涼の気分を味わった風鈴、晩年毎日使った手製のスティッキ、近処の象牙屋の主人から貰った屑象牙から自分で削って作った揚子、菓子箸数十点、書き捨てた同人誌の小説四十編、著書と云えそうもない安装幀の本二種類。この千冊の本は目録を作り、昔の教員仲間に買って貰ってその金でさいたま屋で更にゆくゆく焼酎を呑もうと企だてていたらしいが、実現しないうちにかれは逝った。日記は全部焼き捨てたいとかれは思っていたのだが、それも果たせずに死んだ。

かれの書き捨てたものを田中斉一郎氏の奥さんの様に整理編集して、偲んでくれる者はない、でもそれはかれにとっては所詮どうでもいいことであったであろう。かれが毎夕、さいたま屋へ足を運ぶまで終日ぼんやり寄りかかっていた肘掛椅子のうしろに、永井荷風が紙くずがうずたかく積み重ねられた机と、火の気のない火鉢の間に尻をまくって、マフラーをかぶり、くの字になって、口のあたりに何か吐き戻した物が流れ、あたりに食い物の空き罐や、飲み物の瓶がちらばり、煙草、燐寸が投げ捨てられた部屋の中で死んでいる写真が二枚、わざわざ額縁に入れられて放り出されていた。昭和三十四年四月三十日の荷風の死にざまを某新聞が提供したもので、見出しに、文豪・永井荷風の凄絶なる死とあって、その見出しの文豪という文字と凄絶なるという文字を井中加和寿氏は丹念に墨で塗りつぶしている。この屍臭がにおい出すばかりの写真を、何故氏は額縁などにおさめていたのであろう。又かれは何故、文豪とか凄絶とかいう文字を塗りつぶしておいたのであろうか。井中加和寿氏には、荷風の様な華々しい時期もなかったし、その横たえられた部屋は、荷風終焉の部屋よりは少しは小奇麗にととのえられており、机上に一匹の亀が壺に入れられて飼われていて、カタカタとかすかな音を立てていた。

柳眉抄

大和禎人

りゅうび【柳眉】柳の葉のように細く、美しいまゆ。美人のまゆ。「—をさかだてる」（美人が怒る形容）

『岩波国語辞典』

引用する岩波書店のものにしろ、または新潮社のそれにしても、手軽な辞典では「柳眉」を解釈する内容はほとんど同じである。どうやら美人とかかわる形容ということに落ち着いている。形どうりしか辞書では引き出せない首題のようだ。だから、どうしても小説に書かざるを得ない仕儀を招くのである。それもまた止むを得ないことのようである。

さて、

粛啓　梅のほころぶ春のしきりと待たれる厳冬の候、皆さまには、お変りなくお過しのことと存じ上げます。

夫、卓郎儀、去る一月十二日七十三歳にて急逝いたしました。

以前から、心臓弁膜の持病があり、老年に達してからの身体はひび割れたガラス細工にも例えられようかと思いますが、「独生、独死、独居、独来」の言葉通り、ひとり静かに旅立ちました。

なお、故人の生前からの強い願いにより、葬儀は近親者のみにて、翌一月十三日相済ませましたので、ここに生前のご厚誼を深謝し、つつしんでお知らせ申し上げます。

昭和六十二年一月二十五日

〒———　————————

妻　志　田　品　子

葬儀万端は近親のみといっても、かえってそれは彼女にとって気を張りつめ、世間並のものではない虚々実々の心くばりに心身ともに疲れ果てる案配であったが、ようやく落ち着きを見たところでこんな喪のあいさつ状の

原稿を書いた。

そしてこれから先の対応は世間へ向けていっそう予測もつかないもので、雲をつかむような不安がこんどは胸を占めはじめていた。

（独生、独死、独居、独来）

彼女のしたためた言葉は考えぬいたものだったが、それは自身のこれからを暗示するところもあるようで、さらに身のひきしまる思いがあった。

（ひび割れたガラス細工のような）

と、いったもろさ、心もとなさは秘めて彼女にとっても心のヒダのオリになり、疎通を欠くコレステロールのように蓄積をしはじめていた。もっともコレステロールといっても悪玉ばかりでなく、善玉もあることぐらい彼女の知識にある。むしろこのさいはその二つのものを闘わせなければならないという成り行きが予感された。

品子は夫卓郎とは二十五歳を隔たる若妻だった。後添えとして、志田家の人となったのが、十三年前、卓郎六十歳、品子は三十五歳の時である。若妻というには決して若くなかった品子だったが、初婚であった。すでに男子ばかり三人の子供があり、卓郎はある私大の教授の職を停年までまだ数年を残して退職していた。名誉教授にはそのため欠格しており、当人に一向そのようなヤマ気もなく、ハシカ的な一種、流行ともいえる学園紛争いらいはとくに嫌気もさしていたから、弊履のように職をすてて去っている。もともと理事長の姻戚ということで迎えられたポストで古代文学を専門としながら、学問上の業績もなく、ついに学部長の椅子にすら座ることのなかった人である。その後は系列の短大講師として気楽な暮しをしていた。

一見、偉丈夫の彼が宿痾を抱えているかどで兵役にもとられなかったことは幸運に見えて、実のところ彼の人生をいっそう平凡にしている。その人が品子との再婚ではひどくハシャギを見せ、頭髪まで染め上げる変身ぶりを見せた。それは品子としても嬉しくないことではなかったが、「結婚」というものの得体の意外な底の浅さに少なからず失望を与えられた。先妻を亡くして失意の中にあった六十歳の卓郎に同情し、研究室つきの事務員だった品子がなにくれとなく（親切）を尽くしたあげく、

「どうかね、キミ、よかったらウチへこないか」

という求婚のことばにほだされ、プラトニックな気持で結婚したといういきさつだったから、裏切られるフシもあったと云えるのだった。

しかし、

（それが結婚というもの、ごく当然のことに気づかなかった、品子の方がどうかしているのだ）

と、いまは気づいている。

「品子、苦しい、救急車を呼んでおくれ、一一九をたのむよ」

あまりにも突然に襲ってきた死だった。そのまま卓郎は意識を吹き返さないまま旅立った。

（旅立ちとはいみじくも言ったもの）

と、思う。

卓郎はジェット機にでも乗ったように品子を離れて行った。アッと声を挙げることさえなく、しかもあえなく終えた始末であった。

（空蝉）

とはよくぞ言ったもの、つくづく品子の実感としてそれはいつまでも残る思いになった。残されたものが背負わねばならぬ「業」というべきものであったろう。

救急車に乗せた時はすでにこと切れていた。慌ただしく、その夜は仮通夜。三彦さんがそろった。三彦さんというのは三人の（彦）を通し名とする卓郎の遺児たちのことだ。

岳彦、史彦、嘉彦、

上から順にこうなる。通夜の席はもちろんこの順だったから、焼香に訪れた客たちの目もそれとなく、あるいはとくに注目してこの遺児たちの品定めをした向きも多かったであろう。

品子は凛然として遺児たちを従え、一番の上座に喪服姿も楚々とした風情で、なぜか艶めかしく座っていた。普通であれば嗣子の岳彦が彼女より上座を占めるのが穏やかかと思われるのだが、品子がそれを許さなかったのだ。

七十三歳の卓郎にしてなお、そんなことがあったのかと驚く人が大方であろう。品子の体内にはまだ卓郎がその死をかけた分泌物が潜められていた。不謹慎でしかも、この場では忌むべきものに違いなく、しかも恥ずかしいことであったが、品子にとってそれは二人が夫婦であった証しであった。この上なく恥ずかしい現実なのだ。艶めかしく品子が他人から見てそう写ったのもそんなことが秘められていたからも知れないのだった。

謹啓

如月なかば、文字どうり三寒四温、春日遅々としたこの頃でございますが、

貴家のみなさま方お変りもなくお過ごしのことと存じます。

過日、志田卓郎急逝のお知らせを差し上げましたところ、生前ご厚誼を下さいました方々一様に大変驚かれ、葬儀等内々にて執り行わせていただきましたにもかかわらず、後日、ご厚志ならびに心からの哀悼のお言葉をいただき、志田家一同深く感謝いたしております。

立春も過ぎ、故人が心待ちにしておりました梅花咲く季節となり漂う香りに生前の姿を憶う

日々をうち過ぎておりますが、早いもので五、七忌も過ぎ、月を越え弥生一日は、七、七忌に相当いたし、この日に定めて納骨を予定することに相成りました。その儀も内輪にて、との考えでしたが、明日会う別れにも言葉のあるように、最後の別れを、と折角おっしゃって下さる方々のお気持を有難くお受けいたし、四十九日法要のご案内を差し上げることにいたしました。

ただ三月とはいえ、穏やかな季節にはまだ遠く、お差し障りなければとの私共の気持をご推察の上ご臨席願えれば幸に存じます。

昭和六十二年二月十八日

記

一、昭和六十二年三月一日(日)午前十一時より

一、薬王院本堂にて

一、「辻花」にてお浄め

様

昭和六十二年二月十八日

志田品子

岳彦(長男)

史彦(次男)

嘉彦(三男)

この案内では三彦さんがその名を連ねていた。ただし筆頭者はやはり品子が譲っていない。原稿も三彦さんはあずかり知らないものであった。

三人の息子たちは凡庸なふつうのサラリーマンである。岳彦だけが妻帯しており、孫が二人あった。しかし、別居という点では他の二人と同じである。

(あのひとは父の連れあいには違いないが、母ではない)

三人から見れば品子は(あのひと)の立場である。そして、やがて起こる「相続」という問題ではそうした関係の戸籍上の母子は争うことがあるかも知れないのだ。卓郎の遺産などとるに足らないものであっても(手続)の煩わしさは避けることはできないはずだった。

品子がさきに発送した卓郎の訃を伝えるあいさつ状は死後十余日を経たものだったが、このことでまず物議を第一番にかもした。品子としては予想もしていなかったことだ。それは(栄典制度)から夫卓郎がもれ、勲章の追贈を逸したというものだった。

昭和十四年生れの品子と大正二年生れの卓郎の生れ育った土壌は同じ戦前でも著しく違うものだ。卓郎は大正モクラシーの時代に生い育ち、未完ながら一種のロマンを胸に描くことのあった世代だ。それにひきかえ、品子の方は戦前派でも未就学のまま戦争終結を迎えている。厳しい耐乏生活の記憶を何物よりも大きく脳裏に刻んでいる世代だった。

(卓郎は勲章を望んだろうか)

生前、密葬を希望し綿密に死出の旅路への心の準備をしていたことは知っていたが、そのことについては、いや、そんなことがあることすらついぞ話題になったことがなかった。いまとなっては推測の手がかりすらありようもないのだった。

春秋に叙勲の話題があることをそれとはなく品子も知っている。だがそれがどういう時期を限って行われるものか、まして勲章の種類がどれだけあり、それがどうした手順で授けられるものかまるで知らないのだ。(光栄)に輝き、喜びを語る式の報道にも関心を払ったことはなかった。

事々しく、そんな記事にスペース割くジャーナリズムに首をかしげたくなる、むしろそんな気持が品子の心のうちにある。

なるほど気をつけて見ればさらに叙位叙勲という記事となると毎日のようである。地方版の片隅にそれがない日の方が少ないのかも知れぬ。こちらは死没者への追贈記事である。よほど進歩的な日刊紙でも同じである。官界の主要人事を報じるならまだしも、役所の部課長異動、学校の長、警察消防の署長、駅長に及ぶ慣例がなんのふしぎもなげに見うけられる。さらに司法試験、医師や薬剤師の国家試験合格者の報道など、みな権威主義、ないしは官尊民卑の体質の現れではないのか、

「私が退官したときは」

と、こんどのいきさつの中でも口にした人があった。品子はそういう人に出会うと蔑みが先だってことばに窮するタチである。

ともかく、ことの成り行きに品子は一応ただ驚き恐縮するよりほかないのだ。

(明日会う別れにも言葉があるように……)

と計報に驚き、あと尋ねをされた方のシンミリした口調のあったことなぞ何処かへ追いやられた案配だった。品子にとっては思ってもみなかったことなのだ。

(奥さん、あなたご承知がなかったのですか、申請は故人とならられて十日以内、これが年末年始にでもカチあいますと役所が休みで大慌てになるところですよ、それくらい大変なものです)

(いいえ、それは……)

(ご存知がなかったのなら、しかたございませんな、わたくしどもの手落ちではございません、よろしゅうございますね)

大学の事務長という人が手を合わせて仏を拝み終えると、やおら、ふりむいてそう言った。それを言うためにこの人は志田の家の敷居をまたいだものだったようだ。

(奥さん、今日となっては手遅れでございます、みすみす頂けるものを惜しいことをいたしましたな、残念なことです、いまは故人の先生がお可哀相ですが、しかたご

ざいません）

ぶ然たる面もちをつくっていた。

ここで品子は（先生がお可哀相ですが）という言葉にとくに刺すような皮肉を感じとっていた。何気ないものにしろ会話の底に、ある冷たさをうけとったのだ。せめて（先生にはお気の毒ですが）というべきであろう。この際とくに過敏になっている品子にとって、若い至らなさを突き傷つける言葉だった。

事務長という立場にいるこの男は学内の動静を知悉し、ややもすれば教授、助教授、講師、助手、副手と数多い人事を将棋の歩兵ぐらいに思っているかも知れないのだった。品子が年若い後添えであること、研究室の方の事務助手であったことなぞもちろん知った上の言い方に思えるのだった。

「わかりました、ご懸念なくお願いいたします、卓郎のこれも意志でございますから」

言いつつ品子の柳眉がひきつるように見えた。

（眉秀でる）という形容は品子のためにあるように美しい。いまそのあたりに並でない凛とした決意の漂うのが見えた。

（この女の濡れたようにさえ見える眉はきっとさまざまな表情をもつに相違ない）

事務長の男は鼻白みながら不謹慎な思いを抱き、だが、言葉の継ぎ穂を失ってひきさがった。

三彦さんのうちとくに嗣子岳彦は隣席にいて一部始終を聞いていたはずであったが、あとあとこのことについてはなにも言わないで終っている。幸なことに、さらさら関心を示す気配すらなかった。むしろ世間的にかえって話題を当分残しそうに思え、品子の立場は苦しいことがありそうであった。かりそめにも学界に籍をおいた卓郎の周辺はそういったことにうるさい固陋の世界なのだ。

薬王院での納骨を無事終った。墓碑は生前すでに築かれていて、「志田氏塔」という累代墓だ。五輪であることも卓郎の選定だが、「何々家之墓」式の刻字を避けた「氏塔」とあるところに個性の認められるものだった。

（「何々家」というのは厭だ、たいした家でもないものがおかしい、「之墓」もいけない、森林太郎墓、芥川龍之介墓、みんな心ある人達のものは「之」が入ってはいない、「之」はおかしいのだ、できれば戒名も刻んでもらいたくないが、それはまぁいいでしょう、俗名はかならずフルネームでたのんだよ）

五輪塔の奥津城が完成を見た時、卓郎はそんなふうのことを品子に語りかけたことだ。この定見から考えれば叙勲のことはその念頭になかったか、あるいはことさら言及を避けたものであるかもしれない。

「辻花」の方の浄めは懐石料理で、もちろん品子の趣向に出たものだったが、蔭で派手を囁かれる傾きを免れなかったようだ。

さきの案内状は末尾に※印を付して、香料・供花等は固く辞退させていただく旨を言い添え、何卒お心遣いなきようとしてあったが、せっかく案内をうけた方はそうもいかないのであった。なにらかの縁故で訃報に驚き弔問に訪れた人々を対象に、意を尽くそうとする善意にかかわらず、施主品子の派手としてうけとられる傾きの法事であったことは否定できないであろう。少なくとも日ならず二度の足を運んだ客が大方であった。

拝啓

瑞香薫りつつもなお春寒を覚える砌、貴家ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

故志田卓郎

一病息災を願い、日々努めて参りましたが、（老いとは呼ばれぬまま）とお悼み下さる言葉通り病床に臥すこともなく一月十二日他界いたしました。

その際には、大変ご丁重な弔詞並びにご厚志を頂戴いたしましたことを心より厚くおん礼申し上げます。お蔭様をもちまして、観岳院卓山教与居士、ご縁浅からぬ方々の参集を頂き、七、七忌法要も滞りなく相済ませることができました。

五蘊盛苦を離れ、彼岸に旅立ったいまは、私共天への転生を願い回向を勤めることを心得にいたす所存でございます。

つきましては、心温まるお慰め、お励ましに対し早速にも拝趨の上、おん礼申し上げるのが本来ではございますが、略儀書中をもってご挨拶申し上げさせていただきます。

なお供養の気持をこめ、故人が好みました、「天人舞楽」色紙の写を添え、心ばかりの粗品をお届け致しますので、ご受納下さいますれば幸いに存じます。

品子の書いた三つ目のあいさつ状である。前に引用した二種、二様の内容と比べると、やや生硬が認められて、品子の気張りようを目のあたりに見るようである。たしかに気張っている。しかし、それは気取りとは違うものだ。一所懸命なのだった。

はじめて卓郎の戒名も明らかである。だが、

（できれば戒名も刻んでもらいたくないが……）

と言っていた卓郎の予見した没個性を免れないものだ。「志田卓郎」はこの戒名に隠れたくない、しかし、それは（できれば）というかたちで遺族に強いるものでなかったところに、やはり彼らしさがある。品子は少なくともその真意をうけとっているつもりだ。「観岳院」は山を愛したということからしい。長男に「岳彦」と名づけた卓郎自身の吾意に似る皮肉かも知れない。

「五蘊盛苦を離れ」

と、あるくだりは苦心の文章らしいのだが、いよいよ難かしい。品子は仏事に親しむことで、難解な言葉を覚え、それが使いたかったものであろうか、（五蘊皆空）といえばどうやら辞書でひきあてることができる。人間を成り立たせている五つの要素を五蘊というらしい。色（肉体）、受（感覚）、想（想像）、業（心の作用）、識（意識）がそれというものだ。この際は品子夫人に教えられる案配である。蘊は集まるという意味だそうである。皆空は引き得ても、盛苦となるとついに探しても無駄のようである。いずれ仏教関係に引用する根拠をおくのであろう。品子自身に問う以外ないように思える。

ともあれ、仏事を一通り無事終えると、ポツンと品子ただ一人が置き去りになった。三彦さん達にふたたび見まえる時はさしあたり新盆の行事の時か、相続問題で親族会議の必要を生じる時であろう。さしあたり潮のひくように、品子を無視するように、一言もその問題には触れず彼らは去って行った。

当面、すでに税務署からは葬儀に関し照会の文書をうけとっていた。祭壇は何段のものを使用したか、香典の総額はいくらであったか、などといった遺族の心情を逆なでするような内容のものだった。品子はそれをあえて岳彦には示さないままにした。少なくとも、この回答は自分の責任として処理したいと思ったからだ。

品子はこのところ、しばしば夢を見る。明らかに仏事の疲れが出てきたもののようだ。

「品子、安心しておくれ、勲章はこちらへきてから貰えたからね、安心おし」

卓郎が夢枕に立った。現実、それは本当のことだった。

「お前もはやく来なさい、勲章ぐらいわけなく貰ってあげるから、安心していいのだよ」

卓郎は大正時代の幼児にかえって、肩あげのとれない紺絣の和服姿、兵隊ゴッコでもしていたらしいその胸に勲章を下げていた。もちろん品子がそうした幼児風俗を知るはずがない。古いアルバムから抜け出したそのままの姿に違いない。そうして見ると、やはりこれは夢だったのだ。そして、品子が間違いなく卓郎の妻だったことを確定するような夢でもあった。

（六二・六・二九）

男たちの藩（八）

第五章　黒い影

三戸岡道夫

〔一〕

雨が降っている。

夜中に大三郎は眼をさました。雨脚の音から察すると、かなりひどいもようで、風も強かった。

起きあがって耳を澄ませた。

「すすきが原は大丈夫かな？」

この一年間大三郎の頭には、すすきが原のことしかなかった。寝食を忘れ、開拓に打ちこんできた甲斐があって、開拓は予定通りに進み、修身も長尾真十郎も満足してくれていた。だから、その期待を裏切ってはならないという責任感が、つねに大三郎を離さないのであった。

崖くずれはないか。

雨水が苗を押し流してしまわないか。

しかしそれよりも心配なのは、あの事であった。暴風雨の夜は見張りがおろそかになるので、あの危険性が多い。

「見廻りに行かなくてはならない」

大三郎は立ちあがった。だが、いま何時ごろなのか見当がつかない。宵の口からぐっすり眠ったようにも思うし、寝たらすぐ眠が覚めたようにも思える。しかし一刻寝た若い大三郎の身体は、すっかり体力を回復していた。逞ましい手足に、すばやく手甲と脚絆を巻くと、外に出た。

すごい吹き降りで、息もつけない。蓑を背にし、笠をかぶっていても、たちまちずぶ濡れになってしまった。だが大三郎は暴風雨の中を、ひたすらすすきが原へと急いだ。

昼ならば新緑が眼にしみる台地の坂道は、黒々と林が音をたてて荒れ狂い、通いなれた大三郎でも足がすくんだ。

大三郎は一番開拓条件の悪い北西部を担当しているの

でとくに心配なのだった。山が高いうえに、斜面の構造が悪いので、他の区域にくらべて大幅な地形の改造をやっており、したがって地盤が弱いからだった。大雨の時は崖くずれや、土砂の流出が起きやすい。

風雨に吹きとばされながら大三郎は担当地域を隅から隅まで見て廻ったが、しかし幸いにしてたいした心配はなさそうであった。

（念を入れて仕事をしたお蔭だ）

そしてあの事も大三郎の地域では大丈夫のようであった。大三郎は風雨の闇をすかすようにして、苗の一本一本をたしかめたが、横倒しになるほど風に苗は揺れながらも、ちゃんと植わっていた。

ほっとした気持で、台地の中央に眼をやった。その小高いあたりには見張小屋が建っていて、毎夜百姓が交代で夜警に当っているはずだった。

だが大三郎は他の区域のことも気になった。そこで隣の斜面へと移っていった。虎組の開拓地域だったが、そこにも異常は見られず、次の龍組にも異常はない。

風雨はいぜんとして強い。

だが龍組から仁王組の区域に入ったときだった。

「や、やーっ…？」

大三郎は鋭い声をあげた。恐れていたあの事がついに起ったからであった。

おびただしい茶の苗が引き抜かれ、泥水の中に屍のように投げ棄てられているのであった。三十本や四十本ではない。ほとんど仁王組の半分以上の苗が引き抜かれている。そしてそれも最近の苗ばかりではない、すでに昨年植えて根ずいた苗までも無惨に抜かれて捨てられているではないか。

「畜生！やりおったな…」

怒りが大三郎の体内を殺意のようにかけめぐった。

このような被害は始めてではなかった。これまでに何回となくあった。犯人はわからない。しかし見当はついた。開拓に反対する高柳一派の仕わざにちがいない。

と、その時、大三郎の視界に、黒くす早く動くものがあった。

とぎ澄まされた大三郎の神経は、それが人の影であることを見逃さなかった。

「ついに見つけたぞ」

大三郎は黒い影にむかって突進していった。

（二）

二年前の初夏、すすきが原植樹式に修身が鍬を入れて以来、大三郎は生涯こんなに働いたことはないほど仕事に精を出した。

朝は四時になるともう眼を覚した。冬ならまだ深夜である。しかしもう大三郎は働きたくて、じっと寝ていられないのだった。とび起きて、外に出る。凍りつくように寒い。空を見上げると満天に星が輝いていた。今日も天気は好さそうだった。手早く朝飯をかきこむ。朝の六時には村の四辻に集合である。吐く息が白い。しかし寒さは身体をすっきりさせる。人々の気持は張りつめていた。

全員が集合すると、すすきが原にむかって出発である。足許はまだ暗い。しかし台地の麓にさしかかる頃には、しらじらと夜は明けて、同じ台地にむかう他の作業隊の行列が見えてくる。

「おーい」

「おーい」

声をかけあって、坂道をのぼる。

霜がまっ白におり、鼻や耳や、鍬を持つ指先が痛いように冷いが、働き出せばすぐ身体がぬくもってきた。

年貢が納められなくて水牢に引っぱられた頃とは別人のように、大三郎は生き生きとしていた。仕事がこれほどたのしいと思ったことはなかった。とくに大三郎はチームのリーダーであるので責任が重かったが、しかしそれは同時に誇りでもあった。

リーダーともなれば人一倍つらいこともあった。加えて大三郎は作業が一番困難な北西部の地域を進んで受持っていたので、途中で何回も投げ出したくなることもあったが、しかし弱音は絶対に吐かなかった。

大三郎は朝早くから夜おそくまで人一倍働き、作業が終ってからも一人鶴嘴を握って木の根を掘り起し、苗木に水をやり、休みの日にも一人で見廻りに出掛けていった。

（他の組には負けられない）

疲れを知らない若さと体力を武器に、働きに働いてきた。

しかし開拓はすべて順調に進んだわけではなかった。木を倒し、木の根を掘り、山を削り、谷を埋め、出来た畑に苗を植えていくという仕事のほかに、予想もしていなかったアクシデントが次々と大三郎たちを苦しめた。

雨が山の斜面を苗木もろとも押し流してしまったり、そうかと思うと夏枯れで苗が死にそうになり、桶で水を谷から汲み上げたこともあった。冬になれば霜や寒さから護るために、藁や筵で苗木を覆い、新緑の頃には旺盛な害虫に新芽を喰い荒されて、困りはてるということもあった。

しかし一番困ったのは開拓工事への妨害であった。苦労して切り開いた茶畑の中に、いつの間にやら岩や石が投げこまれ、ときには無惨にも苗が引き抜かれてしまうのであった。最初のうちは村の悪童のいたずらぐらいに考えていたのだが、どうもそうではなさそうだ。あまりに執拗に繰り返えされすぎる。

（反対派の仕業では？）

だが人の寝静まった夜に功妙に行われるので、容易にその正体が摑めなかった。

（同じ藩の者がこんなひどいことをするなんて許せない）

そのために見張小屋を建て、当番制で警戒に当っているのだが、なにせ広い台地のことである。隅から隅まで見張るなんてことはとても出来ないので、天気の悪い夜は被害が避けられなかった。

しかしそうした苦労に耐えている人夫を元気ずけたのは、時々見廻りにくる修身の姿だった。いつも修身は前ぶれもなく、供も、二、三人という身軽さで、馬に乗ってやってきた。

台地に分散して働くまっ黒に日に焼けた男たちの裸体が汗に濡れて躍動するのを見ると、いつも修身は工事成功のまちがいなさを実感するのだった。汗を流しているのは百姓ばかりではない。武士もおれば、商人、職人も混り、文字通り藩をあげての開拓であった。色の白い商人はたちまち太陽で顔をまっ赤に焼き、武士は武道で鍛えた逞ましい両腕で鍬を振りあげ、土に挑んでいた。

当初人夫を募集する時の対象は百姓だけだったが、やってみると武士や商人たちからも

「いっしょに開拓したい」

という希望が続々と寄せられたのであった。これは予想もしないことだった。武士は労働はしないというのが掟である。それを武士が進んで力仕事を申し出るとは、財政再建が浸透しはじめた証拠だと修身は喜んだ。

しかしこれに反対する者もいた。開拓などというものは武士の本道から外れたもので、百姓たちに任せておけばいいという高柳派の考えに賛成する者も大勢いた。武士は武をもって仕えるべきで、力仕事をもってしたのでは武士の面目が立たないという理である。

これに対して修身は

「たしかに開拓工事は武士の身分に不想応な仕事かもしれない。しかし今は臨時非常体制で臨機応変に考えるべきである。現今の開拓工事と戦時における戦争の手柄とは、優劣をつけがたい重要な仕事で、労働奉仕も立派な忠節である」

と藩士たちを励ました。

だがこの時点になると、そうした修身の言葉をまつまでもなく、すでに下級武士の間には、古い武士の面子や意地にこだわっていては駄目だという意識が急速に拡まり始めていた。藩の財政の窮状を見れば、意地を張りあって議論ばかりしていても、何の進歩もない。茶園が必要ならば、その開拓をやろうと、下級武士たちの生活感覚は現実的に反応するのであった。

武士の参加は百姓や町人たちをさらに刺戟した。

「百姓などに負けてたまるか、それこそ武士の面目がすたるわい」

と武士が刀を鍬に代えて腕に力をこめれば

「土を掘るのはおいらの専門さ。さむらいに負けてたまるかい」

とお互いにライバル意識を燃え上らせた。

そうした汗まみれ、泥まみれの男たちの背にむかって、修身はいつも手を合わせたい気持にかられるのだった。

すすきが原には男たちばかりではない、女たちも大勢いた。

その仕事は炊事である。

男たちは猛烈に働くので、腹がへる。食うのが一番の慰労であり、たのしみである。

台地中央の窪地には共同炊事場が作られていた。そこで毎日千人を超す食事が作られるのである。当初は各組から炊事当番を出しあって作っていたのだが、しかし日が経つにつれて

「大の男が炊事をやっている暇があったら、開拓に精を出すべきだ。飯作りは女子供の仕事じゃわい」

筋骨たくましい男たちが、米をといだり、大根を切ったりしているのは、いかにも勿体ない。それに不器用である。

「それじゃ、うちの嬶に手伝わせよう」

「うちの婆さんだってまだ役にたつぞ」

たちまち百姓の嬶や婆さん、娘が手伝いにくるようになって、炊事は女の手に移った。

すると武士や町人の妻も黙ってはいなかった。

「夫が鍬を持ち、畚をかついでいるというのに、わたしたちが何もしないでいるわけにはいかない」

こぞって炊事に集ってきた。

そうした中にあって、まっ先に襷がけで馳けつけたのは、長尾真十郎の妻の幾代であった。いまは家老でも、昔の身分は足軽である。飯の炊き出しぐらいは何でもない。だが村の女たちは驚いて

「いくら何でもご家老の奥方さまに、百姓が食うめしを炊かすわけにはいきません。どうかお帰りください」

と押し帰してしまった。

しかしそのまま幾代はじっとしていることができなかった。何か自分でも出来ることはないか。すると給食の金を藩の勘定方から受取り、それで米や芋、野菜、味噌、醤油を仕入れる、面倒な仕事のあることがわかった。そこで幾代はこの仕入れ係を一手に引受け、蔭で盡力したのであった。

こうして出来た食事だから、その出来、不出来に文句を言う者はなく、見廻りに来た修身や真十郎たちも、いっしょに車座になって舌つづみを打った。城中の食事よりも、台地の雑炊の方がうまかった。鍋の中には野菜のほかに、台地で採れた野草や、時に野兎や山鳥の肉なども刻みこまれていて、湯気のたつ、土の匂りのする雑炊

をすすっていると、修身はひしと美春藩の領主であることのよろこびと責任を感ずるのであった。

それは修身が美春藩に来てはじめて馬でこの台地に馳けあがり、湿った黒い土を手に握りしめた時の感激と同じものであった。

（この土とともに一生自分は生きて行こう）

修身はあらためて呟いた。

（三）

大三郎は黒い影にむかって突進した。

雨風がひどい。

雨が頬に痛いくらいに当り、眼が開けられない。息もできない。しかし

（ついに犯人を見つけた）

その興奮が大三郎を阿修羅のように走らせた。黒い影を逃してはならない。

大三郎は灌木の茂みを抜け、ぬかるみに足をすくわれながら、黒い影の背後に襲いかかろうとした。だが、その一瞬

（待てよ…）

ある分別が大三郎にブレーキをかけた。

（必要なのは捕えることではない。その正体を見破ることだ）

方向を変えて大三郎は見張小屋へ走った。

「開けろ、開けろ…！」

破れ木戸を手荒く開けると、中から三人の男たちが、戸口を振り返った。

「来たぞ！苗木荒しが…」

視線がギロッと光った。

大三郎はその三人にある作戦を告げた。

血走った眼で三人がうなずくと、一人は留守番として残り、あとの二人と大三郎とが、しのつく雨の中へ飛び出した。

途中で二手に分かれて、黒い影を挟み打ちするように取り囲んだ。

黒い影はさかんに苗木を引き抜いている。それも苗木が再び役に立たぬように、わざと二つにへし折って捨てている。

大三郎は作戦通り山道の下り口の灌木の蔭に身を隠して待っていた。

「この野郎！」

反対側の闇で一人が大声で叫び、影にむかって、とびかかった。

黒い影は飛鳥のように逃げ出した。すると他の一人が逃げ道をふさぐようにして

「野郎、ぶっ殺すぞ」

影は反射的に方向を転じて、大三郎のひそんでいる灌木の方へと逃げてきた。思惑通りの動きだった。

大三郎の前を影が逃げていく。

大三郎はその後を追った。

影はしばらくの間、闇の中を走って逃げていたが、坂道を途中まで降りると、足どりをゆるめた。肩で大きく息をしている。背の高い身体つきは、武士のものだった。

（誰だろう…？）

だが黒い布で顔を包み、黒い裁着姿に身を固めているので、わからない。

黒い影は台地を下り、村に入った。

（どこまで行くのか？）

それを尾行するのが大三郎の作戦であった。

あの場で取り押さえてみても、犯人が口を割らない限り正体はわからない。だからわざと逃がして、尾行作戦に出たのである。

黒い影はやがて町並に入った。

そして武家屋敷へと近ずいていく。

菊掛川を渡る手前で、影は不意に右に曲った。大三郎は危うく見失うところだった。あわてて足を早め、曲り角から首を伸すと、黒い影はとある屋敷の裏口へと吸いこまれるように消えていった。

大三郎はその裏木戸に近ずき、用心深く見上げた。

医師の宗悦の屋敷の裏口であった。

宗悦が自分の再建策が取り上げられないのを怨んで、財政再建に反対していることは、大三郎も聞いていた。

（だが宗悦自らがすすきが原まで出掛けていくことはないだろう。それにあの頑丈な身体つきや、素早い身のこなしは、医師のものではない。とすると、あれは宗悦の下男、それとも書生か？）

黒い影は大三郎の想像した通り、下男の留十で、宗悦が用心棒代わりに使っている男であった。

（四）

高柳玄宰が濫褸を出すまで待つのだと、長尾真十郎は方針を決めてはいるものの、高柳がすでに書類に判を押して渡したという事実が、たえず真十郎の気持にひっかかっていた。

いったい、どんな書類に判を押したのか。

そのような時にどんな書類が必要なのか、闇の金融の世界にうとい真十郎には、見当もつかなかった。

それが千羽功兵衛のその後の調査で高柳は融資申込書に判を押し、念書も出していることがわかってきたのである。そして加賀藩の家老と称する加賀谷兵庫も、また澄田藩の勘定奉行岡島文之丞も、高柳を信用させるために彦五郎が仕組んだ囮だということもわかってきた。功兵衛が直接眼にした囮はこの二人であったが、その後も高柳の前には、老中の側近だと称する人間や、豊臣家の血を引く者だとかいう人間が入れ代わり、立ち代わり姿を現わしているようであった。これでいよいよ太閤資金

は美春藩を舞台にした大詐欺事件であることがはっきりしてきたと思った。

高柳が判を押した書類の効力については、至急研究する必要がある。そうでないと大変なことになる。いつの日にか黒い手によってその書類が突きつけられ、美春藩がその始末をつけなければならない破目に陥ることは眼に見えている。

真十郎は不安になった。

（誰に聞いたらいいのだろう）

だがこんなことを相談できる人間は、どこにもいなかった。結局専門家に意見を聞く以外ないだろう。専門家といえば両替商である。

とすれば大阪の平野屋しかない。しかし相談の内容が内容だけに、番頭の新六を通してというわけにはいかない。これは直接主人の平野屋栄蔵に逢ってでなくてはならないだろう。

真十郎は千羽功兵衛に平野屋栄蔵あての手紙を持たせ、大阪へ走らせた。

美春藩の大阪蔵屋敷は堀江にある。功兵衛は旅を重ねて大阪に着き、いったん蔵屋敷に入ると、翌日平野屋を訪れた。

今日の功兵衛は美春藩家老長尾真十郎の名代である。したがって迎える平野屋栄蔵の方でも、おろそかにしなかった。二人はしばし別室にこもって密談の時をすごしたが、

「ご用心なさるのに越したことはありません」

栄蔵は事の真相を察して、そう忠告した。こうした例は時々あるようで

「てまえどもも、時に見たり、聞いたりしております」

栄蔵は、最近太閤資金にひっかかって、書類の回収に苦労している藩のことなどを話してくれ

「早急に回収されるのがよろしい」

とアドバイスしてくれた。

「申込書だから大丈夫だと簡単に判を押しますと、とんでもないことになります。うまいこと判を押させながら、内容をよく読んでみますと、たいていが借用証文になっているのが、奴らのやり口でございます。ひどいのになると、内容が手形の文言になってしまっているものもございます」

聞いている功兵衛は背筋が寒くなった。高柳が判を押した書類はどうなのであろうか。

「ところがでございますよ…」

栄蔵は話をつづけた。

「……いったん判を押してしまえば、終りでございますよ。お金の世界では判がすべてです。それ以外の言い訳は通用いたしません。判を押した以上、大名は家名をかけ、商人は身代をかけて、それを決済しなければなりません。とくに藩の名前を使って、藩主や家老が判を押した書類は、一種の手形と同価値に扱われます。だから太閤資金という幻の金を餌にして、そのような証文を騙しとるのに詐欺師たちが血眼になるのです。彼等はその証文を闇の金融界に持ちこんで換金するのです」

「貸さないどころではございません。金の世界は複雑でございます。裏に廻ればそんな金貸しは、うじゃうじゃおりますよ。考えてもごらんなさいませ。お大名が判を押した借入証文、それを楯に支払いを迫れば、拒絶できる藩はありません。もしも支払わなければ騒ぎは大きくなって…、いや、わざと騒ぎを大きくするのですよ…、そうなれば藩の信用問題となり、公儀に知れるのがこわいものだから、騙されたと知りながら仕方なく金を払って、書類を回収してしまうのです。だからこれほど間違いのない担保はございません。太閤資金が公儀に知れて、お家取潰しになった藩もございます。こわいことです。また太閤資金にひっかかったばかりに、ますます借金がふえて、財政破綻に拍車をかけている藩も私は知っております。藩主や家老が判を押した書類の回収に失敗いたしますと、ただではすまないのがこの世界の常識でございます」

そうした報告を功兵衛から聞き、真十郎は慄然とした。

そんな矢先であった。江戸藩邸で不思議な事件が起きたのは。

事件というのはこうだった。美春藩には藩主や家老たちの署名、花押、印影をまとめた台帳が備えつけてある。現代で言えば会社の署名印鑑簿に該当しようか。原本は三通あって国元の勘定方、江戸上屋敷、大阪蔵屋敷の三ヵ所に備え付けられていた。そして副本が米島屋をはじめ、平野屋その他の、美春藩に出入りの両替商のところに届けてあり、金銭に関する契約書類の、署名、押印の真正を確認するための、極秘台帳であった。

それが江戸屋敷から紛失したというのである。いつもは蔵の中に納めてある。紛失を発見した三日前にそれを使っているから、その時点ではたしかにあったのである。格納場所をまちがえたのではと、他の場所を探してみたが見当らない。誰に聞いても記憶がない。忽然と蒸発してしまった感じであった。

ところが十日ほどたって、台帳は発見されたというのである。所定の場所に、きちんと格納されていた。不思議である。

台帳はどこへ行っていたのか。誰かが必要なために持ち出した、返却するのを忘れていると、騒ぎが大きくなりすぎて、返しそびれた。そこで騒ぎが静まるのを待って返却したのではないかというのが真十郎の善意を推理であったが、しかしよく考えてみると、そこには何かの黒い手が存在しているような気がしてならないのであっ

った。

真十郎はこれと同じような事件が三年前にも、美春藩の江戸屋敷で起ったことを思い出した。そのときは蔵から盗まれたのは決算書であったが、しばらくすると無事戻ってきた。内部の者の仕わざか、外部から侵入したのか、犯人はわからないままに現在に至っているが、真十郎は外部から侵入したのにちがいないと睨んでいた。大名の決算書など盗んで、何の利益になるであろう。一文の得にもなりはしない。とすると犯人は決算書がほしいのではなくて、内容を見ることに目的があったのではないか。見てしまえば用がないので元の蔵に返した。そうとしか考えられない。

三年前といえば財政再建計画の始まる寸前である。笠倉彦五郎が米島屋を通して美春藩を狙いはじめた時期とほぼ一致する。彦五郎が美春藩へ太閤資金を仕掛けるに先だち、美春藩の財政困窮度を具体的な決算数字で確かめたかったのではなかろうか。彦五郎が直接しのび込んだのか、手下を使ったのかはわからないが、犯人はまちがいなく彦五郎だと真十郎は推理していた。

今度の台帳紛失事件もこの決算書紛失事件と、どんびしゃり似ている。

だが、今度は何のために。

彦五郎は高柳が書類に押した印鑑が、台帳に正式に登録されているものかどうかを確認したかったのではなかろうか。

ということは書類がすでに美春藩へ請求される段階に来ていることを示している。

真十郎は彦五郎という男が台帳に額をすりつけるようにして、印鑑を照合している姿を想像した。

美春藩の守備は大丈夫であろうか。

その夜真十郎は珍らしく夢をみた。

暗闇の中から黒い大きな手が出て、首をつかまれ、息の止まる夢であった。そしてうなされた。これまでの真十郎にないことであった。

〔五〕

火事が起きたのは、それから十日ほどたった頃であった。

夜中であった。

月もない。

美春領内は深い眠りに沈み、美春城の天守閣だけが目ざめたように黒い触角を夜空にのばしている。すすきが原台地は黒い獣のように寝そべっていた。その闇の静けさには、犯罪を誘発しそうな不気味さがひそんでいた。

と、その時、予感の裏ずけのように、ぽっと、赤いものが闇の中に見えた。それはあっという間に炎の形となって、夜空に立ちのぼっていった。

「火事だ！」

町方の一角が騒がしくなる。半鐘が鳴る。火消し組が出る。

今まで眠りに沈んでいた美春城下はにわかにざわめき出した。

長尾真十郎のところへは、町方役人から連絡がある前に、すでに闇の使者、傷の留蔵から報告が入っていた。

「火事はどこだ？」

「尚文館にございます」

「えっ、尚文館！」

真十郎は絶句した。

「どうして尚文館が？」

「原因はまだわかりません」

しかし火事の背後で黒い手が動いているのを真十郎は感じた。

「尚文館は完成して間がない。その新しい建物が、どうして火事に…？それに尚文館はとくに殿のご発意で建てられたものだ。殿のご落胆が眼に見えるようじゃ」

尚文館は美春城と同じ丘に建てられた学問所である。学問に熱心な修身が、一等地を選んで建設したのである。

真十郎は城中へ急行した。警固の武士達の間を縫って修身の館に近ずくと、修身もすでに起きていて、居間の障子を開け、闇のなかに燃える火事を眺めていた。が、真十郎を見るといきなり

「実山先生はご無事か？」

と師の安否を気ずかった。

「先生のご宿舎は離れておりますので大丈夫にございます。さきほどお見舞を差上げました」

「火事は不審火なのか？」

尚文館は学問をする所であるから、火の気はない。夜中に火を吹くなんてことは、ありえない。だから修身も何かを感ずいているのだった。しかし真十郎は

「後ほどよく調べまして…」

と慎重に答えた。

しかし真十郎はすでに傷の留蔵に不審火の調査を命じていた。留蔵ならば必ず何かを摑んでくるであろう。

真十郎は放火犯人の黒い影が、すーっと、医師宗悦の裏木戸へ消えていくのを想像したが、しかし想像はあくまでも想像である。修身の前で軽々に口に出すべきものではなかった。

〔六〕

修身の財政再建の三本柱は、大倹約令と殖産振興、それに教育であった。とくに政策を長期に遂行していくためには、意識改革が必須で、それには教育の普及が必要であった。

加えて修身自身が生れつき学問好きであった。とくに歴史に興味があり、一国の動乱はどのように起り、国の

平和はどのようにもたらされるのか、時の君主がいかに成功し、失敗したかなどを、歴史の中から学びとった。夜は十時に就寝することになっていたが、一度寝た後にもまた起き出して勉強することもあった。だから修身の学問は、体系としてまとまった観念的な理論ではなくて、実践的な学問であるところに特徴があった。そうした修身を導いたのは、師の月岡実山であった。

月岡実山は尾張の生まれであったが、江戸に出て愛宕山下に家塾「明倫館」を開いていた。修身は十一才のとき江戸藩邸で父や兄とその講義を聞いたが、深い感銘を受け、以来師と仰ぐようになったのであった。

だから美春藩に学問の普及を考えたとき、修身の頭の中には師として実山以外の人物はなかった。

修身は自ら江戸に行き、実山の住居を訪れて、鄭重に美春藩への招聘を頼んだ。しかし実山はすでに七十才という高令、遠い美春に行くのを躊躇し、辞退した。しかし藩主が自ら出向いての異例の懇願や、手当としては十五人扶持を給与すること、江戸との往復には家中の者を付添わせること、留守宅の経費、旅行中の手当などは充分に準備する、などと細かい点まで気を配った熱心さに打たれて、ついに実山は承知したのであった。

しかし藩内にはこうした修身の動きに反対する者もいた。高柳玄宰一派はその急先鋒で

（足軽や百姓に学問を教えて何になる）

と批難した。修身の教育の対象が藩士だけでなく、下級武士や町人、職人、百姓にまでも広くその対象を拡げていたからであった。

「百姓はただ働けばいいのだ。下手に物を覚えると、小賢かしくなり、批判ばかりして真面目に働かない。金を使って怠け者をわざわざ作る必要はない」

そうした反対者は再建計画推進者の間にも居て

「人間の意識を変えるには時間がかかるし、苦労が多い。いま財政の窮迫している時に、教育などとのんきなことを言っていられないのではないか」

しかし修身は

「百姓は牛や馬ではない。人間が本当に働くには、働く目的がわかっていてこそ全力をあげられるのだ。まして今度の再建計画は一年や二年の短期ではなく、五年、十年と、長期にわたるものだから、武士、町人、農民を含めた美春藩全員の意識改革がなくては、到底なしとげることはできないと思う。時間がかかるのは承知の上。物を知ることは決して不真面目になることではなく、真面目に働くためにこそ教育が必要なのだ」

と熱心に説いて屈しなかった。

しかし反対は修身に対してばかりではなく、月岡実山へも向けられた。

「なんのために江戸からわざわざ儒者を呼ばねばならぬのか。修身さまも美春藩に来られたからには、わが藩のやり方でやってもらわねば困る。美春藩にも人材は居るのだ」

現に美春藩にも医師宗悦のような硯学の士がいた。彼は人の集まる席に顔を出すと、必ず

「外から呼べば金がかかる」

と、わめくように言っては批難するのだった。

「月岡実山を招聘するために、銀子三十枚、縮緬三十巻、それに酒肴、菓子など、おびただしい品物を贈ったというではないか。それに手当も十五人扶持とか聞く。馬鹿々々しいにもほどがある。月岡実山も結局は欲につられて来たのにすぎないのだ。倹約、倹約と、一粒の粟さえ節約しているこの時期に、そんな大枚を払うなんてこれ以上の無駄使いはない」

しかしそうした非難をよそに、月岡実山が江戸からやってきたのは、桜の咲きそめる春の一日であった。

実山が美春領に入り、国境の峠を下った善福院にさしかかると、寺の前には修身が家来をつれて出迎えていた。そこはかって修身がはじめて領国入りしたときに、家老、家臣たちが出迎えた場所であり、今度は修身がそこへ師を出迎えたわけである。しかしその頃の風習としては、たとえ尊敬する師とはいえ、藩主自らが迎えるなどということはあり得ないことであった。たとえ学問の師とはいえ、身分からすれば、家臣にすぎないからであった。

それをあえて修身が破ったのは、師への尊敬と同時に、修身のそうした行動を家臣達に直接見せて、学問の尊さを教えようとしたからであった。

「先生、ようこそご無事でお着きを…」

修身はかけ寄ると実山の手をとり、山門の中に案内した。少し坂になっているので杖をすすめた。だが実山は辞退した。そこで修身は師の肩を抱きかかえるようにして歩いた。

寺の一室に案内すると、茶を一服差し上げ、家老をはじめ主な家臣たちが残らずその席へ挨拶に出た。

やがて一行は城下に入った。

実山は駕籠の中から領民が勤勉に働いている姿を見た。田畑は手入れが行き届き、作物がよく育っていた。とくに実山が感心したのは、武士と百姓、町人が、財政再建に向って協力しているのが、はっきり肌に感じられたことであった。

月岡実山の講義は、美春神社の近くの馬場御殿で行われた。

受講者としてはとりあえず二十名ばかりの優秀な若手武士が選ばれたが、その後学問をしたい者ならば百姓や町人でも参加できるようにした。異例なことである。

しかし百姓や町人は仕事があるから、きちんと講義に出ることができない。しかしわずかな時間を見つけては

平和はどのようにもたらされるのか、時の君主がいかに成功し、失敗したかなどを、歴史の中から学びとった。夜は十時に就寝することになっていたが、一度寝た後にもまた起き出して勉強することもあった。だから修身の学問は、体系としてまとまった観念的な理論ではなくて、実践的な学問であるところに特徴があった。そうした修身を導いたのは、師の月岡実山であった。

月岡実山は尾張の生まれであったが、江戸に出て愛宕山下に家塾「明倫館」を開いていた。修身は十一才のとき江戸藩邸で父や兄とその講義を聞いたが、深い感銘を受け、以来師と仰ぐようになったのであった。

だから美春藩に学問の普及を考えたとき、修身の頭の中には師として実山以外の人物はなかった。

修身は自ら江戸に行き、実山の住居を訪れて、鄭重に美春藩への招聘を頼んだ。しかし実山はすでに七十才という高令、遠い美春に行くのを躊躇し、辞退した。しかし藩主が自ら出向いての異例の懇願や、手当としては十五人扶持を給与すること、江戸との往復には家中の者を付添わせること、留守宅の経費、旅行中の手当などは充分に準備する、などと細かい点まで気を配った熱心さに打たれて、ついに実山は承知したのであった。

しかし藩内にはこうした修身の動きに反対する者もいた。高柳玄宰一派はその急先鋒で

（足軽や百姓に学問を教えて何になる）

と批難した。修身の教育の対象が藩士だけでなく、下級武士や町人、職人、百姓にまでも広くその対象を拡げていたからであった。

「百姓はただ働けばいいのだ。下手に物を覚えると、小賢かしくなり、批判ばかりして真面目に働かない。金を使って怠け者をわざわざ作る必要はない」

そうした反対者は再建計画推進者の間にも居て

「人間の意識を変えるには時間がかかるし、苦労が多い。いま財政の窮迫している時に、教育などとのんきなことを言っていられないのではないか」

しかし修身は

「百姓は牛や馬ではない。人間が本当に働くには、働く目的がわかっていてこそ全力をあげられるのだ。まして今度の再建計画は一年や二年の短期ではなく、五年、十年と、長期にわたるものだから、武士、町人、農民を含めた美春藩全員の意識改革がなくては、到底なしとげることはできないと思う。時間がかかるのは承知の上。物を知ることは決して不真面目になることではなく、真面目に働くためにこそ教育が必要なのだ」

と熱心に説いて屈しなかった。

しかし反対は修身に対してばかりではなく、月岡実山へも向けられた。

「なんのために江戸からわざわざ儒者を呼ばねばならぬのか。修身さまも美春藩に来られたからには、わが藩のやり方でやってもらわねば困る。美春藩にも人材は居るのだ」

現に美春藩にも医師宗悦のような硯学の士がいた。彼は人の集まる席に顔を出すと、必ず

「外から呼べば金がかかる」

と、わめくように言っては批難するのだった。

「月岡実山を招聘するために、銀子三十枚、縮緬三十巻、それに酒肴、菓子など、おびただしい品物を贈ったというではないか。それに手当も十五人扶持とか聞く。馬鹿々々しいにもほどがある。月岡実山も結局は欲につ持られて来たのにすぎないのだ。倹約、倹約と、一粒の粟さえ節約しているこの時期に、そんな大枚を払うなんてこれ以上の無駄使いはない」

しかしそうした非難をよそに、月岡実山が江戸からやってきたのは、桜の咲きそめる春の一日であった。

実山が美春領に入り、国境の峠を下った善福院にさしかかると、寺の前には修身が家来をつれて出迎えていた。そこはかって修身がはじめて領国入りしたときに、家老、家臣たちが出迎えた場所であり、今度は修身がそこへ師を出迎えたわけである。しかしその頃の風習としては、たとえ尊敬する師とはいえ、藩主自らが迎えるなどということはあり得ないことであった。たとえ学問の師とはいえ、身分からすれば、家臣にすぎないからであった。

それをあえて修身が破ったのは、師への尊敬と同時に、修身のそうした行動を家臣達に直接見せて、学問の尊さを教えようとしたからであった。

「先生、ようこそご無事でお着きを…」

修身はかけ寄ると実山の手をとり、山門の中に案内した。少し坂になっているので杖をすすめた。だが実山は辞退した。そこで修身は師の肩を抱きかかえるようにして歩いた。

寺の一室に案内すると、茶を一服差し上げ、家老をはじめ主な家臣たちが残らずその席へ挨拶に出た。

やがて一行は城下に入った。

実山は駕籠の中から領民が勤勉に働いている姿を見た。田畑は手入れが行き届き、作物がよく育っていた。とくに実山が感心したのは、武士と百姓、町人が、財政再建に向って協力しているのが、はっきり肌に感じられたことであった。

月岡実山の講義は、美春神社の近くの馬場御殿で行われた。

受講者としてはとりあえず二十名ばかりの優秀な若手武士が選ばれたが、その後学問をしたい者ならば百姓や町人でも参加できるようにした。異例なことである。

しかし百姓や町人は仕事があるから、きちんと講義に出ることができない。しかしわずかな時間を見つけては

講義に通い、武士に混って熱心に耳を傾ける姿を見ると、実山の身体にも熱意が入ってくるのであった。

実山の学問は実践を主としたものであったからその講義はすこぶる好評で、受講者はふえる一方であった。正式な学生のほかに聴講生も入れると、やがて五百人あまりにもふくれあがり、馬場御殿では手ぜまになってきた。

そこで修身は学問所の復興を決意した。かって五代藩主忠長の頃には尚文館という学問所が正式に設けられていたのだが、打続く財政困窮にいつしか放置されて、いまは荒れ放題になっていた。

それがこの四月やっと新築落成したのであった。

百姓の中からこの講義にまっ先に参加したのは、もちろん大三郎であった。

（この若者なら片腕になる）

そう修身が海辺で見込んだのは間違いなかった。大三郎は仕事も熱心だったが、学問にも熱心であった。熱心というよりも、魂を打ち込んでいる、人生をそこに賭けているという感じで、そこに修身は自分の分身を見出していた。

（この若者を使って、あれをやってみよう）

と修身は考えていた。

修身がやろうとしているのは、ある制度であった。領内を統治するのには、これまで代官が当っていたが、しかし代官職は世襲である上に、城下に住み、ときどき農村を見廻るだけで、農村事情に暗いのだった。そんな代官では実情にあった統治、指導のできるはずがない。これを改革する新しい制度が必要で、それを大三郎を使ってやろうというのであった。その制度は一口で言えば

（百姓の指導は百姓自身にやらせる）

という考え方である。

そのため百姓の中から選んで、郷村教導出役という役目を新設し、働きながら指導に当らせようというのである。そうすれば形式的な代官の統治よりも、ずっと百姓の実情が把握でき、かつまた仲間の指導ということで百姓のモラルアップにも役立とう。

しかし財政再建といっても緒についたばかりで、施策の成果がまだ数字となって現れてきている段階ではなかったからそれは無駄だと反対する者もいたが、しかし修身はすでに反対者の批判をいちいち気にせずに再建策を進める自信を身につけていた。修身は、尚文館に来ている百姓の中から十二名の教導出役を選定した。その一番手に大三郎が任命されたのはもちろんである。

教導出役は尚文館で学んだ講義を素材にして、わかりやすく百姓の教育に当るのである。そして同時に農村の実情や、百姓の仕事ぶりなどを修身に報告するとともに、月に一度は会合を開いて情報や意見の交換をし、切磋琢磨して職務を推進していった。

ある日大三郎はその教導出役の報告会で

「村のかわら版を作ったらどうか…」

と提案した。かわら版は一枚摺りの粗末な印刷物で、事件の急報などに刷ってくばる。当初は粘土に文字を刻み、瓦のように焼いて原版としたので、かわら版の名前が残っているが、最近ではほとんど木版を使っている。現在で言えば初歩的な新聞である。美春藩では一度、すすきが原開拓の人夫募集のときかわら版を使ったことがあったが、それを今後頻繁に使おうというのである。

「かわら版に何を書くのだ？」

「毎月一度こうして集って情報や意見の交換をやっているが、あっちの村ではこんないい仕事をやっている、こっちの村ではこんな工合に仕事が進んでいると、ためになる話がたくさん出る。またどの村の太郎兵衛はよく働くとか、こんな仕事のやり方を工夫したとか、そうした話もたくさんあり、それを埋れたままにしておくのはもったいない、領内に知らせば参考にもなるし、ほめられた者は喜んでますます一生懸命に働く、一石二鳥とはこのことではないかと思うのだ」

「それは面白そうだ」

この提案はただちに採りあげられた。

修身も賛成だった。かねがね領内の隅々まで行政の指示を徹底させるのに、いい方法はないかと考えていたところだったからである。これまでは代官所を通した形式的なものほかは、主要な辻に立札を出し、それを読んだ人の口から口へという方法しかなかった。いわば噂が拡るようなもので、徹底しない。それに比較すれば、かわら版の効果は抜群である。

しかしさて作るとなると、金もかかるし、人手も要る。藩の財政窮迫はそこまで手が廻らない。すると大三郎は

「わたしたち教導出役は過分な手当てを頂いておりますが、それを全部かわら版作成の費用として差し出します。これはわたし一人でなくて、教導出役全員の考えであります」

「それでは教導出役はただ働きということになるではないか」

「ただ働きで結構でございます。教導出役の地位につけていただいたこの名誉だけで十分でございます」

「そうか、それならば予もいくばくかを差し出そうぞ」

修身もその意気ごみに感激して、切りつめた手許金の中から毎月支援することを約束し、新しい計画は藩の金を使わなくても、なんとかやりとげる目途がたったのであった。

するとこの話を聞いた人々の中から、彫刻に腕のある職人が版木の刻りを無料で引受け、文筆の達者な若い武士の間から、原稿をまとめてくれる者も現われてきた。絵のうまい商人はさし絵の原画を描き、百姓たちも負けじと山野から紙の原料になる木の皮を集めてきては、手

すきの紙を作った。

版木ができると、墨で手や顔をまっ黒にしながら、かわら版を刷り上げ、刷り出しはまっ先に修身の許に届けられた。農村の細部のニュースはなかなか修身の所までは届かないので、このかわら版は修身を喜ばせた。

かわら版には、どの村の稲の発育がすばらしいとか、誰がこんないい肥料を工夫したとか、誰と誰とはもう苗木の植え付けを完了したとか、そうした記事が満載されていた。ほめられた百姓はますます仕事に精を出したし、そうでない者はいつかは自分もかわら版にのりたいと、仕事にはげんだ。

かわら版の配達は女や子供たちの仕事であった。村々への配達ルートは決っていて、何か所かの拠点に届けられると、そこから細分して次の拠点に送られ、最後の末端の一枚は一軒一軒に回覧されて、水が草の根にしみ渡るように浸透していくのであった。

〔七〕

こうして修身が心血を注いだ尚文館が炎上したのであったから、そのショックは大きかった。

嵐の夜のすすきが原の事件といい、尚文館の火事といい、不審なことが多すぎる。だがその背後に動いている黒い影の正体が、修身にもなんとなくわかりはじめていた。

これは一人の仕業ではあるまい。美春藩の中で次第に孤立化していく反対派が、ついに追いつめられて、牙をむき出してきたのであろう。

火災による損害は五千両（二億五千万円）であった。しかし尚文館だけは石にかじりついても再建しなければならない。

すると思ってもみない動きが領内から起ったのであった。それは領民たちが

「尚文館は藩校ではあるが、同時に百姓町人の学校でもある。金がなければ、おれたちの手で建てますだ」

と申出てきたのである。大三郎たち教導出役が領民と話しあい、尚文館再建のかわら版特集号を刷るなどして、世論を喚起したからであった。

大工や棟梁たちは無給で城下に集って工事を請負い、百姓たちは交替で人夫、下働きをつとめ、商人たちは材料費として金を集めて差し出した。こうなれば武士も黙ってはいられない。百姓町人に遅れをとった恥かしさが武士たちをかりたて、俸給の一部を建設資金として差し出したり、直接労働に当ったりしたので、尚文館は予定よりも早く、以前よりも立派に復興できたのであった。

修身は感激した。

（つづく）

ハイラル挽歌（八）

終章　去来

金子正義

（一）

八月十七日午後四時、宮坂少尉は、大隊最後の撤収の為に各中隊の残存兵や離れている分遣隊の集合を待っていたが、監視哨を廻って引揚げを伝えてきた土屋兵長が戻ったので、もうそれ迄と残存兵を幕舎前に集めた、同じ第二大隊でも寄り合いの兵隊なので、敵中突破の場合を考え、新たに四個分隊に編成し直して整列させ、

「大隊は既に各拠点を撤収して博克図に向って出発した。我々は直ちに最後の引揚げ隊となって撤退する、敵が博克図に侵入していた場合は万難を排して斉斉哈爾に行く、各分隊は軽機一と弾薬を装備し、各自は小銃に銃弾十五発、手榴弾二個と持てるだけの食糧を持て、その他は地下壕に埋め、三十分以内に飯盒炊餐を済ませて出発する」

と言い渡した。

兵隊達は、分隊ごとに手早く炊餐準備をする者、幕舎を撤収する者、残った兵器を地中に埋める者、と忙しく動いて陣地最後の夕食を掻き込むと、再び集合して夕暮れの陣地を後にした。

宮坂少尉は先頭分隊と共に地形を確かめ乍ら進んだ。更に尖兵として島崎伍長等三名を先行させ警戒を厳にして博克図への夜行軍を続けた。山地を出て草原地帯にかかると、最後尾の藤井分隊の後に、いつの間にか他部隊の兵が追従していた。何処の隊の者か確かめる余裕もない急行軍なので小休止になった時、藤井兵長が待ち構えて確かめると、兵長以下六名の斬込み隊の生き残りと、別行動を取っている朝鮮兵が二名いた。

彼等は宮坂隊に追尾している訳でも合流し度い訳でも無く、偶然同じ方向に行くだけだと嘯き、朝鮮兵はもう日本軍じゃない同朋の処へ行くと言うので其の儘にした。

宮坂隊は、新南興西側の山地を通過して三〇六二高地を越え、第一大隊が陣地構築をしていた二〇七七高地の夜空にも黒々と蟠る山容を目印にして、鉄路を横切り疎林の中を潜行している裡に夜が明けてきた。

博克図に向う道路に出ようと、なだらかな山腹を下り山麓の唐松林を抜けると、左手前方に朝日に映える博克図の市街が望見された。

宮坂少尉が双眼鏡で確かめると、城門や望楼には日本軍の哨兵も、ソ連の赤旗も見えず無気味に静まり返っていた。念の為に警戒して草地の地隙を潜行していると、ソ連軍の戦車隊に遭遇して仕舞った。

ソ連戦車隊は草原に広く拡がって横隊で進行中であった、地隙から湧き出たような宮坂隊を初めに発見した戦車は、愕いたように急停止して機関砲を空に向けて威嚇射撃をした。側面から三台が宮坂隊に向かって驀進して来た、いつの間にか上空にソ連機も現われて偵察旋回を繰返している。

宮坂少尉は左前方に見える松林の中へ駈け込めと叫んで一散に走った。ソ連戦車は威嚇射撃を繰返し乍ら不整地に大きく車体を上下させて追って来た。

逃げ込んだ松林は疎らであったが、丈余の夏草が茂っていた、もう秋を感じて葉が黄変しているので、潜り込んだ宮坂隊には迷彩となった。追撃の三台の戦車は諦めて砲塔をぐるりと回転すると停止している横隊の方へ引き返した。ソ連戦車隊は取るに足らぬ小部隊の宮坂隊など構っては居られぬとばかり其の儘砂煙をあげて去った。

宮坂少尉は、各個バラバラに密生した草叢に散開した兵隊の集結を待ち乍ら、今後の去就を考えていた、博克図に果して二百五十五連隊が集結しているかどうか疑問である、若しソ連軍が進駐しているなら徒らに逃げ隠れせず、潔く投降し兵隊達の生命を救わうとも思った、だが自分の任務は、大隊の最後の撤退兵を纏めて大隊長の指揮下に戻すことである。兵隊達を大隊復帰させず自分の手でソ連軍の捕虜にさせる訳にはいかぬ、と思い直して、次第に集って来た兵隊達には迷いや不安を漏さず、松林を抜け出た段丘の麓で隊列を組み直して、迂回して博克図の南側に出ようとしたが出没するソ連軍の眼を掠めて行くので仲々捗らなかった。午後漸く博克図南郊の満人部落の近くに出たが、彼方此方に日本軍の野営の痕跡があって、踏み倒された草叢には兵器弾薬が遺棄され、階級章迄もが捲り取られて捨てあった。

宮坂少尉は博克図に入っては危ない、本隊も在駐している訳は無いと思って分隊長を集め、

「午前中ソ連軍戦車と遭遇した様子から推して、どうも博克図はソ連軍が侵入しているように思う、我々は本隊に復帰する迄は敵に降伏する訳にはいかない、方向を変えて大久保山系に沿って浜洲線に平行して進路を取り札蘭屯迄行こう、相当の強行軍を予想するので思い切って軽装となる。兵器は護身用に各自の小銃と弾薬十発、手榴弾を自決用に一個、その他は全部此処に捨てよ」

と命じた。

敵と遭遇したら小銃だけではどうにもならない、と下士官達は唇を噛んで憤然としていたが、強力な機甲部隊には重機でも歯が立たない、軽機なんか何挺あっても役に立たない、宮坂少尉の言う通り軽装となって一日でも早く原隊に復帰する為には、武器弾薬の遺棄も已むを得ない、と思い直して黙って従った。

兵隊達は、此処迄歯を喰いしばって担いで来た軽機を放棄するのが無念であった、純情な兵達は頭を垂れ、中には腕を横にして眼を抑え泪を拭っていた。

宮坂隊の休んだ草叢の向うは禿山が起伏して敵に発見される虞れがあるので、兵器弾薬を地中に埋めてから日没を待って出発した。

禿山の山腹を廻って南下し、どうやら大久保山の麓に到着した。山裾の樹木の茂る谷間は墨を流したように真暗闇で、兵隊達は前を行く者に遅れないように一列になって歩いた。灌木を掻き別け急な崖を攀じ登っては、また降る難行軍なのでいつか前の者と離れ、次第に分断して分隊ごとに辛じて纏って歩いていた。

最後尾の第四分隊が遂に迷った、分隊の先頭の大川一等兵が急な崖の下に行き詰って進路が分らなくなった。直ぐ続いている藤井兵長が、

「どうした」

と攀じ登り口を探している大川の後から声をかけた。

「前の兵隊が分らなくなりました」

「失敗った、はぐれたか」

藤井兵長は崖の上の闇に向って、

「おうーい、おうーい」

と叫んだが、声は虚しく闇に吸い込まれるだけだった。藤井兵長は大地に耳を当て息を殺して神経を集中したが、聞えるものは近くの谷川の水音だけだった。迂濶に歩けば一層迷うばかりと思って、

「本隊が気付いて誰か探しに戻るかも知れん、直ぐ下に谷川があるようだから其処で待とう」

と藤井分隊は笹を別けて川州に降りた。不安と疲労で五人が塊って座り込んでいると跫音がしてきた、大川一等兵が本隊からの連絡か、とホッとして立ち上ると、昨日から宮坂隊に追尾している斬込み隊の生き残り兵だった。彼等は川原に下りて来て、座り込んでいる藤井分隊を見て戸惑ったが、後から精悍な兵長が崖を滑って来て

「どうした、どうした」

と藤井兵長に詰問して道に迷ったと聞くと、

「莫迦な、此んな処でいつ迄も愚図愚図して居れるか、前進、前進」

と斬込み隊の兵隊を急き立てて谷川を溯って行った。藤井分隊も後から谷川を溯行すると、谷は崖に行き止っ

て枯葦に消えていた。斬込み隊もガサガサと草を踏み倒して方向に迷っていた。暫くすると辺りが薄明るくなってきた。藤井兵長が夜光時計を見ると未だ四時を指したばかりだった。興安嶺の夏の夜は早く明けるのだ、もう大丈夫だ宮坂隊の通過の跡が発見できるぞ、兵隊達は蘇生の思いだった。山本・大川達が二手に別かれて枯葦の中を行路を探索に行き、藤井兵長は動かずに崖下の枯草に腰を下して待っていた。

斬込み隊も付近に何等かの手掛りを発見しようと歩き廻っていたが、口々に悪態をつき乍ら戻って来た、口汚く罵るのは兵長ばかりでなく若い一等兵迄が、

「薄鈍ろのロートルめ、睡り乍ら歩きやがって！」

と大声をあげているので、藤井兵長は威勢のいい斬込み隊だな、現役兵ばかりかと微苦笑していると、

「おい、おめエん処の兵隊がボンヤリしていやがるからはぐれたんだ、もう俺達は別行動で行くぞ！」

と兵長が喚き立てた、流石の藤井兵長も腹が立って

「何にを言うか、勝手に俺達の隊に紛れ込んだ死に損いめ！貴様等が勝手に行動しよがしまいが知ったことか、だがよ、密林の中を迷い歩いて狼の餌食になるなよ、」

と遣り返した、血の気の多い連中は、

「何にを馬鹿野郎！狼に喰われるのは貴様の方だ」

と口々に悪態を吐き乍ら谷川を戻って行った。

騒々しい連中が消えると辺りは静寂に戻って、幽かな細流だけが何にか空しく聴え、山中唯一人取り残された身が心細くなった。あんな初年兵のような兵隊が、俺のような歴戦の古兵を馬鹿にするのは日本が降伏したからか、そんなことで厳たる関東軍も軍律が乱れ出したかと前途を案じていると、探索の兵隊達が何の手掛も発見できず一緒に戻って来た。困ったぞと顔を見合わせたが、本隊からの連絡など待って留っている訳にもいかない、

「よし、出発するぞ、分隊には地図も磁石も無い、唯太陽と樹木の茂り具合を見て方位を定めて進むんだ」

藤井兵長は沈んだ気持を奮い起して兵隊達を見廻し乍ら言った、山本、大川の一等兵、野田、金の二等兵の不安の目が一斉に向けられた。野田と金は三月の現地召集兵で、毎日壕掘りばかりやっていて満足な訓練を受けていない、足手纏いになるだけの兵隊だが、纏っていれば狼は防げるだろう。

「では出発するぞ、もう絶対に離れるなよ」

と斬込み隊の去った方向とは反対の葦原を南に別け進んだ。

行手には確かに大興安嶺があった。次第に複雑な起伏の昏い密林地帯に入っていった。兵隊達は唯黙々と歩いた、午後になると五月雨のような霧雨が冷々と降ってきた。

森林は靄が立ち罩って方位が分らなかった。厚い霧靄の中を手探りで歩き、お互いに声をかけ合って見失なわ

ないようにするのが精一杯だった。

日昏れのような薄暗が一層濃くなる頃、白樺林に迷い込んだので歩くのを止め、雨外套を脱いでボタン穴を繋ぎ合せて急造天幕を張り、五人が頭だけは雨に打たれないようにして塊り合って睡った。

夜半、狼の遠吠に藤井兵長が目を覚ました。狼声は遠近の山々に山彦のように応呼して闇に響いていた。疲れ果てて死んだように熟睡していた兵隊達も直ぐ挑ね起きた。

兵隊達は初年兵教育で内務班長から、関東軍創設以来語り継がれている狼の恐ろしさを繰返し教えられていた。

満蒙進駐始めの頃の独立守備隊が興安嶺で演習中、不寝番の不注意で、軽機を持った一個小隊が狼の大群に襲われて全滅したと言う、現に興安嶺陣地構築の開嶺五一五部隊でも度々兵隊達が狼に襲われていた。だから陣地構築中入口には必ず焚火を燃やし続け、山中行軍の時は交替で煙草に火をつけて歩いた。狼に出合っても決して射つな、一頭でも仆せば血の臭を嗅ぎつけて群をなして襲いかかる、特に冬は大群をなすので油断するな、と耳に蛸が出来る程言われた。

兵隊達は直ぐ油布に火を点じて焚火を起し、付近の白樺の樹皮を剝いで焚火に投げ込んで火勢を上げた。密林では枯枝でも湿っていて煙を立てるだけで直ぐ燃え上らないが、白樺は生木でも松明のように油煙をあげて燃え上る。特に樹皮は脂が出て良く燃える。兵隊達は狼の来襲に脅えて必死になって白樺樹皮を集めて火に投げた。

狼声は次第に近くなり、腹に響き応える唸り声が白樺林に満ちてきた、雨は歇んだが寒さと恐怖で兵隊達はガタガタと全身の顫えが止まらなかった、朧て闇の中に青い鬼火のように光る目玉が双つずつ揃って現われた。怪しく光り動く狼の目は焚火を取り囲むように動いて、人魂の漂うように右に左に軽く飛んでいた。鬼火のような双眼が数を増し、包囲の輪が縮ってきた。

遂に焚火の周囲十米程に近づいた狼は、低い唸声を上げ乍ら円を画いて動き廻わり隙あらば一斉に跳びかかって兵隊達の咽喉に喰い下ろうと眈々と睨んでいた。

藤井兵長は、焚火を背に輪になって銃を構える兵隊達の中央に立ち、青く光る狼眼の真中に狙いを定め乍らも

「射つな、射ったら最後だぞ！」

と戒めた、兵隊達はその声を呪文のように頼って狼群と睨み合った。一斉に撃てば四、五匹は仆せるが、その瞬間間髪を入れずに跳びかかる狼群は防ぎようもない、緊泊した狼との睨み合いに耐え切れなくなった初年兵の野田・金が、今、まさに撃鉄を引こうとした時、

狼群の先頭に一際大きいボス狼がいて、右に左に緩っくりと動き、襲いかかる隙を窺っていたが、兵隊達の必死の構えに怯んだか白樺の火勢を嫌ってか、くるりと向きを変えて闇に消えた。怪しく光っていた多数の狼眼も

次々と消えて狼は音も無く去って再び闇が戻った。
未だ夏であったのでさほどの大群でなかったが、草原や白樺の無い杜の露営だったら、忽ち狼の餌食だった。兵隊達は狼が去ると背筋にどっと冷汗が流れた、藤井兵長は恐怖と緊張が消えると何にか可笑しくなった。近代的なソ連軍と原始的な狼群とに挟撃されたようで滑稽で堪らなくなり腹を抱えて笑い出した、吃驚して顔を覗き込んだ大川一等兵が釣られて笑い出すと、訳も分からず兵隊達も顔を見合わせて大笑いとなった。
程無く夜が明けた、兵隊達は狼の恐怖が消えてホッとしたが、さて今日は何方へ向ったら良いか分らなかった。四方に敵が居るように無気味で迂濶に動けなかった。だが空を見上げると遊離の旅のように自由な気にもなった。
藤井兵長は、方向を決めるのは自分しかいない自分の双肩には分隊の生命が懸っているのだ、と責任の重みに緊張した。今迄の夜行軍と濃霧の山歩きで、唯一の進路の頼りである浜洲線から相当北寄りに外れているように思えるので、位置を確めようと裸山に登って山頂から四方を眺望したが、緩やかに起伏する丘陵が大波の寄せるように果しなく続いて見当がつかなかった。斯うした茫漠たる大草原では昇り沈む太陽を基準にする以外に方法は無い、幸い霧は吹き飛んで太陽が輝いてきた、満蒙の夏は短かく、もう太陽は大分南に寄っているが、その方向に浜洲線が走り、並行して街道がある、それに沿って南を目指せば日本軍の集結地に辿り着けるだろうと思った。
「大体見当がついた、とにかくソ連軍との接触を避け乍ら鉄道線路の見える処迄行こう」
と兵隊を励まして出発した。幾つかの丘陵を越すと、夜の雨で山狭の草原が湿地に変っていた。斯うした湿地は夏の間は兵隊達が、野地坊主（ヤッチボーズ）と呼んでいる浮動性湿地に変って危険な地帯となる。草の株が点々と坊主頭のように湿原に漂い、風に吹かれて浮動する。此うした湿地帯の通過は危険であった。河岸の乱杭や壊れた橋桁を跳び渡る要領で、野地坊主を踏んで沈まないうちに次々と跳び渡るのだが、鈍間は次々と跳び渡れず、踏んだ野地坊主がグラグラ揺れて軀の重心が崩れ跳び揆ねる足先に力が入らず、次の野地坊主に足先が着かないで湿地に落ちる。湿地の水は氷のように冷たく、忽ちずるずると腰の辺り迄沈み始める。直ぐ引き上げないと底無沼のように沈んで行く。助ける者も迂濶に手を伸ばすと、自分の足元も不確実な野地坊主なので一緒に引き摺り込まれる、二、三人が手を結び繋いだり、銃を差し出して摑ませて這い上がらせてやっと助け出す有様となるのだった。
藤井兵長達も一人残らず次々と湿地に落ちて下半身ずぶ濡れとなった。既に八月半ばを過ぎて満蒙は秋風であった。身も心も寒々と泥人形の兵隊となって鈍ろ鈍ろと

歩いた、食糧の欠乏が兵隊達の心を暗くし刺刺しくした、空腹で歩くと焦々として訳も無く諍い、口汚く罵り合った。藤井兵長は陣地撤退の時、博克図迄の行程と思って兵器・弾薬を重視して、食糧は米二日分しか持たなかったのを悔んだ。途中の処々に遺棄された兵器弾薬と共に缶詰類も棄てあったが、拾って来なかったのが惜まれた。雑嚢にはもう最後に備えての僅かの乾パンだけで、自決用の一個の手榴弾ばかりがずしりと重たかった。
夜は幸い白樺樹林があったので少し早いが露営した、一晩中交替で焚火を絶やさなかったが、狼の遠吠も無かった、疲労し切った兵隊達は死んだように睡った。
翌朝、藤井兵長は朝霧の冷え込みに胴震いして覚醒た。蹌踉めき立つと空腹がどっと襲って来た。兵隊達の誰もが同じであった。朝食を摂らないので未だ睡っているようにふらふらと揺れ歩いていた。目の眩みを耐えて歩き続けると、樹木の疎らな草地に靴跡らしい草の折れているのを発見した。藤井兵長達は希望を取り戻して地を舐めるようにして辺りを探し廻った。
倒れた草叢に数人の足跡を発見してつけて行くと、灌木林の中に消え、草の乱れは二つに岐れていた。藤井兵長がどちらか迷っていると、山本一等兵が、
「分隊長、どうも敵か味方か付近に人が居るようです」
と低く言った。灌木の陰に人影が動いて付近に人の臭が漂った。分隊はパッと地に伏せ息を殺して様子を窺った人影は跫音をたてて近付いて来た、藤井兵長が見上げると日本兵であった。安堵して立ち上り乍ら、
「おい、お前達は何処の部隊かッ！」
と機先を制して大声で訊くと
「二百五十五連隊の三中隊であります」
と驚いて反射的に応えた。
「何んだって、三中隊だあ、誰だお前は」
と藤井兵長が良く見ると、開嶺陣地で一緒だった小林一等兵と見知らぬ二等兵だった。
「何んだお前か、どうしたんだ」
と此の狼の出没する草原をよくも二人きりで歩いて来たものだと呆れて訊くと、小林は藤井分隊に合流できた嬉しさから興奮した言調で、中隊から肉迫攻撃に出撃してからのことを歩き乍ら語った。
蛸壺に潜んで敵戦車を邀撃した攻撃隊の多くは戦車に蹂躙されて戦死し、生き残りは支離滅裂となった。小林は夜になってから戦場を離脱して放心状態で曠野を徘徊して、同じように迷っていた朝鮮兵の金木二等兵と一緒になった、二人共未だ戦争の終結を知らなかった。
藤井分隊は募る空腹にとぼとぼと歩いた。前の者に遅れないように歩くのが精一杯だった、藤井兵長は、分隊は二人を加えて七名となったが、それだけ食物の負担が重くなったな、と暗い気持となった。
いつか草原は夜となり朧月が出ていた。

編集子のメモ

◎本誌は季刊、年四冊を発行するつつましく、渺たる小誌である。だから、この四冊のスペースには精一杯お互いの努力を傾け、凝縮を計り、それなりの内容を盛りたいものだと思っている。

◎しかし、なかなかそうもいかない現実があるようで、第二十四号は前号とまったく同じ名前が目次に並ぶ結果を見ている。季刊二冊の間に半年分の貴重な時間が流れた勘定になる。当然すぎるこの事実に気づきたい。たとえるなら一円玉貯金に似た忍耐を私たちの営みは要求されている。着実な積み上げが必要なのである。

◎作品の配列について、その先後を気にする同人がかつていたが、たしかにそれは編集者の頭を悩ませる問題である。このあとがきが（も）さんから（お）さんに代ってみると、やはり気にかかることである。はなはだやりにくい。しかし、同じ顔ぶれではどう並べてみてもたいしたこともあるまい。渺たる小誌の一徳であろう。なんのカラクリのしようもないし、奥も底もないのである。短編を先に、連載ものを後にという常套の配列に過ぎない。

◎次号は早くも本年掉尾の号になる。全同人による短編特集の予定である。ただし、連載作品については休載をせず、倍大号としたい考えである。

（お）

「まんじ」第二十四号

昭和六十二年八月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九

「作家群」

（まんじ）編集部

☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方

郵便振替口座　東京二ー九〇八一五

印刷　㈲加藤清耕社

千代田区神田神保町三ー十一

☎（261・5743）

派手なネクタイ

三戸岡道夫

出勤の電車の窓ガラスに、白川はネクタイの柄を写して、眺めた。

地下鉄は外がまっ暗なので、窓が鏡のようになり、吊り皮につかまって立っている白川の上半身が、うまい具合にその暗い鏡の中に映って見えるのだった。

そのネクタイは高校生の孫の紀子が、この春、白川の喜壽の祝いに買ってくれたものだった。水色がかったグリーンと、淡いピンク色の縞模様で

「バーゲンだけど、とても色が気に入ったので、買ってきちゃったの」

「すこし派手じゃないかな」

「おじいちゃん、年とったらネクタイはすこし派手の方がいいのよ。外国では、みなそう」

そうだ、このままでは、ますます老いてしまうな、と白川は孫の言葉に勢いを得て、ある日会社に締めていくと

「白川さん、若返りましたね」

お世辞半分にも案外と評判がいい。

ネクタイを変えると、背広が地味すぎた。気をよくして背広も明るいグレイで新調してみると、心身ともに若返った気がしてきた。

まもなく電車が明るいホームにすべりこむと、もう銀座だった。

白川は地上に出た。街は朝から忙しそうだった。

白川の会社は駅から築地にむかって二分だった。ビルの四階にある。

「おはよう」

と部屋に入ると、女子社員がお茶を持ってきてくれ、ゆっくりと新聞を読む。

白川の静かな一日が、こうして今日も幕をあけるのだった。

妻の郁代は

「用事もないのに、よくも毎日出掛けていくわねえ」と言うのだが、白川は結構この単調な出勤に満足していた。

出勤といったが、しかしそれは白川の勤務先ではなかった。正確に言えば、白川の机が置いてある会社といえばいいのかもしれない。いや、もっと正確にいえば、白川が机を置かせてもらっている会社、というべきかもしれない。

そのいきさつを少し説明すると、こうだった。

白川は東日銀行に四十年勤務し、その後東洋自動車株式会社に更に十二年勤めて、さる六月に退任した。通算五十年余のサラリーマン生活であった。

これといった趣味もなく、まじめ一筋に勤めたので東日銀行では異例の副頭取まで昇り、六十五才の役員停年まで勤めあげたいわば東日銀行大物OBの一人であった。

銀行を退任すると、銀行の親密取引先である東洋自動車の常勤監査役に就任し、これもまた勤務ぶりと人柄のよさが買われて、十二年間も在籍した。

しかしいくら白川でもこれ以上そのポストを占領していることは出来なかった。東日銀行から東洋自動車へ送りこむ後任人事が控えていたからである。春の一日、白川は東日銀行の石堂頭取からその通告を受けた。

「長い間本当にご苦労さまでした。今度は常務取締役の紺野を後任として送りますからよろしくお願いします」

丁重な挨拶であった。

OBを含めた役員の身の振り方を決めるのは、頭取の重要な仕事の一つである。もし白川がすなおに首を縦に振らなければ紺野常務の送りこみに蹉跌を来すわけで、だから石堂頭取は必要以上に白川へ丁重であったのだが、同時に石堂よりずっと先輩に当る白川への遠慮があったことも否めなかった。それが石堂の口から

「退任にあたって、何かご希望がございますか。ありましたら、出来るだけのことはいたします」

という言葉になって現われた。

「いえ、別に希望といっても…、この通り健康ですし、経済的にもとくに心配はいりませんので…」

と、言いながらちょっと白川は考えて、

「そう言えば、私にはこれといって趣味もないので、急に会社をやめて、家に引きこもっても、やることがなく、ぼけてしまいそうです。だから、ちょっと、毎日、出掛けられる場所があるといいのですがね」

「ごもっともです。この本店ビルの中にたくさん応接室がありますから、その一つを事務室がわりにお使いになったら…」

「お言葉はありがたいが、でも、本店の中では…」

会長の南條が反対しないかと、言いかけたが、だが余計なことは言わない方がいいと、言葉を呑んだ。

「それでは、どこか他にご希望の場所でも」

「銀座がいいですね」

いま通っている東洋自動車は新橋にあったから、銀座はその隣で都合がいい。それに白川は銀行時代に銀座支店長をやったことがあり、銀座はなつかしい場所である。東日銀行銀座支店が入っているビルには、東日銀行の系列会社である東日カード株式会社が入っており、そこなら白川一人の机を置くぐらいのスペースは充分ある筈であった。

「わかりました。私の方から東日カードの江国社長の方に言っておきましょう」

ということで白川は去る六月の株主総会で東洋自動車を退任すると、東日カードの一室に机をもらい、出勤することになったというわけであった。

だから出勤といっても気ままなものだった。何時に出なくてはならない、毎日出なくてはならない、というきまりがあるわけではない。出ても、出なくても、要は自分次第なのである。

だが白川は毎朝、東横線で渋谷に出ると、地下鉄で銀座まで来る。これまで車で送迎されていたのが電車に変って、その人混みが新鮮だった。

白川はラッシュの時間を少しさけて、銀座駅に着くのは十時頃である。天気のいい日にはそのまま会社と反対の日比谷の交叉点まで足をのばし、日比谷公園の中を歩いて、更に三宅坂をのぼって、お濠のみどりを満喫し、帰りに銀座に多い画廊めぐりをしたりもした。

午後になると、日本橋や上野、浅草にも地下鉄で足をのばし、都美術館で展覧会を見たり、浅草寺に詣で、仲見世で買わなくてもいいお土産を買って帰って、妻に笑われたりした。

また会社の近くに銀座名画座というのがある。古いビルの地下にあるのだが、かれこれ三十年以上も続いている。そこでは名前の通り、古い名画しかやらないのが白川の気に入っていた。そこで久しぶりに「舞踏会の手帖」とか「モロッコ」、「女だけの都」に感動し、また邦画ではどこに行っても絶対に見られない「新妻鏡」とか「良人の貞操」を見て、若き山田五十鈴や入江たか子の美しさに驚嘆し、久しぶりに若き日の興奮がよみがえってきた。

そうした事に加えて銀座は交通の便がよいので

「近くまで来たので、ちょっと寄った」と、誰彼となく訪ねて来てくれるのがうれしかった。

応接セットで長々と話しこむこともあれば、その時の気分次第で喫茶店に出たり、夕方特別気の合った友人でも来れば、そのまま近くの小料理屋へ出かけることもあった。

そうした中で一番小まめに顔を見せるのが栗林であった。年令も白川と同じで、東日銀行では常務取締役まで行き、白川とはその頃から気が合っていた。神田にある、

第三番目の勤め先である小さな印刷会社にまだ未練げに籍を置いていて、週に一度顔を出している。その往復の序に寄るのであるが

「白川さん、今のうちに何か趣味を持った方がいいよ」

その度にアドバイスしてくれる。

「だが、いっこうに、その気がなくてね」

「これから老後を生ゆていくには、何か、こう、やることを持っていることが必要だよ。そうでないと、時間のつぶしようがない。おれ達の仲間にだってさ、毎日ぶらぶらと、やることがないものだから困っている人が多いよ」

そうした連中が気ばらしに街の中をほっつき歩き、後輩がいる東日銀行の支店や関係会社を訪問して、雑談に時間をつぶし、

（この忙しいのに困ったものだ）

（老害だ）

と批難されている人間も何人かいる。

「おれ達は大いに働いて今日の東日銀行の基礎を作ったのだ。街をうろつかなくたって、気軽に行ける、ＯＢクラブとか、ＯＢ事務所ビルの一つぐらい銀行は作ったって、いいじゃないかと思うんだよな。預金増強、顧客倍増運動のときだけＯＢを狩り出すばかりが能じゃない」

「そんなこと言ったって、白川さん、いつ銀行がそんなもの建ててくれるか、待っちゃあいられないよ。自分の生活は自分で護らなきゃあ」

「おれがやるものと言えば、ゴルフぐらいかなあ」

「ゴルフは若いうちはいいが、体力が弱ってくると、せいぜい健康維持のためぐらいで、老後を精神的に支えてくれるものにはならんよ」

「そういう君だってゴルフ以外はあまり趣味もないじゃないか」

「最近、謡曲を始めた。若い頃ちょっとやっていたのを、復活させたのだ。君もやってみないかね」

「いやあ、ちょっとねえ…」

それから、誰それは絵を描いて展覧会に二度も入選したの、誰は盆栽を始めたのと、仲間の噂に花が咲くのだが、しかし七十才を越して始めた絵や盆栽や書道や民謡で、老後人生が支えきれるものかどうか、正直言って白川には見当がつきかねるのであった。

そんな趣味を持たなくても、結構白川は今の平凡で、静謐な生活で、老後が生きていけそうな気がする。毎朝出勤して、夕方家に帰ってくる。その繰り返しが、五十年以上も続けてきた白川の人生のリズムである。

だから今の出勤が、たとえ偽物の出勤とわかっていても、このリズムが毀れるのは、自分の人生が毀れるのと、同じような気がするのである。それで白川の老後が生きられるなら、偽の出勤でもかなわないではないか。七十を越してあわてて始める芸事の方こそ、偽物ではあるまいか。

だが白川にとって困ったのは、この出勤がモグリだということだった。石堂頭取、江国社長までがオーケーしていてモグリとは、ちょっとおかしいかもしれないが、実は会長の南條の了承を得ていないからであった。

南條会長は東日銀行のトップに君臨している実力者であり、石堂頭取といえども従わざるをえない。

南條は厳格なる経営哲学と、峻厳なる人事政策とをもって、東日銀行並びにその周辺に位する系列会社群を掌握していた。とくにその役員人事体系は明確で、何才になったら銀行の役員を辞め、如何なる条件なら系列会社の社長になれて、いつ辞めるか、詳細にわたって決められていて、私情をはさまず、例外を許さなかった。

この基準からいけば、白川が系列会社の中に机を置くなどということは許されない。だから石堂頭取も南條会長へは報告してないのであった。

だが白川の机はＯＢ達の間の恰好の話題になっていて

「なぜ白川さんだけが…？」

「あいつがそうなら、俺だって…」

「だが、白川さんも不見識だよ。いい年をして。たとえ頭取の方から話があったとしても、自分の方から辞退すべきなのにねえ」

そうした噂はいつのまにか南條会長の耳にも届いているようで、

「頭取は、会長との間にはさまって、困っているらしい」

「でも責任は南條会長にあると思うね。白川さんは石堂頭取よりずっと先輩の大物ＯＢ。白川さんからの要求があれば断われないよ。それをつべこべ言うのなら、会長自らが直接白川さんにはっきり言うべきだね。頭取が気の毒だ」

「それなのに、ご本人の方ときたら、派手なネクタイなんか締めちゃってさ、いい気なもんだ」

そんな声がちらほら白川の耳にも聞えてくるのだが、白川は大して気にしていない。要は自分が生きたいように生きれば、それでいいのだ。

東日会というのがある。東日銀行のＯＢ役員と、現在の役員たちの懇親会で、春秋二回開かれる。

それを明日に控えていた。

しかし今回白川はどうも気がすすまなかった。すると銀行の秘書室から電話があって

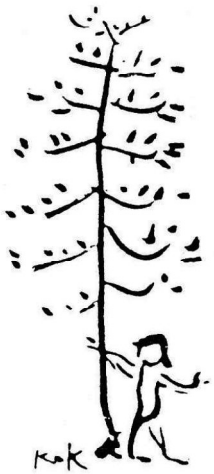
「まだ白川さまのご返事をいただいておりませんが…、ご都合は…」

「田舎にちょっと法事がありまして、今回は残念ですが、欠席させていただきます」

とっさの嘘で、その場を逃れた。

会場で南條会長に逢いたくなかった。こういう時は、さわらぬ神に、たたり無しだ。
その翌日、栗林が顔を出して
「昨夜の東日会、来なかったな」
「うん、ちょっと気がすすまなくてね」
「会長のことかい…」
「まあ、そんなとこだ。なにか言ってた？」
「カード会社の江国社長がなにか嫌味を言われたらしいよ」
「じゃ、江国君の方から何か言ってくるかな」
「大丈夫だろ、彼はそんなこと別に気にしてないみたいだよ」
「ところで君の方だが、神田の会社、いつまでだい」
「今年いっぱい」
「そうしたら、ここへ来いよ。まだこの部屋、机の二つや三つ、並べられる」
「みんなで渡ればこわくない、か」
「ハ、ハ、ハ……」
「ハ、ハ、ハ……」
「ところでさ、いま銀座名画座で『人妻椿』をやってるんだよ」
「なつかしいね」
「昨日、散歩のとき、前を通って見てきたんだ。名女優名作週間って奴だ。今日は川崎弘子の日。これから、どうだね…」
「うん、見に行こうか」
「じゃ、ちょっと時間を聞いてみる」
白川が電話で問いあわすと、二回目が午後の一時五十分からで
「今から行けば、ちょうど間にあう」
二人は午後の銀座通りをゆっくりと歩いた。
「『人妻椿』なんてフィルム、もう無いのかと思っていたのに、お目にかかれるなんて、うれしいね。あの時の川崎弘子、輝くようだった」
「でも彼女のベストはなんといったって『天国に結ぶ恋』だね」
「へ今宵なごりの三日月の、消えてさみしい相模灘…か」
「でも、栗林、君の好みは鈴木澄子」
「うん、毒婦役はいいねえ、『狂恋女師匠』、まだ眼の前にちらついている」
秋の日ざしに無駄話をしているうちに、名画座についた。
映画は開幕寸前で、二人が坐るとすぐ場内は暗転した。
二百人ぐらいの座席は、結構客で埋っていた。
「ずいぶん昼間から混んでいるね」
「結構、東京は暇な人が多いのさ」
『人妻椿』は昭和十一年の作品で、前編、後編に分か

れ、松竹が田中絹代に次ぐ銀幕の女王として川崎弘子をスターダムに押し上げた、決定打であった。夫と生き別れた子供づれの人妻が、その美貌ゆえに辿る流転悲劇のメロドラマ。
二時間を超える大作が終って、場内に灯がついても、スクリーンいっぱいに拡った川崎弘子の美しさに陶酔した二人は、しばらく昭和初期の青春時代の甘い夢から、めざめなかった。
だがその時、白川が
「おい、ちょっと」
栗林の腕をあわてて引っぱった。
「なんだ…？」
栗林がふりむくと、白川は栗林の耳に口を寄せ
「あそこに、南條会長が来ている」
「えっ、会長が…」
見ると、退場する客にまざって歩いているのは、まぎれもなく南條会長ではないか。
二人は一瞬にして川崎弘子の陶酔からさめた。
あわてて人垣に身を隠すようにすると、視線だけを通路の方へ向けた。幸い南條は二人に気ずいた気配はない。人の群にまざって、まっすぐ出口に向っている。
「厳格なる経営哲学だなんて言って、自分だって勤務時間中に、『人妻椿』なんか見に来てるじゃないか」
「彼も暇なんだよ」
「暇というより、結局、彼だって、我々と同じなんだな」
「彼だって、いつまでも今のポストにしがみついているわけには、いかない」
扉の外に消えていく南條の背中を眼で追いながら、二人は互いに、そうつぶやきあった。



同窓会

山根三枝子

「本日はお忙しい中をかくも沢山の方々にお集まり戴き、わが榕蔭会第三十三回目の總会をもつことが出来ますこと誠に嬉しく存ずる次第です。恩師の先生方も御高令にもかかわらず遠方よりお出かけ下さいまして誠に有難うございます。なにしろこの榕蔭会は会員が決して増えることのない、それどころかだんだんと減って行く運命をになっておるのですが毎年のことながら本日も三百数十人の方々が集まることが出来ました。・・・・・・・・・・・・・・・」

台北第一師範附属小学校は昭和二十一年に閉鎖されたのでその時点で一学年であった者が榕蔭会では最年少者であり、新会員の出来ない同窓会なのだ。台湾では榕樹のことをがじゅまると呼んでいて何処にでも生えていて涼しい木蔭を作っていたので会員すべての人達のそれぞれの思い出は大なり小なりその木につながっていることであろう。台湾は終戦の年まで約半世紀の間日本の植民地であった。植民地とはどういうものであったかということは、たとえ住んでいた時代が子供から青年期にかけてであったとは言え、いや子供であったが故に鮮明に肌に感じとっていた。そして其の後大人になり年令を重ねるにつれ知識や理解力によってそれは裏づけされてはっきりしたものになっている。征服者と被征服民族の関係の感覚的な把握などはその後歴史を理解する上でも確かにプラスになっているような気がする。

残暑も厳しい九月半ば市ケ谷駅近くの私学会館の富士の間には開会の十二時迄にはほとんどの人が集まっていた。二十代三十代という、はなやいだ若い世代の人はいない。派手に装った人もいる女性の存在が其の場にいくらかでも楽しい雰囲気を与えていた。挨拶をしている幹事の話は未だ途中なのにコップやビール瓶を運んだりする従業員がアチコチ動き回って雑音をたてていた。

「毎年この会が開らかれる度に名古屋からお出かけ下さった山田先生は今回は御体の不調の為欠席ですが大変残念だとこゝにお便りが届いておりますから御覧になって下さい」

一度も欠席することなく八十六才まで毎回出席されておりその先生に会うことが会員の一つの希望でもあり楽しみでもあった先生の欠席を知り会場には聞こえはしないがたしかに溜息があった。姿勢のよい体格と血色のよい明るい顔が思い出される。おこる時はものすごく恐かったが、生徒と一緒によく遊んでくれる先生であった し官服のよく似合う先生でもあった。〔官服とは官吏、つまり今でいう公務員が職場に行く時に必らず着なければならない、いわば制服であった。海軍の軍人が着た詰襟の軍服に似ていて式日には全員が判任官、高等官、勅任官などという等級により金モールがついたりつかなかったりの肩章やサーベルを着けた〕　山田先生は三木先生という美人の音楽教師と結婚するんだとの専らの評判であったが実現しなかった。二十年位前に同窓会の席上で二人が何年ぶりかで再会した折、その場に居合わせた私は興味深く二人を眺めたものだったが、その三木先生は数年前に亡くなった。現在出席している恩師、数人は全部が知らない先生方だ。席にはテーブル毎に卒業期の数が示されていてその数の少ない期ほど前部に席をとるという具合になっている。私達の期の席もいつの間にか年ごとに前の方になってきている。

挨拶の途中で八十才近い老人が自分のつくべき席を心もとなく探しながら横を通って行った。あれはA氏だ。私が女学生だった頃附属の同窓会に行った折、とてつもなく面白い喜劇を演じ皆を大いに笑わせた人なつっこい青年だった人だ。台北帝大の角帽をかぶった若い時の姿が思い出される。斜め前方に腰掛けている三期上級のN氏、胸の名札を見ないと一寸分からない。彼は中学校、高等学校時代、秀才のほまれ高い人物で蝶博士とまで言われていた。台湾のあらゆる所で蝶を蒐集し蝶に関して色々なことを調べているという評判があった。東大を出て国立大学の先生になっていたが今は何をしているのであろうか、一人のおとなしい老人としてのみ人の目には映る。

当日私は入口で受付の役目をする当番であった。来会者の卒業期をたずねて出席者名簿にチェックをし会費を貰い名札を渡す役であった。「二十一期の久保です」という声にハッとして顔を見た。その人の姉は私と同期で最近亡くなっていたので簡単にお悔みを述べた。彼は中背でいくらかやせ型だ。小学生の頃の顔は覚えていない。彼は三十才代の若さで東大の物理学の教授になり、のち若くして現役時代に文化勲章を貰った俊秀だ。彼は友人の弟でもあったことから特別にその輝かしい出世を陰ながら賞讃したこともあった。しかし人間の栄誉とは何んだろう。彼も道を歩いていれば一人の老人としてしか人

の目には映らないであろう。現に同窓会の内部ですら、世代の異なる人達は彼のことを知ってはいない様である。彼の父親は久保テンズイ（天随）とか云う一寸した漢学者で台北帝大の教授であった。

受付の仕事を済ませたのち会場に入ることの出来た私は満席のため同期の人達と同じテーブルに着くことが出来ず横のテーブルの空席についた。隣りの初老の男性が名刺をくれたので見るとそれは下村君であった。彼の父親は下村虎六郎（湖人）。子供の頃母に連れられて下村家に遊びに行った折に見かけたものだが、彼は一寸ひ弱な感じのする少年であった。下村虎六郎氏は当時台北高校の校長をしていて私の父親と同じ職場であり、行き来があったようだ。下村湖人は戦前に内地に帰っていて奥さんを亡くして荻窪辺りに住んでいた。

母校どころか財産すべてを失いチリヂリになって引揚げて来た附属関係の者達や戦前からすでに日本に帰っていた人達など個人で、又は大なり小なりのグループを通じ或いは上級の学校の関係や職場其の他色々な手づるから順々と会員はつながって行った。そして戦後十年位してやっと榕蔭会は名簿を出すことが出来るまでになったのである。勿論その当時は住所や生死不明の者も1/3位はあったようである。其の頃、会の為に盡力してくれた人は当時の参議院事務総長の岸田実氏であった。現在は同窓会の顧問になっている。彼はクリスチャンである由で其のことが反映しているのかも知れないが名簿には学歴とか役職名は一切書いてない。ただ職場名だけは書いてあるが。

附属小にはたしかに世に言うところのエリート階級の子弟が集められていた。總督府の役人、軍人、裁判官、医者、大学高専をはじめ教職関係の者の子弟、銀行員等の子弟達で、後になって一般からの苦情も出てきたところから入試時にくぢ引も選抜の段階で幾分取り入れたようであった。日本のはづれの台北市の附属小という僅か全校生徒五百人余の小人数の中から結構色々な文化人が出ている。私の弟の期からは東大名誉教授で現宇宙科学研究所長（学士院賞受賞・文化功労者）や国際司法裁判所の裁判官としてオランダに行っている小田兄弟が出ている。彼等の父親は医学部教授で小田内科の評判のよかった医者であった。私の期の女性では軍人の娘であった人が今茶道界の大先生になり茶道関係の雑誌などで写真や記事を時折見かける。又役人の娘だった人でＮＨＫテレビ料理教室で活躍した人も居るが二人ともよい夫にも恵まれていた。

「最後になりましたが悲しいお知らせをしなければなりません。渡部節治先生が本年二月に心臓病の為に九十五才で急逝されました。先生は大正の終り頃から昭和二年迄数年間この附属小の主事（校長）をなさいましたので此処におられる高年令の方々はよく存じ上げているこ

とゝ思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

渡辺先生は十八期である私達が入学試験にパスして、はじめて附属に通いはじめた頃の先生で色白で金ぶち眼鏡をかけた威厳のある方であった。式の折など講堂の御真影の前で教育勅語を読んだりした時の先生の目の光や姿が記憶にはっきり残っている。

台北のあの附属小の校門を入っていくと左に行く道があり、その道の左手には小動物園といってもいゝような所があって檻の中にはオランウータン（当時は猩猩（しょうじょう）といっていた）が飼われていた。帰校時など小使さんに貰ったバナナをやったりすると鉄格子の間から手をぬっと出してバナナをつかみスルスルと上手に皮をむいてモグモグと食べた。その仕草が面白くお茶目な人はオランウータンの動作を上手に真似て皆を笑わせたりした。金網を張りめぐらした中には池があり、おしどりや鴨、其の他の小鳥がいて七面鳥もいた。赤くなったり青くなったりする七面鳥をみたりして下校時にはゆっくりと道草とでもいうものをくうことが出来た。小動物園の脇を通って進むと右手が昇降口で先は花壇になっていた。かなり広い部分に花が咲いていて何故かカーキー色をしたやわらかい感じのキンレン花（カ）が一番印象に残っている。日時計も真中にあったし、はじめての理科の授業の時はハイビスカスの花をとって来て雄しべや雌しべなどを調べた。又図画の時間には花の写生もした。その花壇の奥の生垣の向こうは女子師範の寮になっていた。下校時間がおそくなり夕陽が傾いた頃などにはオルガンの美しくハモった音が響いて来て子供時代からぬけ出る頃の乙女心を感傷に引き込むこともあった。

附属小にはプールがあった。雨天体操場の横に十メートルと二十五メートルのプールがあり横には低学年が使う池のような浅い小プールがあった。小プールはすぐに水がよごれてきたなくなったが大プールの方は子供の目には大へん素晴らしく見えた。南国の太陽の下では特に変えたての水は美しいブルーに輝やき、そして冷たかった。水しぶきの音、生徒達の歓声、若い先生の高い大声などがまじり合って一つのワァーンという響きとなっていた。プールのおかげでどれだけ楽しい思いをしたかわからないし、又健康や忍耐力を養成するのにどんなに役立つことであったろうか。

渡辺先生はもういない。だから感謝の気持の一端でも告げることは出来ない。渡辺先生は当時台南一高女だけにしかプールはなかったのに何度も何度も總督府の文教局に足を運んでプール建設の要請をしたそうだ。建設することになったが少い予算だったのでコンクリートの量を少なくしたそうだ。そのため出来たての頃は満水の折にプールが割れやぁしないかと心配で先生は夜中に二度も三度もプールを見に行ったという話も亡くなってから

聞いた。花壇とか小動物園なども皆渡辺先生の発想と実行力からだったということも。

皆はビールや御馳走で満腹になり、あちらのテーブルこちらのテーブルと行き来して互に言葉を交わし合ったり、写真を撮ったりしていたが、お開らきの時間も近づき校歌や運動会の歌などを合唱することになった。官尊民卑の意識が濃く軍国主義、官僚的、国酔主義、などの傾向が内地より強かった植民地、其の上に被征服民族に対する優越感なども加えられ植民地育ちの子供の心にゆがみを与えていたことも事実であろう。それらの歌に対して子供の頃は別に異様な気がしなかったのは、ひょっとしたら意味がはっきり取れていなかったせいかもしれないが、今こうして歌ってみるとはっきりと過去の歴史が示されていることを感じる。

・・・・・・・・・

日毎に通う学舎は
天津光のかがよいし
行啓所幸処

これは今上陛下が即位なさる前に来台された折、附属を訪れた時のことをさしている。

先登一は我こそと
功名きそう長距離や
金鵄勲章我が手にと
殊勲争う擬戦ぶり

・・・・・・・・・

擬戦とは模擬戦争の略で運動会で行った騎馬戦など戦争ごっこの真似ごとのような競技であった。

今は網引くこの腕
他日千里の海もこげ
今日肋木に鍛う脚
やがて万里の地も踏め

・・・・・・・・・

走るも跳ぶも一すぢに
皇国のためなるぞ
尊き皇子のいでましし
栄ある歴史身にしめて

・・・・・・・・・

そして「皇国のために」同期の男子は数人が戦死している。その中のW君とM君は低学年の頃家が近かったのでよく一緒に遊んだりしたので今生きていたらと残念に思う。

万才三唱をして会も終り二階の喫茶室やロビーなどでは期毎の二次会を開いている者達もいた。入口の付近でかたまって暫く話し合っていた人達も順次会館から外に散って行った。

車の走る広い表通りではなく裏通りの方に出るとそこは車道にはなっていない。フト見ると元大学の何んとか部長であった勲二等氏の横を一人の細身の若者がバイクでよけるようにして走り抜けて行った。一瞬ハッとするような衝突を若者は機敏に避けた。「危いでないかッ！バカ」と言わんばかりの表情が頭デッカチに見えるヘルメットの中に読みとれた。

私達はいつの間にか老年層という群の中に押しあげられてしまっている。さまざまな用途に使われるコンピューターから使い方の分からないカード類、理解しにくい荒唐無稽の漫画の世界の理解、強烈で意表を突くリズムやメロディーの音響、そういったものの中で自由に泳ぐことの出来る若者達は私達を置いてきぼりにしてしまっているのだろうか。それとも彼等がふるさとを失った放浪者なのであろうか。

地下鉄で帰るという膝関節変形症で少しびっこ気味のAさんとは会館を出た所で別れた。H氏とあと二、三の友人達と市ケ谷駅に向って歩いていった。

「ぢゃあ又。入院したらお知らせするから皆で病院に遊びに来てね」とH氏。前立腺の手術をしなければならぬそうだが悪性のものでないことを祈った。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

童子寸描（わらしこ）

大和禎人

わが家の童子、その名を幹人となん云える、二歳六ケ月に達してしだいに天下無敵におよぶ。その無敵ぶりのいかばかりかを今にして写さざれば後の世に悔いを残すならん。……

……

かれはこういう思いで一文を書きだした。それはこの童子を四代目とするとき、二代目たる自称物書き先生、いや先生なんぞと呼ばれずとも、少なくとも微小の作家を任ずるお方のそれがつとめと考えたからであったようだ。つまりは（ジジばか）の所為にほかならないのだが、血の繋がるものの実直な思いに相違なかった。

初代真人、二代はかれ禎人、無敵の幹人の父で三代目が史人。「人」を通し名として四代つづいているアンバイになる。

「幹人のミキは新幹線の幹です」

説明がし易い、（いい字だな）と気に入ってもいる。

出生地の千葉で出された出生届が本籍に回付され、さらに住民登録地に回されるには時間がかかる。早速、扶養関係の届が必要とあって窓口に証明をもとめると、いまだ回付されていないという事態に、係が本庁へ問い合わせ、そこまでは届いていることを電話で確かめたあげく、申立書形式による確認登記の上ようやく抄本を手にするという経緯があった。（新幹線の幹）はまことに明快な通じ方をしたものであった。これから後も名前ではだれよりも、当の本人が他にわかりやすいことで得をするはずに思える。姓名漢字の枠の中で組み合わせを考え、吉兆にあやかろうとて画数、奇偶に頭をどう悩ませても結論にはならないところを嫁どのの案にあっさり落ち着いたのである。彼女の方の兄嫁の一字を採ったものだったが、この字を佳とする考えは一致して芽出たいのであった。「人」の通し名にはこだわらない旨を話してあったのだが、その点でも満足であった。

「みきちゃんたらエリマキとかげみたい」

歩きぶりを評して従姉妹の四方子が形容した。幼児の歩きはじめはなるほどそんなところだ。一歳の誕生日には一升餅を背負って尻餅をつき、戸外では直立不動で歩きに慎重だった童子がやがてとにかくも闊歩をはじめたのである。重い頭をつんのめり加減に走りだすようなあんよの初手はみな同じだ。当節人気の奇っ怪な小動物に似ているというものだった。転んで前額に大きなカサブタをつけていたのはこの時期である。

フィリッピン政変の頃はマルコスの椅子と名づけるカー用品の座椅子にベルトで固定し食卓に向わせていた。リビングの応接卓子の板ガラスの縁をソフトテープで巻いた安全防護策も大人たちの知恵から出ている。むつきのとれるまでのライフケアにはそれこそ大人たちが振り回されたものだった。

「ぼくはでんしゃ」
ぼくはでんしゃ
はやいでんしゃ
だけどひとりじゃ
はしれない
しゅっぱつしんこう
うんてんしさん
キップをはいけん
しゃしょうさん
……

8チャンネルの「ひらけポンキッキ」という番組が大好きである。八・〇〇～八・三〇という時間帯は一般家庭では主人を送り出し、大きなこどもは学校へ行き、主婦は跡形づけの時間、もしくは朝の連続テレビ小説でも見ながら、一休みの時間である。

「ひらけポンキッキ」はあいにく「チョッちゃん」にダブル時間帯なので録画する。

「チョッちゃんが終ったら、ポンキッキ見るからね」

「うん、ロクガしといて」

したり顔にロクガなどと言うのだから恐れ入る。

いまのところ主導権が大人側に無事を得ている。それでも「チョッちゃん」が終ればいよいよ「ポンキッキ」のオンパレード、とくに（ぼくはでんしゃ）となるとリピートをかけて五回繰り返しても飽きたらぬ熱心さだから、料理番組、短歌講座とかシェープアップ体操になると、（ばあちゃん）は遠慮をして応接間の方のテレビを見ていることがある。そして（じじ）のワープロのキャリングケースの上はミニ列車の一大操車場と化し、壮観を呈する。ちょうど目の高さになり、夢を馳せるに都合が良いからである。

「ポンキッキ」はなにやらの番組賞をうけているとかで、絶対にこどもたちを捉える魅力があるようだ。「かまっておんど」というのもこの番組の売物らしいのだが、

かまってくれなきゃ　ぐれちゃうぞ

なぞとつかこうへい作なる詞はおだやかでない、「蒲田行進曲」先生の無頼がかえって幼いものには人気があるのだから皮肉である。八・三〇からこの番組に接続するNHKの「お母さんと一緒」はどうもかなわないようだ。アクの強さに軍配はあげられるのが現実らしい。民放の勝利であり、CMのスポンサーの思う壺ということらしい。世の親たちの少しでも教育的にという願望にかかわらず、NHKさんは良心的かつ微温的にすぎるようだ。要するにバンチの問題らしい。悪巣が良巣をこどもの世界では駆逐するという条理がまかり通る。

さて、ここでテレビ漬けの実態をさらけ出したくないが、もう少し書いておかねばならない。かつて「赤胴鈴之助」や「オバQ」で生い育ったいまの若い父親、母親の精神史があるように、いまの童幼児の心を占めるものがどんなものかをやはり看過してはならないからである。

黒眼鏡のおじさんタモリのウォッチングというのがある。

「あっ、ウォッチングだ」

と、幹人が思わずゆうべの閧の声をあげる。驚いたことには流れ出したメロディだけでいちはやくテロップを予言するのだ。そしてエピローグになると、

「テレパシー　ください、テレパシー　ください」

と画面につれて合唱するではないか。この番組に登場する生きとし生けるものに対する愛情の目が、童子の心に訴えるものをもっているのだ。生命に対する小さなものなりの感動があるに違いない。動物たちの懸命な子育ての姿、生きていくための英知なぞ…、さきには悪巣？を選らんだとみえた幼児が大人の選ぶチャンネルにしても、良巣に対しても感動することを充分心得ていることに感心しなければならないだろう。

「しゃこしめて」

ドアロックはかなりはやくから知っている。いまは降りるときにもロックを忘れない。ロックしてから降りて取っ手を引きながら押しやってドアを閉めるマナーは大人の心得としても、実行はかなりおぼつかないものだ。マイカー時代に幼児がそれをいつか身につけた。（ばあちゃん）がなかなかできなかったことをちゃーんと知っているのだ。大人のすることをいつか学んでいることに驚かねばならない。その上、車庫のシャッターを閉めなさいと言うのであってみれば、全れり尽くせりである。

「ママを送ってくる」

朝、七時には出る第一便をパパが運転する。二便の方は（じじ）が運転して駅まで送るのが日課になっている

のだ。夫婦共働きである。幹人は二往復、親たちを送るのだ。いまのところ良くしたもので、走るクルマの窓にひらけるパノラマを眺めることが楽しいらしく、パパ、ママを送っても一向に寂しがらない。

実のところ我が家では（じじ）（ばば）も共働きだった昔があり、子別れの悲劇を痛いほどに経験している。汝、幹人のパパが泣き叫んでバットを振るって玄関の壁を穴だらけにして大暴れしたことだってあったものだ。

「パパもママはカイシャだよ、バイバイ、（じじ）と（ばば）の言うことを聞くんだよ、困らせるんじゃないよ」

これは二便で（じじ）が送る車中、パパが言い聞かせるセリフだ。こうして幹人の寂しさに耐える長い一日がはじまる。会社つとめのパパ、ママは帰宅時間が遅い。つとめの厳しさは（じじ）（ばば）が教育公務員で経験したものとは比較にならない。

幹人は玩具の洪水の中にいる。

つくづく平和な物の潤沢さに囲まれている。

明治人で初代の（大じじ）は信州生まれの次男坊、農家だから玩具なぞロクロク買い与えられたとは思われない。二代の大正生れの（禎人じじ）はわずかに二組の積木をウェハスの空缶かなにかに入れ、かなり後々まで大切にしていた覚えと、せいぜい数えて見てもコルク鉄砲、針金鉄砲、山吹鉄砲、……とレパートリーは貧しい記憶しかない。戦後生れの（三代パパ）となると、戦後まだ物の不自由の中に育った。いまでこそ玩具の世界にもリバイバルブームとやらでブリキ玩具が珍重される世の中だが、そのブリキものにしても乏しい時代だった。

今様の玩具に囲まれた幹人にとっては成人してこの一文を読むことがあったとしても、全く無縁で、想像もつかないことに終るだろう。

東京デズニーランドのミッキーマウスと象のダンボのぬいぐるみは大きい横綱格、マウスならぬ幹人のミキくんがよくこれらにチューをする。千葉の（大ばば）臼井さんからの贈りものだ。初の曽孫誕生を喜んでくれているのだ。名誉市民で元国会議員の（大じじ）さんは節分行事の翌日、二世議員の選挙いらいの無理もあってか倒れて、長い病院生活をしている。ママの名前が恵子であるところから「お恵ちゃん」と呼ばれて初の孫娘であるママはとくに可愛がられているのだ。幹人は言わばその余恵にあずかっている勘定になる。病院の方にも時々見舞に連れていかれているはずだ。

笛を鳴らしタンブリンをたたくうさぎ、クンクン鳴声をあげて前進する小犬、親子パンダ、etcのぬいぐるみの大小。チョロQなる愛称もよく人気の豆玩具となると、その類似品もあわせて数知れぬありさまだ。シリーズもので際限なくメーカーはこどもたちの嗜好を追いか

け、親たちもそれを追いもとめる、わが子のためならという心理とあいまっての景況なのだ。

「はたらくくるま」

のりもののあつまれ

いろんなくるま

どんどんでてこい

はたらくくるま

こうつうあんぜんまもって

パトロールカー

……

「ぼくはでんしゃ」の次にノミネートされるのはやはり同じ「ひらけポンキッキ」でこの部分だ。またもリピートかけて五回繰り返す。

撒水車、タラップ車、幼稚園車、給食運搬車、宅配車、冷凍車、コンクリートミキサー車、ロードローラー車、……。

マーケットにおよそこれらでないものはないモデル玩具のラッシュである。自動販売機まで現れている。

「あっ、アコードだ、あれはセドリックだね、ボク買うの」

二歳児の頭の中はどういう仕組になっているのか、該博の知識は驚くばかりのものだ。街頭で本物を見ようものなら、歓声とも奇声ともつかぬ声をあげる。くだんのモデル群はしかく精巧なのである。こどもは直感的に名称を言い当てようとするのだ。ただし、勿論そのことごとくが正解とは限らない。

絵本のたぐいも実に豊富だ。そして幼児むけは案外に良心的に編集されている。漫画氾濫時代の奇跡と言えるかもしれない。親が与えるかたちのニーズを満たすために出版社はよんどころなく手抜きができないのかもしれない。発達段階に応じてくもん式なる知能テスト的なものまである。

しかし、大好きなのはなんとしても鉄道ものだ。

「あっ、踊り子号だ」

と、童子の心を奪う興味は玩具とはさして異るものではない。JR特急列車のトレインマークなど六十七種を大半言い当てるほど親しみ、大人どもの舌を巻かせることぐらいたやすいのだ。幹人はとくに踊り子号が気に入っている。この子にして川端さんの小説「伊豆の踊り子」を読む日がいつあるであろうか。

ガールフレンドのナミちゃんは那美、奈美、菜美、浪、はたしてどう字を当てるものか、子は抜きのハイカラさんか、子がつくものか。ともあれ、我が家を出て数メートル、デーリー、マルヨシの女児である。もとは農家で細々とした日用雑貨の店からデーリーなぞとハイカラになり、いまは手をひろげて酒類まで商うようになっていく。タケオとナミコでなく、ミキトとナミコである。もっとも芦花の「不如帰」なぞは（おおじじ）の時代のものだ。こんな比喩は野暮すぎて通用すまい。年下で一歳ほど違う相手だが、いまのところナミちゃんしか遊び相手がいない。一日一回は、

「ナミちゃんとこいく」

ということになる。悪いことにこどもの魅力をひく菓子類も売っており、遊び相手はその宝の山の中にいるのだからたまったものではない。歓声をあげて突進するのはどちらがお目当てなのかわからないのである。一図に欲しがって泣かれれば大人は手もなく負けてしまう。始末が悪いのである。望みが叶わぬとなると、ところかまわずひっくりかえって泣き叫ぶのだ。

「あの人、ビョウインいくの」

天皇の自動車が皇居の石垣の間を縫うように宮内庁病院に向う画面がテレビに写し出されている。折りしも天皇の入院手術という出来事なのだ。（ビョウイン）というアナさんの使う単語から、それを聞いた瞬間に幼児は白衣の医師を思い描き、チクンと痛い注射針まで想像できる。だから、そうした？マークが浮かんで当然なのだ。

「そうあの人だよ、病院に行くの」

と答える。

つづいて後藤田官房長官が首相渡米中とあって内閣を代表し（皇太子国事代行）のことに触れる談話がある。

「このひとコウタイシ？」

「ちがうよ、この人じゃないよ」

「ふーん」

こんな会話が（じじ）と交わされる。

天皇ご入院というトピックスに幼児もまた無関心ではいられなかったようである。ちょうど、群馬高崎で（功明ちゃん誘拐殺害事件）があり、犯罪の意味はわからぬまでも（ヨシアキちゃん）の顔を覚えていて週刊誌の広告の中にそれを指摘できる。幼児もまた目まぐるしい世間の出来事と無関係ではいられない、いや、というよりも幼いなりの対応をしているのだと言える。世につれて育ちを遂げる幼な心にどんな蔭が射し、またそれを刻むものであろうか。もちろんそれは大人の経験に照らして一過性のものに違いないと思うのだが、耳ふさぐことはできない。

「のりたいでんしゃ　はしるきかんしゃ」というのも例の「ポンキッキ」の画面から流れ出る歌詞だ。（じじ）までどうやら浮き浮きするところがある。

どこまでつづくこのせんろ

どんなでんしゃがはしるんだろう

……

……

新幹線、ブルートレイン、エル特急、二階電車、
貨物列車、展望車、登山電車、ラッセル車
と、次々に登場する。そして、ついには蒸気汽関車が
登場するのだから、幹人は歓声をあげ、
「ボクあれ買う」
「うん、買ってやる」
多分大井川鉄道あたりのSLに違いないが、（じじ）
も懐かしさで胸がつまりそうな感動で思わず無責任な約
束をしてしまう。

幹人の（じじ）（ばば）は二人ずついる。つまり嫁どの
の里と両方ということだ。JR総武線「新検見川」に
近いところに里方はあり、その千葉市花園は偶然だが、
昔（じじ）がきみのパパよりもう少し若いころ学校のつ
とめで通ったところだ。その時代にはJRの停車駅はな
かった。幕張で京成電車に乗り換えて一駅、「京成検見
川」から国鉄の踏切をわたり、きみのそちらの（じじ）
（ばば）の家から言えば線路をはさむ向側の丘へ通勤し
たものである。戦災をうけ学校は他に移って無いが、東
大の農場はいまもあるようだ。当時駒込にあった（じじ）
の家からは一時間半の通勤距離だった。余事のようだが
こんなことを書くのはこれをきみがいつの日か読むこと
があることを期待するからである。きみのママはいまほ
ぼ同じ時間をかけて、三つも乗物を換えて船橋のカイシ
ャに通っている。このさき事情はどう変りゆくものか、
ともあれいまのママは大変である。きみは寂しさに耐え
ねばならぬ。

二人ずついる（じじ）（ばば）が父替できみの保育を
している。東京の（じじ）や（ばば）が旅行するとかの都
合、その他で千葉へ行くことが多いのである。なにより
ママにしても骨休めが必要なのだ。
「ママきらい」
「パパもきらい」
「じじきらい、ばばもきらい」
母親譲りと覚しく根はひょうきんな質だが、気に入ら
ないとなると絶対に譲らない。（やぁだもん）も得意の
セリフだ。
「きみは天下無敵だね」
思わず私の言うことがあった。
「うん」
これはまたなんとも、あっぱれただいま二歳六ケ月の
童子の返事であった。

（六二・九・二七）

小説 旧制高等学校 —序説—

山口健二

古稀とか言われる歳をはるばる越えて、寒いさむい日
に不図、日溜りに出たとでも云おうか、何とも言はれぬ
ぬくもりを感じさせられるときが、その男には二ツある。
そのひとつは、ちか頃、収入の少ない老人に、都が恩
恵的に配るバスの無料乗車パスを使って、時間不定の不
便を忍んでバスを乗りついで、終点一ツ橋と云う所まで
行き、他に乗客のいなくなったバスからヨロヨロと降り
て、やっと古色文字通り蒼然とした「学士会館」と言う
建物を仰ぎみた時である。
石段も、その両側の金色の欄干、手摺りも雑役がかり
の手で、丸ッきりいとおしんでいるかの様に磨きあげら
れている。金と時間を頭に入れない人間の働きは、今日
巷にめずらしい。ドアには、把っ手の金具に「押す」とほ
ってあるが、七十を越して、何度も自家と病院の間を往
復して五年余りになるその男の腕力では、とても重くて、
ウンと腹に力をこめて身体ごとぶっつけないとビクとも
しない。それが、かれには「重厚」と云う漢字を思い出
させてくれる。たまたま、中から出て来た若い外国人が、
老いたかれにニコッと会釈して擦れちがってゆく。一面
識もない外国人だが、もし話しかけてくれれば、かれもキ
チンと規格正しい英語でなら応待出来そうな気がする。
何だか、かれは、その外国人にソンケイされた様な錯覚
におち入るのだ。
中に入ると、薄暗くなって更に石段が十段程ある。二
重の扉になっているのだ。会員及び会員同伴の方々だけ
が入場出来ると、筆太に書かれた立て札が置かれている。
その二重目の扉を又全身をぶつけて排すると、机に帳簿
が開かれていて、利用者は署名して下さいとなっている。
何ともはや、重厚で、閉鎖的で、行きずりの若者なら多
分「チェッ！コンチキショウ」と呟きたくなる煩わしさ
である。
入った右手には、二部屋が大きくぶち抜き風になって

いて、午前中から早やばやと、世捨て人めいた年寄りがポツンポツンと何名か、入って来る者を上目づかいにチロリと見ながら、話し相手もなく、皮のソファーに身を沈めている。そのチロリは、相手の年加減を読もうとしている目付きで、自分より若いと見れば、何やら心休まるのであろう。話し合う仲間を待っているのであろうか、それとも、行く所もなく、この部屋に日参して、終日その姿勢で、うつ然と過去の栄光の日々を偲んでいるのであろうか。

二度目の扉を排した所で左側へ行くと、受付と売店がある。壁の黒板には、その日の集会の部屋別案内が記されている。「中国研究会」「朝鮮語講習会」「世界経済懇談会」「〇〇氏講演会」「四高二水会」「二高三木会」「九州大学十日会」等々三十ぐらい並んでいる。更に歩を進めると、囲碁、将棋をやる娯楽室というのがあり、百基ほどの碁盤、将棋盤が並べられている。将棋盤は二十ばかりで余り人気はないらしいが、午后になると碁の方は殆んど満員であり、会員制で勝ち抜き戦など行われ、その戦跡のようなものが大きく壁に張り出されている。廊下を歩く職員の足音は静かで、女子の職員など、歩行の助けにと杖をついているその男を、何やら途方もなく年をとったエライ人と間違えてか、軽く頭をさげてゆく者がある。そういう挨拶に出会うと、男はゾクゾクとくすぐったく、うれしく、下腹部のあたりに快感を感じて、にわかに尿意をもよおして、あわてて売店わきの便所に入る。

地下一階に降りると、喫茶室、ビリヤード、食堂があって、この食堂は、昼食時には一時間余り、殆んど満員つづきである。三人四人十人と人数に応じて客たちのグループによって、素早く椅子テーブルをととのえてくれる。そのサービス振りは、機械的で敏捷だ。働く男も女も若いから、テキパキと食器類を始末して、次のグループのために席をつくる。そこには、客がどんな老人であろうと容赦なく、かれらの回顧癖や動作の鈍さを許さない。料理はつぎ次ぎと運ばれ、済んだ皿小鉢はサッと持ち去られ、その男は、あわてて叫ぶのだ。「アッ一寸待って呉れョ」

この建物の中で、只一ヶ所、「今日」が吹きまくっているのだ。それでもかれは此処も気に入っている。というのは、此処で出て来る定食ランチとパンの味と匂いが、かれを六十余年前の少年の日に引き戻してくれるからである。

県庁所在の市でも、人口七万ばかりの、今日の市町村行政区分から云えば、田舎の小都市と云った所で、町には、西洋料理を作る店はたった一軒であって「西洋軒」と云う屋号であった。その男の家では、年に一回、父親の誕生日に、夕食にこの西洋軒から西洋料理をとり寄せるならわしであったのだ。その西洋料理と云うのは、今

日思い合わせてみれば、コロッケであり、今日では一コ七拾円で、子供でも馬鹿にする品物であったが、そのコロッケが木製のオカモチで配達される。配達人の白衣のいでたちと共に、その男を見も知らない西洋の国へ運んでくれたのであった。その男の七十余年のチシキに寄れば、「西洋料理は、既に明治の初年から、この国の上流階級に入り込み、だんだん上から下へと普及して行った。それに比べて、中華料理は、支那そばから初まって、明治二十年代から、だんだん下層生活者から上層にと普及して行ったのだ」そうだ。ただし、これはその男のチシキであるから当てにはならない。断じてガクモン的根拠はない。ただかれが少年時代を過したその田舎の小都市には、西洋料理を作る店は、西洋軒一軒しかなく、その建物は、御影石とコンクリートで出来ていて、一階の大広間の天井からは、シャンデリアと云う花火が開いた様なかたちに照明がぶら下り、普通の民家の十燭二十燭の電灯の五倍も明るく、クワッと目もくらむばかりであった。ことにこの店の娘は、その男と同じ小学校で、その時分、洋服というものを着ていたたった二人の女の子のうちの一人であった。二人と云うのは、一人は後年の女優市川春代であり、もう一人はこの西洋軒の娘であった。市川春代は、その小都市の弁護士の妾の子であり、弟が、その男より、小学校で一年上にいた。その弟を再三おどかして姉春代の気を引こうと試みたことがあるその男は、結構もう性に目覚めかけていたらしい。だからかれは、西洋軒の娘の方にも充分関心を持っていたのだ。そのせいであろう、六十年後にもなって、学士会館で出会う定食ランチとパンの味と匂いに心を引かれて西洋軒を思い出すのは！これを少々気取って云えば、H・G・ウェルズこと、ハーバード・ジョウジ・ウェルズの物したSF作品タイム・マシンの石英製か何かのレバーを、ゆっくりと過去の世界に戻るように操作して、六十年前の世界におのれを引き戻したと云うことになろうか。

だが、かれと学士会館を結びつける縁は、スルスルと容易に出来上ったのではない。五拾年近く前に、かれは「学士の称号を授与す」と印刷された、縁に金色の飾りのついている証書というものを、その時分、毎日入り浸っていた泡盛屋のおかみに、ボイと手渡してその日のオキマリになっていた朝顔型のコップにつがれた泡盛に、頸をのばして、マッチを近づければボット青い炎を発する異様に臭い液体をすするアテイの学生であった。かれの心底には、自分は学問の士などではなかったと云う反省もあったし、傍ら、そんな証書が何になるかと云う不貞腐れが横たわっていたのだ。それは大日本帝国が、アメリカ国、ハワイのパールハーヴァーに急襲をかけてから、破竹の勢よろしく、南方へ急進している真最中であったが、何故か、その男の心中には、「オレは所栓死ぬより他に仕方なさそうだ」という恐れが全身を包んでお

り、まちには、かれと似たりよったりの年頃の兵士の足腰の革具と銃器のあぶらの臭いがあふれていたのだ。

泡盛屋のおかみは、かれの証書を神棚に上げ、燈明に灯を入れて、長いこと何やら、何ごとかを祈ってくれた。かれは七十才を越えた今日になって、そのおかみのその時の姿を思い浮べると、身を揉んで、声をあげて泣きそうになり、あわてて大声を出して、その印象を消そうとするのだ。かれはその頃、下宿を転々と変え、毎日のめしにも窮して、その泡盛屋で、月極めで食はせて貰っていたのだ。その時分、かれは二十七才の終り頃で、おかみは、小学校一、二年の男の子とその弟と二人の子供のある寡婦で、四十才前後であったろうか。出入りする呑み客の噂では、元は相当な酒の小売商のおかみであったそうだが、夫が死んでから店がモロモロとつぶれて、それまでつき合いのあった問屋筋から、泡盛、ビール、酒などを細ぼそと入れて貰って、泡盛屋をやっているらしかった。自分の過去のことは、とうとうその男に打明けて語ることはなかったが、ひとこと「イマにして思えば、死んだテイシュも不憫だったワ」ともらしたことがある。まだ色白の大柄な女っぷりは、出入の客を充分楽しませることが出来た。さすがにそのまちの大学の学生など出入りするものはなかった。六畳程のガランと云う感じの店には、カウンターがL字変形がたになっていて、裸の木製の丸首椅子が五、六脚置かれており、泡盛や酒の匂いが染みついたカウンターの向う側におかみが坐る按配であった。壁には、張られてから拾年はたったであろうと思われる黄色じみた壁紙が、ところどころ破れてたれ下り、大きな穴には隠すために、これ又色がわりしたキリンビールの美人広告写真が張りつけてある。出入りする客筋は、みなみな人生の生きる競争に破れた敗残の翳を背にした中年を越えた行商人、病院、裁判所などの雇備員、代書人、絵かきくづれ、モノ書きくずれ、昔大所の旦那であったが番頭にだまされて店をつぶされ、今は女房だけを頼みとしていると云った旦那くずれ、等々と云ったところで、その男の様な学生は、店では奇妙な存在であった。そのせいもあろうか、おかみは、何かとかれにはシンセツであり、普通の客には三杯以上は断じて呑ませない泡盛を、かれには三杯半まで飲ませてくれた。一杯十銭であるから三杯半で三十五銭、豆腐四分の一が五銭、五拾銭で朦朧と酔えてお釣りが十銭あった。いつの間にか、その男は、店に客のいない夜など、店から上りこんで神棚のある四畳半程の部屋で、おかみや、その子供らと炬燵を中にして泡盛をすする入り浸り方になっていた。

ある夜、かれはスルリと難なくおかみに言った。

「オバさん、今夜とめて下さいナ」

かの女は黙っていたが、決して首を横にふって断ることはせずに、子供を二階に連れて行って、降りて来ると、だまって寝床を一ツ炬燵につけて用意した。店には、もう客はなく、強い晩秋の風が、激しく雨を入口のガラスの扉や窓戸にたたきつけていた。

「お風呂に行って来る」おかみは言った。

「こんなヒドイ雨ん中、おやめなさいヨ。イッショに寝て……ボク何もしないから……」

その男は幼な気な口振りで言った。かれは風呂へ行くと云うおかみの気持を読んでいるようであった。

「イイもの見せようか」おかみはかれの気をはぐらかすように快活な口調で言った。

「何サ…イイものって……」かれは言った。

おかみは押入れの奥をかきまわして、絹様の巻き物を取り出してその男の前に置いて、さらりとひと息に広げた。

「あの絵かきサン、これを売ってくれって云うのヨ」

それは色もあざやかな男女交合のアブナ絵であった。原画を誰のものに求めたかは、その男には見当もつかなかったが、男女の表情や手足の指の力のこもり方にはギョッとさせる誇張があって、若いかれをうろたえさせた。

「アイツこんなもの描いてんか」

その男は、おかみの目を熱く頸すじのあたりに感じながら、精一杯の低抗を肩先きにこめて溜め息を隠した。

その夜は、かれは、約束通り、おかみの肉体の一部に辛うじて手を触れることが出来ただけで終った。一夜というものが、そんなに短かいものであるということを、かれは二十七才のその夜に初めて知ったのである。

何も大学という所に籍をおいてそのような学生生活をするのは、アメリカ国との戦争の中で、死の恐怖におびえて破れかぶれ気分であったからだと理由づけするのは、少々身勝手すぎる。五拾年前の、かれの旧制高等学校時分の写真を見ると、その暗い容貌、姿勢は他の若者とは比べものにならない程、七十年の短い人生という時間の経過の中で背負ってゆかねばならなかったかれ自身のウンメイを物語っているかに見えるのだ。

それから五十年たって、その男がH高等学校の同窓会誌に求められて描いたおのれの高等学校生活についての思い出の戯文がある。その題は、「赤から白へそして桃色へ」となっている。かいつまんで此処に再録してみると、こうだ。

昭和四年の四・一六共産党弾圧に初まり、同八年の佐野・鍋山の転向声明から、殆んど壊滅したかに見えた「赤い思想」の残層を学生層からも一掃しようとするこの国の方針にそって、かれが入学したその年に、H高等学校の寮生と、学校側が目をつけていた数名の生徒を、今日になって思い返してみれば、「国立」と云う学校組織が、警察と組んで、打ったひと芝居に過ぎなかったのであろうが、世の大人たちは、それぞれ大真面目になってその芝居の舞台に登場していたのだ。「國是に反する思

想に近づきつつある若い生徒を、国費で養成する必要はない」と建前立てをすれば、それはそれで筋は通る。だが入学早々、春まだ雪をのこしている東北の果ての、そのH高等学校の寮の四畳半程の部屋に、学校職員であり、軍事教練のセンセである特務曹長殿（のちの准尉）と警官がモノモノしく踏み込んで来た時には、その男は、矢張り凝然として破れ畳に坐っているよりほかに仕方なかった。警官は、押入れの中を容赦なくかきまわし、本棚からかれが読んでいたファーブルの「蟻の社会」と安部磯雄氏の自伝「社会主義者になるまで」と河上肇氏の「貧乏物語」をぬきとって、証拠物件のつもりか、大きな紙袋におさめた。そこで男は漸く事情を読みとって言った。

「そんなもの、まちに売っているんだから証拠物件にはなりませんヨ」

警官は黙然と馬鹿々々しく職務に忠実であり、特務曹長殿は、その男に言った。

「まあいいやナ、向うサ行ってシャベレや」

その時分の高等学校は、ナンバスクールと称せられるものが一、二、三、四、五、六、七、八高の名古屋で終り、市町名をとったものがそれに続いて十二・三校、他に私立が東京府内に二、三あったようで、全国（朝鮮、台湾、満洲を含めて）の旧制中学校の卒業者と四年終了生徒が、そのおのおのの思惑や、縁によって入学を希望する学校をそれら二十三・四のうちから選んだようであった。H高等学校は、青森県であったから、日本、本州の最北端であり、地元青森と北海道出身の若者が多かった。そういう地理的條件によって、矢張り、生徒の入学時の学力は、東京、大阪を中心とする都市の若者より幾分低かったようで、そう云う所を狙った浪人上りの入学希望者も多かった。その男も、旧制中学校を卒業した年に旧制高等学校入学を断念して浪人し、小一年、日本大学予科と云う所に籍をおいて、近くの研数学館と云う予備校に出入りしたり、主として神田あたりをふらついて過したことがあった。丁度、日本大学では、総長山岡萬之助排斥運動の真最中であり、所謂左翼学生がその中心であった。学生の中にはスンナリとこの国の学校組織を通れずに、紆余曲折ある生活を味わって来た大人学生がおり、かれらにとって恰好なタタカイの的は、右翼の山脈の一角に聳えていた山岡萬之助であったのだ。そのような空気の中で、その男は、河上肇氏の娘が、神田の映画館の前で刑事に引き立てられる無残な姿を見せられたことが引き金になって、何となく左翼的な学生につながれて行った。尤も、かれはその年の十一月に、あっさり授業料退納の故で日本大学予科を退学させられたが、この時期がかれを世の中の仕組みを考えさせる機会になったということは確かである。そんなかれの目からは、北海道、青森県出身の生徒は、自分より何やら幼稚に見えたので

あった。そう云う一種の思いあがりが、その男を寮生活の中で目立たせ、「アイツは赤い」と噂する者があらわれ、中には、教授センセに直接密告する者さえあったのだ。「赤い」と言う言葉は、左翼思想の持ち主であるという意味より、自分たちの仲間として不適格だという広い排斥の意味が含まれていたようだ。それでも、大人たちの大真面目な、国家的な芝居は、その男のように、幼ないながら国家社会の出来具合を考えようとしていた生徒を、二名を退学処分にし、その入口にあると思われたその男ら数名を、譴責とか謹慎という処分にして終った。二名のものは、町の消費組合運動に顔を出していたのである。消費組合とは、今日の生活協同組合のことであり、決して非合法なものではなかった筈だ。その町の暗い小路に立って春を売ろうとする女に聞けば、その前々日、金三拾円也の前金で親がかの女を私娼に売ったという話がきける程の貧しさの中に、その東北の最北端のまちのあたりは沈んでいたのだった。その男の目には、退学処分をうけて、少しは青ざめながら、昂然と街をゆくI・U二名の姿が、英雄じみてうつったことであった。

「お前は、そう云うケンキュウは、大学へ進んでからするがよかろう」

時のH高等学校長Nは、その男を譴責の処分にする儀式の中でかれに言い渡した。大人たちの大真面目な芝居の仕組みが、凡そ想像出来たかれは、口惜し涙が止め度もなく流れるのを拭はなかった。N校長らは、それを悔悟の涙と受けとったのであった。飛んでもない。この時、その男は〝ベンキョウは、落第しない程度に止め、断じてヤツラの言う通りにはならんぞ〟と決心していたのだ。そしてかれは、その決心の通り、酒を食い呑み、街に出ては、街の大人たちや、かれを刺したと思える仲間生徒らに兇暴な喧嘩沙汰が多かった。これが、かれが赤から白色テロに転向した顛末であった。まちの破落戸（ごろつき）さえ秘かに言った。

「高等学校のアイツと喧嘩するダバ、このまちゼンブかからニャマイネ」

その男の白色テロまがいの兇暴さは段々高まっていった。

田舎の高等学校の生徒らは、その町の住民に甘やかされると言おうか、一應はまちに金をおとす人種であり、ゆくゆく社会と云う所に出て、シカルベキ人になるだろうからと云うかすかな期待とおそれから、かれらが酒に酔いしれようと、女とからみ合おうと大目にみるところがあった。殊に娘との恋愛沙汰は、親筋の方からかえって尻を押される程のこともあり、それがもとで一生の不作のなげきになった例も少くない。だが、その男の桃色事件は、所謂ミチナラヌ関係であり、学校も、それは町の最高学府の名誉をきづつけるものなりと断じた。二拾年たって昭和廿三年、その男は、その桃色事件を小説に

仕組んで、文芸雑誌「さざ波」に寄稿して入賞している。一度活字になっているのだから、此処では、わざわざ桃色の内そとをかきつらねることを省略するが、かれは、折角三流どころながら文芸雑誌の新人作品の募集に応じて入賞しながら、あとをつづけることもなく、未練気もなくそのようなブンガク的なおこないを捨て去っている。それは、かれがおのれの才能を読んでいたと言うと聞えがいいが、実はそのH高等学校の少し先輩に当り小説家を名乗っていた津島修治をかれは、吐き気を催す程、嫌いであったことも一因であった。津島修治の文学碑と云うのが、今日、一ッは、山梨県南都留郡河口村御坂峠に「富士には月見草がよく似合う」という、かれの富嶽百景という作品中からえらんだ文句が刻まれている。富士は、かれにとってはかれの前に立ちはだかったブンガクの高みであり、月見草はかれ自身の姿、かたちのつもりであったろうか。少年時代、中学時代と秀才であったかれはH高等学校に中学四年終了で入学している。その頃から、同人誌やH高校校友会誌や、新聞に小説をかき、昭和五年、銀座のカフェーの女給田部シメ子と江ノ島袖ケ浦で最初の投身自殺をはかり、女は死に自分は自殺幇助罪に問われながら起訴猶予となっている。尤もこの時はかれは既に東京大学仏文科の学生であった。かれの二ツ目の文学碑は、青森県蟹田町観瀾山に、佐藤春夫の筆で、「かれは人を喜ばせるのが何よりも好きであった！」とある。かれは、大地主で金持ちの子でありながら、高等学校生徒の時代に、友人間をチョロチョロと渉り歩き友人を喜ばせていた。随分無理な道化をやっていたと考えられる。かれの高等学校時代の友人中に、かれをソンケイするものを発見することは出来ない。二度自殺をやりそこない、酒と麻薬におぼれ、左翼運動に入ったり自首したり、小説の何とか賞が欲しくて、選考委員に泣いて手紙をかいたり、そのくせ、世上小説の神様と言われていた志賀直哉の悪口を言いつづけたり、そしてとうとう、本当に山崎富栄に手を引かれて玉川上水の水中にズブズブと没した。この底しれない道化振りに、その男は吐き気に似た嫉妬を感じつづけていたのである。

（つづく）

陛下からの預り物

金子正義

八月十五日前後は、凡士郎にとって悲しい思い出ばかり多い。宿痾の耳疾・胸部疾患の悪化するのはいつも夏の盛りであった。南冥の蕃地で多くの戦友が死んだのは八月の中旬であった。終戦後二十二年に、独り息子を海で喪ったのは八月十日であった。

終戦は彼には少しも悲しいことではなかった、寧ろヤレヤレ、やっと終ったか、と深く吐息をついて腹の底から安堵感が込みあげた。学問、芸術、文化への渇望が一気に堰を切り、自由と平和への希望が叢々と湧いて精神の昂揚を覚えたのだった。

だが、多くの戦友の死を想うと、自分が生き残ったのが不思議であり、亡き戦友達に済まない惟いでどうしたら良いか分らなかった。唯、悲痛な思いで戦場の光景を絶えず憶い出すのだった。

昭和十八年八月、ニューギニア東南より進攻する米・豪連合軍を、サラモア戦線で三ケ月間食い止めていた五十一師団は次第に包囲され、遂に北方シオ・ケヤリ方面への山中突破の撤退作戦を開始しようとしていた。

凡士郎の属した基〇四部隊歩兵百十五連隊も、サラモア草山陣地を撤退しラエへ転進を始めようとしていた。その後衛となった凡士郎の中隊は、サラモア南西の瓢箪山に拠って米・豪・ニュージランド軍を、阻止して激戦となり、中隊長以下多くの将兵は斃れ、生き残ったのは僅かに樺沢曹長以下十数名となった。

樺沢曹長は玉砕を覚悟して、戦死者や後送した負傷兵の銃剣等の兵器を壕中に埋めよと命じた。中には困難な兵坦補給線をやっと辿って着いたばかりの擲弾筒三筒と弾丸があった。日本軍の兵器ばかりでなく、敵陣斬り込みで分捕った敵産の手榴弾・自動小銃とその革製の褌が け弾帯まであった。

兵器は天皇陛下からお預りしたもの、生命よりも大切なもの、と叩き込まれた兵隊の心情から何んとも懼れ多いことであるが、それ程大切なものを地中に埋めて仕舞うのが何んとも莫迦々々しいことだった。それよりも剣は武士の魂として培かわれた日本人の心情から憤懣に耐えられなかった。

凡士郎は無念の思いで壕の盛土を掘り返して埋めたが、包囲を突破して脱出しようと密かに決意していたので、いつでも掘り出せるように工夫して置いた。

夜になってから負傷兵を護送して連隊本部に行った凡士郎は孤塁を守る中隊の援兵を頼んで、翌朝機関銃中隊の生き残りを連れて塹壕に戻った。援兵はカミアタム陣地を後退するとき重機は分解して遺棄しているので短剣を帯びているだけだった。包囲を潜り抜けて孤塁に着いた援兵に、曹長は直ぐ武器を掘り出して戦えと叫んだ。兵隊達は懸命になって武器を掘り出し銃の泥を拭った。

そんな作業を砲弾雨下の中で見ていた凡士郎は何んとも遣り切れない思いだった。

未だ内地の連隊に居た頃、凡士郎より一期遅れで召集された補充兵の中に精薄者が居た。其の頃は身体欠陥者や病弱者は徴兵から外されていたが、彼は軽度精薄なので病人と見做されず召集され、厳しい初年兵教育を受けていた、苛酷な内務班の扱いに人の何十倍もの罵声を浴び、絶えず殴られ続けていたが、幸いなる哉本人は正に馬耳東風、少しも顔色も変えず、假え、地獄の赤鬼青鬼が寄って集って責めようとも平然としているようだった。

大愚は大賢に通ずる、と聞いているが目の辺りにそれを見て凡士郎は胸うたれる思いだった。

だが本人は、お国の為に立派な兵隊になるんだと一所懸命で、おどおど、まごまご、うろうろと動いていたのであった。何をやっても普通人と違うので流石の教育係下士官や、助手の古参上等兵も呆れ果てて、彼のヘマ振りを厳しい訓練中の息抜のタネ、にして嘲笑したり、消灯前に古兵隊の退屈凌ぎに、明治以来伝承された私的制裁で、人間の尊厳を無視し余りにも馬鹿げているので本気でやれない制裁を、真面目くさってやらせた。

銃架の柱に攀じ登らせて両脚で柱に絡みつかせ、片手で鼻を抑え蟬の鳴声を真似させたり、銃架の間から首を出して、一寸と兵隊さん遊ばない、と遊廓の女郎の呼声をやらせたり、清掃が不徹底だと電球の傘や痰壺の蓋を舐めさせたりして古兵達のよい嬲りものにさせていた。

その彼が小銃の撃鉄を折った、銃弾の薬莢部を撃ち込んで撃発させる僅か二センチ程の鉄鍼であるが、三八式歩兵銃の一番大切なところだ。元々初年兵の銃は古びて使いものにならないのが渡されたが、特に彼のは錆びて銃口を覗いても螺旋条も見えないものだった、訓練でカチカチ空ら撃ちすれば折れるのは当然だった。だが如何に使い古した小銃でも中隊の員数だから大変だった。普

通の兵隊なら重営倉ものであったが彼のことは中隊長に迄知られていたので、精々見せしめの為に初年兵全員が整列させられて一時間程捧げ銃をする前で、上靴ビンタを左右の頬に三回程やられて済んだ。

凡士郎はたかが撃鉄ぐらいで莫迦なことを、とその時は思ったが、ニューギニアの戦場で銃身に接する銃床の木部が焼けて煙が出る程撃ち捲くり、銃口や銃身も白熱して今にも溶解して垂れ下りそうになり、射撃の合間に白銀のようになった銃口蓋を濡れ手拭で冷やし乍ら撃つ激戦で、如何に兵器が大切かが良く分かった。

だが内地の兵営では本末転倒して兵器は人間より尊ばれた、初年兵の教育中ばかりでなかった。生方と云う上等兵候補の優秀な二年兵が、連隊の合同演習で背負っていた十字鍬が抜けて草叢に落ちたが気付かずに帰隊して員数不足を発見された。内務班長・演習分隊長の叱責や制裁がどの程度か判らなかったが、消灯直前非常集合が掛けられ中隊全員が舎前に整列すると、帰宅しなかった中隊長が、営外居住の将校下士官を率いて現われて厳しい語調で兵器の大切さを訓示し、

「……このことは独り生方一等兵の責任だけでなく演習参加の戦友全体の責任であり、全中隊の不名誉である。従って生方一等兵の小隊全員は今から夜行軍で相馬原に行き、夜明けと共に徹底的に演習場を這い廻って探して来い、明日は日曜日であるが中隊全員は生方の小隊が帰る迄は外出禁止である」

と厳命した。

捜索隊は夜通し歩いて榛名山麓の相馬原に達し、夜明から捜し歩いたが発見できず、暗くなったので断念して帰隊した。出発時には落した場所も大凡見当もつき、十字鍬そのものが大きいから直ぐ発見できると顔色も変えなかった生方一等兵も、高崎より相馬原往還三十粁と草叢を捜し歩いた疲労に憔悴し切って、夜半班内に戻るとベッドに倒れて起き上がれなかった。

彼は十字鍬を失なった責任よりも、中隊全員に日曜日の外出停止をさせて仕舞ったことが身を切られる程辛く暫くは顔を上げて歩けなかった。

十字鍬は言わば鶴嘴で工兵隊の土木用具であったのでその程度で済んだが、他の連隊で擲弾筒の引鉄を紛失した幹部候補生要員の学徒兵が教育係兵長と上等兵の激しい制裁と、板寝台の三日間の正座で発狂して後病死した。

凡士郎も大学繰り上卒業の幹部候補生要員だったが、教育中入院したので落されて、同じ幹候落ち二名と万年一等兵として中隊の厄介者となっていた。

秋季演習の時は三人揃って守備軍の假装敵となって、相馬原より榛名山への登り口に軽機の銃座を構えて喘ぎ喘ぎ攻め登って来る攻撃軍を見下していた。凡士郎達は幹候の教育を受けているので、小銃・軽機・擲弾筒・通信と一応歩兵の用いる兵器は全て操作できたので三人だ

けで機関銃座を構えていたのだった。
攻撃軍の攻め登る方向が変って三人の銃座に向わず、姿も見えなくなったので三人はすっかり気をよくして、学生時代に戻ったように久々の解放感に浸って、寝転んで隠し持って来た文庫本を読んだり、大声で歌を唱ったりしていた。殊に野村友衛と云う大きな図体の同年兵はバリトンでトリコのセレナーデ等をやっていた。
その裡どうしたことか、野村は軽機を銃座から下の谷間に転がり落して仕舞った。銃座は攻撃軍に良く見えるように故意と目立つ不安定な山瘤の上に造ったので、軽機はかなりの加速度で深い谷に墜ちたが、樹木が密生しているので枝葉に弾んで故障はしまいと高を括って直ぐ谷に降りず、演習の終了喇叭が鳴ってから探しに行った。夕暮で谷は翳り始めて軽機は見当らなかった。大変なことになった、十字鍬や小銃の撃鉄どころか軽機を谷に落して無くして仕舞ったら一体どうなるんだ。いつも鈍重なくらい悠然としている野村も、どんなことが起っても俺は知っちゃあいねぇよ、と軍隊の全てを軽蔑している須長昌平も、おい、一寸ばかり困ったなア、と手別けして散散探したが見当らなかった、谷間は益々暗くなって麓の方から幽かに集合喇叭が聴えてきた、流石の三人も山の冷気と心痛に寒気を覚えてきた。
「参ったなァ！」
野村が蒼白な顔で繁った杉の木間洩れの夕空を見上げて嘆息すると、何んと直ぐ足元の岩蔭の羊歯の繁みの中に銃口が上を向いていた。
集合地点の廠舎へ通じる道路上に一時間も遅れて着いたが、そんなことは三人はよくやるので分隊長も心得ていたが、流石に真赤になって怒鳴った。
瓢箪山の激戦で敵の手榴弾を浴びた機関銃手の大沢一等兵が血達磨になって斃れた、二番手の三井一等兵は既に額を撃たれて退っていた。弾薬手の佐野一等兵も右上膊部から鮮血を垂らして転がってきた。斜面の上辺にある敵の散兵線の直前の草叢に軽機は転がった儘だった。
中隊指揮班の凡士郎は軽機を取り戻そうと、佐野を励まして敵前の斜面を匍匐して佐野が軽機を摑み、凡士郎は大沢を抱えて斜面を利用して転げ落ち乍ら退った。
中隊の潜む溪流の岸辺に後送できず唯、死を待つ多くの重傷兵の傍に大沢を収容したが、凡士郎が敵前で抱き起したとき、柘榴のように割れ崩れ血泡を一面に吹いてどこが口だか鼻だか分からない顔から、止せよ、止せよ、と呻き声をあげていた大沢はもう息絶えていた。
射手が居ない軽機は、水の湧く岸辺の壕の前縁に据えられたが撃つ弾薬も生き残った兵隊の薬盒に僅か三発ずつしか残っていないので撃ちようもなかった。
だが、凡士郎は内地の演習で谷に墜した軽機を思い出し、複雑な想いに駆られ乍ら軽機の握把を握っていた。

秋そぞろ

井上二三夫

市街の東端にある私の家の前の道路向うは土地改良区で、田畑が広がる。ここ数年の間に、この田園の中に家が増え、大きな建物もできた。NTTの大きなビルの上に無線の鉄塔がそびえ立ち、その先に、M高校が移設された。
その高校の手前角に鮨屋が市中から移転して来たのが、結構うまいという評判で、かなり離れた所から訪ねる客もあるらしい。もっとも、今は、駐車場のない店は、客の寄り付きようもないので、この店が移転して来たのも駐車場を求めてのことでもあるらしい。
妻が戦を持っているところから、その夕食の労を省く意味もあって、外食することもよくあるが、私は、もともと食べ物はそばや日本料理など淡白なものが好みであるのに、妻は、重量級の身体がギラギラしたものを好むようで、一緒に出かけても、注文する品は違っていた。それが、いつの頃からか、妻も鮨などを好むようになって、共通の味を楽しめるようになった。
その鮨屋が開店して、早速、妻に引っ張られて行くようになった。私はアルコールは殆ど飲めない。妻もそういけるわけでもない。中ジョッキを一つ注文し、コップを一つ乞う。店の人は、当然のように私の前にジョッキを置く。しかし、コップ半分が私の量だ。突き出しの煮物も結構うまい。吸い物のさっぱりした味わいがまたいい。軽い酔い心地に鮨がうまい。
「うまい」
遠慮なく声を出す。また一口。
「うむ、うまい」
会議の席や訪問先での簡便な食事として鮨はよく出されるが、こうした味を楽しむことは殆どない。ジョッキとコップのそれぞれが空になると、妻は、す早く私のコップとジョッキの位置を逆転させる。客は立て混むという程ではないが、椅子も座敷も空いていない。

外に出ると、初秋の夕風が汗ばんだ肌に心地よい。四囲は明るいが、陽は西に落ちて、まさに暮れんとする一刻、北に雄大な裾を拡げる赤城山も、今は暗灰色がかっている。

「歩いてみましょうか」

妻に誘われて高校の巡りを歩く。この田園の地に移転された時、旧校庭から移された大きな樹木もしっかりと根づき、四囲は緑を巡らせて、創立百十年の歴史を誇る落着きを見せている。

「もう何年経つのかなァ」

白亜の校舎を見上げて言う。

「靖がいる時だったから、あれから大学四年、銀行二年……もう七年も前ね」

「へえ、もう、か」

「……です」

父親、叔父、弟、子供二人と血の通う男の全員が、この学校の出身者である妻は、自分の出身校よりこの学校に愛着を覚えているようだ。そして、小声で歌う。

「赤城嵐に送られて　学びの窓に集まりし　健児の希望花と咲く　不断の春の厩橋」

練瓦造りを模した同窓会館には、灯がともり、何かの集いの人の喧騒が篭っているようだ。

「うまかったなア、量ではなく、喰った！という充実感がある」

「ほんと、満足！って感じね」

少量のビールの酔いは軽いが、こうして涼やかな風の中、黄昏を歩く。

「実にいい気分だ。」

この快さは何によるものか。生きているというそのものの快さではないか。この間の朝日の日曜版に、宮尾富美子氏が、好物の新芋について、毎年手に入れる新芋一個とミルク一杯の朝食を「生きてあること、胃腸健全であることに心から感謝しながらの」と書いていた。さもあらばあれ、コップ半杯のビールと一桶の鮨によるこの充実感は、正に、生きていることのよろこびではなかろうか。

子供たちは既に県外に就職し、私もこの三月、三十数年の公務員生活を卒え、第二の職場は「再就職」とは言っていられないハードなもので、ストレスもかなりきついが、責任の重さは、やはり現役当時の比ではなく、重圧から解放されたという思いがある。公務員最後の数年は、健康を損って、満期除隊を無事迎えられるかと危懼もあったが、何とかそれを乗り越えた。その安堵による解放感なのかも知れない。

田の畔には、ところどころに彼岸花が深紅のかたまりとなって咲いている。

「曼珠沙華か。この頃、まんじゅしゃかと歌っているのがあったね」

「そうね。歌詞もそうなっているみたい」

「間違っているのぢゃないかな。辞書で調べてみるか」

「どうぞ、どうぞ」

学校の敷地はかなり広く、角一つを曲る度に闇が加わるようだ。畑であった校地の生垣の珊瑚樹は育ちがよく、枝葉が繁り、たわわに実をつけているが、まだ青い。道の左側は一段低い田になっている。人通りはなく、散歩道としては恰好である。その道端に白い軽自動車が停まっている。若き二人の語らいにはよい場所だ。こちら初老の二人は、その環境破壊者か。目を遠くへ逸らして通り過ぎる。

「私たちには、ああした時代がなかったみたい。あなたは始めから老けていたし、私は、ぶ女だからあなたは連れて出たがらなかったし、……勤め先の家族旅行に私を連れて行かなかったんですからね！」

本当のところは、結婚早々で、照れくさくて一緒に行かなかっただけなのだが、妻は、自分の容姿のせいだと思い込んでいる。或は、そうではなくて、何かの折の抗議の材料にしているのかも知れない。そういえば、もう何回この抗議を受けたことか。

「これからは、せいぜい連れて行こう。カナダへ行こう。カナダはいいよ」

「外国なんかいいですよ。私は国内だって知らないところがまだまだあるんですよ」

「国内はもちろんだよ。二人が共に自由になったら本当に外国旅行をしよう。そのためには英語のほかフランス語とドイツ語とスペイン語で看板位は読めなくちゃあ。一人で四ヵ国語は大変だから、一つ分担しろよ」

「いいの、私は、あなたにしっかり摑っていますから」

どうやら抗議の的は、はずせたようである。

帰りの道は、かなり暗くなっている。小さな羽虫のかたまりが顔の回りをうるさい。手を頭のまわりに振り廻す。

「何を踊っているんです」

古女房には虫もつかないのか。

犬の散歩か、人の散歩か。犬に引っ張られて走っている者とすれちがう。

赤城の姿は闇に溶けて、麓の人家の灯がキラメク。灯の塊りは住宅団地であろう。動く灯は自動車か。青、黄の信号機の灯は、遠くからも意外に明かるい。

「歩かないと駄目だなア、足がかゆい、かゆい」

平素はマイカー通勤のため脚腰を使わなくなっているからであろう、脚がむずむずとかゆくなって、血が通うように思えてむしろ快い。

腰につるした万歩計は、三千九百歩を示している。

訣れ

柴田富佐子

継夫の店の前の通りは狭い。少し大きな車が通る時は、軒下にへばりつくようにしないと、体をひっかけられそうで怖い。だから配達から帰って、自転車を店先へ止めておくと、すぐ車の警笛が鳴る。軒先へ抱え込むようにしておけばいいのだが、いちいち面倒なのでつい店先へ止めてしまうのだ。

その上、狭い割に車の出入りが多い。特にここ四、五年は、この裏通りにもビル化の波が押し寄せ、両側の家は軒なみビルになり、その一階には殆んど飲食店が入っていた。継夫の店の右隣りは日本蕎麦屋、左隣りは串あげを売り物にした洋食屋、真向いは安い事で名を売っているチェーンの居酒屋になっていた。

「みどり」というその居酒屋は、学生客に人気があり、その名を冠した「みどりビール」は酒屋で買うより五円安いと看板に大書している。だから毎朝店の軒下に積み上げられるビールの空ビンの山は、継夫の店のそれよりもはるかに高く、不慣れな問屋の運転手は、そちらを酒屋と間違えてトラックを止め、空ビンを積込んでしまったりする。

これだけ飲食店が集っていても、継夫の店の取引先は一軒もない。小さな店には業務店専門の大手の酒屋が、開店資金の援助までして乗りこんでくるし、チェーン店はビール・酒は言うに及ばず、トイレットペーパーまでも本部から送り込まれてくるからだ。「みどり」も緑色に塗った中型トラックが、その日一日分の飲み物・食料品・雑品を積込んで、毎朝十時にやってくる。地元には一円の金も落さないのが、このチェーンの主旨なのだ、と継夫は少し経ってから同業者に聞いた。

「困った時だけ買いにくる奴になんか、引いてやる事ないわよ」

文子は間に合わせに飛込んで来る飲食店の従業員に、正規の値段で売っていたが、

「でもまあ、業務用は業務用なんだから」

継夫は多少は値引いてやっていた。

「全くお父さんは人が好いんだから」

文子は「みどり」の空ビンの山が、いまいましくてならないようだ。

午前中の配達を済ませ、配達先から集めて来た空ビンの整理をしていた継夫の背後で、車の警笛が鳴った。さして大きくない乗用車だから十分通り抜けられると見てとった継夫は、構わず仕事を続けていた。と、続けざまに警笛が鳴った。

窓から首を出しているのは、兄の竜夫である。車はゆっくり近づいて来た。

「相変らず狭いな、この道は」

「だって、広がりようがないじゃない」

「どっかしばらく車を置いても大丈夫なとこないかなあ」

「ああ、クリーニング屋の栄ちゃんとこがいい。栄ちゃんとこの車、昼間は配達に出てるから空いてるよ、きっと。一寸断ってきてやるから、ぐるっと廻って栄ちゃんとこへ置いてきなよ」

継夫がクリーニング屋へ馳けて行き、訳を話して帰って来ても、竜夫はしばらく姿を見せなかった。店先で待っていた継夫は、向いの角から現れた竜夫の姿に息を呑んだ。竜夫は両脇に松葉杖をついている。

「右足がね、曲んなくなっちゃったんだ」

何も言えずにいる継夫に、竜夫は笑いかけた。

「だって、こないだ見舞いに行った時は、何ともなかったじゃない」

「手術の後遺症らしいよ」

「用があるなら、俺の方から行ったのに、こんな体で出て来ちゃって」

一段と肉が落ち尖った顔付きの竜夫は、大丈夫、大丈夫と言うように首を振った。

「今の中ならね、まだ一人で外へ出られるから……この辺がもう一度見ておきたくってさ……　折角行ったのにお堀の桜はまだだった」

店の奥の椅子に腰を下した竜夫は、いくら元気を装っていても、その疲れは隠しきれなかった。

「すぐ蒲団を敷きますから、少し横になった方がいいんじゃないですか」

文子に肩を支えられて奥の部屋へ入った竜夫は、もう口をきく元気もなくしていた。

「ねえさんが心配してるといけないから、電話しといてよ」

継夫の言葉に文子は頷いて出て行った。

足かけ二年に及ぶ闘病生活の間に、二度手術をした。継夫より背も高く、恰幅のよかった竜夫が、病み衰えて軽い寝息を立てている。骨の上に皮膚が貼りついている

ようなその寝顔を見守っている継夫の目に涙が熱く滲み出ていた。

物心ついた時からずっと、継夫はこの兄を見上げて来た。竜夫は運動でも勉強でも何でもよく出来た。積極的で活動的で、だれにも好かれ、だれにも褒められていた。この兄が兄弟中のいいところを全部一人で持ってってしまったから、自分は何をやっても普通の事しかできないのではないかと、思い込んで来た。竹田酒店の長男でありながら、中学から大学に進み、商社に入ってサラリーマンになるのが当然と受け取られていた。竜夫も当然な顔をしていたし、両親も何も言えずにいた。余り出来のいい長男は、両親にとっては親しみの薄い人間であった。父親は継夫が小学生の頃から、継夫の「継」という字は、店を継ぐという意味の字だ、お前は店を継ぐために生まれて来た子なんだ、と言い言いした。永年にわたる父親のその呪文に、根が素直で引込思案の継夫はすっかりたぶらかされて、何の抵抗も覚えずに、竹田酒店の跡取り息子として働いて来た。間口二間、十坪足らずの店に両親と妻子を抱え込み、ただ誠実に生きて来た。

そんな継夫が、自分の生き方に（これでよかったんだろうか）という素朴な疑問を感じるようになったのは、浪人中の息子が苛立った時に投げつける言葉の片片が、継夫の心に突刺さるようになってからである。

「優秀な親を持った奴が羨しいよ。矢張り出来が違うもんな」

（親のせいじゃない、それはお前の努力が足りないからじゃないか、ひとのせいにするな）

言い返す言葉はあっても、それを息子に向けて投げつけるだけの自信がなかった。或いは息子の言う事も本当かも知れない、と思う弱味が背中合せにいつもついて廻るのだ。

模擬テストの失敗を、息子は親のせいのように言う。

「クラスで大学を出てない親を持ってるの、僕ぐらいのもんだ」

（俺だって、入ろうと思えば入れる大学はあった、ただ店を継がねばならなかったから入ろうともしなかっただけだ。店を継いで両親を養い、家族を養っていかなきゃならなかったから、俺は働き続けて来たんじゃないか）

忙しく働いている時はまだいい。客足が途絶える閉店近く、一人で店番をしている時、継夫の傷の疼きは激しくなった。

「僕はこんなちっぽけな店の中を、うろうろして一生を送る気はないからね」

息子ははっきり店を継ぐ意志のない事を宣言している。

（俺がこれまで守って来た店とは、一体何だったのか）

店を否定する事は、継夫のこれまでの人生を否定するに等しい。しかし継夫自身ですら、息子が自分と同じように、この狭い店の中にその一生を埋めて欲しいとは思っていないのに気付いた。男なら、もっと広い世界に羽搏いて行って欲しい、という願いは、継夫の意識の下にずっと流れていたのを、継夫はただ気がつかないだけだった。

文子のように、

「なるようにしかならないのよ。嫌だって言うのを無理に継がせる訳にはいかないでしょ。時代が違うんだから」と、さっぱり割り切ってしまえればいいが、継夫にはそれも出来ない。

「じゃ、店はどうなるんだ」と言えば、

「わたし達の出来る間はやって、出来なくなれば仕方ないじゃない、やめればいいじゃないの。やめるのはいつでも出来るわ、だからやれる間はやってりゃいいのよ」

文子はそう答える。

（成程、そんなものかなあ）と思いながら、それでも釈然としない気持ちが、フィルターに残るコーヒー滓のように粗く色濃く継夫の胸に溜っていた。

「お父さん、松月庵の時間よ」

足音をしのばせて入って来た文子に言われ、時計を見ると一時を過ぎていた。松月庵の落成式は二時からである。

「支度しといたから急いで持ってって下さいよ」

文子の後について部屋を出た継夫は、台車に用意されたビールやジュースを松月庵へ運んだ。とって帰って着替えをしていると、竜夫が薄く目を開け、首を左右に動かして部屋の様子を見ていた。

「目が覚めたの」

「ああ店か、どこかと思ったよ」

「どう、気分は」

「うん……」

「何か食べる、お昼まだだったんじゃないの」

「そうだね、少し食べてもいいような気がする。おそばでもとって貰うか、松月庵の」

「ああ、松月庵は今日駄目なんだ。あそこ、ビルにしてね、今日落成式なんだ。俺もこれから一寸行って来なきゃ」

「そう、落成式か」

「隣りでもいいだろう。割とうまいよ、隣りも」

「ああ、隣りにそば屋が出来たんだっけね」

「この辺は食べ物屋ばっかりになっちゃったよ」

「変ったなあ」

「ああ」

「昔は、出前をとるって言やあ、松月庵しかなかったもんな」

「うん」

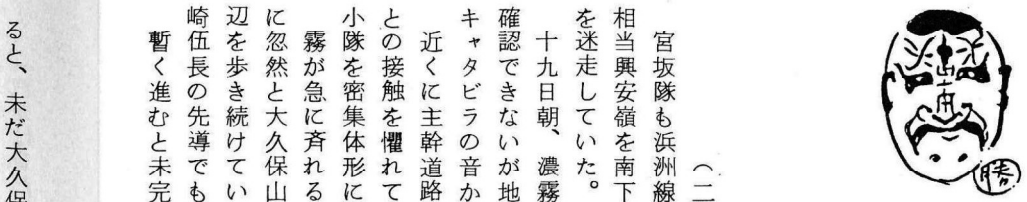
「客が来てさ、松月庵とるっていうと、一緒にとって貰えるんで、嬉しかったもんな」

「お客さんは天ぷらそばで、俺達はきつね」
「そうそう、いつもそうだった」
竜夫は小さい笑い声を立てながら目頭を押えていた。
「所で、どうした、あの青っぱなの信ちゃんは」
「ああ、いいおやじになったよ、大したもんさ、息子が三人いてさ、みんな店を手伝ってんだ」
「へえー、いつも青っぱなの二本棒たらして教室の後ろに立たされていたけどね」
「そば屋は学校の勉強なんかしなくたって、釜場の仕事を覚えりゃいいんだ、って威張ってたよ」
「そうだな、今になってみりゃ、そういう事だ。案外あいつ利口だったんだな。男は食ってく手立てさえ身につけりゃ、いいんだもんな。それが家業っていうもんなんだ。栄ちゃんだってそうだ。さっき一寸覗いたら、窓のとこでアイロンかけてたけど、その姿が見事なくらい親爺さんに似てるんだ。一瞬なにか夢をみてるような変な気分になったよ。あそこの前の道で、よく遊んだじゃないか。メンコしたり、開戦ドンやったり、竹馬にのったり、ねえ、今よりもっと大きい窓があってさ、親爺さんがいつもアイロンかけてた。今みたいに車が通らなかったから、栄ちゃん家の前が溜り場だった。あそこへ行きゃだれかが何かして遊んでた。いつでも仲間に入れて貰えてさ、〝御飯だよ〟って迎えが来るまでみんな遊んでたね」
「今は、第一遊ぶ子供がいないんだよ」
「そういやあ、一人もみかけなかった」
継夫は身支度は終ったが、竜夫が余り楽しそうに話し続けるのでその枕許に坐った。
「病気になってからね、病院のベッドでよく考えたよ。僕はこの店の長男に生まれながら、店の事も、親の事も、みんな継ちゃんに押しつけて、継ちゃんがおとなしくて何も文句を言わないのをいい事に、自分の事ばかり考えていた。自分のしたいようにする事ばかり考えて来た。そのために継ちゃんを犠牲にした事なんか、ちっとも考え及ばなかった。家業ってものを粗末に扱いすぎたんだ。その罰が当ったんじゃないだろうか。ねえ、そうに違いないよ」
「そんな事ないよ。兄さんは出来がよかったから上の学校へも行けたし、いい会社へも入れたし、偉くもなれた。俺なんか、外に何の才能もないから親の言うままに酒屋になっただけだよ」
「いや、継ちゃんだって、外にやりたい事があったろうに、僕が逃げちゃったから」
「そんな事ないってば、俺はこれだけの人間なんだよ。何も後悔してないよ」
「やさしいんだね、継ちゃんは、やさしすぎるんだよ、だから僕はいい気になって、店の事はとも角、親爺の面倒もお袋の世話も、みんな継ちゃんと文子さんにやらせて……」

竜夫の言葉が途切れたので覗き込んでみると、話し疲れたのか竜夫は寝入っていた。
継夫は蒲団をかけ直して立上った。

松月庵の落成式を中座して継夫は家に戻ったが、竜夫はすでに帰った後だった。
「俺が帰るまで、どうして引止めておいてくれなかったの」
「だって、もう大丈夫だから帰ります、ってきかないんだもの。あたしだって何度も引止めたのよ」
「大丈夫だったのかい、一人で車に乗れたのかい」
「仏様にお線香をあげたかったんですって、何本もお線香あげて、それで気が済んだんじゃないの。有難うって、割と元気に出ていらしたわよ」
竜夫は別れを言いに来たに違いないと、継夫は思った。一人で来られる間に、両親の位牌に、生まれ育った家に、町に、別れを言いたかったに違いない。その竜夫の心情を想うと、継夫はまだ竜夫があげた線香の匂いが残る仏壇の前で（何とかしてやってよ、助けてやってよ）両親の位牌に訴え続けずにはいられなかった。
「そうそう、お兄さんが帰ったすぐあと、栄ちゃんが来てね、びっくりしてたわ。病気だったの知らなかったんですって。気の毒でどうしたんですか、とはとても聞けなかった、って」
「栄ちゃん、元気だもんな、同じ年には見えないよ」
「人間どうなるか解んないもんだって、つくづく言ってたわ」
「車上めさせて貰ったお礼に、明日ケーキでも買って届けといてよ」
「そうね」
文子は茶をいれる手を休めて大きく溜息をついた。

それからじき竜夫は三度目の手術をしたが、退院できぬまま帰らぬ人となった。



ハイラル挽歌（九）

終章去来

金子正義

（二）

宮坂隊も浜洲線を迂回して夜行軍を続けていたので、相当興安嶺を南下したと思っていたが、未だ博克図付近を迷走していた。

十九日朝、濃霧の中をソ連軍が進行していた、隊列は確認できないが地鳴りをあげて通過する装甲車の響きやキャタピラの音から相当の大部隊のようだった。

近くに主幹道路があると推定した宮坂少尉は、ソ連軍との接触を懼れて窪地に匿れ、通過を待って霧を幸いに小隊を密集体形にして慎重に南下した。

霧が急に斉れると見馴れた山野であった。何んと目前に忽然と大久保山が蟠まっていた。一晩中大久保山の周辺を歩き続けていたのだった。此の方面に明るい筈の島崎伍長の先導でも、暗夜で方向を誤ったのだ。

暫く進むと未完成の日本軍洞窟陣地に行き当った。相当慌てて撤退したと見えて洞窟周辺には、多くの靴跡や乱れた軍馬の蹄跡が残っていた。陣地内は足の踏み場も無く糧秣や弾薬が散乱していた。

五十米程離れた窪地に炊事場があって、米や乾パン、缶詰などが山積され、清酒やビールの木箱まであった。大釜には炊いた儘の米飯が手付かずにあった。兵隊達は歓声をあげて取り付くと忽ち平らげ、尚も辺りを探し廻って携帯口糧や粉末味噌などを充分身につけ、夜行軍で雨や寒気に苦しんだので、陣内を探して雨外套や毛布、携帯天幕などを集めてきた。

壕の奥の医務室には医療具や薬品が整然と置かれていた。衛生兵の土屋兵長は流石に、おう、と感嘆して分隊を呼んでシートを拡げ、長途の行程に必要な薬品や健胃錠や塩規錠まで選び出し各分隊に分配して持たせた。

宮坂少尉は磁石と略図を現地点の地形と合せて確認すると、未だ大久保山の西側を彷徨っていたのが分った、分隊長を集めて、再び迷わないように大久保山を真一文字に登り切って、続く白樺の山中を南下しようと伝えて出発を命じた。

毛布や雨外套を被って脹れ上がった兵隊達は、吽々と唸り乍ら猪か熊の群れのように登っていった。

大久保山を越え白樺の密林を歩き続ける裡に夕暮れが迫って視界が利かなくなり雨が降り出した。兵隊達は重くなった毛布や装具を担ぎ寒さに顫え乍ら歩いた。遠近に狼の遠吠が不気味に谺し始めた。迂闊に露営すると危険であった。宮坂少尉は疲労し切った兵隊を励まして歩き続け、漸く狼の来襲を防ぐに適した丘陵外れに達した、切り立つ崖を背にして天幕を張り、流れ落ちる雨水で飯盒炊餐をした、生木と白樺の樹皮の煙に咽び乍ら半煮飯を掻き込んだ兵隊達は、濡れた儘天幕に入って重なり合って睡った。

分隊ごとに不寝番をたて狼除けの焚火を天幕の輪の外側に燃やし続けたので、流石の餓えた狼の群れも遠巻きに動き廻って近寄らなかった。

宮坂少尉は身体に絡まった毛布が重く息苦しくなって目が醒めた、天幕の合せ目から夜雨が吹き込んだと見えて毛布は湿って冷たかった。天幕の下辺が明るく夜が明け始めていた。兵隊達は未だ頭から毛布や外套を被って睡っていた。宮坂は、一体今日は何日なのか開嶺陣地を出たのが十七日夕刻であったが、随分と日が経ったように思えるが、未だ三日しかたっていない、開嶺から札蘭屯迄約百五十粁ある、今迄六十粁は歩いたような気がするが未だ博克図をさほど離れていない、此の分だと札蘭屯に着くのに四、五日はかかる、果して無事に本隊に戻れるか、兵隊には気の毒だが或いは復帰は困難かも知れない、と前途を按んじていると兵隊達が起き出した。

手早く朝食を摂り、天幕を畳んで直ぐ出発した。丘陵をいくつか越すと見晴しの利く草原であった、樹木の無い草山の斜面は敵に発見される懼れがあった、次の山並みに向って駈け足で急ぐと、後方から

「おうい、おうい」

と叫んで追って来る兵隊が見えた、鈴木軍曹が留まって待っていると二中隊の野村上等兵であった。

「大隊本部の炊事勤務中部隊が撤退して取り残されて仕舞った、遠くから友軍と見て追って来た、一緒に連れて行ってください」

と息を塞切り乍ら言った、鈴木軍曹が宮坂少尉に引き合わせて報告すると

「遅れるなよ」

と言っただけだった、日本の軍隊は部隊所属が厳しく一度編成されると、その隊以外の将兵は病人や落伍者でも入れなかった。宮坂少尉は第二大隊最後の撤退として開嶺出発時の編成を自分の部隊として、その後の合流者

は自分の指揮外と考えていた、だが敗走の軍隊であるので軍規は緩んで宮坂隊に迷い込んだり、いつの間にか消えたりして六十数名の小隊となっていた。

敗走中でも小隊として纏って行動しているのは、部隊統制の軍規より同じ大隊の身内同志の意識からであった、またソ連軍の目を掠め、土民の襲撃を避けるには部隊として団結して行く以外になかった。それに広袤たる山野は何んの目印も無く、単独行動は迷い歩いて飢え、果ては餓狼の餌食となるばかりであった。

宮坂少尉は磁石と地図と太陽で方向を見定めて進んだ。重畳と折り重なる大興安嶺は、どの方向を見ても同じで迂闊に進むと何日歩いても大きな輪を描いて同じ円周内を歩いていることがあった。道路や鉄道・部落の在る地帯は危険であるが、行路の確認になるので山中を潜行し乍らも、遠くから望見できる範囲に近寄らず離れずして進んだ。

兵隊達は喘ぎ喘ぎ幾つもの丘陵のスロープを登り乍ら山陵の向う側に何があるのだろうか、友軍か、ソ連軍か、と期待と危惧を交々に胸にこめて山頂に立つのだったが、もう何度も同じ想いで登り降りする草山のスロープや、山裾の薄暗い湿地の繰返しにすっかり失望して、

「何処迄行くんだ、昨日鉄道が見えたのに何故列車で行かないんだ」

「汽車は音だけ聞けばいいんだ、鉄道に沿って行けば直ぐ札蘭屯さ」

「札蘭屯に着けばどうなるんだ、本当に日本は降伏したのか」

などと言い合い慨嘆し乍ら歩いていた。草山や草原は太陽を遮切るものが無く、真夏の暑さだったが駈け通し、蝦夷松や柏の疎林はもう初冬のように寒かったが緩っくりと歩いた。

幾つもの山坂を越して山裾の溪流から湿地に出て、葦の根株を履んで行くと野鹿の骨が散らばっていた、狼の足跡も点々とあった。兵隊達はもう無表情で通り過ぎ、再び疎林に入ると柏の林の中に樵小屋が点在していた。

宮坂少尉は島崎伍長外二名を斥候に出して林の中で待機していると、程なく戻って樵小屋は何処も無人で、付近にはソ連兵も見当らないと報告したので、未だ太陽は高いが野営することにした、樵小屋の分宿は危険なので柏の林に天幕を張った。幸い湧水があったので久々に緩っくりと炊餐を済ませ歩哨を立てて休んだ、夜になると風が出て天幕の下辺がハタハタと煽られ寒風が全身を顫わせる、空には北極星が冴えて手が届くようだった。

（三）

藤井分隊の七名は宮坂隊と同じ方向を辿っていたが、ソ連軍を避けて夜ばかり密かに歩いていたので、擦れ違ったり、僅かの距離を隔て乍ら気付かず、仲々宮坂隊に

合流できなかった。藤井兵長は疾うに諦めて自分の分隊だけでも助け合って札蘭屯に行こうと決意していた。

夜通し歩いた二十二日の朝、朝食を摂ろうと雑嚢を開けると、未だ残っている筈の乾パンが無いので吃驚した。小林一等兵も同じであった、夜行軍中の僅かの假眠の間に誰かに抜き取られたに相違ない、同行を許した二人の内、金木が怪しいと睨んで、少し離れて草叢に臥ている金木二等兵の肩を揺って、

「おい貴様、人の食糧を盗みやがって、さあ、全部出せ」

と藤井兵長が怒鳴った、金木二等兵は寝惚け眼で

「自分、知リマセン、盗マナイ、盗マナイ」

と大袈裟に首を振って弁解し乍ら雑嚢や軍衣の内隠し迄見せた。

「貴様が来る迄、分隊の食物は誰も盗まれなかったんだ、貴様！　食って仕舞いやがったなァ、もう貴様のような盗人は連れて行く訳にはいかん、勝手に行け」

と激昂して金木二等兵を突き飛ばした。

夜行軍で疲労し切った兵隊達は、何にも口にするものが無いので気力も失せて、草叢に倒れ込むと其の儘死んだように睡り呆けていた。

暫くして目覚めた藤井兵長は、空になった胃袋が背筋に貼り付いて仕舞ったようで力無く、虚しくなり金木二等兵を荒々しく叱ったことが情け無くなった。日頃兵隊達を労わっていながら、高が食物ぐらいで度を失って怒鳴りつけたのは、朝鮮兵だからと心の底にある先入観で犯人と決めたのだ、と自責の念に駈られて叱り飛ばした金木はどうしたかと、そっと辺りを見廻したが彼の姿はなかった。気の毒なことをしたな、と悔い乍ら同じ朝鮮兵の金二等兵も一緒に消えたか、と不安になって付近を探すと、金は草の中に沈むようになって熟睡していた。

藤井兵長は吻っとして、金の蒼い顔を瞶めていると不憫になって涙が滲んできた、弱気になってはならぬと、

「おい皆んな起きろ、いつ迄も眠っていると其の儘飢えて死んじゃうぞ、犬も歩けば棒に当たるだ、きっと何処かに食う物があるぞ、さあ出発だ」

と大声で言った。兵隊達はもそもそと起き上って蹌踉として歩き始めた。

日が大分傾いた頃、台地状の丘陵が切れて断層が露わになった崖縁に出た。直ぐ目下にバラック造りの急造兵舎が三棟見えた。

「兵舎には必ず食糧があるぞ」

と兵隊達は今にも崖から駈け降りようとするので、藤井兵長も、悦びと不安に昂まる心臓を抑え乍ら、

「ソ連兵が居るかも知れないぞ、気をつけろ」

と制して、兵隊達に目配せして付近の様子を窺わせたがソ連兵士や土匪の姿も見えない。

崖下の兵舎の構造や配置は日本軍の分遣隊に間違いな

いが既に撤退したとみえて人影がない。
「良し、行くぞ」
敵に備えて小銃の安全装置を外して崖を滑り降った。
構内は作業場の跡らしく設営資材が営門の付近に乱雑に捨てられてあった。更に近づくと兵舎の方から激しく数頭の犬が吠え立てた、裏手に廻ると金網の犬小屋に数頭の軍用犬が残されていて、人の気配に唸り声をあげて激しく軀を金網にぶつけていた。
昏い兵舎に怖ず怖ず入って目を凝らすと、床一面に装具や整理箱などが拋げ出され、寝台まで引繰り返って足の踏み場も無い有様だった。別棟のどの兵舎も同じく余程慌てて退去したようだった。外れの炊事場を見ると、人影の無い物洗場に家鴨が三羽きょとんとして首を伸ばしていた。炊事場には米も味噌も豊富にあって缶詰類の箱も手つかずに残っていた。兵隊達は蘇生したように敏捷に動いて食糧を衛兵所に運び込んで、炊餐にかかった。
一同は大はしゃぎで米を研いだり缶詰を短剣で切り開けたりし乍ら
「待てば海路に日和ありだ、腹一杯食うぞ」
と上機嫌であった、中には手摑みで牛肉の大和煮を口に入れ、
「腹の虫がグウグウ泣きやがる」
と自分もボロボロと涙を落していた。
大川一等兵は勿体ぶって
「待て待て、炊きたての銀しゃりを食わしてやるぞ」
とストーブに火を焚きつけて飯盒を並べた。
兵隊達は湧く湧くし乍らストーブの火を掻き立てたりしていると、暗くなりかけた外で見張りに立っていた金二等兵が急いで入って来て、
「藤井兵長殿、ロスケが大勢やって来ます」
と緊張して忍び声で言った、驚いた兵隊達が窓を透して外を見ると、十五、六名のソ連兵が一列に並んで崖を降りて来る。奴ら、ストーブの煙を見てやって来たんだな、と藤井兵長は素早く小銃を摑んで、
「おい未だ飯は炊けないか」
とストーブの前に腰を下して飯盒を睨んでいる大川一等兵に言った。
「はい、未だ煮え立ちません」
とソ連兵襲撃にも平然と構えている。
「おい、ロスケが来たんだ、直ぐ反対側の山へ逃げよう」
と藤井兵長は大川を急き立てた。兵隊達は大慌てに缶詰を雑嚢に押し込みストーブの上の半煮え飯盒を摑んでバラバラと跳び出て裏山へ駈け込んだ。山歩きには馴れているが、数日来何にも食べて無いところへ急に牛肉などを呑み込んだので、躰がふらつき息切れだけが荒々しく足は鉛のように重く、岩角や灌木に躓いては倒れた。
反対側の崖から降りて来るソ連兵が、日本兵に気付い

て威嚇射撃を空に向けて盛んに射った。藤井分隊は狙撃されていると感違いして無我夢中になって斜面を攀じ登った。
山頂を越して相当走ったので危険を脱したろうと停って人員を確かめると、大川一等兵が居なかった。藤井兵長は山本一等兵に、
「お前が指揮して先に行け」
と分隊を任せて大川一等兵を探しに戻った。
「大川、大川」
と忍び声で暗くなった山腹を降りて行くと、山頂から二百米程下った窪みに大川は蹲っていた。
「おう大川どうした、何をしているんだ早く来い」
と低いが厳しい声で言うと、大川は漸く首を擡げ、
「もう自分は駄目であります、跟いて行けません」
と弱々しく言った。
「何にを言うか、弾でも当ったのか」
「弾は当りませんが、腰が抜けて歩けません」
「莫迦め、何にを言うか、何んでそんな弱音を吐くんだ」
藤井兵長は先程は落着き払っていた大川の変りように驚き乍ら、尚も辺りの夕闇を見廻してソ連兵を窺い、手榴弾の安全栓を抜いて何時でも投げられる構えを取って大川の潜む岩蔭に忍び寄り、大川の肩に腕を入れて引き立てて担ぐようにして斜面を上った。大川はぐったりと首を垂れ、
「未だ何にも食う間が無く、ソ連兵なので力が抜けちゃいました」
と情無い声を出して藤井兵長の肩に凭れ乍ら歩いた。
山本一等兵達は鞍部の林の外れで待っていた。藤井兵長が大川一等兵を連れて来たので、黙って立ち上るとずんずんと先に歩き出した。藤井兵長は大川を尚も扶け乍ら後に続いた。先を行く兵隊達は
「夕飯を食いぱぐれて全く没法子だ！」
「家鴨が三羽いたなァーあれを鋤焼にするつもりでいたのに残念だなァー」
などと言い合って夜の山道をトボトボと歩いていた。
「道路だ！」
先頭を行く山本一等兵が頓狂な声をあげた、木の蔭に寄って様子を見ると、道路は五十米程前方の山の出鼻で急カーブをしている。その曲角の真下は谷となっていた。歩み寄って谷間を覗くとソ連軍の夜営地が直ぐ下にあった。闇を利用して藤井兵長が身を屈めて見廻すと、大きなテントの近くに三輌程のトラックが停っている。狼除けの焚火の囲りに歩哨が二人立っていて、一人はバラライカを抱え退屈そうに歩き乍ら何にやら歌っていた。
藤井兵長は小声で
「俺達がずっと通過して来た山塊はこの道路の南側だったらしい、此の道路は浜洲線沿いの街道だろう、俺達

の撤退方向は狂ってないぞ、もう大丈夫だ」
と安堵して伝えた。
小林一等兵は藤井兵長が言い終ると、谷間を見下して
「敵さん、百名以上居るかな、手榴弾を二つ三つあの中にぶっ放すか」
と独り言を言い乍ら、藤井兵長を横目で見て背負袋を開け、内から兵隊達がアンパンと言う戦車地雷を引っ張り出した。
藤井兵長は呆れて、
「何んだ小林、アンパンは捨ててきたんじゃなかったのか、何んで今頃迄重いのに持っていたんだ」
いくら肉迫攻撃隊の生き残りでも、食うや食わずの飢餓行進の中で、後生大事に重い戦車地雷をいつ迄も担いでいる小林の神経を訝った。
小林は藤井兵長の不審顔に頓着なく
「一寸と待っていてください、一丁やって来ます」
と気軽にソ連軍の夜営地に忍び寄って行った、三十分程すると小林一等兵は微笑を浮かべて帰って来た。
「仕掛けて参りました、やっと食いぱぐれの癪の虫が治まりました」
と言った、藤井兵長は小林一等兵の無神経な図太さに腹を立て
「馬鹿者、何日も無駄道を歩いてきてやっと札蘭屯に向っている道路に出たと言うのに、敵に発見されたらどうするんだ」
と怒鳴りつけて元の山道に急いで戻って、ソ連軍の野営する谷間の裏側へ廻わり、枯草を踏むにも気を配り乍ら通過していると、突然照明弾が揚がった、夜空が一瞬透明となり、中天から吊り下ったような照明弾は、青磁色の美しい光を発して緩っくりと浮動している、地表は暫く真昼のように明るくなり、樹々の緑が鮮明に輝いた。
小林一等兵の敷設した地雷の爆発音はしなかったが、日本兵の気配を感じて警戒したのであろう。
藤井兵長は小林一等兵が未だ戦闘に執念を燃やして勝手な行動をしたので、敵に気付かれたと憤り乍らも、折角敷設した地雷だ一台でも引っ掛らないものか、と密かに期待する気持にもなっていた。
藤井分隊は少しでも早くソ連軍野営地から離れようと、空腹を忘れて走り続けた。二時間程も駈け通してもう大丈夫だろうと気を緩めると、忽ち疲労が一度に出て、其の場に崩れるように倒れ込んで、其の儘全員が死んだように睡り込んで仕舞った、狼も敵も、友軍の通過も知らない深い睡りであった。

男たちの藩（九）

第六章　秋の空

三戸岡道夫

〔一〕

ある日、高柳玄宰は供の者、三、四名をつれただけで、領内の見廻りに出掛けた。
高柳としては珍らしいことであった。目的は自分の直轄領地を見廻るかたがた、いま進行中の美春藩殖産振興の進捗状況をひそかに見るためであった。財政再建策に反対しているものの、内心はその成り行きを気にせずにはいられなかったからである。
再建策進行の経過はこれまで部下から詳細に報告を受けてはいたが、直接自分の眼で見るのはこれが始めてであった。百姓たちは意欲的に働くので、荒地は次第に少なくなってきており、以前農村に流れていた陰惨さは払拭されて、活力がみなぎっていた。茶と密柑の苗木は着実に生長を始めていた。数年たてば豊富な収穫はまちがいなさそうであった。
高柳は馬に乗って一日見廻っただけであったが、その一日で殖産興業の着実な進行ぶりが強烈な印象で頭の中に焼きつき、屋敷に帰ると、その反射作用のせいか、にわかにある不安が心の中に色濃く翳を落しはじめているのに気がついた。
（果して太閤資金はこの殖産興業に勝てるであろうか）
しかし高柳がこうした不安を感じはじめたのは、これが始めてではなかった。『太閤資金は大丈夫だ』と、心に強く言いきかせてはいるものの、時折、青空の一片の白雲のように、疑惑が浮かぶことは度々あった。
だが彦五郎という男は不思議な人間であった。高柳の心にそうした迷いが生ずると、きまってタイミングをはかっていたかのように高柳の前に現われて、迷い雲をかき消してくれるのであった。
「先日五人組のところへ顔を出してまいりました。高

柳さまの申請はまだ正式に審議の段階に至ってはおりませんが、みなさま好意的に考えております。大丈夫でございます。その証拠にこれを頂戴してまいりました。高柳さまに差し上げてくれと、五人組からのお預りものでございます」

彦五郎は紫の袱紗包みをとり出すと、高柳の眼の前で解いた。高柳さまへという名さしの言葉が、高柳の心を酔わせた。

袱紗を解くと、五三の桐が紋模様に浮き出た懐紙と、同じ模様の茶筒に抹茶が入っていた。

「太閤さまは大変お茶がお好きでございました」

彦五郎はまるで太閤秀吉がそこに生きているかのような口調で、押しいただき、

「一服おたていたしましょう」

抹茶を高柳に献上しながら

「いかがでございましょう、太閤さまのお茶の味は…」

「うむ、結構だ」

彦五郎の手にかかると、そんな簡単なことで、高柳の気持はたちまち懐柔されてしまうのであった。

抹茶ばかりではなかった。酒、盃、扇など、いろいろな品物を折をみては運んできて、

「決定はもうすぐでございます」

高柳を安心させるのであった。

だが彦五郎の凄腕はそれだけではなかった。その度にさらになにがしかの金を捲きあげていくことも忘れなかった。そして書類の方も、まだあの念書が足らないの、この手数料の承諾書が必要、申込書のほかにも嘆願書が必要だのと、口実をつけては何回も判を押させていった。

しかし領内を見廻りした強い野外の現実が、高柳の中の太閤資金への確信を覆したのである。

（果して太閤資金は間に合うであろうか）

強い不安が襲い、

（自分一人が太閤資金という幻影にとりつかれているのではあるまいか…）

いたたまれない気持になって高柳は彦五郎のところへすぐ使いを出した。

すると使いはすぐ折返しの返事を持ってきた。

「いよいよ加賀谷兵庫さまが一両日中に五人組のところへ書類を持って行くことになりました。ご安心ください」

そして二、三日すると、今度も彦五郎が現われて

「高柳さま、よかった、よかった、本当によかった、いよいよ正式手続の段階に入りました」

顔を輝かせてそう言うのであった。

「それはよかった、いよいよだな」

「さようでございます。高柳さま。そこで最後の書類作成に入りましょう」

「えっ、まだ書類が要るのか」

これまでにも随分たくさん判を押したはずである。

「いえ、これが最後でございます。本当に最後。今度は審議に必要なものでございます。見本をお見せいたしますから、それを見ならってお作り下さればいい」

例によって紫の風呂敷包みから、どこかの藩の実物らしいものを引っぱり出して

「藩財政の健全性と資産内容を見るために、このように美春藩の最近二年分の財政収支書をお作りください。それに今後五年間の資金計画書も作っていただく必要がございます」

厖大な資料である。

「そんなもの、言われてすぐ出来るものではない。それに極秘の作業が必要だ」

「でも、高柳さまは勘定奉行をお握りになっておられる。その者をお使いになれば、すぐまとめられるではありませんか」

今はその実権が自分には無いのだとは、口が裂けても言えない。

「それはそうだが、必要なら必要と、なぜもっと早目に言っておいてくれなかったのか。そしたら用意できたのに。少し時間がかかるな」

「結構でございます。お待ちいたしましょう」

彦五郎はあっさり妥協した。が、追っかけるように

「それと併せて出していただくものがございます」

「まだ…！」

高柳は目をむいた。

「資金振り込みの両替商の指定書でございます。太閤資金は秘密の場所に隠されておりますが、決定が下りると指定の両替商の口座に振りこまれてまいります。だから事前にその両替商を指定しておくことが必要なのです」

いよいよ話は現実的になってきた。

「でも、両替商はどこでもいいというわけではなくて、越前屋、平野屋、米島屋、三州屋の四両替商の中から指定することになっており、それ以外から選ぶことはできません」

「なるほど」

ある夜ひそかに千両箱が山と運びこまれる場面を想像していた高柳には、ちょっと期待外れの感があったが、しかし考えてみれば当然である。二百万両という小判の山を移動させるなんてことが現実に出来るわけがない。

「で、どこに指定いたしましょうか」

高柳はちょっと考えた。一番信用のおけるのは米島屋であるが、しかし米島屋では藩の方へ秘密が洩れる心配がある。そこで

「三州屋にしてもらおうか」

美春藩と取引のない両替商を指定した。

「かしこまりました。これですっかり準備が出来あがりました。書類が揃い次第、五人組へ持ちこみましょう。

審査には約一カ月かかりましょうが、それが終ると高柳さまの方に直接連絡がございます。その段階で美春藩の代表と、五人組、それに指定両替商との間で具体的な打ち合わせが行われ、期日が指定されて、両替商の方へ資金が送られてまいります」

高柳は直ちに勘定方を呼び出して、書類の作成を命じた。権力の座から遠ざかっているとはいえ、隠然たる力を持っている高柳のことである。配下の者は修身や長尾真十郎に表面上だけ従っているだけであるから、直ちに指示に従って動き出した。最近の細かい数字は長尾派の人間が握っているので探るのに苦労はしたが、しかし十日もするとなんとか数字もまとまり、約束の日までに、財政収支実績書と今後の資金計画書、それに両替商指定書を取そろえて、彦五郎に渡したのであった。

それから、もう一カ月が経とうとしていた。

そろそろ返事が来てもいい頃であった。それなのに何の反応もさっぱりないのであった。

高柳はたまりかねて彦五郎へ使いを出した。

しかし今度はどうしたわけかさっぱり返事がない。いつもなら、折返しの返事を持ってくるか、あるいは二、三日のうちには必ず彦五郎が姿を現わすのだったが、今度は四日たっても、五日たっても、音沙汰がない。

やはり騙されたのか。疑惑と不安が高柳の体内をかけめぐった。

すると十日ほど経ったころであった。彦五郎がひょいと顔を出した。

「いったい、どうしたのじゃ！」

思わず責める口調になった。

「すぐご連絡しようと思ったのですが…」

彦五郎は旅仕度をしていた。いつもの彦五郎と少し様子がちがう。顔が陽に焼けて、少しやつれてみえた。

「一足ちがいで五人組が江戸から大坂に場所を移したのです。それで予定通り連絡できなくて申し訳ありませんでした。豊国神社の例祭が今年は早まるとかで、それでわたしも大坂までその後を追っかけたのです」

もっともらしい言い訳をした。

「冗談ではないぞ。それでは話が違うではないか」

「相手が居ないことには仕方がありません。でも、ご安心ください。話はきちんと通っておりますから」

彦五郎は五人組から来たという手紙を見せた。なるほど手紙には五人の署名がある。さらに嘘でない証拠にと

「受付はもう済んでおりますんで。この通り受付票もございます」

一片の紙片を高柳に見せた。

「この受付票は高柳さまの手許に置いてまいりましょう。わたくしは先を急ぎますので…。これで…。また、ご連絡いたします」

彦五郎はふたたび街道の彼方に消えていった。

高柳は

（御申込、たしかに受付け申し候）

達筆の受付票をじっと見つめていた。果してこれが本当の受付票か、それとも高柳の気持を一時的になだめる小細工にすぎないのか。

その後ふたたび彦五郎は五人組を追って大坂まで行ったはずなのに、またもや長いこと連絡がなかった。

いらいらと待つ高柳のところへ、やっと大坂から手紙が届いた。胸をはずませて手紙を開くと

「貸出の枠が縮小され、借入れは困難になった。来春まで待ってほしい」

高柳は奈落の底に突き落された。

恐れていた通りのものがやってきたのである。だが怒ろうにも、相手の彦五郎が居ないのでは、怒りようがない。

あきらかに彦五郎は時間かせぎをしているのだ。話は駄目だったとは書きにくいので、返事を引きのばしているのにちがいない。

それともやっぱり太閤資金は噂のように幻の金だったのか。高柳の心に急速に疑心暗鬼の黒雲がひろがっていった。

すると、またそんな頃、突然、彦五郎が秋風のように舞いもどってきた。

旅から帰ってきたばかりの恰好で、鋭い眼が落ちくぼみ、ますます険しい顔になっていた。苦労したらしい。それを高柳は難航する交渉の苦労のせいだと解釈した。

（しかし実はそうではなくて、彦五郎は捲きあげた書類を換金しようとして、大坂の闇の金融界を走りまわっていたのであった）

「やっと高柳さま決定いたしましたよ」

彦五郎がそう断定的に報告すると、高柳の心はまたもや一転して

「おお、本当か…、それはよかった」

すでに高柳は自分の感情を、自分で制御する力を失ってしまっているかのようであった。

「五人組が特別に美春藩への貸出を決定してくれました。本当に苦労いたしました。しかし苦労のし甲斐があったというものでございます。まだ決定書は来ておりませんが、加賀谷兵庫さまがその場に立ちあっておりますから、間違いはありません。間もなく高柳さまのところへもご連絡があるかと存じます。そうすれば藩の請け書と両替商の保証書とを引きかえに、二百万両の金が入ります」

彦五郎は最後の、藩の請け書と両替商の保証書という重大な部分を、さらりと言ってのけた。高柳を必要以上

に刺戟するのを避けたのである。しかしさすがに混乱はしていても、国元筆頭家老である。高柳はその言葉を聞き逃すことなく

「いま、何と申されたな。もう一度、申してみよ」

「藩の請け書と両替商の保証書でございます」

「そんなものは出せぬ」

高柳は即座に言った。

「出せぬと申されても、高柳さま、太閤資金を受取る際のルールでございますよ。お金を受取るときには領収書を出す、これは常識ではございませんか」

しかし藩に内密で事を進めているのに、藩の請け書などが出せるはずがないではないか。また指定両替商の三州屋とは取引もない。それなのに果して三州屋が二百万両もの保証書を書いてくれるか。無理を承知の要求である。

「出せぬものは、出せぬ」

「お金が出るという今になって何をおっしゃいます。もうすぐ決定書が来ると申し上げているではございませんか。お疑いでしたら三州屋に問いあわせてみて下さいませ。三州屋にはすでに金が預託してあるのです。請け書があれば、すぐ引き出せるのです。彦五郎をお信じくださいませ」

彦五郎は憔悴した顔を引きつらせて、高柳を見上げた。その真剣な顔に嘘はなさそうに思えた。それに金が預託してあるという説明が、ふたたび高柳の気持を動かした。

「仕方がない、とにかくやってみよう」

「それがよろしうございます。それではまた、請け書が出来あがったころ、お伺いいたします」

高柳は直ちに三州屋に使いを出して、預託金のことを問合せた。

しかし返事は

「そのようなものは全くお預りしておりません」

それは高柳が半ば予想した、そして半ば恐れていた返事であった。

「やはり幻だったのだ」

しかし落胆と同時に、高柳の頭は、次の手だてを考えて、急速に回転しはじめていた。

「こうしてはいられない。一刻を争うのだ」

それは高柳がこれまで考えていた、太閤資金が失敗した場合の次善の策であった。

高柳は部屋にこもると硯を引き寄せ、六通の書状をしたためた。そして長尾真十郎を除く六人の家老の許へ、使者を走らせたのであった。

(二)

「おい、ちょっと話がある」

「なんだ、借金の話なら断わる」

「いや、借金は借金でも、でっかい借金の話なのだ。ちょっと聞いたのだが、とてつもない金の話がご家老のところに持ちこまれて…」

「ご家老とは？」

「高柳さまさ。高柳さまがそれを借りるらしい」

「でっかいって、どのくらい？」

「なんでも二百万両とか言っていた」

「ヒェー、二百万両。ほんとかいな」

「それがどうやら本当らしい。それも利息なしの、借入期限も無期限ということらしいのだ」

「それなら、貰っても同じではないか。そんな金があるわけがない」

いつのまにかこんな話が藩士たちの間にひそひそと、そして足軽や仲間部屋にまでささやかれはじめていた。

「その運動資金としてご家老は、すでに二千両以上の金を注ぎこんでいるという。笠倉彦五郎という仲介人がいるのだが、打合せのたびに、やれ運動費だ、手数料だ、旅費だと金をせびられて、積り積ってそんな大きな額になってしまったらしい」

「それじゃ態のいい詐欺じゃないか。ご家老は騙されているのだ。彦五郎はその金を仲間と山分けして、今ごろ(うまくいったわい)と、べろっと赤い舌を出しているのが関の山じゃないのか」

「殿や長尾さまはその事をご存じなのか」

「いや、事は内緒で運んでいるらしい」

「お家の一大事になるぞ」

こんな噂がひろがっては、これ以上捨てておくわけにはいかない、いよいよ書類の回収時期が来たと長尾真十郎は判断した。

するとそんな頃、美春藩の大坂蔵屋敷で、太閤資金の書類をネタに、二百両ばかりの金が捲きあげられるという事件が起きた。笠倉彦五郎という男が蔵屋敷の留守居役に、高柳玄宰が判を押した書類を見せ、言葉巧みに金をまきあげていったというのである。留守居役は高柳の署名、押印のある書状を見せられたので、少しも不審に思わなかったという。

美春藩の太閤資金の書類が世間に流れ出たら、それこそ大変である。しかし今のところ大坂蔵屋敷の事件以外に、その形跡はない。しかし彦五郎は確実に金の回収に動き始めたといっていい。

一般に書類を資金化する方法は二通りに大別された。

その一はブラックマーケットで資金化する方法である。江戸や大坂には厖大な闇資金が動く地下組織があり、そこへ持ちこむのである。大名家の藩主や家老の署名のある借用書があれば、手形と同じにみられて、少くとも額面金額の一割ぐらいの値段で買いとってくれる。大名家の書類はそれだけ信用があるからである。しかし信用と

いっても、その経済力が信用されているのではない。書類を買取った闇金融業者は書類を大名家に持ち込んで、仕入値の二倍、三倍の金額で買戻しを要求するわけであるが、それに応じなければ幕府に訴え出ると強迫する、そんなことをされてはお家断絶だと、大名家は泣く泣く買戻しに応ずるからである。

書類には常識を超えた巨大な金額が記入されているのが普通である。だから大名家の方も額面通りに買戻すことはなく、せいぜい十五パーセントか二十パーセントぐらい、物によっては二パーセントか三パーセントぐらいの場合もあるが、額面金額が大きいので、その程度のパーセントでも大いに儲かるわけである。

しかしブラックマーケットに持ちこんでも、すべてがうまくいくとは限らない。換金できない場合もある。その場合には直接大名家に乗りこんで、買戻しを強要する。これが第二の場合である。

この場合本人自身が乗りこむ場合もあるが、手続グループという専門家があって、その取立てを請負う場合もある。

美春藩の書類が万が一にもブラックマーケットに流れ、そんな書類を持った連中が美春藩に押し寄せてきたら、美春藩の破滅である。書類が彦五郎の手にあるうちに回収してしまわねばならないと、真十郎はその方法をこの数日間考えつづけていたのであった。

彦五郎を暗殺して書類を奪い返すのが、一番早い方法だった。だがそれには危険がある。よほどうまくやらない限り、逆に事が大きく拡がっていくおそれがある。

すると、そのチャンスが向うからやってきたのであった。

ついに資金化を急いだ彦五郎がある日、書類を持って真十郎の前に現われたのである。

彦五郎は江戸や大坂を駆け廻って資金化に死力を傾けたが、うまくいかなかった。美春藩は貧乏すぎて、ブラックマーケットでも人気がないからであった。小使い稼ぎに大坂蔵屋敷をたぶらかして二百両ほどをせしめてみたが、そんなものは、本命ではない。

彦五郎は最後の手段として、直接自らが美春藩へ乗りこんできたのであった。

彦五郎は本名を名乗らずに、近江屋の番頭茂十と名乗り案内を求めてきた。近江屋は大坂蔵屋敷でもお世話になっているから粗略にはできない。勘定方は丁重に迎え入れてから、真十郎に連絡してきた。だが真十郎には

「近江屋の番頭？」

すぐピンと来た。怪しい。

「番頭とは名乗ってはいるが、彦五郎という男ではあるまいか」

だが真十郎は彦五郎の顔を知らない。逢う前に誰かに

面通しさせる必要がある。彦五郎の顔を知っているとなると、千羽功兵衛しかいない。

「功兵衛を呼んでくれ」

「かしこまりました」

まもなく功兵衛が部屋に入ってきた。長い間真十郎の隠密を勤めている習性で、その身体はいつの間にか影のような動きになっている。

「いま近江屋の番頭と名乗る男が来ておる」

「近江屋？　はて、何用でしょう」

「名前は茂十という」

「近江屋にそのような番頭はおりませぬ」

さすが隠密の仕事をやっているだけあって事情にくわしい。即座に否定した。

「その男が笠倉彦五郎のような気がするのだ」

「なるほど」

「逢う前にそちが確かめてくれ」

功兵衛は部屋を出ると、ふたたび影のように歩いて、応接の間へと急いだ。隣の部屋の隠し穴から覗くと

（たしかに…）

髪は結い直して商人姿に身を変えてはいるが、まぎれもなく笠倉彦五郎である。

「まちがいなく彦五郎にございます」

「うーむ」

真十郎の両眼がギラッと光った。

「あの部屋へは誰も人を近ずけるな、よいな」

「かしこまりました」

真十郎が部屋へ入ると、彦五郎は平蜘蛛のように平伏していた。

対座してみるとなるほど功兵衛が言ったとおり、形は商人だが、眼の鋭さは尋常でない。

「近江屋の番頭と申されたな」

「はい、二番番頭の茂十にございます。以後よろしくお見知りおきのほどを」

「そして今日はまた何の用事で…」

「先日ご用立ていたしました金子についてでございます」

「たしかに近江屋にはいろいろ世話になっておる。だが仕事のことはすべて大坂蔵屋敷に任せてある…」

「普通のお取引きにつきましてはその通りでございます。だが今日の件は別でございます」

「今日の件とは…？」

「まだ長尾さまのお耳には入っておりませんか。これは奇怪。二百万両の件でございます」

「そのような大金はまったく知らぬ」

「もっとも手前どもが直接お貸ししたわけではございません。ある人物が貴藩に二百万両の金を貸し、その借用証文を手前どもが買取ったのでございます。というこ

とは結果的に近江屋が貴藩に金をご用立てしていることになるわけでございます」

「いや、そのような事実はない」

真十郎はきっぱりと否定したが

「と申されましても、証拠がございます」

「証拠とは？」

「この書類でございます」

この一瞬のために、彦五郎はあらゆる努力を傾けて、高柳から書類を捲きあげてきたのである。

「書類？知らぬな」

「長尾さまはお知りにならなくても、れっきとした美春藩の筆頭家老の署名のあるものでございます」

彦五郎は風呂敷包みから書類を取り出すと、真十郎の前に置いた。だが取り出したのは一通だけで、用心深い彦五郎は全部の書類を出すようなことはしなかった。

真十郎は眼をこらして、それを見た。

たしかに高柳玄宰の署名があり、美春藩の正式の印鑑が押してある。

だがここで、それを認めるわけにはいかなかった。

「それは偽の書類だ」

途端に彦五郎の顔色が変った。しかしそれも巧妙な演技かもしれない。

「これは解せぬことをお聞きいたします。美春藩では印鑑簿に届けずみの印鑑でも、偽とおっしゃるのでございますか」

彦五郎の口から印鑑簿と聞いて、真十郎は江戸藩邸の印鑑簿盗難事件の犯人が、やはり彦五郎にちがいないと確信を深めた。彦五郎は高柳の印鑑が正式のものかどうかを確認するために、印鑑簿を盗んで照合したのである。するとこの男は怪盗としても一流の腕を持っているらしい。

真十郎は

「……」

彦五郎の問には直ちに答えず、彦五郎がいったいどのくらいの書類を持っているのだろうかと、風呂敷包みに視線を向け、

（あの書類を全部こちらに取り戻すにはどうしたらよかろうか）

その思案にふけっていた。

「いかがでございますか。あくまで偽とおおせになりますか」

「……」

「このような書類が私の手にあります以上、おそれながらと公儀に訴え出れば、美春藩の運命は私の掌中にあるも同然でございますよ」

彦五郎は最後の切り札を言った。経験によると、どの藩もこの科白でだいたい陥落する。

「……」

「いかがでございますか。この辺りで書類お買い戻しの決心をなさいましては。その方がお得かと存じます。そうなれば値段の方も考えさせていただきます」

口調はいつか強迫めいたものになっている。

「いかがいたしますか」

「うむ」

「ご決心なさいませ」

「だが、一人では出来ぬ。よく相談してみよう」

「なぜ、お一人で出来ませぬ。長尾さまは藩主の片腕。実質的には筆頭家老の位置にいられるのではありませんか」

「いや、書類が高柳どのから出ている以上、高柳どのとも相談せねば結論は出ぬ」

なんとしてでも時間を稼がなくてはならない。真十郎は苦しい言い訳をした。

「しかし誰から出ていようと、正式の書類がここにある以上、美春藩の責任は明白でございます。誰にご相談なさる必要もないはず」

「いや、そうはいかぬ。かりにわし一人が納得しても、他の者が納得せぬ。ましてやこれを買戻すともなれば莫大な金が必要となる。そうなれば、殿とも当然相談をせねばならぬ」

すると今度は彦五郎の方が

「……」

しばらく沈黙し

「それではご相談の時間をお貸しいたしましょう」

意外にあっさりとそう言った。緩急自在というところか。

だが真十郎もその一瞬の呼吸の間を突いて

「しかし相談するのにも証拠がなくては出来ぬ」

と眼前の書類を眼で差して

「この書類じゃ」

一気にそう言うと

「この書類はわしが預っておこう」

彦五郎の眼をじっと見つめた。彦五郎が書類を渡すか、渡さないか、それは刃物を交えない真剣勝負であった。

「わかりました。お渡しいたしましょう」

真十郎は手をのばして畳の上から書類を摑むと、ゆっくりと懐中に納めた。

「では、また後日に参上いたします」

彦五郎は最初と同じように平蜘蛛のようにひれ伏した。

「今度はわしの邸に来てくれ。こうした話は城中ではうまくゆかぬ」

「ごもっとも」

彦五郎は帰っていった。

しかし書類はまだ風呂敷の中にたくさんありますと、真十郎に誇示することを忘れなかった。

〔三〕

真十郎は彦五郎から書類を回収することができたが、それはたった一通にすぎない。残りをどうして回収すればよいのか。

だが、その作戦が思い浮かばないうちに、突然次の事件が起きた。

秋晴れの日だった。

美春城の紅葉は鮮明に色づき、澄みきった青空に天守閣の千鳥破風がくっきりと弧を描いていた。城から見下す稲田は黄金色に輝き、遠くのすすきが原台地は黄葉紅葉の秋の錦にもえ上っていた。

その秋のあまりの美しさ、静けさは、なにか凶事の前触れのようで、こわいくらいであった。

修身は朝食のあと、静かに茶を飲んでいた。するとそこへ近習がやってきて

「高柳さまをはじめとする七人のご重役方がおそろいで拝謁を申し出ております。いかがいたしましょうか」

高柳と聞いて、修身はふと身体が固くなるのを感じた。

「七人と言うと、誰と誰じゃ」

「高柳玄宰さまのほか、片桐五郎太、秋元重丸、片松十郎兵衛、藤井主水、中根彦四郎、それに山岡兵助さまの七人でございます」

「長尾真十郎は？」

「おられませぬ」

「……」

七人はいずれも財政再建策に反対をしている、前藩主時代からの重役ばかりであった。

いよいよ来たな、という感じであった。

修身は茶を飲み終ると、ゆっくりと腰をあげ、廊下に出た。身体が緊張してくるのがわかる。

太閤資金に失敗した高柳玄宰は、急遽方向を変更し、重役七人の力を結集し、訴状の提出という方法によって、一挙に事を解決しようと図ったのであった。

書院の間に入ると、七人が緊張した雰囲気で坐っていた。いずれも正装である。

修身はだまって上座につく。

七人の視線が刺すように修身の動きを追った。

「おそれながら、これは七名の連判の訴状でございます」

高柳玄宰が一歩進み出ると、懐中から書状をとり出して修身の前に差しだした。見たところかなりの長文の模様である。

だが書状の内容は読まなくても、おおよその見当はついた。

「後で読んでおこう」

長尾真十郎という相談相手のいない所で読むのは危険だと、修身はそう身をかわした。

だが七人はそでは引き下がらず

「いえ、ぜひ、この場でお読みいただきたく存じます。そしてこの場でお答えを下されますように」

言葉使いはていねいだが、口調は明らかに強要であった。

高柳の鋭い眼が修身に開封を促していた。

修身はやむなく訴状をとり上げると、封を切り、読みはじめた。

それは十ヵ条にわたって書かれた修身への批判であった。

『殿が御家督を継いでから今日まで、藩政は日ましによくなっているとお考えのようですが、実はその反対で、人心はすっかり殿から離れてしまっております』

訴状は出だしから挑戦的であった。たとえ訴状とはいえ主君にこのような文言を並べるのは異例なことで、それには高柳以下七名の積り積った鬱憤と、他家から入ってきた藩主への反撥とが、入り混っていた。

『殿は学問をお好みになり、藩政にも熱心であるが、なにぶんにも美春藩の正系ではなく、他家から養子に来られた方であるから、まだ年もお若いということもあって、側近の者たちに振りまわされ、したがって筋違いなことも多く、賞罰などもはっきりせず、問題も起っております。その点をかねがね申し上げようと思っていたのですが、殿は佞者を側近にお置きになっておりますので…』

佞者とはもちろん長尾真十郎のことを指すのであろう。

『その佞者が我々のことを不忠者のように殿のお耳に入れておりますので、我々はこれまで黙っていたのですが…』

もうこれ以上黙っているわけにはいかなくなったというのであった。

『大倹約を発されて、殿自身が一汁一菜を実行され、衣服も木綿を着ておられるのは結構なことですが、しかしそんな事は小さなことです。必要なのはもっと大きなことです。大きなことがしっかりしていないから、こんな小さなこと一つとっても、国中に行きわたっていないのです』

いまだに高柳は衣服は絹を着て、木綿を着ようとはしなかった。そして今日修身の前に坐っている七人の服装も、反抗するようにすべて絹であった。

『昨年はまたすすきが原台地で殿自らが鍬入れ式を行ったり、また自ら田畑の開墾などをして、五穀豊饒の祈禱などもされましたが、かえって旱魃や長雨など天候が不順で、作物は実らず、また茶の苗も枯れてしまう始末です。またすすきが原の開拓に多くの藩士を動員させ、武士に鶴嘴や鍬を持たせておりますが、これはまったく鹿を馬として使っているようなもので、どうしてそんなことをさせるのか、そのお考えをお聞きしたい』

藩が一体となって開拓しているのに、協力するのでもなく、あまつさえ蔭の力を使って開拓の邪魔までしておきながら、開拓が成功していない、などと、よくも言えたものだと、修身は怒りが腹の底からこみ上げてきたが、しかし今ここで怒ってはならないと我慢した。

また訴状は修身が師事している月岡実山にも及び

『また教育にしても師をわざわざ江戸から招いているが、金がかかるばかりである。最近は藩士への減給もつづき、家臣への支払いも十分できないというのに、月岡実山にばかり高給を払っているのは無駄な費用で、日頃倹約倹約と言われていても、口先ばかりだといわねばなりません。また神聖なる学問所である尚文館に、こともあろうに百姓、町人どもを出入させていることなども、とんでもないことと言わねばなりません』

どこまで非難すれば気がすむのかと、修身は怒りを通りこして暗澹とした気持になった。訴状はさらに鉾先を修身の片腕ともいえる長尾真十郎にも向けて

『そもそも美春藩の藩政は、昔から家柄家老である高柳玄宰が中心になって行われてきたが、藩政改革は長尾真十郎を中心とする者たちによって行われており、昔からの家老制が無視されているのはまことに遺憾である。長尾真十郎は身分の低い足軽からの成り上り者で、幼少の頃から悪智恵にすぐれ、口先ばかりうまい男で、奸佞邪心の男である。その男に殿はすっかりたぶらかされてしまっているので、理非がわからなくなってしまっております。更にその長尾真十郎に胡麻を擂っている千羽功兵衛、坂東孫三郎、各務伊織などの、長尾一党の下級武士だけが認められて出世をしているのは、賞罰の偏向であると同時に、また藩政を堕落させ、歪めていること甚だしいと言えましょう』

つまり修身の藩政改革は十のうち、一つぐらいはよい点もあるが、あとの九はすべて害である。従ってすべからく古法に復帰して、藩政を本来の質実剛健な美春藩本来の国風に戻すべきであるというのである。そのためには藩政の中心に坐っている奸佞邪心の長尾真十郎を直ちに隠居させるとともに、その側近もすべて退役させ、人心を一新すべきだと結んであった。

長い訴状を読み終ったとき、修身は全身に汚物を投げつけられたように不快であった。心身ともに疲労した。

訴状は達筆で書かれていた。内容は修身から見ればまったく無意味な言いがかりにすぎないが、文章は立派で、筋立ての構成もしっかりしていた。知らない人間が読めば本当だと思うだろう。これを考え、書いたのは、この七人の中の誰かなのか、あるいは別に代筆者がいるのか。

「お読みいただけましたか」

「うむ」

「我等の決意おわかりにいただけましたのですな」

「……」

「ではこの場でご下知を賜りとうございます」

「それはできぬ。よく吟味してから、後日いたそう」

「殿、これは国の重大問題でございます。後日と時をかせいで、その間に奸佞な者と相談するのではありませんか。」

事実修身は内心長尾真十郎が早く登場するのを願っていた。いつもならとうに出仕している時間である。

しかし長尾真十郎は今日は登城しないことになっていた。というのは高柳が真十郎のところへ偽の君命を出して登城を停止させていたからであった。

「もし我々の訴えをお取り上げくださらなければ、全員解任くださるようお願いいたします。我々を解任するか、奸佞の者を解任するか、いずれかはっきりお答えいただきたい。そのお答えをいただかない限りは、この場を退出いたしません」

修身は書院の外の秋空を眺めた。あの空へ鳥となって飛んでいけないものか。そうすればこの七人の重臣たちの拘束から逃げられる。

「ことが重大であるから、先君の光寧公とよく相談して答えよう」

「いえ、それはなりませぬ。我々のお聞きしたいのは殿ご自身のお考えでございます。先君のお考えではございませぬ。それとも殿は、我々の訴状についてご不審の点でもおありなのですか。もしそれならばご指摘下さいまし。ご説明いたしましょう」

修身はここで負けてはならぬと思った。負ければ折角築き上げてきた再建計画が水の泡になる。

「では聞くが…」

一瞬座に緊張が流れた。

修身は訴状の内容の不当なところを一つ一つ質問した。高柳が代表でその質問を受けて立つ。しかし最初から高柳にはまともに答をしようとする気持はないのである。修身のまじめな質問に対してのらりくらりと質問の焦点をぼかすばかりで、まともな答えをせず

「殿はもともと四万石の小藩から養子にこられたのだから、二十万石の格式をご存知ないのです。だから藩政のことは我々にお任せください。長尾真十郎を退けられるか、我々を解任するか、いずれか返事をいただきたい」

出生のことを言われて修身は口惜しさで身体がふるえた。しかし自分の感情を爆発させれば、すべてが水の泡になる、と我慢した。

ちょうどそんな時であった。

庭の泉水の蔭で、一つの黒い影がかすかに動いた。

だが興奮気味の書院の中の者は、誰もがそれに気がつかなかった。

長い沈黙があった。

修身と七人の重臣たちの間には、互いに口を開けば押し問答になり、それが果てしもなく続いて、きりがなかった。

いたずらに時がすぎていく。

すでに日射しの具合から見て、時刻は午後になっていた。だが誰も手洗いにも立たず、また茶の一杯も飲まなかった。喉はからからに乾き、額にはじっとり脂汗が浮かび

「この場で、ぜひ、ご下知を…」

「後日返答する」

「いや、この場で…」

果てしのつかない繰り返しが肉体の疲労の限界まで続いていた。

しかしどんなに圧力をかけられても、屈するわけにはいかなかった。屈すればせっかく軌道に乗った財政再建が挫折する。

しかし修身は

(この訴状を無下に退ければ、別の大事が起るやもしれぬ)

という別の心配も同時にしていた。それは訴状却下で重臣たちが不満をエスカレートさせ、騒ぎが大きくなって公儀にでも聞えたら、待っていましたとばかりお家取り潰しの口実に使われるからである。その方が、もっとこわい。

事を荒立たせてはならない。

そのためにはこの場をどう切り抜けたらよいのか、それを先ほどから必死に考えながら対応しているのだが、名案が浮かんでこないのだった。長尾真十郎はいったい、どうしたのだろう。

修身は全身に冷や汗をかいていた。

ジー、ジーと、秋の地虫の声がした。いや、それは修身の耳鳴りかもしれなかった。

「もはや日も傾きました。殿、このあたりで、ご下知を…」

高柳は執拗であった。その両眼は引きつっている。

「……」

修身は返事をしない。

「ご下知をいただけなければ、やむをえませぬ。我等はことの次第を公儀へ訴え出て、お裁きを受けるまでです」

ついに高柳は膝を進めて、声高に言った。

「なにを申す」

修身も思わず大きな声を出した。そして

(もはや、これまでだ)

最後の結着をつける時だと思った。

修身は音をたてて立ち上った。

七人はぎょっとした眼つきで修身を見上げた。修身は

「いつまでこうしていても、きりがない。大殿さまのご意見を聞いてまいる」

と、書院の外に出ようとした。

高柳が修身の裾をつかんで、引きとめた。

「お逃げになるのですか」

「逃げるのではない、離せ」

「いや、お離しいたしませぬ」

「離せ、離せ!」

修身の声も高くなった。

その時であった。

書院の廊下にあわただしい足音がして、襖が開いた。

そこには長尾真十郎が立っていた。

真十郎はすべるように書院の間に入ると

「高柳どの、殿に対して無礼でござろう」

扇子で高柳の腕を力いっぱい叩いた。

高柳の顔が朱に染まり、

「貴殿は登城停止のはず。ここは長尾どのの来る場所

ではござらん。おさがりあれ！」
高柳も扇子を右手に持ち直すと、はげしい勢いで真十郎の右腕を叩き返した。
だが真十郎はひるまなかった。中腰のまま、懐中から一通の書面を取り出すと
「高柳どの、これをご覧あれ」
眼の前に突き出した。それは太閤資金の書類であった。
「書面？　そんなものは知らぬ。それはいったい何のことか」
「知らぬとは言わせませぬ。太閤資金の申込書。この通り高柳どのの署名がある」
高柳の顔は白紙のように蒼ざめた。
「どうして、それを…」
がっくりと首を垂れた。
その隙に修身はすばやく書院を脱出すると、二の丸の先代藩主光寧のもとへ走った。
今朝、突然の登城停止の通知を受けたとき、真十郎はふっと疑念を持ったのである。通知は修身の名にはなっているが、直筆ではない。これまで修身との間でそのようなことはなかったし、また昨日登城したときにもそのような気配はなかった。不審に思い、傷の留蔵を城中に忍ばせて様子を見させたのであった。留蔵は泉水のほとりに長いことひそみ、七人の強訴を知ると、急ぎ帰って真十郎に報告したのであった。

真十郎は
（チャンス到来…）
と手文庫を開くと、太閤資金の書類を取り出した。
（これを振りかざして迫れば、高柳も降参するにちがいない。そしてその瞬間から高柳は失脚するのだ）
彦五郎から手に入れた書類がこんなに早く役に立つとは思わなかった。
その時、修身が先代の光寧とともに戻ってきた。
光寧は今日の七人の行動を聞いて激怒し、直ちに修身とともに書院の間にやってきたのである。
「その方たち、主君が若いからといって、あなどり、無法なことを強要するのはもっての外である。余が許さぬ。早々にさがれ！」
怒声すさまじく叱責すると、さすがの七人も、光寧に対しては頭が上らなかった。
その上高柳の太閤資金が露見してしまっていては、これ以上強気で逆らうことはできなかった。
朝から日暮れまで続いた強訴事件はこれでやっとけりがついて、七人は城中を退出したのであった。

七人の重臣が行った強訴は、封建時代には考えられない主君への反逆であった。
「七人とも直ちに切腹させるべきだ」
と、先代光寧も修身も立腹した。まして筆頭家老たる

者が太閤資金などに手を出していたのであるから尚更であった。
しかし処罰は藩士たちが納得する公平、慎重なものでなくてはならない。しかし決断は急を要した。そこで翌日、修身は七人のところへ使いを出して
「もう一度よく話しあいたいから登城するように」
と命じた。
しかし七人とも病気を理由に登城しなかった。とくに片松十郎兵衛にいたっては邸の門前で馬の稽古をしていながら
「重病だ」
とうそぶき、抵抗の姿勢を示す始末であった。
（それならそれで、仕方がない。こちらは審理を進めるまでだ）
と修身は、次の日、先代光寧の立会いのもとに、証人喚問を開始した。大目付、仲之間年寄、使番などの幹部を召集して、七人の重臣の訴状を見せ
「この訴状の内容は正しいかどうか、正直に申せ」
と意見を聞いたが、彼等は一人残らず
「まったく根も葉もない讒言でございます」
と否定した。
修身はさらに慎重を期して、三手宰配頭や三十人頭も呼び出して意見を求めたが、その答も同じであった。彼等は領民と接触の多い地位にいたから、改革が領民のために計画されたものであり、それが成果をあげていることを身をもって感じていたからであった。
こうした審理の結果、七人の訴状はまったくの讒言であり、陰謀であることがわかった。

事件があってから四日目の早朝、修身は真十郎を登城させ
「本日、七家に処罰を行うので、藩内の警備を厳重にせよ」
と命じた。処罰を受けた七人が力にまかせて反乱を起すかもしれないと、危険を感じたからである。
真十郎は各奉行をはじめ、鉄砲組、弓組、母衣組、御留守番組、大筒組などを使って城門を固めるとともに、城下や隣国境、番所の警備までをも厳重にした。同時に七人の邸へも物見を走らせ、その動静を見守らせた。
こうした万全の警備態勢の後、修身は七人に登城を命じた。
修身は七人を書院三の間の敷居際へ並ばせると、直ちに判決を言い渡した。
「高柳玄宰と片桐五郎太については切腹を申し渡す」
修身は明確に言った。
「はっ」
と二人は畳にひれ伏したが、あまりの重罪に、顔から血の気が引いていった。高柳玄宰は歴代にわたって美春

藩美川家に仕へた家柄家老である。まさか切腹を命ぜられることはあるまいと、たかをくくっていたので、処罰の重さに驚いた。

二人が切腹と聞いて、残る五人も顔の筋肉を硬直させ、自分達にも下される処罰の重さを予感して、自然と瞼を伏せた。

「秋元重丸と片松十郎兵衛に対しては、半知召上げの上、隠居閉門を命ず」

修身は引つづき乾いた声で言った。

「はっ」

切腹だけは免れたという、ほっとした感情が、ひれ伏した次の二人の横顔に浮かんでいた。

「藤井主水、中根彦四郎、山岡兵助に対しては、三百石召上げの上、隠居閉門を命ず」

七人の重臣は邸へ戻ると、高柳玄宰と片桐五郎太は切腹し、他の五人はそれぞれの罪に服し、ここに美春藩の七家騒動は終結をみたのであった。

〔四〕

彦五郎が再び長尾真十郎の邸に現れたのは、高柳が切腹して二日後であった。近江屋の番頭と名乗って真十郎を訪れてから、五日目にあたる。

その五日の間に予期せぬ七家騒動が起って事態は一変し、高柳は切腹してこの世から去ったのである。

彦五郎は一瞬の夢を見るようであった。

この日もすばらしい秋日和であった。錦秋という言葉にふさわしいその秋晴れの完全さは、またもや誰かの死の予兆のようであった。

彦五郎は今日も先日と同じ商家の番頭の姿である。あくまでも表面は近江屋の二番番頭ということで押し通したいのであろう。右手には後生大事にと例の風呂敷包みをかかえている。

客間からは庭が見えたが、あまり手入れは届いていない。ただ泉水だけは透明な水を溢れさせていた。

廊下に静かな足音がした。

と、真十郎の姿が現れて

「ようこそ、笠倉彦五郎どの」

近江屋の番頭の名前でなく、その本名をずばりと呼んだ。彦五郎の正体が割れていることを、真十郎の方からはっきりさせたのである。真十郎にどのような戦略があるのか。今日は真十郎の方から挑戦に出ていた。

しかし彦五郎はびくともせず、静かに平伏したまま

「恐れ入りましてございます」

二人は対座した。

しばらく無言で互いの腹を探りあっていたが、ややあって真十郎の方から

「高柳玄宰は死去いたしました」

と言った。

「存じております」

死んだのは切腹だと真十郎は言わなかったが、もちろんそのことも彦五郎は知っていた。そして

「死人に口なしですな」

彦五郎は謎のように言った。その表情に深い井戸のような笑いが浮かんでいた。

真十郎の方もうっすらと謎のように笑って

「さて、笠倉どの、書類をいただきましょう」

と切り出した。

「結構でございます」

彦五郎は風呂敷包みを引き寄せると結び目を解き、書類を全部取り出し、真十郎の方へ押しやりながら

「これと引きかえに、頂戴いたすもののご用意は…？」

出来ておりますのか、と、真十郎の方に眼を向けた。

「出来ております」

真十郎が静かに廊下に顔を向けた。

すると合図を待っていたかのように、一人の若侍がなめらかな足どりで茶を運んできた。ぴたりと彦五郎の前に茶碗を置くと、ふたたび音もなく下っていった。

「どうぞ、その一服、お召しあがりくださいませ」

真十郎の描いた筋書き通りに彦五郎がその茶を飲むかどうか。真十郎は腰の下から震えが立ちのぼってくるのを感じた。

「頂戴いたしましょう」

彦五郎はその茶の正体を見抜いていた。

茶碗を両手に持つと、口許に引き寄せ、一気に飲んだ。茶の正体を知っていて、それを飲んだのである。

飲み終ると、茶碗を置いた。

静寂が二人の間を流れた。

真十郎は彦五郎を見つめた。

彦五郎は無心の眼を真十郎に向けながら、毒が体内に廻るのを待っていた。

静寂が二人の間を流れていく。

突然、彦五郎が首を突き上げるように動かすと、口許から一筋の血を引いた。

苦悶の表情が浮かんだが、彦五郎はその苦しみを深い微笑で押さえて

「これで死人に口なしですな」

もう一度そう言った。

こうして太閤資金を仕掛けた人間と、仕掛けられた人間とが死んでしまえば、それ以上追究することはできない、ということは美春藩の太閤資金事件はなかったのと同じになる、死に際して彦五郎はそう言いたかったのであろう。その方が幕府にとっても美春藩にとっても、都合がいい筈である。

息が絶える寸前に彦五郎は

「美春藩には負けました」

かすかな声でそう言って、そのまま前に倒れた。
最初は糸のようだった血の筋が、あっという間に溢れて池のようになり、畳の上をゆっくりと動き、廊下の方に流れていくのを、真十郎は珍らしい生きものでも眺めるように見つめていた。

こうして彦五郎は死んだのであった。
彦五郎は真十郎の仕掛けた毒茶を従容と飲み、そして死んだ。立派な死とも言えたし、またあっけない死とも言えた。
危険な書類は無事に戻り、お家の危機は去った。
真十郎は彦五郎の屍をひそかに裏山に葬り、合掌した。
真十郎は冥福を祈りながら、笠倉彦五郎とはいったい何者だったのだろうかと、静かに考えてみた。
彦五郎は幕府の隠密ではないかというのが、真十郎の推測であった。太閤資金に関する情報を丹念に集め、その正体を究明した末に到達した結論である。
ということは、裏を返して言えば、太閤資金とは、幕府が諸大名の取潰しを狙ってひそかに仕組んでいる罠だったのであった。
諸大名をいかに取潰して徳川家の安泰をはかるかが、徳川三百年の歴史を一貫して流れている方針であった。そのためにはあらゆる手段方法が用いられたが、その中の重要な戦略の一つが太閤資金だったのである。
財政の苦しい藩に狙いをつけると太閤資金の話を持ちこみ、罠にかかると、それを口実に大名家を取潰し、領国を召し上げてしまう、幕府の恐ろしい陰謀である。そして幕府の隠密たちがその仕掛けに当るのである。だから日本全国では、何十人、何百人という隠密が、諸大名の間を太閤資金を餌に暗躍しているのであった。
笠倉彦五郎もそうした中の一人だったのである。だから死に際も立派だった。
そう考えてみると、過去の怪事件も謎が解けてきた。江戸藩邸に怪盗が入り、過去三カ年の財政決算書が盗まれるという事件があったが、それは幕府の資料集めだったのである。美春藩の財政赤字の実態を、資料で正確に摑むためである。
しかし美春藩は辛うじて太閤資金の罠にかからなかった。
罠にかからなかったのは、美春藩の財政再建が着々と進んでいたからであった。藩士、領民の一致協力が、太閤資金の侵入を防いだのである。
死に際して彦五郎が
「美春藩には負けました」
と言ったのは、そのことを言ったのであろう。
負けた以上隠密はいさぎよく退かなくてはならない。
退くとは、即ち死である。
太閤資金の掟によれば、仕掛けに失敗した場合、証拠

を消すために、担当した隠密は死なねばならぬことになっていた。
だから彦五郎は真十郎の邸を訪れたときから、すでに死を覚悟していた。
そして真十郎の方もその辺りを充分推察して、一挙に毒茶という勝負に出たのであった。
彦五郎としては毒茶を拒否することはできた。しかしそれをしなかった。それは「死」という掟から逃げられない以上、勝負に負けた武士として、いさぎよく真十郎の手にかかってやりたいと思ったからであった。
一日おいて真十郎は裏庭に出た。そして彦五郎から回収した書類をすべて自らの手で焼いた。
秋の日ざしの中に静かに立ちのぼる煙を見つめながら
(これで太閤資金の痕跡はまったく無くなった)
と思った。

だが、真十郎には最後にもう一つ、処理しなければならない問題が残っていた。それは医師宗悦の存在であった。
嵐の夜にすすきが原で開拓の妨害をしたり、尚文館に放火したりした犯人を、見逃しておくわけにはいかなかった。
それればかりではない、七家騒動の訴状の起草者も、この宗悦にちがいないと真十郎はにらんでいた。
そこで宗悦を呼び出し詰問をしたが、したたか者の宗悦がそう簡単に認めるはずはなかった。
「一切知りません。まったくの濡れ衣でございます。私はこれまで美春藩の財政再建が成功するようにとそれのみを念じ、そのために一身を捧げてまいりましたのに、残念でございます」
白々としらを切って、いっさい認めようとはしなかった。
そこで真十郎は高柳の邸を探索させてみた。宗悦と高柳との間には密接な連絡があったから、その証拠が必ず残っているはずである。案の定、高柳の部屋から、宗悦が高柳に送った密書が発見され、これが動かぬ証拠となった。
直ちに宗悦は捕えられて、討首の刑に処せられた。
高柳玄宰が切腹してから一ヵ月後の、秋も深まる夕暮れであった。

〔五〕

こうして男たちの藩は着実に時を刻み、修身が財政再建に着手してから十五年という歳月が流れて、藩政改革は見事に成功したのであった。十五年という時間は長かったが、しかしすぎて見れば短かかったような気もする。
若かった修身も三十八才になっていた。
しかし財政再建は決して楽々と進んだわけではなかっ

た。修身はその進捗状況を日々見直し、おくれをきびしく戒め、十五年間目標達成への努力を怠らなかったのである。修身のきびしい自己規制と、鉄のような意思の力が、この難関を乗り切らせたといってよかった。

すすきが原も見事な茶園に生まれかわって、その台地に立つと、見渡す限りの起伏はすべて手入れの行き届いた茶畑で、初夏になると、新芽がいっせいに吹き出て、眼にもまばゆい新緑の炎にもえ上るのであった。新芽は製茶場で加工されると、美春茶として、平野屋の手を通して上方や江戸に出荷されていった。密柑と並んで美春藩の名物、財政の源となったのである。

もちろん殖産振興は茶と密柑だけでなく、その他にも新田の開発、疏水、灌漑、排水などを完備して田畑の改良につとめ、また港の整備や、たばこの栽培など、藩に富裕をもたらした政策は数えられないくらいであった。

こうした結果美春藩の石高が飛躍的に増加したのはもちろんである。再建当初修身は表高二十万石を、実質的には四十万石にしようと計画したが、「美春藩石高増減表」によってそれをふり返ると、当初の二十万八千百四十四石は十五年たって四十一万二千八百二十九石に増加しており、実に二十万四千六百八十五石の増収で、修身と真十郎の倍増計画は結実したのであった。

これと並行して山のような借入金もすべて返済し終り、それがかりか逆に、かなりの貯金さえも持てるまでになった。

金を蓄えると同時に、米も蓄え、十五年間で米を五万俵備蓄するという計画も、ほぼ達成できていた。

そして時あたかも、美春藩の備蓄の役立つ時が、黒い影のように日本全土にしのび寄っていたのであった。歴史上有名な天明の大飢饉である。

その夏は全国的に異常低温で、その上長雨のため稲の穂が出ず、加えて八月だというのに東北地方では霜が下りるという異常気候、米ばかりでなく、大豆、小豆、稗なども全滅した。食物に困った人々は、粥に草や藁をまぜて飢えをしのぎ、牛や馬も食用にしてまだ足らず、犬や猫も食べつくしてしまう有様で、ひどい所では村全員が飢死するという地方もあった。

全国各地で米の値段は暴騰した。あわてた幕府は『米売り惜しみ禁止令』を出したが、もちろんそんなものは何の役にも立たなかった。とくに江戸では米騒動が起り、大坂でも同じ騒動が起った。米を買えなくなった民衆が各地の米屋を襲って打ちこわし、焼き打ちするなどの暴動がつづいた。

江戸時代にはしばしば飢饉があった。しかし当時は現代とちがって、藩が一つの独立国のようになっていたために、他から援助してくれる保証がなかったのである。それが局地的に被害を大きくした原因で、したがって藩

自らが自衛する以外に方法がなかったのであった。

美春藩でも先代光寧の時代に一度飢饉があり、その時五千人ほどの人間が餓死した。再びこんなことがあってはならないという念願が、五万俵の備籾確保の長期計画を立てさせたのであった。幸い七家騒動の後は反対派の妨害もなくなって、施策展開が軌道に乗りはじめると、備籾蔵を新設するなど、修身は積極政策に転じた。片手に大倹約令、片手に開拓事業をしながらの備蓄であったので、並大抵の苦労ではなかったが、いつ美春藩にも襲ってくるかわからない飢饉を思うと、一刻の猶予も出来ない気持であった。

年々の収獲に余裕があるのではなく、不足の中からの貯えであるから、細かい計画書を作り、それを着実に実行する以外になかった。毎日の食事は粥ですませても、備籾は必ず実行するようにと、きびしい指示を出した。

そして平野屋から金を借り、間口四間、奥行き二十間の籾蔵を七棟建てさせると、その中へ籾を丹念に積み上げさせたのである。また家臣たちにも知行百石について二斗五升の割合で備蓄をさせ、それを新町蔵屋敷の中に備蓄させた。

領民たちにも郷蔵を建てさせた。そしてそこへも二百俵、三百俵と備蓄をさせ、それに応じて報償金を与えるという奨励策もとった。

もちろんこの十五年間、美春藩にも不作の時もあった。しかし悲惨な飢饉のことを思って油断せずに、備籾をつづけ、ついに目標の五万俵を達成したのであった。

天明六年の大飢饉が襲ってきた。

どの藩でもおびただしい餓死者が出た。盗賊が横行し、人間を食うという噂まで流れ、騒然たるパニック状態に陥ったのであった。

そんなある日、横川藩から米を譲ってほしいという要請があった。横川藩は日頃から美春藩が親睦を厚くしている藩で、出来れば少しでも融通してやりたい藩だった。しかしこちらにも米が余っているわけではない。自衛上心を鬼にして断わらなければならなかった。

しかし更に、永竹藩、浦野藩、松崎藩などの諸藩からも相つづいて要請があった。しかしこれらも全部断わりつづけた。薄情のようだが、仕方がなかった。こちらも死ぬか、生きるかの境である。とても他藩の面倒まで見る余裕がない。

中でも一番辛かったのは、修身の出生藩である菊掛藩から要請があったときであった。そこには修身の父母も居れば、兄もいた。それに茶の苗の購入など財政再建に当っては何くれとなく世話になっている。たとえ領民や藩に隠れてでも、米を分けてやりたかった。

理由をよく説明すれば、領民も理解してくれるかもしれなかった。しかし修身は思い直した。備蓄蔵の米は、

領民たちが食うものも食わずに、栄々と貯めてきたものである。領民の血と汗で築き上げた米倉である。米は領民のものである。修身の生家というだけの理由で米を分けてやることは出来なかった。

他藩の要請を断わりつづける一方、領内でもきびしい節約が行われたのは勿論であった。美春藩といえども、餓死者が出ないという保証はなかった。酒、糀、菓子、豆腐、納豆など、米や豆を原料とするものは一切の製造が禁止され、食事はすべて粥としていた。もちろん領民だけでなく、修身をはじめとし、武士たちも同じであった。

日本全国どこでも米の値段が暴騰した。とくに江戸では米不足が著しく、美春藩の江戸藩邸でも米を買うことができなかった。そこで国元から緊急輸送して急場をしのいだが、しかし国元においてもそろそろ米が窮乏し、ついに長年蓄えてきた備籾蔵を開いて、救援米を放出するに至ったのであった。

救済に当てられた米は、藩の貯蔵米で二万四千俵、家臣の貯蔵米で六千俵、在郷の貯蔵米二万俵、義倉に貯えたもの千俵などであり、そのほか貯金をとり崩して他の藩から九千六百俵ほど買い付けたりしたので、美春藩は一人の餓死者も出すことなく、未曽有ともいうべき天明の大飢饉を乗り切ることができたのであった。

飢饉を無事切り抜けると、この年、修身は七家騒動以来十五年の長きにわたって服役していた七家に対して、特赦を行い、その罪を許した。

お家断絶になっていた高柳家と片桐家には、末家に本家を継がせて復活させ、知行二百石を与え、侍組に取り立てた。他の五人にも家の閉門を解いて、元のようにした。

それは七家が美春藩の先祖代々功労のあった家柄であるから、それを重んじたということのほかに、修身が彼等を罰したのは、その人間を憎んだのではなく、藩の財政再建を進めるに当って障害となるものを取り除くのが目的だったからであった。

実を言えば修身はあれ以来、毎年、高柳玄宰の命日にはひそかに墓参りをして、冥福を祈っていたのであった。修身には反抗する高柳玄宰の気持が痛いほどわかっていたからであった。旧い美春藩から新しい美春藩へ変っていく、その変化についていけなかった高柳玄宰は、いわば藩政改革の犠牲者だったのである。財政再建がこの犠牲を踏み台にしてはじめて成功したものであってみれば、修身は毎年その墓参の度に、たえず七家の復活を考えていたのであった。

そしてそれを実行するのはこの大飢饉を乗りこえた時をおいては外にないと思ったからであった。

ある日修身は馬に乗った。

（今日は久しぶりに海へ行ってみよう）

馬に鞭をあて、田畑の中を一直線に駆け抜け、すすきが原台地に駆け登った。

凶作の後遺症をはね返すかのように、茶畑はみどりに芽吹きはじめていた。

修身は馬から降りると、指先で茶の芽を摘み、それから茶園の黒い土を握った。

ひやっとするが、その中に土のぬくもりのある土の触感、それは『春の土』の触感であった。修身は自分も領民と同じように、この春の土に両足で根を生やしていることを実感した。

再び修身は馬の背に乗ると、すすきが原の斜面を美春灘へとむかって馬で駆けおりた。

風が顔に当る。

風の中に馬を走らせながら、修身は十五年前、はじめて美春の国元の土を踏み、荒れたすすきが原台地から美春灘へと馬を駆けた日のことを、昨日のことのように思い起した。

（終）

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～

編集子のメモ

・本年もいよいよ掉尾、冬季号をおくる。日月の怱々を覚えるとともに我々の営みの牛歩遅々を反省すべき時に思われる。

・当然のことながら、毎号目玉作品が一つはあって欲しいと願っている。どうやらそれらしいものがあるとホッとする。この号にもそれはあった。それをどの作品とは編集子の口からは言えない。賢明、親愛なる読者諸氏の評定にお任せしたい。

・書き出さなければ作品は生まれない。構想はあとからついてくる、と言ったら信じない人も多かろう。だが、実際はあとからついてくるのが本当だ。モヤモヤとしたものを書き出してみて展望がひらけ、ようやく一つの作品がまとめあげられる。模索と低迷、また苦悩の所産でもある。温かく迎えてほしい。

・短篇七作、七人。連載作品とかけもちが二人、なんとか特集の格好だけはついたが、少しく寂しくもの足りない。われわれはつねにおのれの非力と戦っている。そうしたおたがいの練磨のための道場が「まんじ」である。思案投首ではじまらない。いっそうの発奮をお願いしたい。

・三戸岡道夫の「男たちの藩」が完結した。九回、二年余の連載だった。拍手をおくりたい。型破りを承知の上、すべて計算ずくの特異な時代小説だった。異才と言うべきか。（お）

「まんじ」第二十五号

昭和六十二年十一月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九

「作家群」（まんじ）編集部

☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方

郵便振替口座　東京二ー九〇八一五

印刷　㈲加藤清耕社

千代田区神田神保町三ー十一（261・5743）